北條早雲



早乙女貢

三

北條早雲

三

早乙女貢

北條早雲　三　早乙女貢

文藝春秋

北條早雲

文藝春秋
¥950
0093－361670－7384

文藝春秋

北條早雲 三
早乙女貢
文藝春秋

早乙女貢

北條早雲

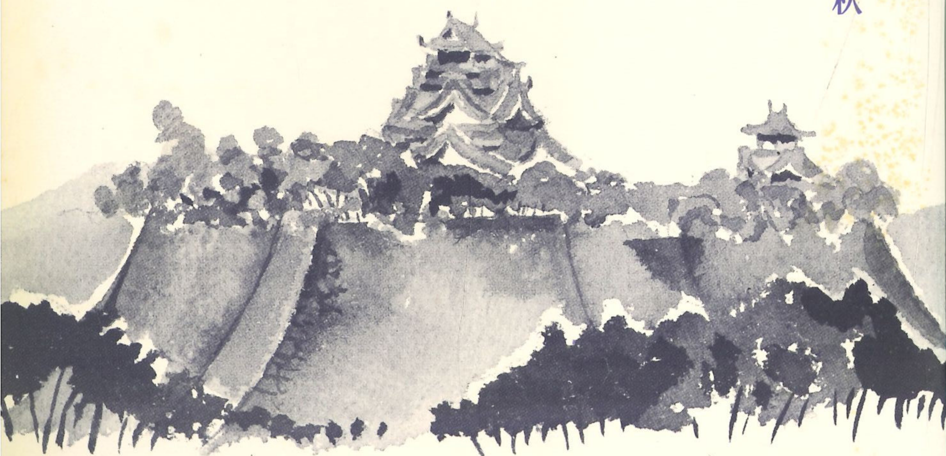
三

文藝春秋



早乙女貢

北條早雲 三



北條早雲　三

装幀　粟屋　充

承　前

伊勢新九郎長氏と名乗る男が、伊勢の社町にあらわれたのは文明八年のころである。その素姓は詳(つまび)らかにしない。乱世のことだ。伊勢平氏の流れといい、備中出身とも伝えられる。若年のころ京都に上って室町御所に仕えていたことは疑いない。将軍義政の弟義視と伊勢で別れた新九郎は、大志をのべるべく動乱の東海地方を望んだ。

豪放で智略に富み、情に厚い新九郎を敬慕して集った五人の壮漢がいた。かれらも新九郎の大志に賛同して血盟し、渡鹿野の島より船出した。遠州灘にさしかかったとき、暴風雨にあい、船は難破し新九郎は海へ投げだされたが、辛うじて遠江の今切の浜へ流れ着くことが出来た。

おりょうという女性に助けられて蘇生した新九郎は、土豪横地一門の争いに巻きこまれたあと、駿河へ向った。途中、曳馬城（浜松）の小堀備中守の城から少女寿々女を救い出す。寿々女は駿河から人質として来ている。八歳の少女を人質に出す政略に憤りをおぼえた新九郎だったが、東海の守護大名今川家の複雑な内情を知って益々意欲を燃やす。

駿河の府中では、当時奇妙なことが流行っていた。妖術と闘鶏である。文殊菩薩の化身と称する女

陰陽師の天殊や雷神うらの泥亀、小鹿新五郎範満の寵臣東雲之助などが跳梁していた。おりょうの父甲冑師明珍高義にも湯女風呂で逢ったが、高義は酒色に溺れ廃人のようになっている。

駿河の太守義忠の座を狙って一族の範満や今川弥三郎春忠らが策動しているうちに、義忠が遠征の帰途、賊の奇襲をうけて横死したことから、政権争奪が表面化する。

新九郎は義忠の寵妾北川どのの腹である竜王丸に相続させるべく運動するが、範満は軍勢をくりだした。駿府は戦場となった。

伊勢で血盟したなかま、大道寺太郎、荒木兵庫、山中才四郎、荒川又次郎、在竹兵衛の五人と戦乱の中で再会する。かれらは折れた帆柱にすがって漂流し、伊豆に流れついたという。かれらの面倒を見てくれた十蔵という男も一緒に府中へ来た。

小鹿新五郎範満は義忠の従弟であるが、すでに義忠の父範忠（前太守）の襲封のときから紛糾していたのが、尾を曳いている。範満の父範頼が継承争いに負けたのだ。その恨みからも、範満の執念は深かった。またかれに与する一族老臣も多い。

義忠の横死は、かれにとっては待ち望んだ好機である。狡智な範満は策をめぐらして、竜王丸母子を抹殺せんとする。その魔手は、新九郎の機略と五人の同志や、少年黒丸らの努力で払い除けるが、府中屋形は奇襲を受けて炎上。母子は漸く逃れて安倍川を渡り、山西へ走る。

鞠子の山中泉ヶ谷の一庵老人とその党は、寿々女を〝姫〟と呼び、範満の野望に抵抗しているが、必ずしも竜王丸母子の味方ではない。新九郎は寿々女を探しに再び府中へ潜入した。

この動乱を山西の石脇城で望遠していた今川弥三郎は、漁父の利を得るべく立ち上った。

宇津谷峠

今川弥三郎春忠が不埒な思案をめぐらしているとは知らぬ伊勢新九郎は、その宵、夕闇を利用して府中へ舞い戻っていた。

寿々女は生きているのか、死んだのか。まずそれを捜るのが先決だった。

混乱の城下は数箇所から火ノ手があがっていた。

範満の輩下が放火したのか、合戦の混乱を利用しようとする無頼の連中が火をつけてまわったのかわからない。ともあれ、範満の勢力下となった城下へ新九郎が潜入するには、幸いだった。

（どこから探したらいいか）

漫然と歩いてもぶつかる可能性は少ない。

（もし生きているとすれば、あいつの知っている所だ）

だが、その点も、なにしろ黒丸はこの府中に長い。野良犬のようにそこらを歩いていたから、知っているところも多いにちがいなかった。

（巣の多いやつだからな）

あの舟山には、まず戻らないだろう。

新九郎には、寿々女がどうやって発見されたか、事情はわからないが、姿を消したのが舟山だから範満方には、舟山の隠れ小屋のことは洩れているはずだ。今度見つかれば、寿々女はいいとして、黒丸は殺される。

新九郎は、黒丸とまわったあたりを考えてみた。あの雷神うらの細民街、湯女風呂、六道ノ辻、あの闘鶏をやっていた露地――

（そうだ、はじめてあいつに声をかけられた寺の門前……）

新九郎の知らない黒丸の知人もいるかもしれない。

夕宵の中に、あちこち、要所には篝火をたいて、武装の足軽たちが、通行人を誰何している。混乱の中では、反抗する者は問答無用で斬られても突かれても文句はいえないのである。新九郎は、その目を避けて裏小路を歩いた。

誰もいないと思った角で、ふいに声をかけられた。

「おい、どこへ行く」

声は下からだった。声には酒が匂った。

地べたに坐りこんで、酒壺を抱えている雑兵だった。いずれ、そこらの酒倉から徴発して来たのであろう。

「そこまで」

と、軽く応えて行き過ぎようとした。が相手は、そうは

させなかった。
「やい、待て」
　酔いしれた声が、ふと強いものに変った。生酔いだったのだろう。
「新九郎だな、伊勢ノ新九郎」
　言いざまに酒壺が飛んできた。とっさに身をひねって避ける。壺は築地塀に当って、ぐわッと砕け、酒がしぶいた。
　その体のゆらめきを目がけて槍の直穂が突っかけてきた。酔っているとは思えぬ、必殺の鋭さであった。
　酔っていたのは、本当だろう。が、遠篝火の仄明りに新九郎と知って勇気が湧いたのも事実だろう。
　いまや範満方にとっては、一に竜王丸、二に北川どの、三番目に新九郎の首が狙い目にちがいなかった。
　いや、範満の憎しみからすると、新九郎の首は、北川どの以上の価値かもしれない。雑兵にとっては、ここが出世の好機、と、即座に閃いたのではないか。槍先には、欲がこもって鋭い。
「たわけが」
　新九郎は身をひねって、抜き討ちに斬り下げている。斬ったあと、とどめも刺さずに走った。
　雑兵の一人や二人、首をあげる意味はない。第一、もはや首をとって戦功を誇示する時機は過ぎていた。
「ま、待てい……」
　苦痛に濁った声が背中にからみついたが、追う気力はあるまい。
　ただ、その男の口から、新九郎の潜入が知れるかもしれない。と思うと、息の音を止めてきたほうがよかったが、ただそのことのために殺してしまうのは気が進まない。
（見つからなければいいのだ）
　新九郎は走りながら思った。
　暫くいって気がついてみると、小路に入りこんでいる。向うで燃えている火明りで大銀杏が見え、大体の位置がわかった。
　このすぐ左手が雷神で、裏側一帯のごちゃごちゃと建てこんだところが、泥亀のいる下町だ。
（逃げこむには、あそこが一番いいわけだが……）
　戦さは勝負がついている。
　今川の天下は範満の手に帰したとなると、泥亀はじめ、その輩下はもとより、金儲けなら、火つけ盗人何でもやる連中にとって、竜王丸や寿々女を範満に引き渡して恩賞に預かるという方向に頭が働くだろう。
　抜け目のない連中だ。そういうことにかけては、異常に頭がまわる。
　黒丸が新九郎の腰巾着になって、すなわち竜王丸側だということは泥亀以下みんなよく知っている。牛飼いや雑仕

の小者や、水仕の女たちなど、屋形ではたらいていた者には、寿々女と黒丸の存在の価値もわかっている。
　寿々女と黒丸がうろうろしていたら、まず安全とは思えない。すぐにも魔手がのびるにちがいなかった。
（どこにいるのか……）
　いよいよ気がかりだった。
　黒丸も愚かではないから、敏感に察して、郊外へ逃げたかもしれない。それなら一応安心だが、しかし、寿々女を連れて帰らねば竜王丸たちが、泉ヶ谷で安心して隠れて居られない。
　新九郎はあてもなく夜の底を歩きまわった。
　暗い街に来たとき、カタリと音がして一軒の家から、白い顔が出た。
「新九郎さま、どうしてここへ？」
　名を呼ばれたとたん、新九郎の手は刀の柄にかかっていた。無言で振りかえっている。
「あたしですよ、新九郎さま」
　暗い中に白い顔が動いている。板蔀を手であげたまま、あたりに気をくばっているのは、若い女だった。
　灯をわざとともさないでいるのは、混乱につけこむ悪い連中に目をつけられぬためだろう。
「あたしですよ、さ、早くお入りになって」
「そなたは？……」
　誰か。馴れ馴れしく呼ぶだけの親しい相手となると、そう多くはない。
「戸を開けますから、早く」
　ばたんと、板蔀がしまった。
　女の声に聞きおぼえがあるようであり、その暗い中に白い花が咲いたような顔も、記憶に古くない。
（誰だったろう）
　急には思いだせなかった。
　戸が開いた。板戸である。新九郎は手をつかまれた。優しい白い手がついと延びて手をつかんだのだ。女に引きこまれたようなかたちになった。
「そなた？」
「ほほほほ、もうお忘れ」
「あ、小萩か」
「あい」
　あの湯女だった。
　思いだした。いつか楽しんだ肌である。忘れたわけではないが、ここは湯女風呂のあの女小屋ではない。同じ場所なら忘れることはないが、意外な場所だったから、まさか小萩とは思わなかったのだ。
「――あそこはどうした、逃げだしたのか」
「ええ、いやなやつばっかり、どんどん押しかけてきて、もうそれこそ、ひどいんですよ、銭を払うどころか、湯に

入るより女を抱く方がいいなんて」
「……」
「臭(くさ)いやつばっかり」
そしてまだ新九郎の手を放さず上に引きあげると、暗いなかで、坐るところが決っているように、円座を奨めた。
「ほほほほ、ほんに懐しい、新九郎さま」
「懐しいな。だが、こう暗くては、顔も見えぬではないか」
「顔なんか見えなくても、いいじゃありませんか」
「いや……」
「どうせ、男に女。ね、からだでお話ししましょうよ」
小萩は、膝に乗るように新九郎の広い胸にもたれかかってくる。
「まあ、待て、そんなことをしてはおれんのだ。おれには用がある」
「いつも、あんなことばかり、新九郎さまは、いつも用がおありねえ」
「戦さの最中だぞ、そなたを抱いていては首を斬られてもわかるまい……」
そう言ったばかりへ、表を、大きな声で喚きながら走ってゆく一団があった。
よかった。一足ちがいで、見つかるところだった。
戦乱は庶民の生活を変える。殺戮の嵐を免かれた者も、劫火を避けた者も、いままでの生活の基盤を失ってしまう。
湯女風呂の女たちに襲いかかる勝利者たちの醜い姿を、新九郎は思った。その難を避けて来たこの女が、急に哀れに感じられた。
「だが、よく助かったな、早く、この城下から立ち去った方がいい」
「はい。新九郎さまは」
「おれは、用がある」と、新九郎は苦笑した。「そなたは、何もこの城下にいなくてもいいのだろう、それとも借銀があるのか」
「はい。でも、戦さで棒ッ引になるでしょ」
小萩は舌を出したようだ。闇に目が馴れてくると女の表情が漸く見えてきた。小萩はくすっと笑った。
「戦さは厭だけど、借銀が棒ッ引になるのだから、万更、悪いことばかりじゃありません」
「徳政ということもあるが、とにかく、命だけは大事にすることだ」
「はい、ですから……抱いて下さいまし」
小萩は男の膝に手を置き、上半身をくねらした。衿が弛み、乳房が半ばあらわれた。
闇が女を大胆にしているのだろう。おのれの魅力を充分に知っている女の、あふれるような媚態には、新九郎も抗しかねた。

「ねえ、あれっきり一度も来て下さらなかったのですもの」
「行こうとは思うたが」
「うそ。新九郎さまは、北川どのとほんとうの兄妹じゃないらしいって、お侍衆が話していました」
「なんだと!?」
「怒っても駄目。……でもいいんです。新九郎さまが出世なされば、小萩だって嬉しい」
「その、おれのことを申していたやつは、誰だ」
「知りたい？」小萩は、下から凝っと猫のような目で見上げて、「知りたいのだったら、抱いて」
「おいおい、ひきかえか」
「ええ、こんな御時勢ですからね、タダじゃア言えません」
その間も、女の手は、男の股間に動いているのである。そうしながら、新九郎の掌を導いて、おのれの豊かな胸に当てさせているのだった。
「ねえ、あたしだって……」小萩はあまい声で言った。
「一度くらい、商売抜きで楽しみたい」
「取引だと申したではないか」
「いいえ、あの湯女風呂の割部屋ではなくて、ね、ここだったら、ここでこうして新九郎さまに抱かれたら、ほら、夫婦(みょうと)のような気持になれるじゃないか」
客に買われる女ではなく、好きあった男と女の関係で契(ちぎ)りたいというのだ。そんな女の心情はやはり哀れであった。
新九郎ははじめて女の下肢をひらかせた。
果てたのち——
小萩はいつまでも新九郎を放そうとはしなかった。
「このまま、凝っと……ね、凝っとしていたいの」
湯女としてではなく、一人の女として新九郎ほどの男に愛撫された喜びが、小萩を夢の世界に誘おうとしている。
このまま安らかに眠りたい思いと、眠ってしまっては、新九郎に去られてしまうというおそれと、そして、眠りの中に溶けこませてしまうには、惜しい感情が、こもごもに、女の胸の中を揺曳しているのだった。
夢を見ようと思えば、嘘でも見られる。他の男に抱かれていても、新九郎と思えばいい。
どんな嫌いな男だって、眼を閉じてしまえば、それまでだった。歯くそをいっぱいためた黄ろい汚ない歯の口で、女の秘所を弄ばれても、眼を閉じて新九郎にされていると思えば、それなりに気持は誤魔化せるものなのだ。
新九郎の爽やかな口を思えばいい、清潔な皓い歯並びを思えばいい。いくばくかの銭で肌の切り売りをする女たちには、そういう、わざが身についているのだった。
そうでなければやりきれない。きらいな男を一々、拒んでいては商売にならない。それだけに、好きな男に抱かれ

たいという思いは切実だった。
その思いがかなえられたのだ。現実の中で。
小萩は新九郎の背にまわしている手を静かに動かした。男の背をなでている。このからだは、間違いなく新九郎さまのものだと思った。
逞しい新九郎は、一度放ちはしたが、まだ女の裡で、息づいている。その男のいのちも懐しく頼母しいのである。
男に惚れたことのない女が、自分から燃えた。それだけに、何度も何度も、快感に呻き、いのちのすべてを燃焼し尽くしたように、小萩は果てたのだった。
また表の小路を数人の男が走っていった。血の臭うような喚きが風のように通り過ぎた。
「行かなければならぬ」
静かに新九郎は身を起した。
「あ、まだ！」
あわてて小萩は両の手に力をこめて、
「行かないで」
「いや、こうはしておれぬ」
「でも、もう少し……」
「駄目だ。行かねば」
「でも……でも、まだこんなに」
新九郎のそれはまだ硬かった。
「しようのないやつだ」これはおのれに言ったのである。
「おれの方もよほど小萩を好きらしいぞ。だが、駄目だ。行くぞ」
「どこに？」
「――黒丸だ、あいつを探し出さねば」
「あ、それなら……」と、女はあわてて、言った。「急がなくったって」
「どうしてだ」
「だって、黒丸なら、あたし、知っている」
「知っている？」新九郎は闇の中で、疑うように、女の顔を見つめた。「なぜそれを早く言わぬ」
「だって、聞かなかったでしょ」
「うむ、それもそうだ。どこにいるのだ、黒丸は。で、寿々女も一緒だろうな」
「すずめって……ああ、あのお輿入れしたという女の子」
「姫といえ、その寿々女姫だ。一緒にいたであろうな」
「いたかしら」
小萩の声には眠気がある。
「おい、どうした、どこで黒丸に逢ったのだ、早く申せ」
ぐいぐい揺するのだ。もう新九郎の男のものは、目的意識をなくしてたらりと凋んでいた。
「しかたがない」
漸く、小萩はあきらめたようであった。もの憂げに小萩は身を起し、汚れたところを始末した。

「灯をつけましょうね」
「要らぬ。それより黒丸のことだ。どこで逢うたのだ」
「さあ、どこだったかしら、いえねえ、逃げてくる途中でしょう、だから、はっきりとは……」
小萩は小首をかしげ、歎息を洩らした。
新九郎に愛撫されてすっかり頭の中が空虚になったらしい。が、新九郎の眼から見れば徒らに時間稼ぎしているような気がしてならない。
「ああ、思いだしました。そうですよ、あそこですよ、ほらあの、文殊堂」
「天殊のか」
「あそこの裏に小路があるでしょ、あそこでしたよ、少し離れた通りから、ちらっと見たのだから、はっきりとは言えないけれど」
あてにならない消息でも、無いよりはマシであった。新九郎はすぐに行ってみる気だった。立ち上って帯を締め直した。
「これから？」
「そうだ」
「だって、こんなに暗いのに。明日朝早くに行ったほうが、よくわかるのじゃないかしら」
「時間がないのだ。それに、おれは夜の方が動きやすい」
まだ深夜というわけではない。
「じゃア、また来て下さる？」
「来られたらな」
「ここの町はわかるかしら。そうねえ、そこの角に瘤欅があるから目印になりますよ」
「わかった」
新九郎は外の足音に耳を澄ましてから飛びだした。
たしかに五つ抱えもありそうな瘤欅が鬱然として蛸の足のような根を八方へ張っていた。かなりの年月のものだが、上の方はない。雷火で裂け落ちたのであろうか。
新九郎は空を振り仰いだ。うるんだ星をさぐって、方向を見定めた。
(どっちが勝っても、あたしは大丈夫)
天殊は自分の才覚に酔っていた。
両方を上手に操っている自信がある。
竜王丸派が勝っても、範満派が勝ってもいい。陰陽師としての存在価値は両方とも認めているのだ。この戦さが、それを証明している。
雑兵ばかりか、侍たちも、名ある武将までもが、血と火に酔い痴れて女を犯し、財宝を奪い、殺戮を楽しんでいた。
その狂乱の中にあって、この文殊堂だけは、誰も手をつけようとしない。
迷って乱入してくる者もないではなかったが、

「ここはよせ、陰陽師の住居だ」
「天殊だな、危ねい危ねい、うかつなことをやって、気ふれにでもされてはかなわぬ」
「おん大将に知れたら無事では済まぬ」
「ここだけは手をつけるなという仰せであったわ」
と、誰もが敬遠した。
陰陽師は、呪師でもあり、超人的な通力を持つと信じられている。この時代、まだもののけを信じる者が多い。
天変地異は、そうした力によって起されると多くの者が信じていた。
黒丸と寿々女が、この文殊堂に逃げこんできたのは、雑兵たちのその会話を盗み聞いたからであった。
黒丸と寿々女は、不浄門から忍びこむと、下人や水仕の女たちの眼を盗んで、屋敷の裏手から、文殊堂の縁の下にもぐりこんだ。
「ここなら、見っからないよ」
「でも、犬が入ってきたら」
寿々女は心配そうだ。
「犬なんか平気さ、おらが首ねっこつかまえて、石でぶっ殺してやるよ」
「いけないわ、ここは神様のお堂でしょう」
「仏様のお堂だよ」
「あら、神様じゃなかったかしら」
寿々女は不服そうだ。せっかく二人きりになったのに、そんなことで仲たがいしたくなかった。黒丸は妥協した。
「どっちだっていいさ、どっちでも寿々女を守って下さるさ」
われながら、うまい言い方だと思い、黒丸は少々得意になった。
「そうねえ、きっと」
「そうさ、寿々女が可愛いから守って下さるさ」
ますます、いい。これで、何か食べるものがあると、尚いいのだが。そう思うと、急に空腹が感じられた。あちこち走り廻ったのだから無理もない。
「寿々女、おなかがすかないかい」
「ええ、少し」
「おら、腹ぺこだ。何かとってくるよ」
「どこに行くの」
「きまっているじゃないか」
この屋敷の台所に決っている。いや、ここのお堂なら、お供物があるかもしれない。
黒丸と寿々女がここに駈けこむ姿を小萩は、ちらりと眼の隅に見たのであろう。
新九郎は、塀についてまわった。裏門も不浄門も閉っている。万一を警戒している。たとえ、名を告げても、めったなことでは戸を開けてはくれまい。

(乗り越える方が早い)
と、決断した。小路の塀は六尺ばかり。新九郎は難なくこれを越えた。
(さて、天殊の部屋だ)
寿々女を匿まっているとすれば天殊は、また何やら思惑があるにちがいない。一筋縄ではいかない女なのである。ところが、この少し前、実はほかに客があったのである。天殊はきちんと小袖の重ね着をして、この客と応対していた。
「どうなされたのでございます、かような夜に、お出でになるとは」
「逢いたくてな」と、東雲之助は言った。「だから来た」
「まあ」
「殿の命令ではない」
天殊は二ノ句がつげない。
「……」
「おれの気持さ。わかるだろうな天殊」
東雲之助の眼は燭の明りを受けて潤んでいるような光を反射している。
「さあ……」と、軽くそらそうとして、天殊は微笑した。
「驚きました。戦さの晩にお出でになるとは」
「勝ち戦さの、と言ってもらいたいな」
「お前さまは、殿の寵臣、今宵こそは、いろいろと、御用繁多でありましょうに」
「それを捨てて来たのだ、この気持、わかって貰えよう」
東雲之助は、膝でにじり寄った。
戦さに勝つと、こうも、態度が変るものか。安手ではあったが、ともかく美貌といえるものが、東雲之助の身上だったのが、急に大人っぽいものに、変っていた。
昨日までのかれには、寵童上り、稚児姓上りといった女性的な面が見られた。それが払拭されたような感じなのだ。鎧が緋縅しの派手なものだったにも関わらずそこには戦さに勝った男の、逞しさがあった。
安っぽい美貌というのは、少女や浮薄な女たちに好まれるもので、東雲之助はそのおのれの美貌に酔い、乗っかっていたところがある。血の臭いと殺戮の嗜虐的な快感は人間を変える。
あるいは、かれ自身、そのおのれの変り方を自覚していたのかもしれない。天殊のような、したたかな女に対するには、以前の美男子よりも、いまの〝おれ〟のほうがいい、と自認しての推参かもしれなかった。
(この男は……立派なおとこになったつもりらしい)
天殊は、東雲之助の心中を見抜いていた。
(あたしが惹かれると思っているのかしら)
いままで、上手に利用してきた心算だった。東雲之助の方も女にかけてはかなりの経験を積んでいたが、ほかの男

と同じく、天殊のような女は、勝手が違った。
それがまた、魅力に感じたのだ。心情の女々しい男は、強い女に惹かれる。
素姓不明の妖しい魅力を持った天殊は、まさに〝強い〟といえる。
女は優しさ淑やかさ忍従の美徳をそなえていれば、たいてい生きてゆける。その上、美貌が備っていたら尚更だ。
強い姿勢で生きる女性は、この時代、多くの困難と戦わねばならなかった。天殊には野心がありすぎたのだろう。
持って生れた気性もあるだろうが、こうした世の中で自分の意志を貫くということが至難であることを知りながら、それに挑戦していた。
もっとも、天殊のその行動を支えているのが、智慧や才能であるのは当然だが、通俗的にはやはり美貌なのだ。
天殊に、もしこの美貌がなかったら、ここまで成功したかどうかわからない。ただの拝み屋でしかあるまい。美貌は、才智を一層、きらめいたものに見せる。
東雲之助が、その才たけた美貌に惹かれただけではなく、彼女を出世に利用しようとしていたことは、早くに見抜いていた。
天殊はそれを逆手にとって、利用し、範満に食いこんだのだ。
うすうすは東雲之助もそれに気がついている。ただこの男の欠点は、おのれの美貌を過信していることだ。
女は、かれを利用する気持とともに、
(やっぱり、おれに気がある)
そう思った。思いたいところがこの男の甘さであり、愚かさだった。
それは、天殊にとって、都合のいいものだった。彼女の野望をカムフラージュできる。
もしも天殊に多少なりとも、この男を受け入れる要素があるとすれば、それは、嘗ての範満と共通の感情だろう。
天殊の女としての部分が、色子で慰められようとする、きわめて、単純化された性的行為にすぎない。
たとえ天殊がこの男を抱いたとしても、それは、一時の快楽を得る、自慰に近いものになるのではないか。
さすがに、そこまでは、東雲之助は見抜けない。
「天殊どの、この男の気持を汲んで下され」
東雲之助は、にじり寄って、女の手をつかんだ。新九郎はこのとき、板戸の外に忍び寄ってきている。
いい匂いが流れてくる。
板戸の隙間からだった。
門は閉っていたが、馬が門内の桜の木につないであったし、従者が一人は、馬の傍で居眠りし、一人は台所で酒を馳走になりながら水仕の女をからかっていた。
どうせ、見たり聞いたりの話を、さもおのれの武功のように吹きまくって、気を引いているのだろう。
香は極上のものだった。
その匂いをたどるだけで天殊の居るところがわかる。
板戸の前まで来たとき、中から洩れてくる会話に新九郎は耳をそばだてた。
(東雲之助だな)
声に特徴がある。きんきんした女のような声である。
それに応える天殊の低い声は、いかにも迷惑気だった。
新九郎は、にやりとした。
板戸の細いすきまから、一本の金の針を立てたように灯りが洩れている。
いつまでも、こういうところにうずくまって聞き耳を立てているのは、性に合わぬ。
板戸に手をかけると、さっとひきあけた。そして笑いながら、
「やあ、生きていたか」
ぎょっと振りむいた東雲之助へこう浴びせた。
「ぬッ」
咄嗟に、東雲之助は抜刀した。新九郎の双脚を薙ぎ払うように、坐ったままの抜き討ちだった。
「くたばれ」
しゃぁーっと、白刃が半円を描いている。
天殊があっと思ったとき、新九郎は一跳していた。これは刀を抜こうともしなかったのである。
虚空を薙いだ刀を、とりなおそうとする東雲之助の顔を、
「痴れ者が」
たっと、蹴っていた。
抜刀するまでもない。
顔を皮足袋が掠めた。東雲之助は鼻をつんと突き上げられて一瞬、目が眩んだ。二度目に、がっと、顎にしたたかな蹴りが来た。ずしんと、頭全体がしびれ、仰向けに転がっている。
二度蹴りをうけて目の前が真っ暗になったまま東雲之助は、動けなかった。倒れた拍子に後頭部もしたたかに打ったのである。
「馬鹿めが」
新九郎は語尾を笑いに変えると、かれの手を蹴った。倒れながら、ともかく、刀は握ったままだったのだ。
刀は手を離れ音を立てて、床をすべった。
「天殊、無事らしいな」
「おかげさまで」と、天殊は微笑した。「わたくし、新九郎さまが、お見えになると、信じていました」
「ほう、勘か」
「わたくしには、なんでもわかります。新九郎さまのお優しい気持もよくわかります。そして、それを態度にあらわすのが、お嫌いだということも」

新九郎は笑いだしそうになった。こういう臨機応変の言葉のうまさは、いかにも天殊らしい。
（こいつ、おれが助けに来たと思っているのか）
当意即妙といおうか、新九郎の姿を見ると、すぐに、そういうふうにすらすらと、こちらの気持をくすぐるような言葉が出る。この天殊という女、たしかに、才たけている。
「おれは、女に優しくない」
「いいえ、それは、殿方の差じらいと申すもの」
「……」
「失礼ながら、お可愛らしい」
「おれが、か」
「はい。武功を誇らぬ奥床しさと同じにございます。女にお優しいのは、つまり、殿方の中にあってお強いからでございましょう」
「……」
「日ごろ、お強い方は、いじましさがない。ゆえに、陰弁慶、内弁慶ということがありませぬ」
「だろうな」
「家で女房をいじめておる方ほど外では、いじましく、おどおどしているもの」
まるで、夫婦生活の経験者のように言う。
正体の知れないところが、また魅力なのだが、こういう女には、真実がない。うっかり信用するとひどい目にあってしまう。
（尻子玉を抜くという河童の話があったな）
新九郎は、その好色的な図を想像してにやりとした。
（この女は、いわゆる尻の毛まで抜くやつだ）
その笑いをどうとったのか、天殊は、身をくねらせるようにしてすり寄ってきた。
「新九郎さま、これから、どうなさるおつもりでございます」
「どうとは」
「戦さのこと、新九郎さまのこれからのこと」
「敗け戦さのことか」ずばりと、新九郎は言い、男らしい豪放な笑い声をあげた。「範満にしてやられた」
「……」
「小股をすくわれたという感じだがな。敗れたのではない。おれは負けたとは思わぬ」
「……」
「最後に勝つのは、おれの方さ」
「でも、御屋形を」
「屋形は奪われた。が、屋形なぞは、いつでも奪いかえせるさ」
東雲之助が正気にかえったのか低く呻いている。呻きながらも、耳ははたらいているのであろう。新九郎は、聞かれていることを承知の上で、話をつづけた。

「ま、当分は、範満にいい気持にさせておこう」
「新九郎さまは、どこへ」
「さァな、まだ決めておらぬ。それより、この男の始末だ。多くの犠牲者の供養のために、こやつの生首を文殊堂の屋根に梟（さら）すか」
東雲之助の呻きが大きくなった。
「こやつの顔は誰でも知っているからな」と、新九郎の言葉は、どこまで本気かわからない。「効果が大きいだろう」
「さらし首に……」
天殊は恐ろしそうに、身をふるわせた。
「平治物語の絵にあったではないか、それ、何とかいうた、入道首、左様さ、入道信西（しんぜい）が生首を屋根に梟（か）けてな、その罪を公けにする」
「東雲之助どのの罪……」
「謀叛だな」さらりと言った。「範満が元凶、こやつが腹心ゆえ片割れ」
「ではやはり」
「梟首すれば、範満が吃驚するだけでない。連累の者どもが動揺する」
「……」
「家臣どもが、範満へ信頼を失う。主従の間が、緊密を欠けば、おのずから、範満の天下は崩壊する」
新九郎の言葉は力強い。いつか天殊はうっとりと聞き惚れていた。
新九郎はそう語りながら、実は、内心その望みがないことを承知していた。知っていながら、話した。東雲之助に聞かせるためであった。
俄然、東雲之助は反応を見せた。がばとはね起きざまに、大刀へ手をのばしたのである。
新九郎が蹴って遠去けていたかれの刀だ。
刹那、新九郎は身をひねって、抜刀するや、丈いっぱいに腕をのばして、その手くびを斬った――
ぎゃっと、東雲之助は悲鳴をあげた。
（斬られた！）と、思った。
天殊にも、そう見えたのである。
が、手くびはついている。峰打ちだった。東雲之助は、おのれの右手を抱くようにして、うずくまった。知覚を失っている。が、腕の先にちゃんとついているのだ。
（なんというお方……）
呆然と天殊は、新九郎を見つめていた。
これだけの余裕を持っている男など見たこともない。敗戦もこの男には一向に影響を与えていない。
おのれの手首をかかえてうずくまり、呻いている東雲之助は、あまりに対照的だった。
その女の眼を東雲之助も意識しているのか、かれは、さらにもう一度、隙を狙った。呻きのうちに手の痛みを治し

ていたのだ。
脇差を抜くなり、からだごと、新九郎に突っこんだのである。
その最後の必殺の気も、しかし新九郎を傷つけるには至らなかった。
「性懲りもない」
新九郎は東雲之助を叩き伏せるや、その脇差をざくりとかれの手の甲に突き立てていた。
東雲之助の手は女のように白い。
ふっくらとして、指のつけねに、えくぼができる。その手は、これまでに、どれほど女を弄んだかしれない。
ぴたっと、掌が床に吸いつくように五指がひらいた。脇差はその手の甲をぐさりと刺し貫いて床まで通っている。
「ぎゃあーっ」
けものじみた叫びをあげて東雲之助は残り三肢をばたつかせた。
新九郎はそれ以上、手を下そうとはせず、
「これでいくらか懲りるだろう。いずれ、範満にも苦しみを味わって貰うことにするが、きさまから伝えてやるといい」
「た、助けてくれ、う……痛い、痛い、気が狂いそうだ、こ、これを、抜いて……」
「自分で抜いたらどうだ。左手があるだろう」
その左手を、柄に伸ばす気力も東雲之助にはなかった。あぶら汗が額にねっとりと吹きだし、だらだらと垂れた。
「天殊、黒丸はどこにいる？」
「え？」
「黒丸だ、ここに来たはずだ、見た者がいる」
「黒丸、あっ、あの子、知らない」
「知らぬ？」
この有様を見て、天殊が虚言を弄するはずはなかった。
そうすると見違えであろうか。
天殊は、わなわなと顫えている。
東雲之助の手から流れる血が床にひろがり、その五指をひろげた手は血の池の中の奇妙なかたちの小島のように見えた。
その血が、膝のほうへ流れてくる気がして、天殊は思わず立ち上り、新九郎にすがりついた。
「行きましょう」
「どうした？」
「わたくし、こわい」
天殊は少女のように身を竦めて、新九郎の腕をつかむと、部屋を出た。
「文殊堂へ」
わなわなと顫えているのだ。
どこまで演技かわからない。が演技にしては、つかんだ

手が熱く顫えが伝わってくる。
「て、て、天殊、助けて、くれエ、これを、抜いてくれえ」
地の底からの呻きのような東雲之助の声に耳をふさいで天殊は文殊堂へ急いだ。
ここまでくると、さすがに声は聞えない。板戸が厚く、ぴったりと隙間のないように造られている。外の音を一切遮断するということは、内部の音が洩れないわけだ。
天殊は須弥壇の前もかまわず新九郎にすがりついた。
「こわい、こわい、ああ、天殊はいままで気が強いと思っておりましたが、ほんとうは、こんなに気が弱い、小心者……」
急に変った様子に、新九郎が返事もできないでいると、ぐいぐい、顔を胸にこすりつけてくる。
「弱い女でございます、しっかり抱いて下さいまし」
この女、どこまで狐なのか。
この文殊堂では、範満を誘い、犯されたような顔で、からだの交渉を持った。さらに北川の夢子と肌を合わせて、女同士の喜びを共有した。
どちらに転んでも損のない布石を打っている。東雲之助に甘い顔を見せたのも、範満へ近づくための手段だったし、いま、その東雲之助が力を失うと、新九郎の心を獲ろうとする。
天殊にしてみれば、九分通り夢子を自家薬籠中のものにしたとき新九郎があらわれて、計画をつぶしてしまった。奪い去ったのみかしたたかに殴られた。目から火が出るかと思った。頬が腫れて、暫く熱を持ったほどだ。
憎い新九郎である。この敗け戦さで、命からがら蒼くなって遠国へ突っ走ったと思ったのに、平気で舞い戻ってきている。
いまや、この駿河の府中は、すべて新九郎の敵といっていい。範満は新九郎の首には莫大な賞金を賭けるだろう。それを知りながら、平然とあらわれた上に、卑怯な東雲之助を叩き伏せ、手を床に釘づけにした。
あんなにサラシ首のことを言いながら、首を掻こうともしないのは、東雲之助など、ひとかどの武士とは認めていないからであろう。
その男らしさに、天殊は、いつしか憎しみが消え、はげしい欲情を感じていた。
（抱かれたい）
渇えた咽喉が、水をもとめるように、思った。
感情の振幅の烈しい女である。憎悪も強いが、恋情もまた人一倍強い。
憎しみということには、無視よりも感情の交流がある。そこには対象への関心がある。まるっきり無視した存在には、人間的つながりはないが、憎むという気持は、掌を返

すと、愛に変る。憎悪や愛情は、所詮、人間の情感の度合の強さを示すものだ。

江戸時代に入ると、女性の感情は常にころされ、表現することが少なくなってくるが、この激動の時代には、女性もまた喜怒哀楽がはげしい。

ことに天殊は、野心家である。常の女性とは違う。

新九郎への憎しみは、計画を邪魔されたとき殺したいばかりだったが、いま、その男らしさに魅了されてその厚い胸で抱きしめられ、燃え立たされ、狂うほど、虐められたい想いに駈られたのである。

「新九郎さま」熱い息を吐いて、すがりついていた。「おねがいです、新九郎さま、わたくしを哀れと思し召して」

「何が哀れだ？」

「あの、夢子さまと、あんなところをお見せして、恥しい」

「女同士のあれか」

「はい……男を断っているために、つい」

「男の力がほしくなったのか」

「ええ、ほしい」天殊は、あえぐように言った。「あなたさまがほしい」

「憎かったのではないか」

「さっきまでは」正直に彼女は言った。「でもいまは……好き、抱いて下さいまし」

「あきれたな」

「ほんとうです、新九郎さま、天殊は、こんな女、自分でも、ときどきいやになることがあります、なんて、あたくしは、男勝りの女だろうと」

「……」

「でも、いまは違う。違います。ほんとうに、こんな気持になったのははじめて、ああ、苦しい、せつない気持、ああ、新九郎さま、わかって下さいまし」

「おれは女心はわからぬ」

「わかって下さらなくてもいい、抱いて下さるだけで」

「……」

「あなたさまに抱いて頂けたら、天殊は」

と、あえぎながら、女の手は男の胸をまさぐり、大胆に股間に触れている。

むろん、外からだが、天殊の指は、狎れた動きを示していた。

そこには、おとこをもとめる女の昂ぶりが感じられる。

天殊は指で新九郎のそれをたしかめながら、その微妙な動きの効果をはかっているようだった。

この女の自信がうかがえる。自分の魅力を知っている女の自信である。

「天殊は、おんなになります」

思い詰めた調子が、新九郎の冷笑をとめさせた。

「なんと？」

「おんなにして下さいまし」

意外だった。意外すぎて、言葉がなかった。

天殊が女性であることは、知っている。北川どのと抱きあっていたときも、乳房まではっきりと見ている。

だが天殊の言うおんなとは、新九郎にも愛される女という意味だったろう。

「あたくしの悪いところは、新九郎さまに抱いて頂けるとあらたまりまする。あたくし、ほんとうに女らしい女になりたいと、どれほど思ったことか、おねがいです、新九郎さま」

その手は、さらに一層、新九郎のものをまさぐってくる。

こんな女など、と思いながらも、目の前に甘肌の匂いが濃くたちのぼり、うるんだ眼が新九郎の眼を吸いこむようであり、その花びらの唇が、半ばひらいて皓い歯を小さく鳴らしているのが、男の気持をそそりたてた。

新九郎は、否みながらも、おのれのおとこが充血してくるのをおぼえた。

それは、はっきりと天殊に自分の魅力を確信させたのである。

「新九郎さま」

天殊はずるずると崩れるように膝を折り坐ると新九郎の下腹部の盛り上りに頰ずりした。

動物の多くは、生殖機能が季節や年齢によるものだが、人間は幼年もしくは老病でなければ随時随意である。性交が享楽の意味を持つのはそのためであろう。

新九郎がこの天殊を蔑すみながら、しかし、その紅唇を魅力と感じたのも、単に男の性衝動にすぎない。

刺戟を与えられれば、好悪の感情を抜きにしても、勃起する。新九郎の壮軀はこの上なく健やかであった。

その硬さが、天殊の情感をますます煽ったようである。

新九郎の腰を抱きしめると、そこに頰ずりした。

新九郎は立っている。袴の布地を透して、下帯を透して、直接にその熟した肉体に接しているような喜びが、天殊をわななかせている。

女の肌は燃え、そこに夢中で頰ずりしているという意識が感覚を鋭敏にし、天殊の両手は男の腰を抱きしめ、揺すぶっていた。

「新九郎さま、焦らさないで！」

仁王のように突っ立ったままの男にしびれを切らしたように、天殊は手を放し、袴の紐に手をかけた。

「おねがい……」

「そうだな」

「おねがい、新九郎さま！」

「抱けとか」

「はい！　早く」

悶える女の衣紋が崩れ、胸がはだかって、上から見おろす男の眼に、乳房のふくらみが、はっきりと見えた。
　新九郎は、むらむらと欲情が噴きあげるのをおぼえた。
「天殊！」
　と、肩をつかんだ。
　鷲づかみだった。指が肩の肉に食いこむかと思われた。
　その痛みに、天殊はうっとりとなった。強い男の手で骨が砕けるほど、揉みしだかれたい――
　快い眠りにおちてゆくときのような恍惚感を無惨に破ったのは、女の悲鳴だった。
　足もとからである。天殊はびくっと、からだを顫わした。
「何だ？」
　新九郎も太い眉を動かした。
　また聞えた。こんどは、方向がわかった。足もとからである。つまり床下から聞えてきたのだ。
「誰かいる、この下に」
　新九郎は天殊のからだを突き飛ばすようにして、とんとんと、床板を踏みしめてみた。
「天殊、地下蔵があるのか」
「い、いいえ、そんなものは」
「隠すな」
「ほんとうです、この下は床下でございます」
「高床になっているのか」
　新九郎が板戸をあけたときだ。やはり悲鳴を聞いて駆け戻ってきた黒丸の姿が見えた。
　黒丸は台所から盗んできたらしい食物を笊に入れて抱えていた。
「黒丸！」
　新九郎は叫んだ。
「あっ」
　黒丸はふりかえり、立ち止った。そこへ、寿々女が駆け寄った。悲鳴は寿々女だったのだ。
「お犬が、黒丸ちゃん、助けて」
　寿々女のうしろから、むく犬が追ってくる。
　危害を加える様子ではなかったが、寿々女には自分のからだほどもある犬が近づいてきたので、恐怖のあまり悲鳴をあげたのであろう。
　こちらが走れば、犬も面白がって走るものだ。寿々女にはそれがわからない。
「寿々女、おいで」
　黒丸は笊をほうりだして庇おうとした。
　むく犬のほうでは、そうなると明らかに敵意を燃やした。犬ばかりでなく、動物は敏感である。敵意には敏い。防衛本能がはたらくのであろう。
「黒丸、よせ」
　大喝するや、新九郎は小柄を抜きざまに、さっと飛ばした。風を切って、小柄はむく犬の鼻先へ――
　新九郎には、咄嗟の間にもむく犬を傷つける気持はなかった。ただ、その行動を阻めばよかったのだ。
　小柄は、鼻先を掠めた。むく犬は白い光と冷たい刃の感触がもっとも鋭敏な鼻を掠めたので仰天した。一声吠えて、走りをやめ、顔を振って、さっと向きを変えた。
「新九郎さま」
　喜びの声をあげて、寿々女が駆け寄ってくる。
「探しに来たのだ、二人とも大事ないようだな」
「おら、腹が減って」
　と、黒丸はほうりだしたものを拾い集めた。餅や饅頭や干柿や栗などだった。
「どうしたのだ、天殊に捕まっていたのか」
「床下に隠れていたんだよ」
「お犬こわい」
　寿々女は、まだ顫えている。
「はははは、もう大丈夫だ。おれが来たからには、安心していい」
　新九郎は哄笑した。こうなるともう、天殊もあきらめざるを得ない。
「部屋へあがって、ゆるりとお食べなされ」
　女たちに湯茶の支度を言いつけ酒の用意もした。
　抱いて貰えなくても、ともかく、新九郎の気持が変って来ただけでも、嬉しかった。
　範満の天下は暫くつづくだろうが、新九郎と北川どのが結びついていれば、竜王丸の成長後の変化ということも当然考えられる。
　先の先まで天殊は考えている。感情的に範満を好きにはなれないだけに、新九郎という存在を心の支えにしたいという、女らしい気持が動いていたのは事実である。
「馬が要るな」
　酒を飲み、餅を食べ、新九郎は腹ごしらえが済むと立ち上った。
「やつのがある」
「はい」
「あれを借りよう」
　東雲之助は手を床に釘付けにされたままだった。
　懲らしめのために、暫くあのままにしておくがいい、と新九郎は言った。
「死にはせぬ。ただ、刀を抜くのが、ちょっと難しくなるだけだ」
「まあ」
「肉が刃を巻きこんでしまうからな。抜くときも痛いだろう。医者を呼んでやるといい」

文殊堂には、牛はいるが、馬はない。むろん、新九郎は、はじめから、東雲之助の馬をあてにしている。

従者が二人いたが、台所で駄弁っていたやつは新九郎が当身を喰わして、眠らせている。馬の傍で番をしていたほうは気持よさそうに、はじめから眠ったままであった。

「一頭しかないが、途中でもう一頭探すとしよう。黒丸、おまえは馬に乗れるな」

「乗れるけど、おら、いいよ。走ってゆく」

黒丸も腹いっぱい食べて元気をとり戻している。

空には、あちこち、火炎と吹きあげる火ノ粉が見える。幸い風が少ないから、ここまで類焼してくることはあるまい。

今川屋形を奪い取った範満にしてみれば、もはやこの府中はおのれのものであり城下街としても東海一の規模と殷賑を誇る華麗な街を、焼きほろぼす気はない。

全力をあげて消火につとめているはずだった。

「天殊、世話になった」

「あら、もう……せめて、もう少し」

おや、この言葉は、誰かに聞いたようだな、と思った。さっき、小萩に聞いたそれではないか。

女は身分や年齢が違っても、言うことは同じだな、と新九郎は苦笑した。そこがまた女の可愛いところでもあるのだ。

「夜が明けては、無事に逃げ出せなくなる。さ、寿々女まいろう」

新九郎は抱きあげた。

表へ出ると、門のうちに馬をつないで眠っている。槍も傍の槐の木に立てかけてある。

「黒丸、あの槍を持て」

「ねい」

足軽言葉で、威勢よく、黒丸は槍をとって担いだ。新九郎の郎党になっていい気持なのだ。

槍も三間柄に刃渡り五尺などというすさまじいものになると、持ち上げるのも容易ではないが、東雲之助だから、青貝摺一間半の柄で黒丸にも持てる。

新九郎は、寿々女を抱いたまま、軽く馬にまたがった。

「門を開けろ」

馬が嘶いた。それで口取りは眼をさました。

何やら叫ぶと、脇差抜いて、馬上の新九郎へ斬りつけている。

寝ぼけ眼で、狂ったように斬りつけた脇差である。新九郎は馬上から、足をあげて蹴った。

「邪魔ひろぐな」

どーんと胸を蹴られて、刀を振りかぶったまま、よろよろとなったが、「おらが主人の馬を」と、歯を剝いて、なおも斬りかけようとする。

「執こいよ、やい!」

うしろから、黒丸が槍で殴りつけた。

東雲之助の槍だ。ぶーんと弧を描いて、腰のあたりを殴ったから刀を持ったまま、突んのめった。

さっと馬をよけて、新九郎は、

「行くぞ、黒丸」

馬腹を蹴った。栗毛は、新しい主人を得て、喜び勇んだようである。はげしく嘶いて、門から走りだした。

郎党は地面に突っ伏したまま動かない。倒れた拍子に鼻柱でも打ったのか。

(死んだのかしら)黒丸はちょっと気になったが、(殴っただけじゃないか、この弱虫)

あれくらいで死ぬのなら、死ぬほうが悪いんだ、と、黒丸は自分に納得させて、馬のあとから走っていった。

新九郎は夜の道に蹄の音をひびかせながら、馬を走らせている。黒丸が徒で追ってくることが出来るくらいの走らせかただ。速度を加減している。

夜を焦す炎は一箇所だけになっていた。ほかは消火したらしく、黒煙だけが濛々と夜空に立ちのぼり、頭上にはその煙の幕を拡げたように、星の光も消えている。

町角で篝火を焚いて、往来を見張っている連中の姿が見えた。

「うるさいな、別の道を行こう」

新九郎は馬首をむけなおした。

小路を抜けて、暫く走ったが、警戒の網は、要所に抜かりなく張られていた。

残敵掃討は勝利者たちにとって楽しい仕事である。雑兵らは勝ち酒に酔った顔を夜気にさらして、槍や薙刀をふりまわし、獲物のかかるのを待っているのだった。

「面倒だ、あれを突っ切ろう」

こんなことなら、東雲之助でも連れて来て、楯にすればよかったと思ったが、もう遅い。突破するしかなかった。

「黒丸、いいか、あそこを突っ走るぞ」

「ねい」

「おれが二、三人薙ぎ倒す、すぐうしろから走って来い。遅れるとやられるぞ」

新九郎は槍を受けると、おのれの脇差を渡した。寿々女に鞍の前壺に伏せるように言った。そして、並足で馬を走らせた。

蹄の音を聞きつけた者がこちらを見て何やら叫んだ。松明が集まるのが見えた。

松明は五つ六つ。ばらばらと集まって来た雑兵は十人内外――

と、すばやく見てとった新九郎は、狼狽するふうもなく、並足で馬を近づけた。

その悠然とした態度が、雑兵らの殺気を僅かでも削ぐこ

とになった。松明が大きく振られ、
「止れ、止れ」数人が喚いた。「馬から降りろ、名乗れ、何処の者じゃ」
　松明のあかりに、すかし見ている。新九郎の顔がはっきりと見えた。あっと驚きが掠めた。刹那相手より先に大喝していたのである。
「伊勢新九郎長氏、罷り通るぞ」
　ぶーんと、槍が唸った。片手薙ぎだ。松明が数本、はねとばされて火を虚空に走らした。
　たちまち悲鳴と怒号が新九郎を包みこむ。槍は、群がり寄る雑兵の頭上に唸り、ばしっばしっと叩きつける。
　東雲之助の体格に合わせた槍である。新九郎が打ちふると、大きく撓った。まるで、青竹でも打ち振るような調子だった。右を打ち、左を打って、馬腹を蹴った。馬は一瞬、棒立ちになり、はげしい嘶きを残して走りだした。
「逃すな、追え」
　瞬時に数人を打ち倒された雑兵らは、ぱっと輪をひろげて、浮き腰になったが、新九郎が馬を走らせたのを見ると、あわてて、槍をとりなおした。
　馬のうしろから黒丸が走るのがかれらに追撃を促したようである。
「あの童を捕えろ」「そうじゃ、あいつがいい」「童を捕えれば、新九郎が戻ってくるぞ」
　その目論見はこの場合、浅薄だったようである。弓をひきしぼった者も、黒丸を射るのをためらった。矢を放っていれば、殺すか傷つけるかしていたろう。
　弓ノ者は二人いた。一人は、早くも、馬上の新九郎に一矢を放っていたのだが、狼狽のあまり、矢は虚しく闇に消えている。
「逃すな、あの童！」
　怒号が背後に迫った。
　黒丸は脇差を抜いていた。が、雑兵らと渡り合うには、背も低いし、腕も細いのだ。まともには戦えない。せいぜい、小廻りのきくところを利点とするしかなかった。
　走るのは早い。鼠のように早い。怒号の渦を巻いて、大津波の迫るように追ってくる連中よりも、早く走れる自信はあった。
　かれらは脚が長いが、物ノ具をまとっている。その重みが、速度をおとした。黒丸は軽捷なのだ。重いものは脇差だけだった。
　それでもおそろしく足の速いやつがいたが、これは、猿臂をのばしたとき、新九郎が馬上から振りかえりざまに薙ぎ払った穂先に首すじを割られて、ふっ飛んでいる。
　これほどの苦心をして寿々女を連れて来たのに、何ということだろう。
　泉ヶ谷から、北川どの母子の姿は消えていたのである。

「おお、御無事で……」
　寿々女の元気な姿を見て、一庵は喜びの声をあげた。相好を崩して、いまにも泣きださんばかり、一庵は寿々女を抱きあげて、みんなを呼んだ。
「やあ、姫のお戻りじゃ、喜べ姫はお元気じゃ」
「おうおう、早よう、お部屋へ」
　その騒ぎの中で、新九郎と黒丸は取り残されていた。
「北川どのは何処だ、竜王丸ぎみは」
　かれらだけではなかった。家臣たちもいないのである。
「なんとした、みんな、何処へ行ったのだ」
「山西へ」
　一庵は冷たく答えた。
「山西？……」
　新九郎を待たずに北川どのが去るなどとは考えられない。三日間の泉ヶ谷潜伏も難しい立場なのに、勝手に宇津谷峠を越えたのだろうか。
　新九郎は裏切られた思いがした。が、北川どの母子の信頼を考えると、かれを捨てていったとは思えない。
「嘘ではあるまいな」
「ほかに行くところがあるかの」
　一庵は意地の悪い顔で反問した。
「だが、たとえ行くにしても誰も残っていないとは」
「石脇城で聞かっしゃい」
　面倒くさげに、一庵は言った。
「石脇の城か」
「そこで聞けばわかる」
　さっさと、泉ヶ谷から出ていって貰いたいと、冷淡な態度だった。もう寿々女さえ戻ってくれれば、あとは知ったことではない。
（石脇城へ行ったのか、夢子と竜王丸は）
　新九郎は宇津谷峠を越えて行くことにした。
「黒丸、どうする」
「うん……」
「うんじゃない、峠を越えてゆくぞ」
「――おらも」
「行くか」
「新九郎さまと一緒さ」
　意を決したように黒丸は言った。この少年の胸の中にも、寿々女への淡い想いが揺れ動いていて、決心には努力がいったにちがいない。
（寿々女と一緒にいたくないのか）
　と、揶揄しかけて新九郎はやめた。少年なりに、想いは強いのだ。その気持がわかるだけに、哀れだった。
　寿々女があれほど一庵はじめ昔の家来たちから大事にされているのを見ると、黒丸も諦めざるを得ない。寿々女の倖せを願えば、結局、黒丸が自我をころすしかなかった。

「行こうよ」
　と黒丸は無理に威勢よく言った。
　六人のなかまはどうしたのか。
　新九郎が意外に思ったのは、大道寺太郎らが一人も残っていなかったことである。その理由は、のちにわかった。
「石脇城といえば、弥三郎春忠だな、あいつが竜王丸を」
　寿々女を拐(かどわ)かさせた男である。藁科川の小島、小枯ノ森での一件は、まだ記憶に新しい。
　新九郎にあざやかなしっぺがえしを喰って、陰険な策略をめぐらしていたのだが――
　こうした北川どの母子の危難に、ちょろりと手を出してくるとは。虚(きょ)をつかれた感じだった。
　今川の一族だが、弥三郎春忠の方に言わせれば、義忠の後を襲う資格がある。不遇をかこっていたという。
　庶腹であることも、かれをひがませる結果になっている。この時代、腹は借りものの思想が一般的だから、嫡男と庶子の差は、殆どない。竜王丸もいわば妾腹である。
　問題は認知のしかたであり、どの女の腹でも、世嗣と定めれば、即ち〝嫡子〟になる。弥三郎春忠は、その点でも、傍流とされた。
　かれが野心を持ち合わせていたことが、かれ自身を不幸にさせた。
　北川どの母子を石脇城へ案内したことも、決して、かれらの為を思ってのことではあるまい。
　真実、今川竜王丸を護るためならば、新九郎にこうした冷淡な仕打ちはしないはずであった。
「これはうっかり乗り込めぬぞ」
　峠へかかる道で、新九郎は呟いた。
「彼奴、何を考えているかわからぬ」
　口実は何とつけても、弥三郎春忠の目的は権力にある。
　北川どのと竜王丸をおのれの翼の中に抱きこむことによって、範満に対して一つの勢力を持つことになる。
　その考えに逢着したとき、春忠は、手を伸ばしてきたのであろう。
「そうだ！」
　新九郎は、気がついた。
「彼奴らかッ、春忠の手先であったか」
　才四郎が一庵の輩下林蔵をひきたてて泉ヶ谷の奥へ入っていったとき、卑劣な矢を飛ばしてきて殺した。あの矢も、春忠の手であろう。
　目的はいうまでもなく、新九郎らと一庵の結びつきを阻むことにある。
　結果としては、寿々女を探してくるという条件によって一庵を納得させることができたが、新九郎にその自信がなかったら、林蔵を死なせたという事実が、竜王丸の不利を招いたことは疑うべくもない。

「黒丸、また、ひとはたらきしなければならんかもしれぬぞ」
「おもしろいな」
　黒丸はすっかり新九郎の槍持ちになった気でいる。
　宇津谷峠にかかってから、
（まわった方がよかったかな）
と、思った。
　かなり嶮岨だが、峠の二つ道のほかにも間道があるということを、聞いている。
　むろん、この夜闇では、街道のほうでも容易ではないのだから、間道を探すなど、まず無理なことだった。
　ただ、目的の石脇城が宇津谷峠を構成する山稜の南塊、高草山のその突端にあることを思うと、搦手(からめて)をつくには、東南の間道をまわったほうがいいわけだ。
　現在でも東海道線は、静岡と焼津の中央で長い日本坂トンネルをくぐっている。
　この海沿いの山が削いだような断崖をなしていることは、大崩れ海岸としても有名なくらいで、当時は、ここの道は無かった。
　そのために、敢て嶮しい宇津谷峠を越さねばならなかったのである。
　この大崩れ海岸の南の末は突兀(とっこつ)たる虚空蔵山で、ここから西へ一・四キロの地点に石脇城はあった。
　東海道一号線は藤枝辺から北上して岡部を経由するが、そのあたりで東を遠望すると、高草山の端に百メートル足らずの丘の突出を見る。そこである。
　焼津平野と呼ぶべきか、志太平野と呼んだらいいか、朝比奈川と瀬戸川に灌漑された流域は茫乎(ぼうこ)としてひろがり、石脇城からの看視を避けることはできない。
　駿府の西の出城に造られた理由がよくわかる。
　ここを本拠として、宇津谷峠の西口である岡部をふさぎ、また焼津の港をふさげば、侵攻を食いとめることができる。
　前述の平原のどまんなかに田中城址がある。
　藤枝市街地の東はずれになるが、ここは戦国末期もしくは江戸初期からのものであろう。乱世に用いられた城は、殆どが山城である。
　平地の城は、行政の目的から築かれたものが多い。現在、この田中城址は西益津小中学校の敷地に包括されている。
　さて、こうした地勢だけに、新九郎は気をつかった。
「松明が目印になってしまうな」
「もう消してもいいよ、歩けるよ」
　二人は岡部の村をぬけたあたり、たしか新九郎の記憶では谷内とか呼ばれていたように思うが、その村はずれから、山に沿った小径を歩きはじめていた。

北川どの母子を入城させたとすれば、徹宵の見張りがいるにちがいなかった。
「疲れたな、一眠りするか」
「でも……城へ忍びこむのなら、暗いほうがいいのだろ」
「暗いうちなら、いいさ。夜明けまで、大分ある」
新九郎は、地蔵堂らしい一宇の破れ堂を見て、近づいた。
松明は消している。星の明りだけであった。
山懐ろになっているので、漆黒の闇に蔽われている。
闇に馴れた眼には、おぼろに御堂のかげが見えるだけであった。
「はて、妙だぞ……」
何か聞える。風の音ではない。
唸り声らしい、とわかってから、新九郎は足を止め、あたりを見まわした。人影はないのである。
その声は、山を蔽う樹々のざわめきのようであり、あるいは地底から噴きあげる怨念の呻きのようでもあった。
「うーん、うーん……」
唸り声にちがいない。
(あのお堂の中だな)
と、新九郎は頷いた。足音をぬすむようにして近づいた。
観音開きの戸が蝶番が片はずれして歪んでいる。角度のせいで明りは洩れていなかったが、のぞいてみると、中に小さな灯が点(とも)っていて、何か動いていた。
お灯明は貝殻に油を入れたものである。灯芯はごく細いもので、その小さな火が、荒れた堂内をぼんやりと照らしている。
そこに一人の女がいた。というよりは、女体が見えたというほうがいいだろう。文字通り女体であった。一糸まとわぬ裸身である。
そこに等身大の地蔵さまがある。その地蔵さまに抱きついているではないか。
地蔵さまは木彫りのようであった。普通、地蔵さまというと石像が殆どであるが、この木彫りには何か由来があるのか。御堂に安置してあるのは、木彫りのゆえであろうか。
その女は、裸身でお地蔵さまに抱きついている。頬をすり寄せ、背中に手をまわし、股をひらいてはさみこんでいるのだった。
さながら、男を抱いているのに変らない。そのあられもない姿態で、女は昂ぶりのままに、声を洩らしているのだった。
異様というか、猟奇的な構図だった。荒れ堂の中の淡い灯も、おぼろな裸身も、恍惚とした女の声も、その性的な動きも、すべてが、妖美で、何か夢の中の出来事のようであった。
「何か見えるかい」

黒丸も縁側に足をかけた。
「駄目だ、餓鬼の見るものではない」
新九郎は手をふった。黒丸はあがりかけて、重心が不安定だったから、のけぞって転がり落ちていた。
思わず洩らした悲鳴と物音が、女の恍惚を破ったようである。
唸り声がとまった。女は、ふっと灯明を消した。闇が裸身を黒い布で包みこんでしまったのである。あとに魚油の匂いが流れた。
「――だれ？」
低い声が、しかし咎めるように鋭い。
女が、闇の中で、緊張しているのが気配でわかる。
まだ新九郎の眼には、その姿態が残っている。
(若い女のようだったが……)
うつつの表情が、おぼろながらに、妖美に見えた。細おもての美貌といっていい。ああいう場合には、かなりの美貌でも、醜く歪むものだ。
新九郎は、その妖しい姿態にいささか、心を奪われていたように、言葉がなかった。
「ひでえなあ、新九郎さま、おらの尻の骨を打って……」
「叱ッ」黒丸をあわてておさえて、「中に人がいる」
「え？」
「人だ。行(ぎょう)をしているらしい」
むろん、その声は、中の女に聞かせるものだった。女の緊張した耳に、その声は、救世主のように聞えたろう。
衣ずれの音がした。急いで小袖をまとっているのであろう。
その音を計りながら、新九郎は、暗いな、と言った。
「こう暗くては、足もとも見えぬ」
「だから、おら、転んだのだね」
黒丸はとってつけたような、へたな弁解をした。
「どなたか、おいでかな」
新九郎はこう声をかけた。
すると、あの烈しい、咎めるような声とは別人のような、しおらしい声が、「はい……」と、返事した。
そして、中から、観音扉が開いた。小袖を着た女がそこにいた。
「灯があるかな」
「はい」
「点してくれ、こう暗くては、話も見えぬ」
その言い方がおかしかったのだろう。女は小袖を半面にあてた。
「――旅の御方でございますか？」
「うむ……わかるか」
「お城の方でないことだけは」
ほう、そうすると、この女、石脇城にゆかりがあるのだ

ろうか。
　新九郎は、益々、興味をおぼえた。
　女は小さく燧石をならしていたが、やがて、もとのように灯明が点されると、そっと居ずまいをなおした。
　いまさっきの乱れようなど、どこの誰だというような淑やかな所作なのである。
　新九郎はますます疑問をおぼえながら、お堂にあがった。せまく、汚い。埃りくさい。荒むしろが一枚敷いてあるだけだ。女はこんなところで生活しているのではあるまい。この深夜、人目を盗んで来ていたのであろう。
　新九郎はお地蔵さまを見た。女の情欲に応えていた慈悲の温顔は涼やかである。
　淡い灯のもとながら、女にこう向いあって見ると、新九郎は、おやっと思った。どこかで見たような顔だった。
（見おぼえがあるぞ、この女）そう思ったが、急には思いだせない。（はて、誰かに似ているような、誰だったか）
　それも、酷似している――わけではなかった。なんとなく、である。眼のあたり、唇もと、それから、鼻のかたち、新九郎は首をひねった。
（たしかに……いや、見ちがえかな？）
　女の知り人なら、あるいは抱いたことのある相手かもしれぬ。
（とすると？……）
　思いだせない。話をしているうちに記憶の底から浮び上ってくるだろう。
「夜参りかね」
　と、新九郎は聞いた。
「――はい」
「おれはこのあたり、よく知らぬ。実は、一刻ばかり、仮の宿をお地蔵さまにお願いするつもりで来たのだが……」
「まあ、それは」
　女は微笑した。
　漸く、新九郎に他意ないことがはっきりしたのだ。
「休んでもいいか」
「お地蔵さまは、来る者を拒みますまい」
「うむ」
「私のような者も、お許し下さいます」
　それは、あの痴態のことを言っているのだろうか。
　新九郎は、女に恥をかかせたくなかった。話をそらした。
「そなた、差しつかえなければ、事情を話さぬか」
「……」
「このあたりの者か」
「はい」
「しかるべき生れと見たが、どうだ」
「……」女は口を噤じた。
　あの狂態は尋常ではない。ただ男が欲しいだけならば、

あんな真似をすることはない。これだけの女ぶりなら、男に不自由するはずがあるまいに。
「どうぞ、お許し下さいまし」
「申せぬか」
「聞かないで下さいまし」
　そうまで言うものを、根掘り葉掘り詮索するのは、気が進まない。
「では聞くまい」
「御免下さいまし、私、これで」
　と、女は立ち上った。帰ってゆくのである。新九郎は、この女の面立ちの記憶が気になっていたから、これきり逢えなくなるのが、何か残念だった。
「せめて、名前だけでも教えてくれぬか」
「はい……私、よねと申しまする」
「およね？」新九郎は、思いだした。その名は、雑兵の蛸の太兵衛が臨終に口にしたものではなかったか。「そなた、法栄長者の屋敷の者ではないか」
「え!?　まあどうして御存知」
　およねは驚いて立ち上った。
　この土地ははじめての旅人――新九郎はそう言ったのだ。その男が、自分の名前を知っていたとは。
　およねは、愕然となった。それは、木彫り地蔵に抱きついて、身も世もなく、情欲に狂っていた痴態を見られたにもひとしい驚愕だった。
「まあ、どうして私の名を」
「これには、わけがある」
「……」
「不思議な縁だな。まあ、立っていては、話が出来ぬ。入るがよい」
　こうやっているところを、石脇城の見廻りの者にでも見つかっては計画が壊れてしまう。およねは素直に頷いて、また御堂に上った。
「仰有って下さいまし、気になります」
「そうだろうな。実は、蛸の太兵衛から聞いたのだ」
「まあ……」
「存じておろう」
「ええ、よく」
「そなたに随分と惚れていた」
「……」
「山西の法栄屋敷のよねとだけ聞いていたが、こう早く逢えるとは思わなかった」
　新九郎は話しながら、
（そうだ、預かったものがあったな……）
　貽貝の形態を思うと、しかし、この場で取り出せなかった。
　あの痴態を見ていなかったら、どうということはないが、

あまりにも生々しい。新九郎は動かした手を止めた。
「実は、おれは、蛸の太兵衛と一緒に戦さに出てな、最期の死水をとってやったのだ」
「討ち死になされたということは聞いています」よねは眼を伏せて、「乱暴な人でしたけれど……いい人でした」
「深い仲であったろうな」
「いいえ」と、意外な返事だったのである。「からだの交りはありませぬ」
「なんと……」
太兵衛の言葉では、まるっきり情婦のような表現だった。その肌身離さず持っていた貽貝を、臨終の苦しい息の下でつかみ出すときも、（頼みがある）と、言い、（おれの女に……）と、言った。
あの女好きの男の言葉である。まるきり肉体関係がなかったとは意外すぎた。
この夜の不思議な出逢いで、およねが、嘘を吐くとも思われない。この場合、およねは嘘を吐く必要は何もないのだ。
「そうか……一方的に、太兵衛が惚れていたのか」
「……」
「哀れなやつめ」
新九郎は、深い吐息とともに言った。
ふいに、およねは身をふるわせ、両掌を蔽った。指の隙間から、嗚咽が洩れた。
「好きでした、好きでした」嗚咽のなかから、女は言った。しゃくりあげて、詫びるような、弁解するような声であった。
「でも……どうにもならなかったのです」
「……」
「私は、自由の身ではなかったのです」
「人妻か」
「いいえ、お殿さまに……無理矢理にお傍に……」
側女にされていたというのだ。それも、石脇城の弥三郎春忠に。
そういう事情があったのか。
蛸の太兵衛は、いかにも女好きの男のように、豪放にふるまっていたが、意外に、繊細な神経を持っていたようだ。およねをひそかに愛していて、その思いを貽貝に托していたのか。
それはただ、およねのおんなを象徴するだけではない。もっと深い意味があるのであろう。およねに渡してくれという遺言に、その謎が秘められているようだ。
いま、ここで、それを渡せば、あるいは事情が分明するかもしれぬ。が、その哀しみの前にあまりにも、その〝似たり貝〟は、ものがものでありすぎた。
（いずれ、機会を見てからのことにしよう）

と、新九郎は心に決めた。
「それにしても、以前に逢うたことがあるのう、どうも一度逢うたような気がしてならぬのだが」
逢ったことはない、とおよねは答えた。新九郎のその疑問が、調子よく捏造したものではない、とわかったのだろう、およねは、小首をかしげて、
「私に似た女に逢うたのではございませぬか」
と、言った。
「似た女？……」
「私、妹がいます」
そう聞いても、思いだせなかった。
「山向うの、泉ヶ谷にお出でになったことがございましょうか」
「泉ヶ谷……そうか」漸く、新九郎は思いだした。「小菊！　そうだ、小菊に似ていたのだ、そうか、そなたは小菊の姉か」
「多分……それが、妹でございましょう」
「というと」
「名前を、変えているのでございましょう、私の妹は、おくまと申します」
「ふうむ。おくま……小菊、随分と違いようだな」
「父親が熊蔵と申しましたゆえ、くまと名付けました。妹はひどく嫌うていましたが……」
あまり、その家庭事情は話したくない様子だった。
おくまの名を嫌って小菊と名乗った女心はわからないではない。が、変名の理由はそれだけではなかったようである。
「小菊が妹だったのか……」
ただの行きずりの女ではない。
新九郎に抱かれた上に、寿々女を拐かしている。弥三郎春忠の手先だった女である。
寿々女が新九郎に連れて来られたのは、全く偶然にすぎないが、野望を秘めた春忠は泉ヶ谷の一類を捜らせていたのであろう。
（あの小菊が……）
似ているのも道理だ。それにしても不思議なめぐりあいにちがいない。
こんなところで小菊（おくま）の姉およねに逢おうとは。さらに命を賭して敵陣に乗りこんだ雑兵の蛸の太兵衛の想い人だったとは。
「法栄長者の家にいるのか」
「はい」
「聞くところによると、小川法栄という長者は、山西では城主も遠慮するほどの大分限だそうだが、そなたは」
「世話になっています」
どういう意味か。長者の妾だというのか。

その身が、しかも深夜、地蔵堂に来て、妖しいふるまいをするというのも、解(げ)せないことだった。
「小菊は弥三郎春忠に仕えて、泉ヶ谷の一庵のところに透(スッ)破となって入っていた」
「……」
「ということは、そなたも、春忠の」
「いいえ、いいえ、今は違います」
怒ったように、およねはかぶりを振った。
「今は？」
「はい、以前は……」
そこで言葉を切った。口にしたものかどうか、思い迷ったようであった。
新九郎の素姓が判然としなかったからであろう。その様子を見ていた新九郎は、
（賭けだ）
と、思った。
この男の決断は常に危険に踏みこんで活を得ることにある。
およねが弥三郎に通じるおそれがあるかどうかを案じている余裕はなかった。
「はっきり言おう、おれの名はそなたも耳にしているやもしれぬ、伊勢新九郎長氏だ」
「伊勢新九郎さま！」
殆ど、叫ぶように、およねは言った。
「聞いています、お噂は」
「今川竜王丸は、おれの甥に当る」
「はい」
「このたび、新五郎範満の謀略によって、今川屋形を奪われ、竜王丸と母御は、この地へ逃れてきた」
淡い灯火のもとに、新九郎はまっすぐおよねの表情を見守ったまま、話している。
その表情の動きを見逃すまいとするように。
「おれが府中へ戻っている間に、竜王丸は春忠に誘われてこの石脇城へ入ったという。春忠の心奥は見えすいている。暴力をもって十にもならぬ姫を奪わせたくらいだからな」
新九郎は、はっきりと言った。「――春忠の行為は、善意とは思えぬのだ」
万一、およねが、春忠の為を思うような素振りでも見せたら、この場を去らせず、打ち果して、と思っていた。
新九郎が顎をしゃくると、心得て黒丸は槍を持って外へ出た。見張りに立ったのである。
心が通じている。多くを言う必要はない。
「およね」と、はじめて新九郎は女の名を呼んだ。「そなたが、春忠のことをどう思うているかは知らぬ。が、おれはあの男を信用せぬ」
「はい」

「小菊は、あの男のために、命を賭けて泉ヶ谷へ潜入するほどゆえ、信じているのであろう」
「……」
「竜王丸の身が危ない。おれは、石脇城から救いだすためにやってきたのだ」
およねは無言だった。新九郎のその行動力に打たれたように黙っていた。
何か言おうとして、唇を開きかけたが、それを圧えるものが、一部にあったように、また乾いた唇を閉じた。
その面てに、動揺があらわだった。心の葛藤が隠しようもなく、女の呼気を乱している。その表情を凝っと見つめながら、新九郎は言った。
「そなた、以前は春忠のもとにいたと言うたな。ならば石脇城の様子、詳しく存じていよう」
「はい、およそは」
「教えてくれい、竜王丸を救いださねばならぬ」
敵を知る者は、と孫子にもある。城砦の構造から、城兵の数、秘密の通路の有無や、春忠の兵略まで出来る限り、識ることで勝機を摑む。
何しろ、こちらは、黒丸と二人きりなのである。
「はっきりと確かな人数はわかりませぬ。でも、以前は、侍三十騎、足軽百五十人ほどでございました。ほかに女子供など四十人がほどもいたでしょうか」
ほかに、農民たちが、召集をかけられれば、たちどころに百人や二百人は集まるという。
「容易ならぬな。うかとは城に近づけぬの」
竜王丸だけではない。
北川の夢子をはじめ、侍女たちや大道寺太郎ら六人の腹心のほか、敗残の家臣たちが五十人内外はいるはずだった。
焼討ちをかけて、混乱のうちに北川どのと竜王丸を救いだすのもいいが、それでは何も知らぬ侍女たちまで巻き添えになる。
「よい思案はないかな」
「そのようなお考えならば、急いでは難しゅうございましょう」
こんなところでは安眠もできまいから、法栄長者の屋敷へお出で下さい、一晩でもぐっすりお休みになれば、またよい御思案も浮びましょうほどに、と奨めた。
新九郎は、断わる理由もなかったのである。
（春忠は竜王丸を利用しようと思っているのであろう、とすれば、一日二日遅れても、危害を加えることはあるまい）
そう思うことで、新九郎は、今夜を眠ることにした。
婚礼の祝事が一変して戦火と敗亡、そして、寿々女の救出行と、あわただしい一日だったのである。
さすがの新九郎も、からだは綿のように疲れている。広

い厚い褥の上で、手足を伸ばし、ぐっすりと眠りたかった。
心配なのは、北川の夢子だけだ。春忠が夢子に手を出そうとするやもしれぬ。夢子の心とからだを獲れば、春忠は、名実ともに竜王丸の後見になる。
あの陰険な野心家のことだ。そこまで考えて行動するにちがいない。
危険は、その魔手を、夢子が拒んだときだ。
春忠は、夢子を殺す。それが竜王丸に知れれば、竜王丸のいのちも終る。
母子の首を揃えて、今度は範満にとり入るだろう。どっちに転んでも、弥三郎春忠に損はない。
そこまで考えた上で、泉ヶ谷へ図々しい手を延ばしてきたに相違なかった。
(夢子は……決して肌は許すまい)
自惚れではないが、夢子は新九郎から離れられないはずだ。もともと浮気の性ではないし、むしろ、いまでは貞淑すぎるくらいの母親になっている。
夢子にとって、竜王丸はいのちであり、東海の覇者、今川家を継がしめることに、全力をそそいでいる。
(――となると、存外、肌を許すかもしれんぞ)
貞淑なるがゆえに。子を想うがゆえに――
夢子は春忠の手をふり払わずに、眼をつむるかもしれない。
(弱ったぞ、そのおそれも、無きにしもあらずだ。今夜のうちに救いだすのが間違いないが)
もっとも、侍女たちや、太郎らがいる。
春忠も、それを知っている。かれにとっても賭けであるし、そこまで危険はおかすまい。
暫くは、せいぜい手厚いもてなしで、自ら、夢子や竜王丸の心がひらくのを待つのではあるまいか。
寡婦の夢子は、竜王丸の後見人にふさわしい男には、歓んで肌をひらくだろう。
(おれに対する気持も、それに近い……)
昔の仲が、深い親しみと信頼で再び緊密になったのは言うまでもないが、やはりそれだけではない。
夢子には、それなりの打算があったはずだ。
その新九郎の立場が、弥三郎春忠にとって代る。
新九郎は何といっても新参者。春忠は今川の一族であり、範満の対抗馬としては、もっともふさわしいともいえる。
(いかんな、こんなことではいかん。新九郎しっかりしろ)
法栄長者の屋敷へ伴われる道すがら、新九郎は何度も、立ち止った。

法栄長者

山西の法栄長者。
それだけで通る。小川法栄という名だが、長者屋敷は、数丁の広さを持ち、この志太平原の大半を掌握する勢力家で、近辺の城主も一目置く存在だった。
武門が強いといっても、所詮、経済力がない。生産活動に弱いのが武門の通弊である。
したがって悧口な武将は、近隣の豪農と関係を持ち、その力を利用する。農業、漁業と街道の関銭などの権利等々、そうした力はあなどり難いものがある。
何よりも、当時の武力というものが、後世と違って、武力だけの独立がないせいもあった。
生産活動がなければ、経済的に苦しくなる。他国を犯して、貢進させるにも、その地での食糧小物成り等の生産品の収奪といううまみがあってのことなのである。
小さな長者なら、叩き潰すことも出来るが、代々、この地に根を張って、民衆の畏敬するところの長者となると、武力でも容易につぶせない。したがって、提携するなり、その存在を容認することで、貢租の便をはかる、ということになる。
領主もそういう長者が、反抗さえしなければ、五公五民なり四公六民なりの年貢の収納にも便利なのだ。
「ほう、聞きしにまさる広さだな」
新九郎は、長者屋敷へ伴われると、その宏大さに目を瞠った。
およねは長者の、
(世話になっている)
と、言った。ただの寄人か妾か。彼女に対する門番の態度は敬虔だった。
屋敷は高い土塀をめぐらし、さらにそのまわりを二間幅の濠が掘ってある。塀の内側が一段高くなっているのは、城砦でいうところの武者走りであろう。矢狭間こそ切ってはないが、要所に鐘楼がある。これは望楼を兼ねている。つまり、この屋敷は、そのまま城館をなしていたのである。
翌日になって、気がついたのだが全体の敷地が、珍しい形をなしていたことだ。
方形ではない。南の一片が、つまり正門のところがクサビ型にへこんでいる。濠はそのかたち通りに囲繞し、はね橋が渡されている。こういう奇妙なかたちに作られている

のは、いうまでもなく広い正門を守るためだ。正門を要として扇形にひらいているから、攻めてくる敵はさながら三角形の袋に入ったような塩梅になる。それを左右から邀撃するための地形になっている。左右に突出した先端にある鐘楼は、敵の襲来を報じるとともに、矢攻めのものだ。

これだけの用意があるところを見ても富裕ぶりがわかる。

新九郎はますますおよねの立場に納得いかないものを感じた。

「長者は幾つになる？」

「さあ、よくは」

存じませぬ、とおよねはくくっと笑った。

「こういうことはいい加減に聞いておくと間違いのもとだからな、はっきり聞かしてくれ。言い難いであろうが」

「……」

「そなたは、長者の夜伽をしているわけか」

「いいえ」

「それでは、ただこの屋敷の寄人というわけだな」

これにも、およねは首を振っている。

「はて、ますますわからんぞ、一体どういうことだ、それでは、側女でもない、客でもない、厄介人でもない……」

「私は、側女です」

「ではどうして」

「長者は、さっき申しました、八十歳から、九十歳までの間くらいの御方ゆえ」

「……」

「それに、私のような女が、十人ほども居りまする」

「ほう、なるほどな」新九郎、漸く納得した。「それで、そなたになかなか順番が廻ってこないというわけか」

「もう、一年ほどになりまする。でも、はじめの夜に一度……それきりでございます」

この熟れ盛りの年齢では、それではたるまい。

「なるほど……」

と、新九郎は大きく頷いた。

（それで、あのお地蔵さまに抱きついて、情欲を発散させていたわけか）

無理もない。

だいたいお地蔵さまというのは美貌に彫られている。場合によっては、なまじの男よりも、女の性には都合がいいかもしれない。

「しかし、勿体ないな」

新九郎は、寝る前にそう言った。

およねを見ていると、小菊との一夜を思いだすのだ。

小菊は、女の方から、新九郎の衾の中へ入ってきた。

あれは、小菊の情の濃さというより、多分に寿々女を連れだすための計略だったわけだが、抱かれている間の女体の燃え方には、目的のためだけではない惑溺と陶酔があっ

たはずだ。

それが新九郎を信じさせることになったのだが。

（来るかもしれぬ……）

新九郎は、その夜、そう思った。

が、一夜が明けたとき、かれは、何もなかったのを知った。

黒丸と同室である。これでは、男に飢えた女でも、入り難かったろう。

あるいは、戸の外まで来たかもしれないが、確証はない。いつにない疲れが新九郎を熟眠させていた。

ところが、二日目の夜、およねの方から、やってきたのである。

黒丸は石脇城の捜りに出て、いない。

焼津市の西郊に小川という地名がある。

このあたりは、少し南に与惣次、その西に三右衛門などという地名が現存しているし、藤枝の益津には四郎兵衛というところもある。

また、新藤枝駅の南には兵太夫、与左衛門などと、往昔の地主の名をとどめているところが多い。

この「小川」は小川法栄の名残りであろうことは、おそらく、異論はあるまい。また、ここと瀬戸川の中間に、五ヶ堀之内というところがある。

この五ヶ堀というのが、法栄長者の屋敷を囲繞した前述の濠の形態から来た地名であるらしいことも、多くの理由から類推できるようである。

前にも述べたように、この平原は水利がいい。用心濠を穿っても引く水量に不安はなかったであろう。ただ、これだけ多くの河川が集まっていると、洪水のおそれはある。

長者屋敷は、五尺ほども土盛りし、その居宅の場所はさらに築土して、河川の氾濫や、駿河湾の大津波などに対応したらしい。

ここから石脇城までは、距離にして、一里たらずだ。サグリにいった黒丸が、もどってくるまでに、半刻はかかる。

城中に入って、仔細に兵員の配置や秘密などを捜れば一刻は充分かかる。それ以上を要するかもしれない。

そうしたことを見越してのおよねの行動だった。

とろとろと眠りかけていた新九郎は、戸の外に忍び寄った足音に眼をさましている。

（……？）

来た、という感じだった。殆ど直感的に、およねだと思った。

自惚れもある。が、それだけではない。木像を抱いて情欲をはらしている裸女の姿は、こうした事態に当然たち到るものと思われたのである。

女は入ってきた。灯は消えている。新九郎が眼をあけて、見守っているとは知らず、女は凝っとうずくまっていた。

気持の整理がつきかねている様子だった。
決心して入ってきたつもりでも、やはり、いざとなると迷いが出たのであろう。
（どうするか……）
皮肉な眼になっていた。
どれくらい、その逡巡がつづいたろうか、およねは身を起し、帯を解き、するすると、小袖を脱いだ。
闇の中に裸身が浮びあがる。仄白い肌である。女体は男をもとめて火照っている。
そのまま、およねは身をかがめて、新九郎の衾に手をかけた。
「――新九郎さま……」
消え入るような羞じらいをこめて、囁いた。
「もし、新九郎さま」
新九郎は、目を閉じた。
眠ったふりをした。いままでの女の迷いを見ていたとなると、あまりに哀れである。
「もし……」そっと、女は、新九郎の肩に手をおいた。「よねでございます」
「む……」いかにも、いま醒めたように眼をあけている。
「や、どうした」
「新九郎さま……抱いて下さいまし」
するりと、夜具に入ってきた。しがみついたのだ。闇の中でも、顔を見られたくないのか。
「そなた……」
「羞しい、お許しを」
「……」
「ずっと、ずっと、独り寝の、淋しい夜でした、おねがい、今夜だけ」
「――長者はよいのか」
「かまいませぬ。どうせ……」
およねは裸身をぐいぐいこすりつけてきた。
新九郎もすでに昂ぶりをおぼえている。女体の中心の葎（むぐら）が、妖しい刺戟を齎していた。
「ああ、新九郎さま」
およねの裸身は、かっと火に包まれた。
冷たい木像とは何という違いだろう。何という強さ、何という頼母しさ――男の腕に抱きしめられ、壮軀の匂いをいっぱいに嗅ぎ、およねは、もうそれだけで下半身に快い戦慄が走った。
その感覚は、新九郎のおとこにも誘いをかけずにいない。かれの手が指が、おんなを開かせてゆくにしたがい、快感のあまり、唇の弛みをどうするすべもなかった。
およねは、全身をつらぬく甘美さに身をよじって、声をあげていた。
これまでに、何度、死のうと思ったことか。死なないで

よかった、と、喜びの頂点で思った。死を望むほどの惨落と屈辱を、およねは味わったのだ。
あの蛸の太兵衛という男が彼女に近よったのも、その死の影に把（つか）まれていたときである。
新九郎の愛撫の中でおよねは、歓びに狂い、夜具をみだして、いのちの泉をあふれさせた。
おちてののち、暫くは、口もきけないほど、全身が萎えていた。新九郎の手が静かに、その女体を撫でてやると、およねの眼から、あらたな涙があふれ落ちた。
「おやさしい……おくまにもこうしてやったのでしょう」
「おくま？」
「小菊ですよ、ねえ、にくらしい。でもいいの、そうであったとしてもこんどは、あたしが新九郎さまを、とったのだから」
「こんどは？　……どういう意味だ」
およねの言葉を新九郎は聞きとがめた。
「たしかに、あの小菊なら、一度抱いたが」
「おくま、小菊のほうから、持ちかけたのでしょう、あの娘（こ）それはもう……」
およねは言いかけて、今夜の自分の行動もそれに劣らないことだっただけに、言葉を切った。
「話したいことがあるなら、言うがよい」
「ええ、でも……」迷った。迷いながら、しかし、女はやはり、訴えたいものがあった。「あたしが、石脇城をほうり出されたのも、実はといえば、おくまのせいでございます」
「……」
「おくまは、小さいときから、何でも、あたしのものをほしがった。あたしが春忠どのの寵を受けているのが、羨ましくてならなかったのでしょう」
話しながら、およねは、きゅっと唇を嚙みしめた。
新九郎に抱かれて、その快い余燼が揺曳している。その感覚の中でもいまわしい思い出となると、憎しみが、こみあげるのであろう。どれほどのショックだったかわかる。
「あたしには、おくまほどのことはできませぬ。府中にサグリにゆけといわれても、人をだましてまで、そんなことはできない」
「……」
「おくまは、昔から人のことなんか考えない。嘘を吐くのも平気。春忠どのが入浴しているところに入っていって、それはもう……」
そうだった、と新九郎も思いだした。かれの入浴のところへ入ってきたのと同じだ。男というものが、獣欲をもっているのをたくみに利用する。
「――なるほどな。小菊は、春忠の想い女（もの）であり、また、かれの野望のために尽くしている、ということか」

「はい……」
「それで、そなたは、どうして、長者の」
「長者というものは、そういうものでございますもの」
「というと」
「このあたりの御領主が春忠どの。その春忠の寵を受けた女を、自分のものにすれば、鼻が高うございます」
「そうか、すると、そなたに惚れてのことではないのか」
「もうお年齢ですし……、一度、一度だけでよいのでございましょう」
「………」
「女の身としては、そんな……たまりませぬ」
およねは、また身をすりよらせ新九郎の唇をもとめた。
空閨の淋しさが、あの木像への痴態となったのか。

黒丸が戻ってきたのは、二度の交りが終ったところだった。
「――どうだ、様子は」
足音を聞いて、新九郎は板戸の外へ出た。
「うん……大変だ」
「何が大変だ?」
「とても入れやしない」
「城には大道寺や在竹などが入っているはずだが」
「そこまで、とてもゆけないのさ、警戒が厳重だもの。城の外にだって、ぐるっと柵が出来ていて犬の子一匹近よれない」
「それほどか」
「矢が飛んできたのさ、ううん、おいらが見つかったんじゃない、犬がいたのさ、野良犬さ、あそこのところごみ捨て場になっているんだ。いっぺんキャンって飛びあがって倒れたからね、あれは、どこかに刺さったんだろ、びっこひいて逃げていったよ」
「犬のことなどどうでもいいが」しかし、野良犬の影にまで矢を放つとは、かなり神経質になっている。それだけ、見張りが厳重なのだ。「では、城内へ入れなかったのか」
「うん、ぐるぐる仕寄のところをまわってみたけどさ」
「ふうむ……」
大道寺太郎らに連絡をとるのが先決だった。中と呼応できないと竜王丸たちを救いだすのは難しい。
おそらく、春忠は、口実かまえて、かれらを外へ出すまいとするだろう。範満の軍勢が近くまで来ているというだけで充分なのである。
「さて、これは弱ったぞ」
「もう一ぺん、行ってこようか」
黒丸は面目なげだった。
「いや、何度行っても同じだ。ほかの方法をとるしかあるまい」

それにしても、二人きりでは何ともならぬ。
石脇城の一応の城内の様子は、およねから聞きだすとしても、それだけで侵入するのは無謀だった。
「――人だな」
「え?」
「手だ」
人手が要る。軍勢である。どうやって集めるか。まず、少なくても五、六十人は必要だった。最悪の場合でも、三十人はいる。
はじめての土地だし、軍用金もない。金がなくては、人は集められない。恩も義理もない連中が命をかけるのは、金だけである。
「いや、何か方法があるはず、必ず、何か……道はある」
新九郎は、外へ出た。深夜の空が頭上にひろがっている。そこらを、かれは歩きながら考えた。
広い長者屋敷である。あまり広くて、屋敷の中という気がしない。自然の樹林がそのまま、とり入れられている。起伏がある。厩や牛小屋、それから鷹部屋があったりした。
新九郎は足をとめた。
「………」黒丸をふりかえった。「え?」
「聞いたか」あたりを鋭い目で見まわして、新九郎は、「何か、声がしたように思ったが」
「どんな?」
「聞えなかったか」唸り声のようでもあり、話し声のようでもあった。「風かと思ったが……人の声らしい」
「誰かしら」
暗い邸内である。自然の雑木林をそのまま採り入れてあるから、起伏のある場所だけに山中か、丘陵の林のようだ。
「おかしいな、耳のせいかな」
「そうだよ」
と、いったとたんに、また聞えた。唸り声のようだ。
「この向うだぞ」
厩の裏がわは、一段低くなっていて、唸り声などはそこから聞えてくるのだった。
起きている馬がいるのか、羽目板を蹴る音がしている。
新九郎は、黒丸に目くばせして近づいた。
鼾が聞えてくる。話し声と思ったのは、寝言らしい。低地になっているので、それらの声は、地の底から地獄の呻きのように聞えてくるのだ。
そこまで来て漸く気がついたのだが、厩と背中合わせになってやはり、馬がいると思われたのだが、ずらりと戸が閉めてあり、のぞき穴が、四、五間ごとにある。
新九郎はそこへ近づいてのぞいた。顔が入るくらいの窓である。が、格子がはまっている。二本。厳重だった。中は真っ暗だ。が、多勢の者がいるらしく、鼾や寝息がすさまじい。

星明りに仔細に見ると大きな錠がおりている。

(牢屋だな)

なるほど、長者屋敷ともなればいろんな罪人がいよう。どういう罪状か知らないが、とにかく一人や二人ではないのだ。

(奴婢でもないが……)

長者屋敷だけに、いろいろのことが考えられるのである。

部屋へ戻ると、およねは、浅い眠りからさめたところだった。

「何処へいってらして?」

身を起して、乱れた髪に櫛を入れていた。燭の仄明りに満ちたりた女の顔があった。

新九郎はどっかりと坐ると、

「歩いてきた」

「まあ、あまり屋敷の中を歩いてはいけませぬ」

「悪いものを見るからか」

「え?」

「どうやら、見てはならぬものを見たようだ」

「新九郎さま」およねは真剣な顔になっていた。「どうぞ……見なかったことにして下さいまし。夢だったと」

「いや、耳も聞いたからな。人間どもの呻きさ。いつものおれなら、忘れるかもしれぬ」

「………」

「だが、あれは忘れられぬ。心配するな、そなたに迷惑はかけぬ」

「でも」

「いや、迷惑がかかるかもしれんが、そのときは、おれが助ける、案じるな」

何を考えているのか、新九郎は、にやりとした。

およねは身をふるわして、

「いけませぬ」と、言った。「お忘れになって下さいまし、見なかったことにしないと、新九郎さまも、この屋敷に居ることは、出来なくなります」

「一体、どうしたことだ、あの者たちは」

「罪人です」

「それはわかっている。罪といい罰というも、理は一つではない。権力者の肚裡(はら)一つだからな。冷静に見ねばわからんさ。どういう罪をおかしたのだ」

「関銭を払わなかった人」

「ふむ」

「この屋敷に強盗に入ろうとして捕った人が八人」

「ほう」

「馬盗人が五人」

「なるほど」

「網盗みが十人」

「なんだそれは」

「漁師の網を盗んだのでございます。魚を獲るために網を張っていますと、一夜のうちに、網ごと、そっくり魚も盗んでしまうので」

「ははァ、大がかりな魚泥棒というわけだな」

新九郎は面白そうに言った。

網ごとそっくりさらってゆくなど、第三者の眼からすれば、たしかに面白い。

「そんなところか」

「人殺しもいます。宇津谷峠で、何人も人を斬っては、持金をすっかり奪って、丸裸にして、崖から蹴落すというひどいことを」

「ふうむ、そいつはひどい」

こう相槌を打たないと、女はシラけてしまう。

「まだいます。女の人を……犯しては、有金をさらって」

「そういう奴は、昔から、男のものをブチ切るというのが、刑のはずだが」

「長者は、火焙りだの首斬りだのということが大嫌いで」

「だから、厩の裏小屋に押しこめておくわけか」

高齢だから、衝撃的なことは嫌いなのであろう。

翌日、新九郎は、長者に会うことにした。むろん、およねと一夜を楽しんだことは秘密にしている。

「長者は昼寝をします、時刻を長びかせぬように」

「いいとも、半刻もあれば充分だ」

新九郎は心に深く頷くものがある様子で、長者のところに導かれていった。

泉殿の勾欄の上から釣糸を垂れている老人がいた。

小がらな老人だった。つくねんと、釣糸を垂れているのである。

遠くから見ると、いかにも釣を楽しんでいるかに見えるが、近くに寄ってみると、眼を閉じている。

廂が深いので、泉殿の勾欄のところまでは陽が当らない。が、まるで日向ぼっこしているように、うずくまっている。

釣竿は動かない。いったい餌がついているのかどうか。

池では鯉が群れている、釣糸の下で突っついているとみえ、水面に近い部分は動くのだが、引くというところまではならない。

「長者か、あれが」

小声で聞くと、

「ええ……でも、気をつけて、あれ、狸寝入りですから」

「ほう」

「あんなにしているのが好きなんでしょ」およねの言葉は、突っ放すようで、「とにかく、変った爺さまですから」

昼寝をするというのだから、釣糸を垂れているのは、眠っていないのだろう。

新九郎が近づくと、そのままのかたちで、

「客人じゃの」

と、言った。
眼は閉じたままだ、見ていたのではない。足音でわかるのか、眼を開けるのが億劫という感じだった。
「はあ、てまえは……」
「伊勢新九郎どの」
「ほ……どうして」
「昨夜は、ゆるりと休まれたかいの。およねが、うるさかったろうがな」
「いや……」
ひやりとした。この爺さま、たしかに食わせものだ。知っている。昨夜の一条を知っている。知っていながら、咎めようとしない。いや、知っているということを口にしたのは、それだけで咎めているのではないか。
何というべきか、さすがの新九郎も意表を突かれて、返事に窮した。
「ははは、眠れなんだじゃろ」
「いや、眠りましたが」
「ほう、そりゃ、おかしい」
老人、はじめて、こちらをむいた。奥眼が、ぎろりとした感じで、新九郎を見た。
「眠れなんだゆえ、庭を歩きまわったのではないかな」
「……」
「それで、あれを見つけた」
「……」
「な、そうであろう」
こうなれば、勿怪（もっけ）の幸いだった。話し易い。新九郎は、度胸を決めた。
「あの罪囚どもだが、ただ押しこめておくのは無駄でございませぬかな」
「買うかや」
老人は、またぎろりと眼を光らせた。
新九郎は絶句した。正しくこの男が長者の小川法栄か。小がらで風采はあがらない。吹けば飛ぶような身軽さに見えるが、やはり、その爛々たる眼光は尋常ではない。むしろ異常といえるくらいだ。言うこともいささか、異様だ。
「罪囚を？」
「そうじゃて、買うか」
「……」
「買うなら、売るがの」
「しかし、囚人とて、人間を」
「馬や牛でも売り買いするでの、買い手がくるのを待っていたのじゃて」
ほんとうであろうか。
新九郎があの連中を発見したのも偶然だしそんなようには思えない。それとも、この老人の当意即妙であろうか。ともかく、この老人、なかなかの男だ。

「買うてもよろしいが」と、新九郎も相手の申し出でに、呑まれないように、態度を変えた。「一人頭、幾らで売るつもりか」
「幾らで買うかね」
「さ……何せ、見ていないゆえ、どれほど使えるか、膂力のほども、かいもく見当つかぬでは」
「なら、買わずともよい」
老人は、話をもどした。それきり、また、まえの姿勢に戻った。
全く得体がしれぬ。昨夜のかれの行動を見張らしていたとするとこれは、なかなか細心のことだし、その〝闇の眼〟もまた、油断ならぬ。
こうやって、老人と話しているのも、どこからか、いくつかの眼が見守っているに相違なかった。
でなければ、いかに自邸の中とはいえ、この小がらな老人が、安穏と狸寝入りを楽しんでいられるものではない。
時は乱世である。駿府では領主追い出しの一大合戦が行われたばかりなのだ。
「――何を釣ってござる？」
新九郎も、その話は切りあげて、釣糸をのぞきこんだ。
「ほ……何じゃと思う」
「さて」
「あててみなされ」
「……」
「うまくあたったら、おぬしのほしいものを進ぜる」
「ほう、何でも？」
「何でも、な」大きく頷いてから、いや、と言い直した。
「いま、おぬしが考えていたものよ、ほしがっていたものよ」
「わかるか」
「わからいでか」けっけっけ、と鶏のような笑い声をあげて、「わかるから、こう言うている」
なるほど、こういう人並みはずれた暮しをし、それもこの年齢まで生きると、人の心くらい見ぬけるようになるかもしれぬ。
「あれだ」と、新九郎は振りかえって見せて、「では約束したぞ。何を釣るか、あてればよいのだな」
「左様、何を釣ろうとしているか、じゃ」
「あてれば、おれの希うものをくれるというのだな」
「法栄長者は、嘘を吐かぬで」
けけけッと前よりかん高く笑った。
「じゃがな」と、言いだしたのが本音だったのである。「あたれば、くれてやる、が、あたらねば」
「……」
「命を貰う」
ずばり、と言ったのである。

このひとつかみしかない老人が何を言うことか。
その言葉が冗談や威しでないことは、いつの間にか、中門のあたりに、屈強の男たち五、六人が姿を見せていたことでわかった。刀や槍、薙刀、大まさかりなどを持った連中である。
新九郎はその人数を素早く読んで、老人を見た。老人は相変らず、釣糸を垂れた姿勢は崩さない。
「どうじゃな、それでもあてるかな」
「よいとも」新九郎は刀を差したまま、ぐいと、鍔をあげ、「金打いたそう」
「ほう」
「約定だ。武士の金打は、いのちよりも重いぞ」
「わしは武家ではないでの。だがの、長者の約束は、神文と同じでの」
「よし、それで決った」
「ほう、いさましい。命を賭けるかの」
「賭ける」
長者は頷き、ふりかえった。
それだけで言葉になるのか。五、六間離れたところにうずくまっていた男が、半弓に矢をつがえてひきしぼった。
むろん、的は新九郎である。
「では、言わっしゃい。わしは何を釣っている？」
「……」
新九郎は腕を組んだ。凝っと釣糸の先を見た。それから視線を老人に転じ、にやりとした。
「糸の先には、鉤針が無い」
「……」
「つまりは、魚を釣っているのではない」
「ほう……」
老人の頬がぴくりと動いた。
「……」
「釣っているのは、人間だ」
「この新九郎を釣ろうとしたのだろう、どうだ図星であろう」
刹那、矢が飛んでくるかと思った。手練の矢を避けられるかどうかわからない。が、そのときは老人を楯にするつもりだった。
「けけけッ、これは、なんと、けけけッ」長者の顔はくしゃくしゃと歪み棗の干したような顔が一層小さくなった。
「当ったわい」
「……」
「負けたわい。しかたがないの、およねを連れてゆけ」
「また違ったぞ」
こんどは新九郎が笑う番だった。
「何が違う」
不遜と感じたようである。長者は笑いを消した。

この小さな、一つかみしかないような老人が、法栄長者と呼ばれる大分限で、生殺与奪の権を握るしたたか者だということも、いささかおかしみを誘うことであったが、その肉体の卑小さが、しかし、かえって屈強の男たちを顎で差図する快感に酔えるのかもしれない。
虫も殺さないような高僧じみた悟り澄ます態度は、実は残忍な嗜虐性の裏返しかもしれない。
新九郎に、この賭けをいどみ、
（当れば望みのものをやるが、はずれれば殺す）
という思いきった提案も、悪趣味というよりは、新九郎を殺す理由があったからの発想ではなかろうか。
（およねだ！）
昨夜の情事は、見つかっていたらしい。
広いといっても長者屋敷の中だ。およねが、新九郎と黒丸を連れこんだことは、門番から注進があったろう。
情事は偶発的なものだが、老人には、その予測がはたらいたのだ。
〃眼〃はいくらもある。〃耳〃も多い。
新九郎に抱かれて喜悦するおよねはたしかに、長者の権力を冒瀆するものだったろう。
その不埒な行為を、長者は、長者らしい皮肉で嗜虐的な方法で罰しようとしたのだろう。
およねの始末は、あとでゆっくりするのか。いや、こうした老人にとって、およねの行為は憎いというよりも不愍な思いもあるはずだ。その意識と、しかし、新九郎への憎しみは別だ。およねは可愛く、かなしい、が、新九郎の壮軀は、憎い。うなるほどの金があり名誉があり、権力がありながら、ただ一つ、老人にないもの。それは若さであり、壮軀だった。その還らぬ健やかな肉体への呪咀ではないか。
復讐ではないか。
当ったら、（およねを）遣る。
と、賭けたのも、事実、長者の心が葛藤で苦しんでいたことを物語っている。
だが、そこまでの賭けを、的中したとたんに、新九郎は、けろりと覆したのである。
「間違っていたな、長者」と、新九郎は笑ったのだ。「おれは、およねなぞ、望んではいなかった」
「そ、それは……」
「本当だぞ」
「ほしいのであろうが」
「だから、長者の目は失礼ながら狂っていた。おれは長者から、女を盗む気はない」
「……」
「だが、約定は約定だ。思っていたものを貰ってゆく」
「それは、なんじゃ、何を希うていた？」
「だから、あれさ」

とまた新九郎は背後を目でさした。
その視線のかなた——長者はおよねの部屋と早合点したのだ。
「裏の罪人どもよ」
「え!?」
「牢舎の罪人ども、あやつらをくれい」
老人の金壺眼は、一層驚きでひろがり、まじまじと新九郎を見つめた。
（およねではなかったのか?）
およねが引きずりこんだ男。当然、空閨の憂さをまぎらしたことはわかる。その男が、およねをほしがっていると見た。
それだけ、長者は、もう古いのか。男と女の関係をそのようにしか見ないだけ、古いといえる。
古いのは老人だからしかたがないとしても、その〝眼力〟が狂ったのは、小川法栄には、かなりのショックだったらしい。
「ちがったか……」
と、まだ歎息している。
「違ったな」と、新九郎は、さらにはっきりと言った。「長者は二つの間違いをした」
「……」
「おれがおよねに惚れていると思うたこと」
「……」
「いま一つは、この伊勢新九郎の大志を見ぬけなかったこと」
「そ、それは初対面ゆえ……」
しかし、その弁解は日ごろの長者の鼻っ柱の強さを裏切るものだった。
「ははは、無理もない。おれがいささか常人と変っているかもしれぬ」
「そうじゃ、およねがほしくないのか、あれは石脇城の……」
「それを聞いたからな。ほしくなくなった」
「それにしても、罪囚など」
「約束だ、くれい」
「……」
「ぜ、ぜんぶかや」
「ぜんぶさ、おれの命を賭けた」
実際、もう少しで新九郎を殺すところだったのだ。法栄長者はあきらめた。
所詮、囚人は、首を斬って見せしめにするか、タダ働きさせるかだったのだ。タダ働きで、得をする勘定だったが、これはしかたがなかった。
「くれてやる。どこへでも連れてゆけ」
「聞いたか」新九郎は、近くにいた長者の家来の顔を見た。

「あの通りだ。忘れずに、臍（へそ）まわりにでもしたためておけ」
「聞えたわい、ちゃっと聞えたて」
しかたなく家来がうなずいた。
「では、あとは勝手に選ばして貰おう、ものの役にも立たぬ者なら要らぬ」
「勝手にさっしゃれ」
老人、また釣糸の方をむいた。
新九郎は家来の案内で牢舎の前にくると、あののぞき窓から一つ一つ見ていった。
中からぎょろりと睨みかえすやつもいる。
無精髭が生えているせいもあるが、不逞な面がまえが、仲々強そうであった。
「開けろ」
とっつきの鍵をあけさせると、新九郎は恐れ気もなく、中へ入った。
五、六人の男たちがいた。あぐらをかいたり、片膝立てたり、寝そべっている者もいる。年齢はまちまちだった。
まだ青年といっていい若さを残した者から、人生に疲れきったような老人もいた。
新九郎は、中へ入ると、すぐに壮年の男に目をつけた。
肩の盛り上った胸の厚い男だった。
その男はどうやって手に入れたのか、瓶子（へいし）を手にしていた。酒であろう。そのまま口からごくごくと飲んでいる。
入ってきた新九郎をじろりと見ただけである。
「おれは伊勢新九郎、お前は」
「牛次」
「ふむ、名は体をあらわすというが……一体、なんの罪だ」
「人を殺した」
「女を?」
「女は殺さぬよ。この長者の郎党だ、道をふさいだ、で、殺した」
「一人か」
これに怒ったように牛次は目を剝いた。
「たった一人なら、その場で殺されている」
「……」
「六人だ」
嘘ではあるまい。まわりの連中が眼を輝かせて頷いた。
「六人もか」
「六人くらい殺すとな、向うでも簡単には、処刑（しおき）せぬて」
はじめて、にやりと不逞々々しい笑いを見せた。「せいぜい、酷（むご）い処刑のしかたを考えているのだろう。爺いは気が永い」
「力はあるか」
「おぬしの腕なら折ってみせる」
「甘く見るな。折りたくば、うぬの脛を折ってみろ」

「そうだな、そいつは損だ」

牛次は立ち上ると、小屋の大柱に手をかけた。

「よいか」

と、言ったかと思うと、腕に力をこめた。ぐらぐらっと、小屋が揺れた。

「よし、それでよい。その力をつかうところはほかにある」

「ほかに？」

「お前を出してやる」

さすがに、その言葉は、嬉しかったと見えて、牛次は、

「ほんとうか」

と、大声で言った。

「出ろ」

「忝けない」

「その代り、働いてもらう」

「よいとも、十人二十人ひねり殺してくれる、どこのやつだ、相手は」牛次は腕をさすって、「ついでになかまも、出してくれ」

次の小屋には、奇妙な男がいた。坊主である。まだこの牢舎に叩きこまれて幾日も経っていないと見え、頭の毛は伸びていない。

この男は両脚を鎖でしばられていた。

ほかにも何人かいたが、そんな厳しい目にあっているのは、この坊主だけだった。まだ三十そこそこであろうか、筋骨質で、腹がへこんでいる。

「こやつは、何をしたのだ」

長者の家来に尋ねると、

「神隠しでござる」

「――なんだそれは」

「人さらいで」

「人さらいを神隠しというのか」

「この男は、足が速いので」と、憎々しげに言った。「何しろ、子供を抱きあげると風のように走ります。早いのなんの……全く誰の目にもとまらぬほどなので、まるで神隠しにあったような……」

「名前は？」

すると、それまで、黙って白眼を剝いていた坊主が、

「韋駄天と呼ばれている」

と、誇らしげに答えた。

イダテンは増長天、八将軍の一で、仏法の守護神という。足の速さでは、他の神々も及ばないとあって、速足の者の渾名によくつけられる。

「イダテンの何だ」

「他に名はない」

「生れたときからイダテンか」

「十くらいからだ」笑いもせず言う。「それまでは、名前

はない」

この男も、乱世の浮浪児上りかもしれぬ。

「こやつの両足を切って、見せしめのサラシものにすることになっておりますが」

「なるほど、それで鎖をかけているのか」

「何をいいやがる」韋駄天は両足をばたばたさせて屋敷侍に目を剝いた。「足を切ったら、両手で走ってやる。そのときは、一番にうぬのところに行ってやるぞ。うぬの髪を咥えて、百里一刻で走ってやる。目玉が飛びだし指がひき千切れてしまうが、そのことを覚悟してやがれ」

「両手で走るか、まあそいつは無理だろう」

と、新九郎は軽くいなしてやった。その不屈の根性は大したものだと思った。侍は真っ蒼になって竦み上っている。

「それより、どうだ。両脚切りの処刑をとりやめにしてやろう」

「え！　そ、それは、本当でございますか」

「子供さらいなどの悪事を一切止めるならば、だ」

「へえ、あれはもう、悔いておりますて、可愛い子供をさらうなど人間のすることではございませぬて」

「約定を破ったら、おれが叩っ斬る」新九郎は侍に言った。

「こいつの鎖をといてやれ」

解く――といっても、鎖の一方は壁に打ち込まれていて、一方が足の輪につながっている。足輪のほうは鉄板を曲げて筒状にし、合わせ目を三つ釘でとめて叩きつぶしたものである。これは抜きようがなかった。

長者が、絶対にこの男を釈放したり、脚切りを逸す気がなかったことは、その厳重な拘束でわかる。

「鎖を切るしかあるまい」

タガネをあてて、大鎚で打ち切った。

「やれやれ、やっと人間らしくなったわい」

韋駄天はおのれの足を、いとしむようになでている。だが、双の足くびに鉄の筒がはまったままだった。

「こいつを外すのは難しいぞ」

「へえ、つけたままにしておきますて」

にたりと白い歯を見せた。

「走るのに邪魔だろう」

「なあに、ほどほどに重みがついていいくらいで」

不敵な笑いであった。

「その足、おれのために役立ててくれい」

「へえ、命の恩人のことは忘れませぬわい、足どころか、ぜんぶ差し上げますわい」

馬より速いものはなかった時代だ。人間の足で、それに匹敵するとすれば、大いに役立つ。

その次の房は、意外にも女ばかりだった。

「女には用はない」

新九郎は一歩入ったが、苦笑して、出ようとした。

とたんに、さっと、飛んだ影がある。まるで、牝豹のような俊敏さだった。
新九郎と侍の間をすり抜けて、戸口から飛びだそうとしたのだ。
「何をする」
侍は煽られたようによろけた。
その女が失敗したのは、まだほかにも侍がいたことだ。
一瞬の争いのすきに、ぱたっと戸は外から閉められてしまった。
「ちくしょう」
女はいきまいた。その手に刀がある。
（いつの間に……）
侍から抜きとったのだ。
若い女だった。凄艶といってよかった。腰まで垂れた髪といい、刀を手にして、新九郎と、侍を睨んだ眼が凄い。
（牝豹だな）
新九郎は呆気にとられていた。
「戸を開けて」と、女は叫んだ。「開けないと、殺すよ」
ほんとうにやりかねない。侍の方は刀をとられた口惜しさと意表をつかれた驚きで、まだ、へたりこんだままだった。
「こいつを斬るがいい」と新九郎は他人事のように言った。
「手並みを拝見する」
斬る、というおどかしに、おびえを見せることは、相手を増長させるだけだった。
新九郎は気をそらすように、ゆったりした笑顔をむけている。
「女にしては、なかなかのものだ、ずばりと斬ってみせろ」
これには侍が仰天した。
「な、なんということを、伊勢どの、助けて下され、あの刀を」
「とられたほうが悪い」
「し、しかし」
「ぼんやりしているからだ。それとも、美い女ばかりゆえ、鼻の下を長くしたか」
これは女たちにとって、うれしい言葉だった。仄暗いなかで、みんな、にやりとした。
どういう悪事をしたかしらないが、女は、やはり綺麗だとほめられて悪い気はしない。件の女も、その点は同じだったのである。
笑みこそ浮べなかったが、その刀持つ手に、ゆるみが見えた。
一瞬、新九郎が抜き打っている。あざやかな抜き打ちであった。するどい金属音とともに火花が仄暗いなかで散った。

一つの刀が、宙に飛び、板壁にぶつかり、おちた。
女は身を翻した。落ちた刀を拾おうとした。が、右手が痺れて、拾えない。血は出ていない。峰打ちだったのだ。
新九郎は、にやりとして、
「つかめまい、腕をころした」
「……」
「女だてらに、そのような真似はせぬことだ」
「ちくしょう」
「だが、なかなか見どころがある」
刀は侍の手にわたった。
女は怒りと屈辱で蒼ざめている。その眼の光は異常なほどはげしい。
「この女、一体、どういう素姓の者だ」
「素姓はわかりませぬがな」と、侍は、ほっとして刀を拭っておさめながら、「ひどい悪女でしてな、男をたぶらかしては、毒殺して、銭を奪う」
「ほう」
「それも相手は侍ばかり、すでに五人も殺しております」
「みんなこの長者屋敷の者か」
「いや、当家の者は一人ですが、その一人を毒殺したところを見つかったので」
「侍ばかりとは、大したものだ」
あらためて、新九郎は女を見た。
目鼻立ちのはっきりした顔である。意志が強そうであった。大の男五人を毒殺したとは、尋常ではない。
「女、名は何という」
「……」
「名はあろう、申せ」
「この女、はじめから、名を申しませぬ」
と、侍が口を出した。
「名なしか、名なし女か。しかし面白そうな女だ」
「何が面白い？」
きっとなって女はふりむいた。
「ははは、そういうところが面白いのさ」
「無礼な……」
「気が強いな、山猫だな、まるで」
「山猫でいいよ」
女は、なぜか、ふっと、怒りを消している。山猫とは、いささか驚きと蔑すみをこめて言ったつもりなのに、女の方では、そうはとらなかったのか。
「山猫だそうだ」と、新九郎は侍をふりかえって「こいつも解き放してやれ」
「えっ、こやつはなりませぬ。こんな奴を野放しにしたら、大変なことになります」
「それくらいの強さが必要なのだ」
「しかし」

「放せ」新九郎は、戸を開け放して、「出るがいい」と、山猫に顎をしゃくった。
「え？……」
　真意をはかりかねて、山猫は動こうとせず、新九郎へするどい目をむけている。
「ここから出たいのであろう」
「それは」
「だから、放してやる」
「……」
「信用せぬらしいな」
　あの新九郎の手練を知らされている。へたに動けば、ずばっと一刀両断に殺られるかもしれない。その不安が、山猫をたじろがせている。
　獰猛な野獣ほど、警戒心が強い。自分のほうから牙や爪を立てるだけに、相手のそれに対する不安も強いのだ。かれらは、絶対に自分が勝つという見込みがないかぎり攻撃をかけない。
「山猫」と、新九郎は促した。「きさまの牙と爪を、おれのために役立ててくれぬか」
「……」
「つまり、おれの家来になれということだ」
「お前の……」
「そうすれば、死罪も許してもらえるのだ」
「長者が……」
「そうだ、約束した。どうだ、おれの片腕にならんか」
「なってもいい」
「よし、じゃァ、こい」
　新九郎は背をむけた。それが、山猫を安心させた。
「家来になって、何をするのさ」
　山猫はまるきり、侍のほうを無視して、新九郎について出た。
　そこに隣房に入れられていた韋駄天や牛次を見ると、漸く、嘘ではないことが、わかったらしい。
「面白いことをやる。それには、腕の立つ、強い奴が必要だ。お前たちは、いずれも、一人で十人ぶりの働きができるだろう。それだけの人間を死罪にしてしまうのは勿体ない」
「それなら、使えるやつがまだいるぜ」
　牛次がその次の房へ顎をしゃくった。
「どういうやつだ」次の房の鍵を開けさせながら、新九郎は言った。「何の役に立つ？」
「さあ、そいつはわからねえ、だが、何かの役には立ちまさあね」
「盗人か、人殺しか、馬泥棒か」
「そのどれでもねえ、が、どれでもやってらな」
　戸が開いた。

　けらけらと笑い声がした。と、同時に、カタカタと何やら木の触れ合う音がした。
　女が立っている。——女の唇が動き、笑い声が洩れている。
　侍は、ふいを喰ったように飛びのいた。
が、これは、人形だったのである。等身大の人形が、笑っている。
「なんだ、木偶ではないか」
　新九郎は京で見たことがある。よく焼けあとの京の辻で、こういう人形を操って、見物たちを喜ばせていたものだ。
　それも、人形は一つではない。仄暗いなかに、三つ、四つ、五つ——人間と同じように横たわっていた。
　その立ち上った女人形は、ふっと笑いをやめたと思うと、
〈どこからおじゃった？〉
と、口を聞いた。
　さすがに新九郎は、これに返事がすぐには出ない。
と、
〈長者どのから使いを頼まれてのう〉
　別の声がした。
　横たわった男が身をもたげた、と見えたが、これも人形であった。
〈ほ、ほ、ほ、長者どのからのお使いかえ〉
〈そうじゃ、ちょうじゃ〉
　下手な洒落だが、げらげらと笑いが起った。
　笑ったのは人間か、人形か。その両方らしい。
〈長者どのは何と仰せられた〉
〈されば、罪を許してくれようとのう〉
〈そりゃ本当か〉
〈本当とも、本当とも、そうするのが、長者のためじゃほどに〉
〈ほ、なんとて長者のためになるかえ〉
〈木偶使いどもに罪はおじゃらぬ。されば、一命助け給えば〉
〈長者の家は栄え〉
〈富は増え〉
〈長者の命は百年までも〉
〈ほんに八方まるおさまり、四海波静かにして五穀豊穰、万々歳〉
〈ほんに、ほんに、めでたいことで〉
　それから、二人は声を合わせて、
《めでたいことで、ござりまするなァ》
　ぺこりと頭を下げた。
　新九郎は哄笑した。
「おもしろいワザオギ（俳優）だの、そのワザに免じて、助けてやる」
「そりゃまことでございますか」

と、人形を操っていた男が立ち上った。
その操り人形の一座は、ぜんぶで七人だった。
女が三人である。
かれらが、人形ごと入牢させられたのは、盗み、殺人のせいではない。
「とんだ迷信の犠牲でございまするわい」
操り人形の長老は、こんなことを言った。
「なんでもな、人形遣いで、魔性の者がいたとかいうことで、わしらは、ほうりこまれてしまいましたのじゃ。何もしないのにな」
「――人殺し馬泥棒という話だったぞ」
「左様なこと。そりゃ、何もせぬのに捕えようとするゆえ、斬りましたわい、それが何が悪い」
降りかかる火ノ粉を払う。それだけのことだと、長老は昂然としている。ほかの座員たちも、一様に頷いた。
善悪は別として、災厄は、おのれの手で払うしかない。乱世の常識だった。
「人を殺したとは、そのことか」
「そのときだけじゃ、それでも捕まってしもうた。どうせ、みんな殺されることじゃろ。それなら、いっそ、好きなだけ人形遣いしてと思うてな、こうやって、一緒に入れてもろうたのよ」
「馬泥棒は、何とした」
「ああ、あれか。あれも逃げようと思うて、馬を無断で借りたなかまがな……射殺されてな」
どうやら、旅廻りのくぐつ師の受難というところらしい。
見方によっては、殺人だの馬泥棒だのと、大層な悪事に聞えるが、それも、仕掛けられた争いからの脱出のためだったのだ。
「なるほど、それなら死ぬることはない」
「え！」
「助けてやる」
「それは……」
すぐには信じかねたのである。
「ほんとうでございますか」
くぐつ師たちは、顔を見合わせ、人形を抱いて、不審の眼を新九郎に向けた。
「ほんとうだとも」
と、大きく新九郎は頷いて言った。
「おれはこの長者屋敷の者ではない」
「………」
「お前たちも聞いていよう、府中の今川家の者で伊勢新九郎と申す」
「おお、竜王丸さまとは血つづきとか」
「そうだ。こたび、小鹿新五郎範満の謀叛でな、府中を追われてきた」

「――聞いておりまする。噂は聞きましたで」
「竜王丸どのを今川家太守に立てたい。そのために、人手が要る。そこで、お前たちに手を助けて貰いたいのだ。どうだ一肌ぬいでくれまいか」
「へえ……そういうわけでございますか。それは、まあ、ここを出して頂ければ恩人ゆえ、手助け仕らぬこともございませぬが、何しろ、あの長者なればなあ、長者がうんと言いますまい」
「すでに言うている」
「え!? まことでございますか。おい、みんな喜べやい、わしらは自由になれるぞよ」
「有難うございます。有難うございます」
くぐつ師たちは、両手を合わせんばかりの喜びようであった。

城取り

石脇城の門前に、くぐつ師の一行があらわれたのは、翌日の夕暮れには間がある時刻であった。
まだ陽は高かった。
「さあ、さあ、面白のくぐつ廻しを御覧ぜろや、花の都は柳に桜、風に吹かれて、くるくると、女と男が戯れるよ……」
鉦を打ち、笛を吹き、胸から下げた小太鼓を打って、はやしたてながら、やって来た。
「ほう、くぐつ廻しだ」「面白そうだぞ」「見ろ見ろ、あの女、あれあんな恰好をして、ほれ、裾がひらく」「見えたか」「何が」「股ぐら上のアレよ」「木偶にあれがあるものか」「あるかもしれん、作ってあるそうじゃ、ちゃんと毛まで植えてな」「ほ、そりゃ一見の価値がある」
門番はむろん、非番の者もぞろぞろと出てきた。
濠をめぐらして、はね橋になっている城の大手は、戦時だから、さらに鹿垣を結い、茨などを配置してある。

その前の広場がいわゆる、狩場と呼ばれるところで、そこまで攻めてきた敵は、つまり袋叩きにあう。
　城のはざまや鹿垣のうちからいっせいに矢を射かけて包み撃ちにする。矢ごろで、遮るものがないところだ。くぐつ師の一行は、この狩場で等身大の人形を踊らせているのだった。
「おりゃ府中で何度か見たがあんな大きな人形ははじめてだのう」「なんとよう作ってあるではないか」「人間と見わけがつかんくらいじゃ」「見わけがつくのは、あそこだけというわけじゃな」「木偶なら肌も固かろう」「おぬし、抱いてみるかや」
　無聊に苦しんでいた雑兵たちは、いい見世物が来たとやぐらの上やはざまからも乗りだして、勝手なことを言っている。
「同じ抱くなら、木偶よりも、あのほんもののほうがいいわい」「くぐつ女か、あいつを抱くにはいかほどかの」「米の三升ほどで済むじゃろ」「お蔵から盗みだしてこいや」「ふわッ、見つかれば両手を切られて追放じゃ」「それでも抱きたい……」
　そんな雑兵の気を引くように、くぐつ女たちは、かなり開放的な姿だった。
　ゆったりと着た小袖の胸もとから白い肌が見える。乳房のふくらみものぞけそうだった。人形をつかいながら熱中すると、自然と前裾がみだれて、ふくらはぎまで洩れるのである。
　男どもは、生唾をのみこんだ。
「──くぐつ師がまいったと？」
　弥三郎春忠は頭巾の中から、眼を光らした。
「はい、女四人に、男六人の一行でございます」
「怪しいふしはないか」
「なかなか面白うございますゆえ、にせものではありますまい」
「油断はならぬ」膝のところで、扇子をひらいたりしめたり、ぱちぱちと癇性に動かしはじめた。春忠の癖だった。
「用心せねばならぬ。うかと、城内へ入れるな」
「はい」
「にせものかどうかを見きわめよ、にせものならば、斬れ」
「は……」勿体ない、という顔になって、「なかなかの美形がおりますが」
「くぐつ女か」
　ふっと蔑すみに唇をゆがめた。
　女のように、うすく朱い唇だった。城中でも白頭巾をかぶったままである。
　眼だけをだしているかぶりかただが、この陽気ではいくら紗を三枚重ねただけの布でも、息苦しいのであろう、下半面だけはゆるめて、呼吸を楽にしていた。

　そういう主人の顔を家来たちは、まともに見ないようにしている。いつでも目を伏せ、視線をそらしている。目を合わせるのが恐れ多いという表情を保っている。
　そうでないと、春忠の癇癖は、手がつけられなくなる。かっと血が頭へのぼると、狂的になるのだ。顔を見られたくないという負い目が、強いひがみとなって、それは憎しみ、怒りへとはね上る。したがって家来たちは、春忠の顔をどんなときでもなるべく見ないようにしている。
「──くぐつ女などと遊ぶな」
「………」
「ろくな女はいない。同じ下賤の女でも、まだ湯女の方がいい」
「はあ？」
「湯女なら、そこに長くいるから素姓がわかる。が、旅の者は……何やつか知れぬ。素姓の知れぬ者は、男でも女でも近づけぬほうがよい」
「はあ」
　素姓もくそもあるものか、一度か二度抱くだけの女だ。そのとき楽しければそれでよいわさ、と、家来の方では、肚裡で、舌をだした。
（第一、おめえはよいわさ、何人でも側女を持てる。領内の女ならよりどり見どりだ。そんないい身分のやつに、わしらの気持がわかってたまるかい）
　誰だって、そんな気分になりたい。それが出来ないから、安い女を買うんじゃないか。
　家来のその気持をそそるように、小太鼓と鉦の音が、聞えてきた。
　そこへ、侍女の声がした。許されて入ってきたのは、竜王丸と北川どのへ付けておいた侍女であった。
「竜王丸どのが、くぐつの舞いを見たいと仰せられています」
　ならぬ、というふうに、春忠は無言で首を振った。
　一蹴されて侍女が立ち去ろうとすると、
「待て」と、呼び止めた。「くぐつ舞いを見たいというのは竜王丸のほうだな」
「はい」
「北川どのは」
「御一緒に、と」
「それはならぬ」きびしい声で言い、「竜王丸にだけ、見せてやれ」
「でも、それでは、どのような理由にいたしましょう」
「そうだな……」
　北川どのには、はっきりと敵意を見せているのではなかった。
　むしろ同情を寄せている、というかたちになっている。表てむき、そうとりつくろっているのは、春忠の気の弱さ

だった。
北川どのの美しい容姿への食指が動いているのも否めない。今川家の権勢をおのれのものにしようという野望から、手を差しのべたのだが、北川どのを目近に見て、春忠の情感は、男と女との感情を圧えることができなかった。
そこに春忠の脆い部分があるに違いなかった。
それに、北川どのの扱いは下手ができない。伊勢新九郎の腹心たちが見守っている。れいの大道寺太郎ら六人である。
（邪魔な奴らだ）
とは思うが、いずれも一騎当千の荒武者ばかりなので、始末に悪い。
（方法は二つある……）
と、春忠は胸で計算していた。
かれらの目を盗んで、北川どのの気持をこちらにひきつけ、竜王丸の後見の権を握るのが一つ。
いま一つは、はじめの計画通り北川どのと竜王丸を範満との駈け引に用いる。つまりかれらを引出物にして、府中へ乗り込んでゆく。範満と今川家の領地を折半にする。
たしかに範満のほうが、武力に於ては、現在、勝っている。勢力があるということは、乱世の首長たるべき要素である。が、しかし、この時代は、いささか、早い。まだ世間が名分、名目にこだわりを残している。〃由緒〃や〃血統〃や〃名跡〃を重んじた。領民もそうだし、隣国の大名も、京の朝廷も、みんなその伝統を破棄するまでに至っていない。竜王丸なら、高位も与えようが、範満では難しい。駿遠両国と、三河の一部を治める太守にはいささか、血がうすい。比較の問題だが、義忠の後なら、その子の竜王丸が一番だから、どうしても譲らなければならない。
そこに、ただの下剋上、ただの弱肉強食ではどうにもならぬ時代の様相がある。そのために幼児の竜王丸の価値があるわけだ。
（ともあれ、北川どのの心を獲るのが良策だ）
と、春忠は思っている。
「理由か、そうだな、卑猥な舞いなど御覧ぜられては北川どののお美しさがけがれます、とそう言え」
侍女は、春忠に命じられた通りに伝えている。
「卑猥な舞いゆえ、お目がけがれましょう」
真面目な顔でそう言われて、北川どのは、思わず目を伏せた。まるで、自分の卑しさを見抜かれたようで、羞しさにかえす言葉がなかった。
「あのようなものを見たいなどと仰せられずに、草紙でもお読みになられてはいかがでございましょう」
そこまで余分なことを言われることはない、と思ったが、北川どのは、黙っていた。食客の身ではある程度、我慢するしかない。

だが、竜王丸のほうは、そんな事情はわからないから、
「見たい、くぐつ舞いを見たい」と、駄々をこねた。
春忠の意を含んだ侍女はじろりと見て、
「若君には、卑猥なこともおわかりにはなりますまい」
「それは」
「したがあのような下賤の者、城中へ入れるのは、如何なものかと懸念されまする」
「……」
「是非とも、と仰せられますなれば、大手にて御見物なされましょう」
「よろしいか」
思わず、北川どのの声は喜びにはずんだ。竜王丸の気持が少しでもほぐれれば、と願っていたのだ。
生れ育った屋形を焼かれた上に、府中を逃れて流浪の身となった母子である。その哀しみに、竜王丸の子供心が傷つき、ねじれるのを、彼女はおそれたのだ。
（この子は、義忠どののかたみ、如何なることがあっても、今川家の主の座につけてやらねば）
それが非業に死んだ義忠への一番の供養だと思っている。
彼女は、まだ、春忠の真意がわからない。親切と同情での石脇城への誘いにふらふらとなったのではない。
一つには、あの泉ヶ谷の一庵の住居には、不穏な空気が感じられたし（それは多分にお尋ね者となった逃亡者の心理がさせるものだったろうが）もう一つは、
「新九郎どのは殺られたという話じゃ」
と、春忠の密使に告げられたことである。
「まさか、あの人が……」
と打ち消してみたものの、それは願望にすぎなかった。混乱の府中に潜入したのだ。打ち消す根拠を彼女は持たない。
「範満どのの家来にナブリ殺しにされたという噂じゃ、確実らしい」
春忠の姦策を知らない以上、その言葉を信じるしかなかった。
（いいえ死なない、私のところに帰ってくる……）
そう信じたい気持も言葉を重ねられれば、もろく崩れていった。
彼女は、ひとりではない。竜王丸の将来のことを考えてやらねばならない立場だったのだ。
北川どのの侍女小なみとすぎ乃に付き添われて竜王丸は大手へ出た。ほかに在竹兵衛と山中才四郎が護っている。
春忠の家来たちも、十数人、護るような看視するような顔で、並んでいた。
むろん、くぐつ師たちは、こうした歓迎ぶりに感激したようであった。
「ほれ、若君のお出ましじゃ、大いに木偶を使うて見せる

がよいわ」
　長老は〝鎌〟と呼ばれていた。
　その鎌の音頭とりで、男も女も、人形遣いたちは一せいに派手な動きで、男女の痴態を演じはじめた。
　鉦、小太鼓、鼓、笛と、楽器も明るく、かん高い音を立てて、その中で、美声の持ち主であろう、ひときわ高く唄っている。

〽新茶のわり立ち
　摘みつ摘まれつ
　挽いつ振られつ
　それこそ若い時の
　花香よの……

　茶摘みを唄いながら、実は女性を見たててての戯れ唄であった。
　女の人形の裾をめくったり、胸をはだけさせたり、ひょいと抱いたかと思うと、ほいと放したり、あざやかな人形遣いであった。

〽新茶の壺茶よの
　入れての後は
　こちゃ知らぬ
　こちゃ知らぬ……

　壺が何を意味するかは、いうまでもあるまい。
　男の身勝手を唄いながら、そんな男を忘れられない女の哀しさが、笑いのうちに、なんとなく身につまされるのだ。
　小太鼓と鼓がやみ、鉦がやむと笛だけの独奏になって、

〽今結うた髪が
　はらりと解けた
　いかさま心も
　さそく解けた……

　そういう大人の心が、竜王丸にわかろうはずはない。
　ただ、等身大の人形が生きているように踊ったり、滑稽な仕草をするのが面白いので、喜んでいるだけだった。
　そのくぐつ師の一行の人数が長者の牢屋に入れられていた人数と違うことに、誰も気づいた者はいない。
　鉦を叩いている女は二人。笠を目深にかぶり、下半面を布で蔽っているので、人相はわからない。その目が光っている。
　いつの間にか、陽が黄ばみ、西の空に落ちかけていた。
　当時としては賑やかすぎる演奏と、奇抜に情痴的、煽情的な木偶踊りにひかれて人々は時間の経つのも忘れていたのだった。
「母さまを呼んで」
　と、竜王丸が言った。
　面白いし、楽しいだけに竜王丸は、母の夢子と一緒に見たい気持にかられたのだろう。
　侍女の小なみはあわてて、

「なりませぬ」
「呼んで、母さまを」
「おむずかりなさいますな」
　その様子を見て、春忠の腹心の今出という男が寄ってきた。
「母者人は、城から出られるのが、おきらいじゃ」
「………」
「な、それゆえ、若だけ」
「なら、あの者、母さまの許へ」
　くぐつ師たちを、城へ招き入れればよいだろう、と、子供らしく、頬をふくらませて抗議するのだ。
「さ、それは……」
　下賤の身だから、城へ入れるのは憚る。
　その常識だけではなく戦時の警戒が、胡乱な者には、必要以上のきびしい眼を向けていた。
　くぐつ師。
　傀儡師、と書く。
　傀儡、もしくは傀儡子は人形の意であり、木製のからくり人形をも称う。ただ、人間のかたちをした存在の表現ではなく、あくまでも、興味の対象たる舞い人形を意味する。
　したがって、遊芸の一つであり、外来語だ。ペルシャなどから中国を経て、朝鮮を経由し、本邦にもたらされたもので、〝傀儡〟の字は、中国からの直輸入である。
〔列子〕に、
　――巧人有㆓偃師者㆒、為㆓木人㆒能歌舞、此傀儡之始也。
　と、ある。
　わかり易く言えば、操り人形であり、転じて傀儡といえば、操られる人をも意味する。
　木偶（でこ、でく）はいうまでもなく、古いころの、埴輪に見られる土偶の対で木製の人形というわけだが、これらをくぐつと呼ぶのは、
　久久都（くぐつ）
　これは当初、海女などが、海中の獲物を入れるための袋の呼称らしい。
〔袖中抄〕には、
「藁にて袋のやうに編みたる物なり、それに藻貝などを入れる」
　と、ある。
　万葉集にも詠まれているが時代が下ると、一般に使われるようになり、その袋が、入れもの、を意味して、箱様のものに及び、人形遣いが、胸にさげている箱、の専称に転化し、ついには、人形遣い、その人をくぐつ師、くぐつ廻し、と呼ぶようになったらしい。
　したがって、くぐつを操るからくぐつ師ではない。くぐつ師が先だ。傀儡師と書いて、単にくぐつとも呼ぶ。〝人形〟をくぐつとは呼ばないのは、その間の微妙な違いを物

語っている。
　さてこの傀儡師たち。
　大道芸人というか、遊芸人というか、一箇所に定着していない。放浪芸人である。
　伝うるところでは、外来民族独特の、いわばジプシーで、そのために、律令以来の身分制度の中では、いやしめられてきた。
　こうした人々は、中古も近世までも、諸国往来が商売だから、蔑すまれはするが、関所などを通るには、容易であった。
　関銭なども免れたらしい。近世江戸時代の関所などでも、大道芸人は手形が要らない。
　芸がつまり身分証、というわけで、関所役人の前で、芸を披露すれば、入り鉄砲に出女の、きびしい箱根の関所などでも通行を許された。そういう特典も、所詮は、蔑視のあらわれでもある。
　鎌倉時代ごろに、だいたい、このくぐつ師の服装、人形箱など、その風俗は固定化したようである。派手な色目の投げ頭巾に小袖、くくり袴、手甲脚絆で、袖無しなどもときに着る。胸にかけた人形箱から、とりだした人形は、だいたい、二十センチくらいのものだったようだ。
　素朴なかたちの人形操りである。
　一般的な人形操りといえば、そんな程度のもので、木製のからくりになっていて、後世の文楽人形の原型にもなっているわけだ。
　この連中のような、等身大の人形など、はじめて見る者が多かったにちがいない。
　小さな人形ではどんなに精巧につくっても、やはり作り物の感は免れないが、等身大だと、別の感覚が湧く。
　好色的な仕掛けができるからである。等身大の女体などというと、それだけでもう、男たちは舌舐めずりし、好奇の眼を光らせる。
　人形遣いの長老〝鎌〟の狙いも、そこにあったのであろう。
　〔奇譚傀儡師〕という古写本によると、この鎌は唐人の帰化せしものか、と素姓に疑問を投げているが、真偽はわからない。他に徴すべき文献もない。
　ともあれ、この等身大の人形が世間の意表をついたのは、たしかだった。
　普通の操り人形だったら、石脇城の人々も、大して興味を起さなかったろう。
「竜王丸どのが、人形操りを、御殿へ連れてゆくと、むずかっておられる」
　腹心からそう聞いた春忠は、
「小うるさい餓鬼め」
と、舌打ちした。

　もう日は暮れかけて、西の空の茜もどす黒く、変貌してゆく。
「城へ入れてはならぬ」
　弥三郎春忠は、強い言葉ではねつけたが、その語尾が、奇妙な笑いに変って、
「そうだな、人形だけならよいが」
「は？」
「人形だけならだ。ふふふ、そうだ、そうするがよい、おれに考えがある」
　春忠は、北川どのの顔を、姿態を思い浮べ、その衣裳を剝ぎとって、裸身にしてゆくさまを、宙に描いた。抑えきれぬ笑いがこみあげて、
「日が暮れぬうちに、せい」
と、促した。
　真っ暗になってからでは、何をするにも、心配なのだ。夜は、魔性ノものが跳梁すると信じられていたのも、当時の乏しい灯火と無関係ではない。
　早速、春忠の意向がくぐつ師の長老〝鎌〟に伝えられた。
「人形だけを、と仰せられる」
　小首をかしげて、ためらいを見せた。
「そうじゃ、お受けせい」
「………」
「鳥目にありつけるぞ」
「いかほど？」ぎろりと、眼を剝いて、「高うございますぞ」
　とおどかしてから、うふふ、と陰気に笑った。笑い声だけは洩らしながら、眼も唇も笑ってはいなかった。
「ま、その辺のことは、おまかせしましょうわい」
「では、仰せの通りにするか」
「いたしかたはござらぬ」
「そうせい、悪うは計らわぬ。人形をお見せすれば、どうせ、その人形を操る腕が必要になる、そうであろうが」
「そうでしょうな」
「そうすりゃ、いやでも、おぬしらも招かれる、な」
「有難きしあわせで」
「では、足軽どもを呼んで、運びこませる」
「あいや」と、鎌は、首をふって、「めったなことに、素人衆の手に触れさせませぬて」
「何を申す」
「われらが苦心の木偶でござれば」
「大仰に申すな。たかが、木で作った……」
「ほほ、木と布と絵具と、材料を申せば、いや、まだ髪があったな、髪は人毛でござる」
「………」
「それに肌は、人肌でござる」
「なに！」

「これは内密」
「うむ」
「内密ですぞ、肌は人間の肌を剝いで、作ったもの、それゆえ、さも生きているがごとくに見えまする」
何だか気味悪くなってきた。そんな問答のうちにも、日は暮れてくるのである。
「早くせい、どうやって運ぶ」
「長持に入れまする」
その長持が林の中に置いてあるのが見えた。
その長持は黒塗りのがっしりしたもので、六人担ぎになっている。運搬には牛車を用いることもある。鎌は人形をこの長持に入れさせた。
もうあたりは宵闇に包まれて、少し離れると、人の顔もおぼろだった。
「早くせい、日が暮れるではないか」
「丁寧に扱いませぬと……」
人形をそっと長持の中に横たえる。
人形の肌は、人間の皮を剝いで作ったものと聞いて、うす気味悪くなった雑兵たちは、遠巻きになって見ている。
不思議なのは、こう暗くなったのに、くぐつ師たちは、火を焚こうとしないことだった。
いうまでもなく灯火は、篝火か松明だ。松明など、そこらの木の枝で作れる。雑木林がいたるところにあるから枯木を拾うのも容易なのだ。
(あいつら、夜目に馴れているのであろうな)
(けものみたいな連中だからな)
と、雑兵たちは、蔑すみの目をむけている。
遊芸人に対する一般の気持は、その芸に感動するより、単に興味の対象でしかない。遊女や、浮れ女を見るのと大差ない。
一時の憂さを忘れ、笑いさえすれば、それでよいのであろう。
「――さあ用意はととのいましたなれば」
と、鎌が申し出た。
「よし、では一時、借りることにする」
「ただし、今夜は、城内にとどめおくだけにして下され」
「なぜだ」
「夜は人形に性（しょう）が宿りまするでな」
「……」
小頭は毛虫のような眉をひそめた。
性とは魂魄ということだ。霊と言っていい。
夜と霊との結びつきは、きわめて自然で、頭のよくない雑兵たちには、その言葉だけで、何やら神秘めいたものに触れるような気を起させた。
「不吉なことが起りましょう、白昼になれば、魔性は去りまする」

「魔性を……宿しているのか」
小頭は、こわごわ聞く。
あの艶冶な、滑稽な、卑猥な、人形の動きは、そのためかもしれないと思った。あまりにも、人間くさい。人間に近い。
「いや、魔性は、夜の闇とともに来るのでしてな」
「……」
「夜のトバリがおりるとき、魔性が忍びおりる、左様に聞いておりまする」
「うむ、なるほどな」
「夜明けの光とともに、魔性は去りまする。魔性はお天道さまの光をきらいますでな」
「そうであろう、そうであろう」雑兵の小頭は納得した。
「左様に殿に申しあげて、誰も近づかせぬようにする」
昔の人は迷信に弱い、という。
前世紀の非科学性といってしまえばそれまでだが、迷信でも信じるしかない時代だったのだ。政治や宗教のひずみともいえる。
夜陰に魔性がおりてきて、人形に宿る、といわれると、
(そうかもしれない)
と、納得してしまったのは、当時としてはきわめて自然だった。
春忠だけは、
「馬鹿をいえ」と一蹴したが、「さわらんにこしたことはないな……見張りを二、三人立てて、近寄らせるな」
と、指示した。
運びこまれた人形の長持は、六人がかりで、
「重いな、こりゃァ」「何しろ木で作ってあるからな」「木とは思えん重さじゃ」「樫の木か、それに衣裳も着ているからの」「人間の髪を植えてあるそうじゃ。それに皮膚までな」「そうじゃろ、なんとも色っぽかったからの」「襟からちらちら見えたおっぱいなんぞ、まるでほんもののようであったわいな」
城内へ運び入れると、〈忌みノ間〉へ安置した。
どこの城でも、こうした部屋がある。たいてい乾（いぬい）の方角にある。
城内で死人が出たときなど、この部屋に入れる。奇病の場合もそうである。医学知識の少ない時代だから、ただ漢方と祈禱に頼るしかない。
伝染性の強い場合だと一種の隔離の効用があるわけだ。
こういう部屋は不浄門に通じている。部屋の入口には注連縄が張られ、病魔退散の魔利支天像を描いた掛軸が下り、瓶子が供えられているほか、長剣がさかほこに立てられている。この剣で病魔を退けるというまじないである。
この部屋に運びこむと、「やれやれ、重かったな」「どうじゃ、ちょっとのぞいて見ようかい」「よせよせ、魔性が

宿っているというぞ」「それでも気になるわい。あの女人形のおっぱいと……」「あそこか」「生えているかどうか」「人形なら、植えているかどうかじゃろ」「そういうことになるがな……」

人形の裾をひんめくって、そこを掌でたしかめたいらしく、その雑兵は蓋に手をかけたくて、むずむずしている。

「さあ、早く出ろ」

小頭に一喝されて、しぶしぶ部屋から出た。

板戸が重く軋って閉った。

「お前とお前、見張りだ」

二人を指名して、板戸の前に立哨させると、小頭は報告のために春忠の部屋へゆく。

奇怪な〈忌みノ間〉は夜の闇と妖気に包まれていた。

春忠の考えはどこにあったのか。くぐつ人形八体を納めた長持を〈忌みノ間〉に安置したと聞くと、

「北川どのに、そう伝えろ」

「はあ」

「忌みノ間だということは、秘めておけ」

「は……？」

「天女ノ間だというのだ。わかったな、そして、小半刻経ったらくぐつ舞いを御覧に入れると、かように言え」

春忠の真意は、家来にはかいもくわからない。かれの声には、笑いがある。悪戯を思いついた子供のようなそれだった。

子供の悪戯ならまだいいが、大人のそれは執拗で毒がある。——

北川どのは、

「くぐつ舞いを呼び寄せましたゆえ、御覧じられませ」

と、呼ばれて、天女ノ間に入ってきた。

「お一人で」

と、念を押されている。

竜王丸が頼んで招き入れたのだと侍女に聞いたので、なんの疑いも持たなかった。

その部屋は、天女の絵を唐紙に描かせたもので、春忠の悪趣味が剝きだされている。

天女は、羽衣伝説から材をとったものであろうが、絵があまり上手ではないので、天女というよりは、海女のようなからだつきで、生々しい。

案外、真をついていないでもないが、絵としても、品がない。天女に名を借りて、春忠の好色に応える図ともいえる。

北川どのが入ってゆくと、燭の炎が揺れて、天女が動いているように見え、

「あ……」

と、思わず、立ちどまったほどだった。

そして、その天女の媚態を真似ているかのように、女体が横たわっていた。

等身大の人形、と聞いていたので、格別の不審も持たなかったのだが、人形にしてはあまりにもよく出来ている。うすい、蟬の羽のような、紗の布をまとっただけなので、全裸といってよい。

女人形一体だけではなかった。男の人形もあった。男のほうは、まるっきりの裸である。これは屛風の影になっていたのである。

人形は動く——人間と同じように動くという。たしかに、動いた。

のろのろと動いた。女体と男体と、二人？　は、ぎごちない動きをしながら、愛撫をはじめたではないか。

「まあ、なんということを……」

北川どのは正視することが出来なかった。思わず、袖で顔を蔽った。

その羞じらいを見ていたように、ふふふ、と含み笑いがどこからか聞えてきたのである。

「如何じゃ、くぐつ舞いは」

「——面白いであろうが」

と、春忠は、笑いながら屛風の陰から出てきた。むろん、頭巾はかぶったままなのである。

「如何じゃ、北川どの」

「はい……」

立ち竦んでいる。むさいものを見たように、夢子は袖で半面を蔽って、返事もできないのだ。

「あれ、男と女がまぐわっている……くぐつ舞いは、人の世を写すというが、まことにな」

「……」

「男と女の裸の姿じゃ、生きとし生けるものは、ああやって、歓びをわかちあう」

「……」

「のう、北川どの」

「はい……」

「不肖この弥三郎が、そなたと竜王丸の面倒を見よう、安心なさるがよい。竜王丸も今川の当主となり、そなたは、この腕に抱かれる……」

弥三郎春忠の言葉は、麻薬のように、夢子の心をしびれさせた。

目の前では、男女の人形が、あやしい動作をつづけている。その動きは、あまりにも的確で、人形とも思えないほど、リアルだった。

目のあたり、こういう姿を見たことは、はじめてだったのである。あまりにも強烈で、しかも興味的だったのは否めない。

夢子は、がくがくと膝がふるえ、目の前がかすむようで

あった。
　人形が人間のように愛撫しあっている。それは幻影ではなかった。夢でもなかった。
　遠明りの中で、おぼろではあったが、まぐわいしているのだ。
「人形が……」
　意味もなく、夢子は、つぶやいた。何か言わないと、気持が落着かない。
　弥三郎春忠の手は、いつか彼女の肩を抱いている。女のからだは、情感で火のようになっていた。その熱いからだを抱き寄せると、目の前に、わななく唇があった。その唇は、男のそれを待っているかのように、ぽってりと厚く、かわいて、火を持っていた。
　弥三郎は、頭巾をひきはぐように、下半面を剝きだして、夢子の唇を奪おうとした。
　そのとき、家臣の声がしたのである。
「殿！　殿！」
　狼狽した声だった。走りまわる数人の足音もした。
（せっかくのところに！）舌打ちして弥三郎は振りかえった。「なんだ！」
「大事でございます人形が……」
「人形が、なんとした」
「殺しました」
「なに！」
「見張りを殺しました」
「馬鹿な！」
　その驚愕が、はっと、夢子を現実にかえしたのである。
　夢子は見た。
　男女の人形が、この騒ぎで、愛撫の手をとめ、ぽかんとして、こちらを見たことを。
　それは、人形ではなかった。人間の男女だった。
　弥三郎春忠に命じられて、かれらは人形の演技をつづけていたのである。
「卑劣なことを」
　それと気がつくと、夢子は、かっとなった。
　もう少しで、あやうく弥三郎に唇を奪われるところだった。あの放心状態では、それだけでは終らなかったろう。
　その騒ぎは、夢子にとって救いになったのだ。
　彼女は、弥三郎の腕をふり放して、〈天女ノ間〉を飛びだした。
「あ、待て」
　と、弥三郎は手をのばしたものの、その手をすりぬけられると、それ以上は追おうとせず、また、つづけざまに舌打ちを聞かせて、
「とんだところに、邪魔が入ったな。ええい、わいらは、もうよい、着物をつけろ」と、演技した男女へ浴びせてか

ら、注進の者をふりかえった。「一体、何ごとだ、人形が人を殺したとは、何を寝呆けたことを」
「はい、それがまさしく……」
　その男も驚きで、声がふるえていた。そこへまた駈けこんできた者がある。
「殿！　殿、大変でござる、あの人形ども……」
　なんということだろう。
〈忌みノ間〉の人形たちが、一せいにいのちを得たように暴れまわっているというのである。
（魔性がおりたのか?!）
　一瞬、そう思った。
　摩利支天像も、破邪の剣も役に立たなかったのだろうか。
　その動きを見せたのは、実は、長持を運び入れたあと、板戸を閉じた直後だった。
　長持が動いた。いや、蓋が動いた。静かに持ち上ったのである。
　もしも、これを目撃した者があったら、恐怖で心ノ臓が凍ったかもしれない。
　一基の燭の炎がおぼろにあたりを照らしているだけの、忌みノ間であった。
　長持の蓋が持ち上ると、隙間から、ぎょろりと眼がのぞいた。二つ。小さな炎を吸って光った。
　部屋が無人とたしかめてから、ギーッと、上る。するりと、すべり出る。小兵な男。これは人形ではない。正しく人間だった。
　その次に出てきたのは、あの〝韋駄天〟ではないか。足に鉄輪をつけたままだった。
　つづいて、女が出た。これも女人形ではない。目尻が、吊り上ってキラキラ光る〝山猫〟だった。
　また一人──牛次が出てきた。牛次の手には、手斧がある。山猫は脇差を持ち、韋駄天は棍棒を摑んでいた。
　さらに三人──次々と出てきたのである。
　牛次はそっと板戸へ近寄ると、耳をあてた。外には見張りがいる。二人であることは、話し声でわかった。
「いやなこったな、こんな役目はのう」「貧乏クジよ。ま、朝までだ、しかたはないわさ」「こっそり蓋をあけてみようぜ、女人形を……」「よせ」「いいではないか、誰にもわからん。ちょっとだけだ」「見つかると、首がとぶ」「見つかりはせぬて、な、女人形だ、生きているような人形だったぞ」
「そうか」と、もう一人も気が動いたらしい。「見たいな」
「見たいだろ、な、よいではないか、二人で口を拭っていたら、わかりゃせん」
「見るだけなら……」と、相棒も納得してきた。「ちょっと見るだけなら、まあ、よいだろう」
「見たら、抱きたくなるかもしれんが……」

「人形だぞ」
「人形でも、美い女は美い女だ。人間の肌を用いたという
ていたからな、しなしなと、柔らかそうだ、うふッ……」
　よほどに好き者らしい。だが、そう言われると、相手はまたひるみをおぼえた。
「そんなことをして、ひょっとすると……」
「ひょっともくそもない。おりゃ見てくるわい」
　がらりと板戸を開けて、入ってきた。
　とたんに牛次の手斧がぶーんと横殴りに走って、ぐわッと脇腹に食い込んでいる。
「わあ！」
　突然のことだし、人形が動きだしたとも、魔性のせいだとも考えるひまはなく、その男はふっ飛ばされたように倒れた。
　外にいた方には、次の瞬間、山猫がとびかかっていたのである。
　脇差が、腹巻（胴鎧）の合わせめに、ぐさりと入った。
「で、出合え……」
　その声が、どれくらいひびいたかわからない。
　韋駄天は、その間に、飛びだしている。そのあとから、二、三人つづいた。かれらが狙ったのは、大手と搦手の門であった。
　門の内側にいた夜番の連中は韋駄天の棍棒で打ち倒された。槍も刀も、棍棒の前にはものの数ではない。槍が折れ、刀がけし飛び、脳天を叩き割られ、あるいは顔がひん曲り、ばたばたと倒れた。
　大手門の閂をあけると、表でわあーっと鯨波が聞えた。
夥しい松明と喚声が、山津波のように押し寄せてきた。
　夥しい松明と喚声と――
　これは合図を待っていた伊勢新九郎の率いる連中だった。
　軍勢というには、あまりにもお粗末だが、牢屋から出ることのできた歓びと、
「城を取ったあかつきには、侍に取り立ててやる」
　侍になりたくなければ、恩賞はこれこれしかじか、と餌を目の前にぶら下げての軍勢編成だった。
　罪囚というだけでは、その人間性を一概に論じられない。無実の者もあろうし、やむにやまれぬ事情もあろう。
　だが、どちらにしても、暗い牢屋から解放された歓びは大きいのだ。
　膝を抱えて、ちぢこまって、処刑の日を待っているしかなかった者たちには、
「思いっきり暴れろ」
　という指令が、何よりだった。
　自由に手足が伸ばせるだけでも嬉しいのに、刀槍をとって闘うことができるのだ。
　鬱屈した血にとって、これほどの歓びはない。

「命令に逆らった者は斬る」はっきりと新九郎は厳命して、
「一つだけおぼえていろ。逃げる者、味方につく者は、敵対するな。というのは、城内に、おれの腹心がいるのだ」
　大道寺太郎たちをむざむざ混乱の中で死なせたくない。
「伊勢新九郎が手の者、と申して斬りこめ、それでも刃向うやつはかまわぬ、斬り捨てろ」
　それだけを厳守すれば、あとは掠奪は気のまま、というのだ。
　戦国の雑兵らにとって、掠奪は日常のことだった。そのうまみがなければ、誰も、命がけで闘いはしない。
　城内から大手門がひらかれ、
〝三つ火〟
が、夜空に流れた。呼応の合図である。
　火矢三すじ、つづけざまに切って放したのだ。
　林の中、山の陰、川の畔、木の陰、農家の裏などにひそんでいたかれらは、いっせいに松明に点火し、鯨波をあげて、攻め寄せてきたのである。
「伊勢新九郎が参上」
「伊勢新九郎が参上！」
「伊勢新九郎が参上!!」
　口々に喚きながらの突進であった。
　簡潔な言葉は、声を合わせてのものではなかったが、城兵たちにはっきりと聞えた。
　それはいうまでもなく、北川どの母子と、その侍女たちと郎党、大道寺太郎らに知らせるためのものだった。
　未然に同志討ちをふせぎ、内部からも、味方させる。その方略なのだ。
「まあ、新九郎どのが」北川どのは、すっくと立ち上った。
「新九郎どのが参りましたよ、みんな心して和子を」
　侍女たちが走り寄る。軟禁されたにひとしい一室であったが、かえって、それが、北川どのや竜王丸には、幸いした。
「城兵どもを近づけてはなりませぬ」
　侍女たちは、薙刀を手にし、脇差を抜き、あるいは裾を短く、股立ちとって、母子を守るように、円陣をつくった。
　すでに、弥三郎春忠の真意は判然していたのである。
（竜王丸のためを思ってのことではない！）
　おのれの野望のために利用しようとしたのだ。
（その上、私まで……）
　獣欲の犠牲にしようとしたことも、彼女を目ざめさせた。
　はじめから信用していたわけではないが、落魄の身には、親切な言葉が、意外に作用したのである。
「北川どの」
「和子は大事ないか」
　在竹兵衛と山中才四郎が走ってくると、
「新九郎兄貴が、攻めてきたぞ」

「われらのいることを知らざったのであろうか」

唐突なことで、誰もが、的確な判断が出来なかった。

「お聞きか、新九郎兄貴の手勢じゃ」

「われらを攻めるはずがないが」

大道寺太郎が槍をひっさげて、駈けつけてきた。

「あの鯨波を聞いたか」

「聞いたとも」

「あれは、われらに聞かせているのだ」

「というと」

「つまり、和子を助けだしに来たということだ。同志討ちにならないようにな」太郎は振りかえって、「おい、こっちに来い」手招きした。

引かれるように駈け寄ってきたのは、山猫である。

白刃を背にかくすようにして片膝をついたのは、北川どのと竜王丸に対する儀礼であろう。

「伊勢新九郎さまの手の者でございます。和子をお救いするために先乗りして来た者」

「おお、忝けなく思います」

北川どのは、喜びをあらわにした。

「しかし、一体、どういうことなのだ」

無骨な兵衛には、まだのみこめないらしい。

「わからんのか」と才四郎は呆れたように、「弥三郎春忠は、和子のためを思うて、助けてくれたのではないということよ」

「あ、そうか」

「そうだ、見ろ」

どっと、城内に寄手が雪崩れこんだようである。

春忠の命令を受けたのか、数人の城兵が白刃を閃めかせながら走ってくるのが見えた。

「奴ら、和子を奪いに来たぞ」

太郎が振りかえって槍を握りなおした。

「うぬら、近よるな！」

大道寺太郎が一喝した。

その一言で、城兵たちは仮面をかなぐり捨てている。

おためごかしの保護の手ももはや効かぬとさとったのか、

「かまわぬ、やつら、ぶった斬れ」

髭面の男が喚いた。

室内では長槍は使えない。短槍をしごいて、突っかけてきた。これを太郎が払いのける。刀が飛びこんでくる。兵衛がむかえうつ。

たちまち敵味方入り乱れての修羅場となった。

北川どのと竜王丸を守って侍女たちは刀と薙刀で守り、外側の女たちは勇ましく、敵にむかった。

斬り合って、時間を稼いでいるうちに、新九郎が救けにくる。

その考えが、誰の胸にもあった。

敵は、その考えをぶちこわすように、面てをふって激しく斬りこんでくる。

「刃向うやつは、一人残らずぶった斬れ、北川どのと竜王丸は人質にするのだ」

あくまでも、利用するつもりなのだ。髭の男は注意を何度もくりかえした。

血と刃の閃きは、理性を麻痺させる。

幾ら注意をしても、し過ぎるということはなかった。混乱は、彼我の区別すらもわからなくした。

石脇城の中は血と怒号と剣戟の修羅場になっていた。

前にも述べたように、この城は山の端の小高い丘の上にある。

城内はしたがって傾斜した部分を、あるいは削り、あるいは窪地を埋めたり、平坦にして、小屋を建てている。日ごろの住居は、その裏側の山腹の〝平(たいら)〟を利用したもので、その部分は、城郭の名称でいえば、三ノ丸に当っていた。

大手と搦手から攻めこんだ新九郎の軍勢は、雑多な、文字通り〝烏合の衆〟だったが、

（手柄をたてれば、侍に取立てられる）と、勇躍し、（城を陥せば、掠奪自由なのだ）

その甘い餌に吊られて、死物狂いのはたらきをした。

城内の地ノ理は、およねがおぼえているかぎりの指示をしたことで、だいたいわかっていた。

新九郎は城内へ躍りこむと、大太刀をふるって、群がり寄る城兵を斬りまくりながら、三ノ丸の御殿を目ざした。

「伊勢新九郎参上！」

「伊勢新九郎参上!!」

それが合言葉であり、勇を鼓舞する、かけ声にもなっていた。

「おれが新九郎だ、降伏する者は斬らぬ。刀を捨てる者は救けてやる」

斬り結びながら喚き、喚きながら走った。

その声に応じて、刀を捨てうずくまる者もいたし斬られたふりをして突っ伏す者もいた。

（竜王丸と夢子を……）

救け出すのが目的であった。

同時に、かれらの侍女や供侍、そして新九郎の腹心六人が呼応してくれることも、計算のうちにあった。

故意か粗忽か、小屋の幾つかが火を発して、闇を赤く染め、彼我の斬り結ぶ姿をくっきりと描きだしている。

返り血を浴びて、なお荒れ狂う新九郎は、火炎不動のような凄まじさで、

「この城は新九郎が貰うたぞ、竜王丸ぎみに従う者は刀を捨てろ、新九郎の手の者は、集まってまいれ」

大音声である。

さらでだに、上背のある新九郎の派手な動きは、よく目立つのだ。
「やあ、新九郎兄貴だ」
「おお、よくやるのう、あ、また斬った」
「なんと、われらも、劣らぬ働きをしようぞ」
「春忠はどこだ、あやつを血祭りにあげてくれよう」
「どうも、はじめから、うさん臭いと思うていたわ。あやつには腹黒い企みがあったのじゃな」
「それに違いない、新九郎兄貴のすることじゃ、間違いはないでな」
すっかり心服しているから、一々こまかく説明しなくても、新九郎の行動は、かれらを納得させる。
「やあやあ、おれは新九郎の義兄弟大道寺太郎だ、死にたいやつがいたら、おれが引導わたしてくれるぞ」
「新九郎が義兄弟、荒木兵庫だ、誰でもまいれ、相手はえらばぬ」
「おれは在竹兵衛だ、やはり伊勢の新九郎を、兄貴と呼ぶ者ぞ」
つづいて、山中才四郎、荒川又次郎、鳥羽十蔵らが、それぞれ名乗りをあげて、斬りまくるのだ。
城兵はもう、まるきり戦意を失って、刀を捨てて降伏する者、勝手知った城内だけに、逃亡をはかる者がつづき、勝敗は誰の目にも明らかになっていた。
「弥三郎はどこだ」
「見えぬぞ、居間も寝所も、もぬけのからだ」
「ちいッ、逃がしたか」
「どこの城にも、脱け道がある、この城も、どこかにあるはずだ、探せ」
「夜中に草の根をわけても、探せるものか、腹心をつかまえて吐かせるがいい」
刀を捨てた連中を一箇所に集めてある。
荒木兵庫は大薙刀をぶんぶんふりまわして、松の枝を叩き落したり、死体を穂先にかけて、はねとばしたりしてみせた。
「弥三郎春忠めは、いずくより逃げた？　脱け道でもあれば、吐け。知っていて隠したことがわかると、うぬらも、この通りだぞ」
誰も顔を見あわして、返事をしない。この場の有様を、当の弥三郎は、凝っと見ていたのである。
「いるはずだ、必ず、居る！」新九郎は、きっぱりといった。「入ると、すぐ、大手も搦手も門を閉めて、見張らせた」
「…………」
「塀を越えて逃げるやつは、弓矢で仕止めたり、斬り捨てている。一人も逃げだしたはずはない」
この暗い夜に、それだけはっきり言える根拠はどこにあ

るのか。歴戦の体験が言わせるのか。
闇の中で、戦さとなると、夜目が光るのであろうか。
それもある。が、新九郎を言明させているのは、それだけではない。
（弥三郎春忠にも、誇りがあるはずだ。こそこそと、逃げるような真似はすまいが）
あの尊大で傲慢で、虚栄のかたまりのような男が、鼠のように、逃げまわるとは考えられなかった。
だが、あの頭巾をとろうとしないのは、顔の醜さだと聞いている。
一面、小心なものがあるのだ。
それは、弥三郎の陰性さを物語るが、立場が逆転したとき、そういう男は、こんどは、どこまでも卑屈になってゆくのではないか。
そこここで、掠奪と、強姦が行われていた。
北川どのを中心にしてこれを護る侍女たちは、
「新九郎どのの御味方」
といって、毒牙はまぬがれたが春忠の寵を受けたり、その女に仕える侍女や、お末の女たちは悲惨なものだった。
木の陰や、部屋の隅や、井戸端や、棚の下、草むらなどで、むざんに凌辱されていた。
その女たちが裸にされたり、下半身だけをひん剝かれた、白い肌が、夜の中で、哀れにも妖しく見える。
「くそ、いまいましい」
鳥羽十蔵は、目を光らしながら歩いていた。
何といっても、城内の女の数は少ないのだ。金品を先に奪っていたために十蔵は、女にありつけなかった。
欲情で、気が狂いそうだった。
この鳥羽十蔵と名乗る男、西伊豆で、大道寺太郎らの漂流を助けてから、すっかり仲間になってしまい、駿府へやってきたのだが、伊勢で血盟したかれらとは、どうしても、気持が、どこか、とけあえぬところがある。
きわだって、どうということはないのだが、古い連中と新しい加盟者との違いは、何かの折に、ふっと、感じるのだ。
自分では、一つになっているつもりでも、どこかが違う。こうやって女を探しているのも一人行動なのである。
「…………」
呼ばれたようだ。ものかげからひら、と白い手が招いた。
「や……？」
鳥羽十蔵は、目をむいた。
ひら、と白い手が動いた。女の手、と感じたのは、当然であろう。
招いている。おいでおいでをしているのだ。

まるで、街頭か、娼家でその種の女に招かれているような感じだった。
十蔵は、特に好色というのではなかったが、ふらふらと近寄った。とたん、つと手をつかまれた。
と、思うと、ぐい、とひき寄せられた。
つんのめったところに、冷たい刃が首すじに触れた。
「さわぐでない」
女にあらぬ、くぐもった声が言った。
「む……」
「声をあげれば、ざくりとゆく」
むろん、その調子はただの威しではない。
「だ、だれだ」
顔を見たかった。が、首をねじむけようとすると、すかりと、切れた。
「みろ、騒ぐだけ損だ。地獄への道が近くなる」
「うッ……」
「……」
「た、助けてくれ」
「おれの言うことを聞けば、な」
「聞く、聞く」
「ものわかりがいい」
笑ったようである。くそ！　腹立たしかったが、しかたはない。
十蔵はうなずいた。刃物を頸動脈にあてられていては相手のいうがままにうなずくよりない。
「伊豆の人間は、みんなものわかりがいいようだ」
「え!?」
どうして、かれを伊豆の生れと知っているのか。
「こんなところまで来て死んでは死にきれまい。伊豆へ帰るがいいぞ」
「……」
「どうだ、どっちをとる？」
「どっちとは」
「ここで死ぬか、伊豆へ帰るか、だ」
「それは……死にたくない」
「帰るほうをとるか。よし決った、立て」
十蔵はひき起された。が、放されたわけではない。
その脇の下、鎧の隙間に、ぐいと短刀をこじ入れられて、
「下手なことをすれば、こいつがざくりといく」
「……」
「わかるな。騒がぬことだ。このまま、おれを連れてゆけ」
「ど、何処へ？」
「黙って来い。城を脱けるのだ」
十蔵は顔を見たかったが、暗くてわからない。
女姿なのである。小袖を着て被衣をかぶっている。が、

これは男にちがいないのだ。
その声には聞き覚えがあった。歩きだしてから、あっ、といい、思わず立ち止った。
「死にたいか」
耳もとで囁いた声は弥三郎春忠にまぎれもなかった。
「わかったか」声のない笑いを見せて弥三郎春忠は、「どうだ、売るか」
「いや……」
「手柄にするか、それもよいかもしれぬがな、考えたほうが得だ」
「――逃げきれまいに」
「なあに、逃げてみせるさ、もっとも、きさまが、死ぬのを覚悟で騒げば、たしかに難しくはなる」
「……」
「きさまの死とひきかえだ」
真剣である。
弥三郎春忠も発見されたら、助からない。
新九郎とは、あの藁科川の中の小島（小枯ノ森）で、一度、争っている。
あのことがなければ、ただの城とりなら、必ずしも血祭りにされはすまいが、あのときから、憎悪の黒い河が二人の間に流れている。
とても、命乞いなどできないし常識的には、血祭りにあげられよう。
それは残酷ではない。城主を家来の前で斬ることくらい、その城とりの成功度を確認する手段はない。
（それに、北川どののことがあるからな）
北川どのを手ごめにしかけている。
あれだけでも、〝兄〟と称する新九郎の剣が首へおちてくるはず。
弥三郎春忠は、一歩間違えば、地獄へまっすぐに落ちねばならないのだ。冗談や、あいまいな話はできない。
「おれは見つかれば、殺される」
「……」
「が、ただは死なぬ。きさまを供にしてやる」
「……」
「地獄に独りでゆくなぞ、ゾッとしないからな。供に連れていってやる。先供だ、露払いだ。よいか」
「御免蒙りたい」
「生きて伊豆へ帰りたかろう」
「それは」
「ならば、余の言う通りにせい」
被衣をかぶって、小袖を着た弥三郎春忠である。
顔は見えない。が、すらりと痩せがただから、うしろや横から見ると、結構〝女〟になりきっている。
前から見ても、被衣をふかく、うつむいていれば、わか

らない。十蔵ともつれるようにして歩いてゆくのは、はた目に見れば、十蔵がうまく、女をつかまえたというふうに見える。
「余は嘘はつかぬ」と、弥三郎は囁いた。「これでも今川の身分ある者じゃ。余を助けたら、そちの身の立つよう計らってやる」
十蔵にはその言葉が有難い。
「おい、うまくやったな、どんな女だ、面を見せろ」
数人の男が寄って来た。
（しまった）
十蔵は、ぎくりとした。
弥三郎を助けない以上、自分は死なければならぬ。こうなると保身が先に立つ。
弥三郎が囁いたように、先へ死ぬのは自分だ。弥三郎が発見されると同時にぶすりと短刀が、脇腹を貫くだろう。
「よせ、おれのものだ」
と、かれは喚いた。
「うん、そりゃ、わかっている。が、ちょっと見せろ、良けりゃ、あとで……」
「いやだ、誰にも抱かせぬぞ」
十蔵は本気になった。
いのちがかかっている。その、むきになった様子が、ほんとうに、女を庇っているように見えた。
「くそ、なんと吝いやつめが」「ふん、どうせ大した女じゃあるめいがな」
毒吐いて、かれらは、漸くあきらめた。
女装の弥三郎も被衣のかげで、ほっとして、声のない笑いに頬が弛むのをおぼえた。
だが、いのちびろいした思いは当の弥三郎よりも、十蔵のほうが強かったようである。弥三郎の短刀はチクリチクリと脇腹を刺している。かなり血がにじんでいるはずだった。
男たちが離れてゆくと、
「よかったな」
「……」
「助かった」弥三郎は皮肉に言った。「お前のことを言っているのだぞ有難く思え」
「ふん、死ぬのは、同じだ」
「そうさ。ただ、先へ死ぬだけだ」
「……」
「あ、右へ曲れ」建物について曲る。だらだら坂になっている。「逃げようと思うな。余は嘘は吐かぬ。お前が身の立つように計らってやる」
「どうだかな」
「伊豆でも、顔が利くのだ、よいところに仕官させてやる」
実際、それだけのことは出来るに違いなかった。

鳥羽十蔵も、はじめから弥三郎を信用していなかったら、傷ついても抵抗したにちがいない。
かれの今川宗家の血すじということが、十蔵のような、無位無冠、漁師上りの者にしてみれば、ある魅力だったのも事実だ。
それに、十蔵は新九郎の命令に服しなければならぬことは、何もない。荒木兵庫たちと立場は違うのである。
（うまくいくと……）
故郷の伊豆で人がましい身分になれるかもしれない、と夢を抱いた。弥三郎の言葉には、そう思わせるものがあった。
落城と知るや素早く妾の小袖をまとい被衣に面をかくして、十蔵を楯に脱出を計るという奇略も、並々ではない。
「そこだ、左から三番目の石を押せ」
石垣の前に来ると弥三郎はこう命じた。
石垣といっても丸石の乱積みである。当時はまだ城造りが華麗さを備えるほど余裕はない。
専ら〝城塞〟の本義にのっとった守りのために存在する。そこには、余分なものはない。この石脇城も、かなり原始的な防塞の形態を残している。
土を盛り上げた、いわゆる〝掻上げ〟と称する部分や、土止めも施さずに小山を作ってあったり、皮付きのままの原木を組みあわせた櫓や、切り出した茨を乱雑に積んだ鹿柴などである。その石積みの部分は、城の搦手に近い三ノ丸の糒蔵の裾だった。
左から三番と指示された場所に十蔵は手をかけた。
「押すのだ」
ぐいと力を入れる。が、動かない。両手で押したが駄目だった。
「右側に、ちょっと力を入れるのだ、すると動く」
促されて十蔵はまた力をこめた。
要領があるのだ。今度は、僅かな力で、ぐらっと動いた。それをそっと取りはずす。
「持っていろ」
と、言い、弥三郎は被衣をかなぐり捨てると、女小袖のまま、中へすべりこんだ。
機敏な動作ではあったが、もしも、十蔵が、騒ぎ立てるつもりがあったら、そのときできたはずである。またその岩を弥三郎に叩きつけることも、できないではなかった。
もっとも、かなり重い。頭上に持ち上げるのは、難しい。
弥三郎は、中へ入ると、
「早くせい」と、呼んだ。「急がぬと、来るぞ」
「はい」
と、十蔵はつられて、素直に返事した。もう家来になってしまっている。これでは、まるで、昔からの家来だったようだ。

貫禄の違いというか、生れの違いであろう。
弥三郎の尊大で、横柄な態度も、十蔵のような男には、効果があると見える。効果があると知って、ひきずりこんだともいえる。
十蔵がまごまごしているので、弥三郎はあせった。
「何をしている、早く入れ」
「はい。ですが、あとをふさがないと」
それもそうだ。逃げ口を発見されれば、追跡されよう。
「上手にやれ」
中へ入ってから、外に置いた岩を持ち上げるのは大変だった。
が十蔵は、被衣を利用した。それくらいの頭はまわる。被衣で引き寄せて、岩をどうやら、もとのようにはめこんだ。少しゆがんだがしかたがない。
「よし、まいれ」
暗い中で、弥三郎の声は数間先から聞えた。
暗い。
一切の灯がない暗室であった。鳥羽十蔵は身うごきができなかった。
下手に動けば、頭がぶつかり、足もとにぽかりと奈落が口を開いて待っているかもしれない。
両手を振りまわし、そうっと足を進めながら、
「や、弥三郎どの」と、哀れな声を出した。「どこじゃ、弥三郎どの、何れにござる」
「こっちだ」
声は左手で聞えた。
「びくびくするな、早く来い」
「こ、来いと言われても、何も見えぬ。あ、歩けぬわ」
「そこに居るか、十蔵。居たいなら、そうやっていつまでも、そこに居るがいい」
弥三郎春忠の声は、ふっと冷たくなる。
もともと冷酷な男なのである。
おのれが助かるために、十蔵を道連れにして来たが、いつでも気持の変化で、弊履のように捨てられるだろう。
「早く来ないと、置いてゆく」
「ま、待ってくれ」
「歩け、壁に沿って来るんだ」
声はさらに遠くなった。
そのころになって、漸く、闇に眼が馴れて来たのか、十蔵にも、弥三郎の姿が、ぼんやりと仄白く見えて来た。
白い女小袖を着ていたのが幸いであった。黒装束なら、見えなかったろう。
「こっちだぞ」
弥三郎は手さぐりで進んでいる。
壁にぴたりとつき、手で伝いながら、歩いてゆくのだ。
十蔵がふりまわす手が、壁に触れた。冷たい石の肌である。

ほっとして、石をたぐるようにして前へ進む。その石積みが切れたあたりから、道は下り坂になっている。地下道である。この暗い地下道がどこまで続くのか。
山稜の南の端。糒蔵は、山腹にくっつくように建てられていた。その土の中をえぐって続いているにちがいなかった。
ギギーッと、闇の中でいやな音がした。
ぎょっとなった十蔵に、
「戸だ、階段になっている、用心しろ」
厚い板戸を開けながら、弥三郎は笑いを含んで言った。
蝶番が錆びていたらしい。
土壁は、ただ掘り抜いたままでところどころに支柱を建て、崩れを防ぐ板が打ちつけてあるだけであった。気をつけろと言われても、暗すぎたし、階段は急だった。
明りがありさえすれば、それほどの傾斜ではない。が、十蔵は取り残されるような不安を感じて、身を乗りだしたとたんに足を滑らせて倒れた。わっと悲鳴をあげ、闇の底へ転がり落ちていった。
暗闇の階段である。「わあーっ！」もんどりうって転がった鳥羽十蔵は、その数瞬の間に、このまま地獄へ落ちるのかと思った。ばたっと、壁にぶつかって漸く止った。
直ぐには起き上れない。どこを打ったのかもわからなかった。五体の骨がばらばらになったような痛みで、かれは呻いた。
「う、うーむ、痛う……」
「叱っ！」冷たい弥三郎の声が頭上でした。「静かに、誰か来る」
そこは板戸になっているらしかった。つまり階段でおりたところに、出口があったのだ。
ほっとするとともに、
(見つかったか)
十蔵は疼痛を怺えて身を起そうとした。
なかまに見つかったら、まず命はない。敵だったら降伏という手があるが、味方なら、
〝裏切り〟
を責められる。惨殺は免れない。
たとえ立場が異なって、十蔵が大道寺や山中らでも、真っ先に刀をふりかぶるだろう。
「……」
足音は外でとまった。
「おい、聞かなかったか」
声がした。板戸の外である。
「何を」
「何か、声が聞えたように思ったのだが……」
「声が？　誰もいないではないか」

「いや……ここだ、この戸の内らしい」
「まさか、ここは不開の戸だと聞いている。なんでも魔封じといって、城にはどこでもこういう戸口があるそうだ」
「どうだか、知れたものか、おい新九郎どのに注進して来い」
「なんだと言うのだ」
「怪しい声がした、と言えばいい、とにかくこの城のことは、われらにはよくわからん、調べるにこしたことはない」
十蔵も弥三郎も、二人の声で思いだした。
北川どの母子の供をしてきた雑兵だった。ここの戸口のことは、城侍に聞いていたのだろう。
万一の際の抜け穴の所在は、家来たちにも〝魔封じ〟ということにして隠している。いつ裏切られるかわからないからだった。
「よし、一丁いってくるぞ」
雑兵の一人が走り去った。
もう一人はここで見張るつもりらしい。
弥三郎の肘が動いた。さっと短刀を抜いたのだ。戸を開けると同時に無言で飛びかかっている。
疑いはしたものの、人が飛びだして来ようとは思っていなかった雑兵は、抜刀はしたが、もろにぶすりと刺されてのけぞり倒れた。
弥三郎はのしかかって、さらに一えぐりすると、
「手伝え」と十蔵に言った。「こやつの具足を剥ぐのだ」
手早く小具足を剥ぎとると、弥三郎春忠は女小袖を脱ぎ捨てた。血のついたままの雑兵鎧、小具足を着込んでゆく。
十蔵はその手ぎわのあざやかさに、すっかり気を呑まれて、打ち身の痛さも忘れたように手伝っている。
刺された雑兵は、苦悶しながら抵抗したのだが、
「うるさい奴だ」
弥三郎は手に触れた石を摑んで、頭を殴りつけた。ぐわっと悲鳴を洩らしたのが最期だった。
まるで、蛙か何かを叩き潰すような調子だった。
「馬鹿めが、世話を焼かせる」弥三郎は虫ケラを潰したほどの感情も見せずに、言った。「さあ、これでよい、行くぞ」
ぴくぴくと四肢をふるわせている断末魔の男をもはや一顧もせず、女小袖で血まみれの短刀を拭いおさめ、さらに、刀を拾いとった。
二、三度、素振りをくれたのは、重みをためしたのであろう。
「ふむ、ナマクラだが、ま、よいわさ」じろりと十蔵を振りかえって、「首くらい切れる」
「……」
十蔵はひやりとした。首すじが冷たくなった。
櫓や柵が燃えている。濃い煙が、低く這って、物のかた

ちや人影を淡く見せていた。
この城塞の劫火に呼応したように、頭上では雨雲が怪しく動き、星の光が明滅している。
たとえ二人の姿が、煙のなかに見えたとしても、悠然としていれば、疑われることはない。
ここは三ノ郭の外であった。城山の側面で、東側である。ここまでくれば、あとは、山裾を囲繞した濠を渡り、柵を脱け、鹿柴の外へ出るだけである。
「わかっているな」
見張りの者がいるところを抜けるとき、弥三郎は念をおした。
万一露見したときは、一蓮托生で、十蔵だけ生かしておかぬという意味だった。
十蔵は無言で頷いた。仄明りの中でも、緊張している表情が見える。
篝火が、そこここに焚かれていた。
「どっちへゆけばいいのか」
「南だ」言下に、弥三郎は答えた。「河口へ出るんだ。瀬戸川の河口へ出ればいい」
「瀬戸川？」
まだここへ来て日も浅いから十蔵にはぴんと来ない。
「小半道（約千五百メートル）下れば河口へ出る」
その道のりが、地獄へ通じるか極楽へつながるか、予断は許さない。
「誰だ」
半弓をかまえた男が、闇を透かすようにして声をかけてきた。
「十蔵だ」かすれ声でかれは言った。「新九郎どのの命令で、長者屋敷へ参る」
まだ新九郎や太郎たちには、鳥羽十蔵が脱走したという事実はわかっていない。
混乱の中だけに、どこで死んでいるかもしれないのだ。
したがって、
〝弥三郎捜索〟
には手を尽くしても、十蔵のことにまでは関心が持たれなかった。
十蔵が弥三郎に威され、うまうまとかれの逃亡を助けるかたちになってしまったが、最前線の見張りのところまでは、十蔵の行方を追求する指令は届いていない。
「鳥羽十蔵だ」
と、いう言葉だけで、すぐに道をひらいた。
この連中は、いうなれば、新しい新九郎の家来たちであり、北川どの母子と六人の名前は教えこまれている。
「長者屋敷へまいるのだ」
弥三郎の窶した雑兵を供連れにしている十蔵の姿に、見張りの者が不審を感じなかったのも無理はない。

牢屋から囚人まで狩り集めた烏合の軍勢である。お互いの顔すらよく知らないのだ。
弥三郎は顔を泥で汚している。もともと平常でも頭巾をかぶっていたのが、まるでこういう事態を予測していたかのように、幸いした。
弥三郎がかぶっていた被衣が、発見されたのは、その少し前である。被衣は、岩の間にはさまっていた。
いうまでもなく、十蔵が脱け穴に入ったあと、岩をもとへもどす際に、被衣を利用した。その端布が、外に洩れていたのである。
「おや、妙だぞ、こんなところに被衣が」
女に飢えた連中が発見したのだ。
引いて見た。岩が動いた。ぽかりと脱け穴が暗い口をあけるまでに、いくらも時間がかからなかった。
愛妾か侍女の一人が逃げたのかと思われたが、そのころ、すでに、侍女の一人が、弥三郎が女装して逃げたことを白状していたので、
「さては弥三郎の脱け口か」
と、合点された。
荒木兵庫たち数人が、松明をかざして、暗い中を進んでいる。
そして、その出口に雑兵の死体を発見したことで、
「いよいよ、彼奴と決ったぞ」
と、兵庫は、ただちに足どりを追った。
十蔵と雑兵が一人、東の柵を出たことは、その直後に判明した。
「逃げた、すぐに追え」
ただちに〝韋駄天〟が手斧を握って走りだした。
見張りは、二人が瀬戸川の河口のほうにゆくのを記憶していたのである。
在竹兵衛と荒川又次郎が、十人ほどを連れて、そのあとから走った。
「どんなことがあっても探し出せ、絶対に逃がすな」
さらに十人が、牛次に率いられて走った。この連中、いずれも、かれの同囚だった者たちである。
「来たな」
弥三郎は背後を振りかえって呟いた。
松明が幾つも動いている。その群れは、三つにわかれて闇の中を泳いでゆく。あきらかに、かれの逃亡を知っての追跡だった。
「しまった、見つかった」
十蔵は思わず立ち竦んでいる。
「止るな、行くんだ。案じることはない」
「し、しかし」
「愚図々々するな、河口へ出れば舟があろう、海へ出てしまえばそれまでだ」

たしかに、そうに違いない。十蔵はもう意志のない走狗でしかなかった。
「探せ、舟だ、きさま、漕げるはずだな」
「はあ、それは漕ぐことなら」
漁師あがりだけに、十蔵は正直に答えてしまっている。櫓には自信があるのだ。
瀬戸川の河口は、現在では焼津市の北郊を劃るように流れて駿河湾にそそいでいる。河口ちかく、当目大橋の辺で幅員二百メートルほどのものだが、当時はもっと広かったらしい。
むろん築堤などもなく、岸辺には葦が生い茂り、落合のあたりから極端に川幅を広げて、焼津港の近くまで来ていたようだ。星あかりだけが頼りであった。葦の間に半ば岸へ乗りあげて、漁舟が数艘点在している。
櫓軸に結ばれたもやい綱が、岸辺の杭に固く縛りつけられていた。このしばりかたには、それぞれ地方によって独自のものがある。いうまでもなく、波に流されないためと、盗難に遭わないためだ。縛り方が独特なのも、他国者、流れ者を意識してのことであろう、同じ漁村内では、みんな親類みたいなものだから、人のものを盗むことは少ない。
「早く綱を解け」
弥三郎は抜刀をひっさげたまま背後から追ってくる松明の灯を睨んでいる。
「いますぐ……」
と、解きかけたが、なかなか綱は解けない。結んだあとにわざと水をかけたりしてあるのだ。
手もとが暗かったし、西伊豆のかれらの結びかたとあまりにも違っていた。現在でこそ、同じ静岡県であるが、駿河と伊豆では、やはり風俗習慣に違いが多い。
「早くしろ、何をしている」
焦立って弥三郎は抜刀をうち振った。
「はあ、何しろ、暗くって、この固くって……くそッ」
「ええい、解けねば、切ろ、切ってしまえ」
その声に応じて十蔵は鎧通しで押し切ろうとした。が、固く縛られた麻縄の濡れたものは容易に切れない。
「早くしろ、早く」
弥三郎はきんきん声で急きたてるし、鳥羽十蔵はおろおろしてしまって、ますます切れなくなる。
「なんて切れねえ刀だ」
しかたがなかった。鎧通しを綱にあてると、ぎしぎし、押し切りした。
その間にも、松明は近づいてくる。
「おおい、そっちにいないか」「川べりに行け、舟に乗るにちがいないぞ」「舟で逃げられるぞう」
そんな声まで聞えてくる。
三方に別れると見えた松明の群れは、地上を蔽うように

拡散したまま、炎の津波のようにこちらへむかってくる。追われる身には、地獄火のように見えたろう。
　だが、その炎の海よりも、一足早く、躍るような人影が見えたのである。
「なんだ、あの影は？」と、弥三郎は舌打ちした。「まるで、魔物のようじゃ」
　それが手斧をひっさげた韋駄天だとは、まだわからない。
「殿、これへ」
　ずいっと、十蔵が押し出す。
　その漁舟に飛び乗ろうとして、気があせっているから、弥三郎はどうと転がり倒れ、空舟は、ゆらりと、川の中へ流れでた。
「しまった」
　あわててつかもうとしたが、もう手がとどかぬ。
　すでに、そのときは、韋駄天の影は、十間ばかり先の小高いところへ来ていたのである。
「いかん、隠れろ」
　弥三郎はあわてて、葦の間に身を潜めた。十蔵もそれにならう。丈高く生い茂っているが、ただ身を潜めているだけでは、危険だった。
「居らんわい……」
　韋駄天が、肩で息をしながら独りごちるのが聞えた。
　雲つくばかりの巨漢だし、その右手の手斧は、一議なく弥三郎のほそ首を叩き斬るにちがいなかった。
　慄然として、弥三郎は、葦の中で、じりじりと後退(あとずさ)った。水の中に、腰を浸し、腹、胸、肩が没し、僅かに、首だけ出して、呼吸もほそくした。呼吸まで慮らねばならなかった。
「おう、どうだ、見つからんか」
　又次郎が、松明の群れの先頭に立って、漸く追いついてきた。
「うむ、そこら中を探してみなけりゃな」
「ヤッ、舟がゆくぞ、それ、舟が流れてゆく」
「人影が見えぬぞ」
「いや、中に伏せているのであろう、あいつを追え」
　ばらばらっと、矢が飛んだ。
　首が出ていることすら、心配だった。
　唇のあたりまで水に浸し、僅かに鼻で呼吸をして、弥三郎は岸辺の松明の群れを睨んでいる。
　十蔵もそれにならって、ときどき鼻を出しては呼吸し、夜気を吸いこんでは、顔を沈めた。
「——あの舟は、空らしいぞ」
　そんな声が聞える。
　矢が数本、舟を襲ったのだが、反応がないのを見ると、荒木兵庫が地団駄踏んで、
「火矢を放て」

と、喚いた。
　松明の火を移した矢が、闇を裂いて走った。
　二人は首を竦めて火の飛ぶのを見ている。ふっと、弥三郎は、そのさまを、
（美しいな）
と、思った。まるで他人事のように感じた。繊細な神経を持っている弥三郎だった。
　半ば水に消えたが、残りは舟に突き刺さり、あるいは舟の中に落ちて、炎が大きくなった。
「——やはり、無人舟じゃ」
「くそ、どこへ逃げたか、そこらの葦の中にひそんどるんやないか」
　又次郎がこう提案した。
「いっそ、葦に火をつけたらどうや」
「なるほどな」
「葦が燃えりゃァ、そこらに潜んではおへんよってに」
「そうだ、あたりが明るくなるしな……」
　ぱっと、松明の火で葦を薙いだ奴がいる。それにならって、みんな手あたりしだいに、火をつけはじめた。
（これは、たまらん）
　弥三郎はずぶりと、潜ると、静かに潜泳をはじめた。
　波音を立てると、気づかれてしまう。見つかったら、逃れようはない。火矢が、束になって襲ってくるだろう。
　だが、潜るには呼吸の限度があった。十蔵は伊豆の漁師あがりだから、かなり潜行できるが、弥三郎は、せいぜい三間ほどだ。
　息苦しくなって、頭を出して、息を吸って、また潜る。
　そのときちらっと見たのだが、すでに十蔵は数間先に、ぽかっと頭を出して、また沈んだ。このときほど、弥三郎は水練の必要を痛感したことはない。
（くそ！　奴だけが……）
　もし発見されても、十蔵はうまく逃げのびるにちがいない。そう思うと、怒りがこみあげた。死ぬのは自分だけか。呼吸をするために、頭をあげるのも難しい。
　葦が燃え、あたりが昼のように明るくなっている。だが、息苦しい。もうかなり遠く離れたつもりだったが、何度目かに頭をあげても、葦の火は、すぐそばに燃えていた。その頭が見つかったらしい。
「やあ、あそこだ、あそこだ」
「いた！　あれだ、頭が見えたぞ」「どこだ」「あそこだ、あそこだ」
　夜の川である。ちらっと見えたくらいでは、しかし確信はなかった。
「たしかに、黒いものが見えたのだが……」「ええい、しっかりしろ」
　火勢は夜風に煽られて強くなっている。放火した又次郎

や兵庫などが、その熱気に顔をそむけて、後退した。
「あっ、見えた！」
また、誰かが叫んだが、沿岸一帯、もう火の海になっていた。
せっかく炎であぶり出したものの、その火が逆にかれらを阻んでしまったのは、又次郎らの計算ちがいだった。
「くそ！　あいつらを、このまま逃がすのか」
「突っこめ、誰か泳いでゆけ」
怒鳴っている荒木兵庫も、熱風から顔を背向けているのだった。
こうなると、いかに韋駄天でもどうにもならない。岸辺で地団駄踏んでいたが、一方に走りだした。
燃える葦のはずれまで走っていって、川に飛びこもうと思ったのか。ところが、走っていった方向は河口だった。
暫くいって、やっと、それに気がついて、またひきかえしてきた。足の速いのは、たしかに韋駄天の名に背かないが、頭のめぐりは、あまりいいほうではない。
そうした騒ぎのうちに、弥三郎春忠と十蔵は泳ぎ逃れていたのである。
舟に乗って、駿河湾へ逃げだすのは一応、断念しなければならなかった。
弥三郎は向う岸へあがると、肩で荒い呼吸をしながら、唇を歪げて笑った。
「ふん、これで新九郎は、長蛇を逸したわけだ、な、十蔵」
「……」
「いまに思い知らせてくれる、余は、執こい男だ、蛇のように執こい男だ、十蔵、おまえも、そのことを忘れるな」
「忘れようと思うても、忘れさせはなさるまい」と、十蔵は、もうあきらめていた。「そのようなおまえさまに魅入られたのが、十蔵の不運だ、しかたはござらぬて」
「余が、また立ち上ったときは、おまえは、一ノ家来になる」
そんな希望が持てるだろうか、持てるかどうか、しかし、いまの十蔵には考える余裕はない。渦の中に巻きこまれてしまったのだ。あとは、落ちるだけ落ちるしかなかった。
「来い、こっちだ」
弥三郎は濡れたからだのまま急いで歩きだした。
葦を燃やす火とけむりが、夜をおどろに彩っている。弥三郎のような男には、その劫火にかえって生甲斐を感じるのかもしれない。
「どこへ？」
「黙ってついて来い」
弥三郎春忠が十蔵を連れて、その足で向ったのは、なんと長者屋敷だった。
「ここで見張っていろ」

もう十蔵が逃亡することなどは考えていない。
どうせ追われる身になった以上こそこそしてもはじまらない。逆に相手の裏をかいてやるという気持だった。
弥三郎は長者屋敷に忍びこむとまず、下人部屋へ近づいていった。石脇城の城主として、何度か来たこともあるのであろう。迷うことなく、家の内へ入っていった。
下人部屋へ入ろうとして、ふと思いなおしたように、隣りの棟へ行った。ここは女人部屋である。お末の水仕女や縫物をしたりする女たちが眠っている。
弥三郎が板戸をあけてすべりこんできたのに、誰も気がつかない。弥三郎は、一体、どこでこんなことを聞いたのか、入るときに板戸の閾に小便を流している。
静かに音を立てぬように、流して、それから、板戸をゆっくりとあけた。夜気の中に、尿の臭気が、立ちこめた。
弥三郎は、自分が流した臭いなのに、顔をゆがめ、早くその場を離れようとして、女たちのほうへ近よった。
闇の中で、寝息が聞える。弥三郎は手近の一人に近寄ると顔も見さだめようとせず、衾の下に手をさし入れた。女の腰のあたりである。
その手が、どこに触れたか、
「……」
女は寝返りをうとうとした。
が、それをさせない手が、そこを圧えている。その異常さに、女は眠りを破られた。
「あ……」
眼をあけた。べつの手が、口を圧えていた。
「うう……、うう、うう」
もがこうとしたが、股間にさしこまれた手は、微妙な動きで、女の心をとらえてゆく。やがて、そのもがきが、疲れたように動きをやめ、べつの動きに変っていった。
衾はほとんど剝がれて、女の着ているものは、前がはだけられている。
腰きりの肌着に、短い腰のものだけである。水仕の女たちの寝衣は、簡単だった。健康な乳房が、夜の底で息づいている。
あきらかに、そのあえぎは情感のそれだった。
このあたりでも夜這いは珍しくはない。もっとも長者屋敷だから、外部から入ってくる者はいないと思っている。
闇のなかで、女の眼は、大きく見ひらかれ、弥三郎の顔を見きわめようとしていた。いずれ顔見知りの下人が忍んできたと思ったのであろうか。
半頬と侍烏帽子をつけた弥三郎の顔はよく見えない。弥三郎は指を動かしながら、囁いた。
「およねの部屋はどこだ？」
「——あ……」
「声を立てるな。およねの部屋を聞いているだけだ」

声を立てなければ、教えることは出来ない。
弥三郎春忠は自分の言葉の矛盾に気がついて、鼻で笑った。自嘲である。
「案内しろ」
と、引き立てた。
むろん、女はかれが石脇城の城主であった弥三郎春忠とは気がついていない。ただの雑兵が忍びこんできたとしか思っていない。
石脇城とは距離にしてそれほどへだたっているわけではないが、所詮、内戦にすぎないという気持が、長者屋敷に眠りを貪らせているのであろう。
表と裏の門前に篝火を焚き、屈強の下人が数人、抜身の槍刀弓などで武装して見張っているだけだった。
戦さとなれば、誰の気持も荒々しく、殺伐になる。
落武者などの狼藉は常識だったし、勝者はまた、おごりたかぶった気持で、凌辱してまわる。その混乱が、第三者まで、便乗させてしまうのだ。
水仕の女などにしてみれば、見張りの眼をぬすんで侵入してきた〝荒武者〟という程度の認識だった。
「およねの部屋だ」弥三郎は、外へ出ると、また囁いた。
「案内するだけでよい、おまえには乱暴せぬ」
美女ばかり食い飽きている弥三郎である。女の好みは贅沢だった。
「……」
はい、と、おびえとともに、女は頷いた。
恐怖しながらも、およねのところに案内する女の気持のなかに、残忍な思いが動いていたのは否めない。
およねばかりでなく、長者の妾は、彼女たちから見れば、羨ましい存在だったのである。この武者が、何を考えているのか、女にはおよそわかる。確実なことは、およねの立場がなんらかのかたちで、〝変る〟ことだった。
案内してゆく間、弥三郎の手は女の口をふさいでいた。用心ぶかい男なのである。
別棟になっているおよねの部屋の前まで来たとき、弥三郎は、女を放した。
「騒ぐまいぞ、騒げば、余の家来がそのままでは置かぬ」
そのときになって、女は、この男がただの雑兵ではないことに気がついた。
「あなたさまは……もしや」
「弥三郎春忠じゃ」
もう隠すことはなかった。むしろ、かれがおよねを拉致したことが、新九郎にわかったほうが面白いと考えた。
「まあ……これは御無礼を」あわてて土下座しようとするのへ、「案じるな、城はすでに落ちた。落武者よ。はははは、だがまた盛り返してみせる。そのときは過分の礼をとらせるぞ」

それで充分だった。この女は、その期待で、弥三郎春忠に悪く計らわないはずであった。こういう女にしてみれば、今川家の跡目争いをするほどの存在である弥三郎に口をかけられたというだけで、感泣する。
まして、かれの指は、女の秘所をまさぐっている。それだけ、赤の他人ではなくなっている。
「ここにいます」
水仕の女はいった。
「ここで、見張っています」
忠義顔なのだ。弥三郎は冷たく笑った。自信に満ちた尊大な顔になっていた。
「よかろう、充分に心せい」
「はい」
「あとから取立ててやる」
誰にでも、こう言いさえすればうまくいくと思っている。
橋廊下になっているところの、入側(いるがわ)から入ろうとして、はっとなって、女の肩をおさえ、身を沈めた。
手燭の火明りが板戸にさしたのである。しわぶきも聞えた。老人らしい。こちらにやってくるのである。
二人は、その姿が闇の中におぼろに浮びあがったとき、
（およねの寝間に行くのか）
と、同時に思った。老人はこの長者屋敷の主(あるじ)小川法栄にまぎれもなかった。
長者法栄は馴れた足どりで、橋廊下を渡ってくると、入側を入っていった。
「ふん……」
弥三郎が鼻先で笑うのが、水仕の女には、大胆不敵な男らしいものに聞えた。彼女たちには、長者法栄は、生殺与奪の権を持つ、絶対的な存在だったのである。
「あの老齢で、何ができるのか」
「……」
「せいぜい、指だけであろうがな」
と言いながら、弥三郎の手はまた女の股間へ伸びた。それは的確に陰阜をおさえた。
「あ……」
「濡れている」
「……」
「あとから、いい思いをさせてやるからの」
お願いしますとはいえない。真っ裸になって、水仕の女は頷くばかりだった。男の指は二指が生き物のように動いている。女の部分に馴れた指の動きである。
女は肩であえぎ、弥三郎にしがみつこうとした。と、するりとそれをはずして、かれは身を起している。
「あとは、事が成ってからじゃ」
「は、はい……」
「見張っていよ」

濡れた指を半袖でこすって、弥三郎は法栄のあとをたどった。

法栄はおよねの寝間にいた。手燭を枕もとにおき、衾を静かにめくっていたのである。

およねは新九郎の夢を見ているのであろうか、その寝顔は微笑んでいる。

寝入りばなだった。戦さがはじまったときは、およねはむろん、寝るどころではなかった。

新九郎の襲撃が成功するかどうか、それが気がかりだったし、

（弥三郎に復讐できる！）

と、捨てられた女の一念が、妖しい焔を燃やしていた。

そのため、遠い潮騒のような合戦の声を聞き、石脇城が炎上するのを見て漸く、新九郎たちの奇襲が成功したのを知った。

一度に、気疲れが出て、ぐったりとなってしまった。

その寝入りばななのだ。法栄長者が衾をはぎ、襟をはいで、乳房に手を這わせているのにも、眠りから醒めようとしないのだった。

長者はどういうつもりか。伊勢新九郎という逞しい男が出現して、およねと枕を交したことは知っている。その嫉みもあろう。新九郎の行動性に、触発されたのかもしれない。

（――戦さは、寄手の勝ちじゃそうな）

（石脇城は陥ちましたぞ）

（弥三郎どのは、いずくへか落ちられた様子……）

などと、報告が入ってくるのを聞くうちに、かれは、およねへの関心が甦ってきたのだった。

長者は大あぐらをかき、女の手を、おのれのものに触れさせた。

むろん、およねはまだ、眠りの中にある。

その手が、だらりとしているのは、意思が働いていない証左だった。

「これは、どうじゃ……」

老人の筋張った手が、女の手の上から、無理に、ぎゅっと握らせた。

「うーん……」

およねは、眠りからさめかけた。手が逃れようとして、しかし、握らされたものの感触に、興味をおぼえたようだった。

「これ、久しぶりだの、ほれさ、およね……」

老人は腰をゆすった。

女の手はこんどは自発的に、握った、が、また、はなした。また握った。

しかし、夢うつつなのである。それだけに、感触は悪くない。

にもかかわらず、老人は一向にふるいたたないのだった。哀れに、腐った茄子のような、ぶざまな姿を見せているだけである。

「お、およね！　……」

老人の双の手は、双の乳房にあてられた。唇がだらりと弛み、たらたらと涎をしたたらせた。

顔を近づけた。涎が、女の顔にしたたりおちた。

「あ……長者さま」

ぼんやりと眼をあけて、およねは呟くように言った。

「そうじゃ、わしじゃ、新九郎ではない。ふふふ……」

法栄長者が、およねの裸身の上にかぶさったとき、板戸が開いた。

いうまでもなく、弥三郎春忠が入ってきたのである。

「ははは、よせよせ、その老齢では役立つまい」

「なに！」

法栄長者はふりかえって愕然とした。手燭の明りでは、一瞬、かれとはわからなかったようである。

「みっともないぞ、よしたがいい」と、くりかえした。「第一、およねは、おれの女だ。おれでなければ、快は得られぬ」

「弥三郎どのじゃな」

「落武者どのと言い直したらどうだ？　そう言いたいところであろう」

「城を致されたか」

「先刻承知であろ」

「……」

「ならば、何をしに余が来たかもわかりそうなものよ」

「――申されよ、銀か」

「それも一つ」

「他には？」

「およねだ」

まあ！　と、およねがはっきりとさめて、寝衣で肌を隠して身を起した。

「連れていってやる」

この男の言い方は、常に命令的であった。落武者となっても、一城の主の矜持を失わない。

長者法栄は、これにさからうことの無駄を知っていた。落武者となった場合、どれほど荒々しく、残忍な気持になるものか、多くの実例を知っている。

要求するものを渡すしかなかった。

（ほかに女は多勢いるのだし）と自分を納得させた。（およねなど、ずっとほったらかしていたのではないか）

なぜ、今夜になって興味をそそられたのか。

新九郎との関係が触発させたのだとすると、それは一時の激情にすぎないのだ。

だが、翁と呼んでもいい老齢にとっては、こうした激情

こそ、枯れたからだに、異常な気力を復活させるものだったはずである。

激発するところがなければ、女体に挑む興味さえ、もはやない。前にも述べたように、城主の側室だったという女を、おのれのものにする喜び、それも通常の恋情としては、埒を超えている。一度抱いてしまうと、あとは手もつけず飼い殺しにするというやりかたが、それを物語っている。

「連れてゆかれるがよい」長者法栄はぼそりと言って立ち上った。「銀は、いかほど」

「持ち重りするほどだ」

「よろしいとも」

「いや待て、砂金でよいな」

「……」

「同じ重さなら、金がよい。金をよこせ」

「金蔵までお出で下さるか」

それに頷いて見せ、弥三郎は、およねの腕をつかんで、引き立たせた。

「来るのだ。他国にいって可愛がってやる」

長者屋敷には何度も来たことがある弥三郎だったが、金蔵の所在は知らぬ。

それらしいものは知っていた。が、それは兵書（陸韜三略）の知識に拠るまでもなく、〝虚〟の蔵に過ぎない。

これほどの屋敷で金蔵がなければ、かえっておかしい。一応、それと見せて、多額の金銀は隠し蔵に入れているはずだった。

弥三郎が案内されたのは、むろん、虚の方である。

かれは黙って、法栄老人が差し出す砂金を受けとった。

「これだけか」

「これだけでござる」

ぬけぬけと言った。

老翁の顔というものは、嘘をつくのに都合がよい。皺が表情を隠してくれる。

「そうであろうな」

「……」

「ここにある分は、これくらいのものであろう」

砂金は錦の袋に入っていた。金は当時銀の四、五倍だった。

金や銅の産出が、そのころまで銀に比べて、割合に多く本邦では、銀を中国から輸入していたほどだった。金銅もしくは、その製品が輸出されていたのに比べると、銀が不足していた。

天文以降になって、銀山の開発や、輸入銀の増加を見て、安くなる。戦国末期には一対十、もしくは十二の比率になるのだが、当時は、その差が叙上の如くであった。

弥三郎が受けとったのは、子供の頭ほどある錦の袋、二包みにすぎない。

「東海に名を知られた小川法栄ともあろう長者の屋敷の黄金が、二包みか」

「……」

「おぬし、忘れているようだな」

「はて……」

「この屋敷はチト広すぎる。女の数もおぼえてはおるまい。同じように、金蔵がもう一つあることも忘れているとみゆる」

皮肉たっぷりに言う弥三郎だった。

老翁がどこまで、空とぼけるか、女性的な一面のある弥三郎の嫌味は、ねちねちと、周囲から攻めて追い詰めるやり方だった。

「はて、妙なことを仰せられるな」

と、逃げようとする法栄に、

「いいことがある。思い出すにはこれがよい。もの忘れしたときは頭に鰯を乗せて、三度あくびをしたらいいそうだが」

言下にさっと抜刀して、ぴたりと、白刃を法栄の首すじにあてた。

「鰯よりは効果があるだろうな」

「――ほう、ほう、なるほどな」長者もくせものである。皺深い顔が、にたりとした。「思いだしたわい、やっぱり鰯より効くようじゃ」

「案内しろ、手間どるな」

時間が経つと、家来たちが出てくるだろう。弥三郎は促して歩き出した。

隠し蔵は、老人の居間の地下にあった。

そこは一見、何の変りもない部屋に見えたのだが、どこかに触れると床の間の板が開くようになっていて、地下へ通じる梯子が見えた。

「ここじゃ」

法栄がそう示したとき、弥三郎は、うかと近づきかけて、はっと足をとめた。

あとから、まんまと翁の罠にはまるところであったと述懐したが、たしかにそのとき、かれが先へおりたら、その隠し板戸は重く、地獄の音を軋ませて、閉じられたに違いなかった。

「先におりろ」弥三郎は促してから、「そうだ、砂金を持ってくることだ、おれはここで待つ」

法栄がどこまで罠にかける気があったかどうか、わからない。あくまでも、かれの表情は老獪で真意をつかませないのである。

法栄は逆らうことなくおりていった。すぐに砂金を持って上ってきた。二つ、四つと、次々に持ってくる。一体、どれくらいあるのか見当もつかぬ。

「もうよいわ。われらでも持てぬ」

「左様かの」
「命びろいしたな」
「金で済むことなら、安い」
声もなく法栄は笑った。長者の笑いだった。
弥三郎は砂金の袋を、さらに大袋に入れさせた。一袋に五つずつ入れた。それを十蔵と水仕の女に担がせ、おのれは、小袋を一つ。用心深いかれは、身軽であることと、万一の場合を考慮したのだ。
「さあ、まいろう」
「どちらへ」
「ははは、どこかへ、さ。長者どの、舟を出して貰おうかの」
長者屋敷の水門から、掘割りが海へつながっている。小舟は暗い帯のような流れをすべりだした。
「丁度、潮がひきはじめたところでござる」
と、十蔵が言った。
「幸先がいい」弥三郎は頷いた。「これから、おれの運が甦る」
三人へ聞かせるためばかりではない。この男はそう信じているようなロぶりで、空を仰いだ。
（この小舟で伊豆へやれというのだろうか）
と、十蔵は不安に感じたが、そうではなかった。海へ出ると、かれは沿岸を東へ進むように命じ、
「途中で、手ごろな舟に替えるのだな」
と、こともなげに言った。
水仕の女まで連れてきたのは、その〝手〟のためであろう。おのれの野望のためには、誰でも利用する。当然と心得ている男だった。暗いうねりは、ときどき白い歯を剝きだした。
「雨になるかな」
十蔵があざやかに櫓をあやつりながら言った。弥三郎は応えようともせず、腕を組んで陸地に目をむけていた。石脇城は漸く火を消して、まだ煙だけが、むくむくと噴きあがっていた。

男の道

「勝った！」
「勝った!!」
新九郎たちの喜びは大きかった。寡兵よく一城を攻め落した凱歌だけではない。
今川館を攻められ、敗亡したかれらにとって、この勝利は、絶望からの救いであった。
「竜王丸の将来に光明が見えたぞ」
かれらは手をとりあって、喜びあった。
幼い竜王丸が、今川館に返り咲くには、歳月を必要とする。その歳月が、苦難に満ちたものになるか、人並みの暮しのうちに、他日を期せるものになるかどうか、それは一にかかって、流亡の日々にあった。
「この石脇城は、城としての欠点は少なくない。だが、工夫しだいでは鉄壁の守りにもなる」
と、新九郎は言い、翌日からただちに改築の工事に入った。
勝利に酔うには、新九郎は慎重だった。半生の経験が、それをさせなかった。
「城は城の機能を最大限に発揮することによって存在する」
という信念が、欠陥を無視させせないのだ。
かれは軍勢の〝力〟ということにすら、兵略の視点をゆるめなかった。当時の常識では、力とは、軍勢の多寡を第一義とする。
数さえ揃えば、戦さは勝つ、とされていた。いかにそれが誤った考えであるかは、これまでの多くの戦さが実証している。
特に、今度の場合はその実験的戦いとしても、特筆に価するものだった。
軍勢の規模が、そのまま戦力にはならない。力は、個々の熱意と気力体力の綜合点であるし、
「奇略によって、二倍にも十倍にも生かせる」
と、信じた。その奇略が生きるかどうかも、しかし、また〝人〟によるのだ。
かれにとって、兵力の充実とは、麾下士卒の訓育の如何にかかっていた。
「石脇城は新九郎どのの思うように手配して下さいまし」
と、北川どの も、ほっと愁眉をひらいて言った。

「竜王丸も喜んでおります。新九郎どののお力で、やがては、府中へ戻れることを」
「もとより、粉骨砕身、必ずともに、府中のお館の主にお据え申すであろう」
「それを楽しみに、この地で過しましょう」
「長者法栄も、力を寄せてくれるとのこと、城が完成するまで、長者屋敷で過されまするよう」
小川法栄には、また思惑もあったのだろう。
弥三郎にはひどい目にあったが、その痛手はこの長者の財産から見れば大したことはない。
新九郎が石脇城を支配するようになれば、弥三郎よりはずっとよい。
それに、
（北川どのは、悪くない……）
と、この老翁は目を細めた。
（——おれの城だ！）
新九郎は感激に胸をふくらませた。
小なりと雖も、城主である。
かれは石脇城の矢倉の上に立って、改築工事に働く人々を指示しながら、ふっと、来し方をふりかえることがあった。
青年のころに抱いた理想は、現実という木槌に打ち砕かれていった。
乱世にかぎったことではないが、殊に乱世は、非情そのものだった。
〝理想〟は、砕かれるために存在し、青年とはその現実に懊悩し、苦悶する時期の代名詞であることを、かれは知らねばならなかった。
青年だけが舐めねばならない苦味であろうか。
人生とは、もともとそういうものではなかったろうか。
それを悟ったのは、三十の声を聞いてからである。
いうなれば、人生は、カオス（混沌）にすぎず、青年とは、その凝縮の渦中に好んで投じられた期間をさすものだということを。
多くの者は、この坂をのぼりつめたところで息切れがする。
坂の上には、また幾つかの道がある。
新九郎に、人々と違ったところがあったとすれば、挫折が情熱を冷ますには至らなかったことだ。
「おれの手で成るものならば」
坂の上に立って、さらに、あらたな理想の鐘が胸に響くのをおぼえた。
すぐれた智才と膂力と、人生を直視してきたところからくる自信が、新九郎をその理想に駆りたてた。
京には応仁以来の戦乱の疲弊があった。ただの兵火と殺戮の修羅場というだけではない。

その劫火は人間の良心を焼き、兇刃は志を断った。
不信と悖徳と、劫掠と強姦と、飢餓と嗜虐とが、〝平安〟たるべき都を地獄にしていた。
政治の任にある人々は、混乱を鎮める意欲を失い、保身の逃避をはかるか、火事泥的な権力ぬすみに狂奔していた。
室町幕府そのものの腐敗堕落が、大乱を惹起した所以である以上、かれらに荒廃を救う意志のあろうはずはなかった。
新九郎が足利義視に仕えていたことは、前に述べたが、義視そのひとの頼むに足らぬこと知るとともに、京畿で活躍することに絶望して、伊勢にとどまったのである。
当時、すでに六十余州群雄の擡頭と兵火を見てはいたが、鳥羽志摩、東海地方は気候温暖、地味は肥え疲弊度が少ない。
かれが生涯の理想への段階として、この地を足がかりにすることを考えたのは、諸国の情勢に通じていたことを物語るものだ。
一介の牢人が、とにもかくにも一城の主となれたのは、身分階級のやかましい時代だけに珍しい。
「兵を養うには、まず、徳を以ってすることだ」
経験の積み重ねが、新九郎にそう教えている。
かれは失踪した鳥羽十蔵のことも、深く追求しなかった。
「所詮は、われら同胞とは違うのだ」
新しい友人に過ぎない。
それも新九郎に心服したのではなく、大道寺太郎らを助けた関係から同志に加わっていただけの男である。
弥三郎とどういう交渉があったか知らないが、今度のようなことがなくても、所詮は、そうした弱さを持っている以上、のちのちに禍いをもたらすにちがいなかった。
「去る者は去らしめよ。おれは気にかけぬぞ、大道寺」
「あのようなやつを、朋友にしたのは、われらが生涯の恥でござる」と、大道寺太郎はいきまいて、「又次郎は、海のかなたまでも追いかけて、十蔵首、ねじ切って来るなどと申しておるが」
「よせ、益もない。もしも又次郎が彼奴を発見できるとすれば、急ぐことはない」
「………」
「いずれ、逢うこともあろう」
「そうでしょうか」
「運命がな、引き合わしてくれる。でなければ、追うても追うても、無駄骨だろう」
新九郎の言葉には、人生の重みがある。
「そんなことよりも、この城固めが先だ」
「はあ」
「それから、兵を養う」
「その二つが成ったならば」

「安倍川を越える」
「おう！」
「府中へ攻め込もう。が、それまでは、軽挙すまいぞ、府中の軍勢に比べれば、われらは、十の一、いや三十の一がほどの微力だからな」
新九郎の脳裏には、兵制の構想が出来上っている。
まず、大道寺太郎らの腹心をおのれの下に置く。
すなわち、在竹兵衛、荒木兵庫、山中才四郎、荒川又次郎、らである。
この五人が士分で、一人に十人ずつの足軽を配す。十人の長には、牛次や、韋駄天や、その他、この度の戦さで、手柄をたてた者を配した。
山猫はかれらのところへつくのを嫌がって、
「あたしは、新九郎さまのお側さ」
と、言い張った。
「つとまるか、おれはきびしいぞ」
「なんでもするよ、男なんかには負けやしない」
「はははは、男勝りになることはないさ。女だからな。だが、女だから困る。おれも男だから、いつ手を出さぬともかぎらぬ」
「いいよ」きっぱりと山猫は言った。「新九郎さまなら、抱かれたいもの」
他人の目も平気な山猫である。かえって、まわりの者が、どぎまぎしたくらいだった。
「あたし、新九郎さまを好き」
「おい、よせ。人前でそのようなことを申してはならぬ」
「でも、好きだから」
それこそ、人目がなければ、抱きついてきそうだった。
勝気な気性だけに、思ったことをずばりと言うし、行動にあらわす。
行動せずにはいられないように、その四肢はたえず動いている。眼も凝っと静止していることがない。大きな眼が、いつも獲物を探すようにきらきら光っている。
「どうしてこんなに好きになったのかしら」
「はははは、気まぐれなんだな」
と、軽くあしらおうとしたが、山猫は真剣だった。
「そうじゃない。男に惚れたことはないよ」
「……」
「新九郎さまがはじめて」嘘の吐けない性分らしい。「男は嫌いだった。みんな嫌いだった。憎かった。好きになったことはないんだ」
生娘でないのは、からだつきでもわかる。
男を知らないとは言うまい。そのことは、しかし男を嫌いだということと、矛盾しない。暴力で犯されることもある。好きでもないのに、からだを開くこともある。
山猫の光る眼に、掬いあげるように見つめられて、女に

は馴れているはずの新九郎が、どぎまぎした。
「山猫、おまえは女たちの頭になれ」
牢屋に入っていた女たちと、かき集めた者など十二人ほどいた。
「いやだ」
「なぜ、いやだ、手当ても余分にくれてやる」
「新九郎さまと、二人きりになりたい」
言いながら、山猫の弾力のある肌はぴりぴり動いているようだった。若い女の体臭が匂いたつようだ。動物的な匂いだった。
野性の情熱がたぎっている感じなのである。男の力をもとめて、皮膚が反応を見せている。あえいでいる。
（面白いだろうな、この女と寝たら）
以前の新九郎だったら、すぐにも別の部屋へ伴ったろう。
一城の主となったいまは、やはり、その愉しみに溺れていられないのだ。
それほどに新九郎に惚れた山猫が、数日後に、姿を消してしまったのである。
「どこに行ったのか、かいもく、行方がわかりませぬ」荒木兵庫が焼津で聞きこんできた。「廻船にどこぞへ連れていってくれと頼んでいたそうで」
どこでもいい、できるだけ遠くへと言っていたという。
あの激しい気性の女がそういう気持になっていたとは。
新九郎は女の気持を思いやって、憐れんだ。
「それほどまでに……あの勝気な女がのう」
「兄貴が悪い。いや、殿のせいでござるぞ」
「なに、おれのせいだと」
むっとなって新九郎は兵庫を見た。
「はい、たしかに」
「馬鹿な！」と、吐き捨てるように言ったがすぐに、「そうだな、おれのせいだ」と、頷いた。
非を認めるのに吝かではない。
「おれが、もっと、優しくしてやればよかったかもしれぬ」
「左様々々、やはり、兄貴はわかりが早い。やあ、これは御無礼仕った。もう兄貴ではない。石脇の殿だ」
「言いなおさずともよい、二人きりのときは、これまで通り、血盟の仲だ」
「いや、それはいかん、いけませぬ。太郎や又次郎も、申していたが左様に仰せられるのは有難いがまことに嬉しいことでござるが、人間は狎れというやつがこわい」
荒木兵庫も、たまには、まともなことを言う。
「やはり、常々、申していれば、それがふいに出る。家来どもの手前もある。城主は城主らしくなされませぬと」
「城主は今川竜王丸だ」
新九郎はその気持を大事にしている。
名目人というだけでなく、この石脇城を保つということ

が、即ち、その意義の上に立っている。
　無位無冠の牢人者、伊勢新九郎長氏が城主で候といばっても、なかなか世間は納得してくれない。
　当時はまだ、肩書きや名誉を重んじる習慣から抜けきれていない。
　いかに幼少でも、今川竜王丸という名前が、存在価値を示すのだ。
　あくまでも、
（今川竜王丸の城）
　であり、新九郎は、その後見であった。あるいはその侍大将としての、意味があったのである。
　実質的には、かれの権限内にありながら、表面は、そうはいかないのだ。
（それも当分のうちだ）と、新九郎は思っている。（民心を安定し、人々の信望を得る！　その上にたって、おれの政治が、やがては、渇仰されるようになるだろう）
　新九郎には自信があった。
　だが、その第一歩から、山猫に去られたことは、痛手でもあった。
「お気づきにならんのか」と、兵庫は言う。「ただに、山猫を抱いてやらなかったためだけではない」
「と申すと」
「あちらだ」と、顎をしゃくった。「長者屋敷」
「む……」
「北川どのとの、な、ははは、嫉んでのこと。女心は、哀れなものだ。殿のせいとは、ははは、そのことよ」
　兵庫の言葉は新九郎をぎくりとさせた。
　山猫が去ったのは、ただに新九郎への想いの苦しさのみではなかったのだ。
（北川どののことを……）
　見られたのか？
　新九郎は、
（違う）
と、叫ぼうとして、いまさら否定してもはじまらないと思いかえした。
　その夜、北川どのと逢ったのは事実である。だが、寝たわけではない。北川どのから使いが来た。
「竜王丸どのの学問のことで」
という。
　今川家を継ぐにたる武将となるためには、武弁一点張りではならない。
　武勇は長じてからでもできるが、学問は、幼少から積み重ねなければならない。
　府中を追われての流浪も、この益津郡一円を確保した上は、学問の師などを、どこから招くか、それらのことに就いての相談だった。

が、それはあくまでも、表向きの理由であることを、新九郎は知っている。
（おれに逢いたいのだ）
　北川どのとも、ずっと、肌を合わせていない。熟れ盛りの女の男恋しさの気持は、眼を見ただけでもわかる。
　むろん、新九郎も、北川どのの肌に惹かれている。壮軀は、毎夜でも女体に焦がれて飽きない。
　それを愉しむ時を持たなかっただけだ。
　石脇城を支配するようになったいまは、しかし、かえって自由ではなくなっている。
（夢子は、竜王丸の母者人）
　うすうす二人の仲を知っている者もいるかもしれない。が、あくまでも、〝兄妹〟と、いうことになっている。
〝腹ちがい〟という詭弁でもって、万一の場合に逃げ道はこしらえているが、そうでなくても、内なる思いは、目や顔にあらわれる。世間を見馴れた者には、見透されているかもしれないのだ。
　それだけに用心しなければならなかった。だから新九郎は、長者屋敷の竜王丸母子の棟を訪れるときも、従者三人を引き連れていっている。
　山中才四郎と、足軽に小者である。むろん、馬上であった。山中才四郎も馬でつづき、足軽が槍を持ち、小者は馬の口とりだ。
　長者屋敷でも、堂々と振舞った。
　夢子との話も、見通しの利く部屋であり、たとえ、山猫がのぞき見したとしても、猜疑したり、嫉妬したりするような真似はしていない。
「妬んだとは、おれが見たくない真似をしたということか。何もしていないぞ、あのときは」
　新九郎はそう否定したが、兵庫は小首をかしげ、太い眉をひらいて、おどけた顔になった。
「あの女、すすどいゆえ、見ぬまでも見抜いたのでござろうな」
「心のうちを……」
　見抜かれたとすれば、しかたはない。
　女は感情の動物だ。殊に愛憎の心は深い。恋をすると、感覚が鋭敏になるというが、牝が牡をもとめる本能的なものが敏くするのであろう。
　新九郎は、山猫の、異常なほどの光を放つ眼を思いだした。
（しかし、かえってよかったかもしれん、あんな女にとりつかれたら、死ぬか生きるか、色恋さわぎで、身が保たなくなる）
　それも面白いかもしれないが、いまの新九郎は壮大な理想に燃えている。
　長年の夢に、やっと手が届きかけている。この機会を捨

てたくはない。
（男の一生の夢だ）
男として生れた意味を、女狂いの中に埋没する気にはなれぬ。
新九郎は、おのれの存在を、そこまで過小に卑下していない。
（おれがやらねば！）
天下有為の人物としての器量を持っている。その自負がある。
だが、世の中は思った通りにいかない。男が描く理想は、女のそれと常に両極を示すものだ。
女性にとっての幸福とはきわめて感覚的なことだ。大志を抱く喜び、理想に殉じる法悦など、女性には、みみずのたわごとにすぎない。
北川どのにしてみれば、ひとまず石脇城を確保した以上、ここで小さな倖せも得たい。いま北川どのの心を占めているものは、新九郎の愛情だった。
竜王丸が成長するまでは時間がかかる。これは気長くやるしかないことで、そのときを待っていては、北川どのは、女でなくなる。
（いま、ほしい……）
嵐をくぐり抜けて来た喜びを、新九郎の腕の中で、しみじみと味わいたい。男の臭いの中に溺れたいのだ。
新九郎が府中に来てから、一体何度、抱かれたろう。数えるくらいしかない。
それも、ただ抱かれ、口を吸われるくらいのことが殆どだった。肌を合わしたのは、数えるくらいしかない。お互いに立場があった。二人の仲を知られたら大変なことになる。新九郎に心服している者はいいとしても、今川の旧臣たちには許せないことだ。
〃今川の血〃
を重んじるかれらにとって、大事なのは、義忠の血をひく竜王丸であって、北川どの、すなわち夢子ではない。
夢子は義忠の子を生んだ。それだけのことだ。腹は借り物の思想である。
沢や、伊勢新九郎などは、竜王丸を府中の館へ据えることができれば、いくらでも代りは見つかる一人の武将に過ぎない。
その男が、竜王丸の母と深い仲だとなれば、心配になってくるのは当然だった。腹ちがいの兄妹と称しているだけに、尚更、罪は重い。
（気(け)どられてはならぬ……でも、逢いたい）
感情に溺れないだけの聰明さが、北川どのにはある。
新九郎との逢瀬を楽しみたい気持と、竜王丸の母としての恥しくない行動の矛盾に悩んだが、ある夜、男装をして、

秘かに長者屋敷を出た。
侍烏帽子を冠り、男小袖に短袴をはいて、刀をさした。細腰には、いささか刀は重かったが、万一の場合を考えると、刀を持っている方がいい。
長者屋敷を出ると、焼津の猪谷の社に向ったのである。
夏の空には月がなく、星だけが銀を散りばめている。頭上に大きく横たわった天の川を振り仰ぐと、彼女はふと京の夜を思った。
京で新九郎に抱かれた夜を思い出したのである。
初めて女になった夜だった。
やはり頭上に白々と天の川が横たわり、二人は草叢に寝て空を眺めていた。
その時まで、二人は兄と妹だった。
〃異母兄妹〃と称しているが、実は血がつながっていない。
新九郎の父は後妻を娶って間もなく戦さで討ち死にした。あと、その継母は再婚した。そこに生れたのが夢子である。
継母は新九郎を可愛がってくれたので、再婚した後でも、よく遊びに行った。
夢子に対する気持も、妹に対するそれと少しも変りがなかったのだ。
十年ほど二人の間に空白があった。
再会したとき、その美しく成長した姿に新九郎は目を瞠(みは)った。
だが結ばれるには、妹として接した記憶が邪魔をした。
それを克服するのに更に時が必要であった。
そのことは、夢子の方にもいえるかもしれない。彼女の方でも新九郎から兄のイメージを消すのに、時間がかかったのである。
新九郎には、まだ足利義視の家来としての野心があった頃だ。
義視を補佐して、将軍の座に据える。それが無意味だと判ったのは後のことである。
上洛してきた今川義忠が、ひと目みて夢子を気に入ったとき、新九郎は懊悩した。
（渡したくない……）
だが、夫婦になるには野心がありすぎた。
夢子の倖せを思うと、東海の雄今川義忠の側室になることは、否むべきではなかった。
義視の腰がふらついていたし、激動の京では明日の日も不安だったが、東海の今川の勢力は安定している。
（群雄が割拠しているとはいっても所詮小勢力で、今川家は揺るぎもしまい）
その安泰ぶりが夢子の倖せを約束しているように思われた。しかし理性と感情は相反することだ。天の川の流れる

夏の一夜、草叢で、新九郎と夢子は、初めて男と女になった。
あの夜の、ふるえるような感激を夢子は忘れることができない。
草むらには夜露がおりていた。が、冷たさは感じなかった。
戦乱の中でも、いや、それだからこそ、愛を交す喜びは深く、いのちの泉は涸れることを知らなかった。
夢子は、新九郎によって〝おんな〟になった。
冬の季節が長い山国では、初夏近くになって、一度に開花の春が訪れる。桃や桜や杏が一時に咲くように、夢子はその夜、はじめてにもかかわらず、女のよろこびを知った。
永い間、待ち望んでいたのだ。
その間に、充分、〝おんな〟になる準備がなされていたのであろう。
女が〝おんな〟になるのは、ただ性の行為だけではない。その行為によって、感性が目醒めるからである。
早熟な者ほど悦びを知るのが早いのも、その理由にほかならない。その悦びが深かったから、かえって、夢子は踏んぎりがついたともいえる。
「この思い出を抱いて……駿府へまいります」
一度の契りのゆえに、その思い出も美しい。
夢子は今川義忠の、
〝寵妾〟
となって、竜王丸を生んだ。
一説によると、竜王丸は、したがって新九郎の落胤だともいうが、そうではあるまい。
時代が少しずれる。竜王丸は義忠の血をひいていよう。
度々くりかえしているように、当時の権威主義、血統主義は、その辺のところが、非常にやかましい。
今川の一族の複雑さは、その権威と伝統の深さを物語るものだがそのやかましい一族や、宿老重臣たちの眼を誤魔化すのは、容易ではない。
義忠も、それほど愚鈍ではない。
夢子のことを新九郎の伯母だとする説などもあるが、それらのいろいろの点を考えても、竜王丸に関しては、義忠の血を引くと考えるほうが妥当であろう。
いま――
夢子は道を急いでいる。
天の川が頭上に流れているのは、十年前と同じであった。
違うのは、彼女が男装をしているということだった。
あれから十年――竜王丸を生んでいるし、十年の歳月は容赦なく彼女にも年輪をきざんではいるがまだ充分に魅力があるという自信は捨てていない。
今川義忠の寵妾としての生活が、容色に磨きをかけていた。

そして何よりも、新九郎を愛して信頼する心が、彼女を生々とさせている。恋の道は女性を美しくする道であった。
夢子は新九郎に抱かれ愛撫されることを想い、ひとりで赧くなった。
星が一つ、流れた。
南北朝の悲劇を伝える猪之谷神社は由緒があるだけに、竜王丸にとっても好意的だった。
夢子は、禰宜に頼んで新九郎との逢引の場を提供してもらった。
「内密の相談があるゆえ」
というと、禰宜はこころよく引き受けてくれた。
「よろしゅうございます。裏の部屋をあけておきまする。ご自由に使うてくだされまし」
あくまでも夢子と新九郎は兄妹ということになっている。
禰宜は疑おうとはしなかった。夢子の美しさに魅せられたように、顔を赧めてもじもじしていた。まだ若いせいもあったろう。
長者屋敷でも夢子と竜王丸を大事に扱っているし、社寺といえども、その保護下になければ存続してはいかない。
夢子は、この夜の大胆な行動に昂奮していた。
(今宵こそゆっくりと、新九郎さまに抱いてもらえる)
新九郎の男のものが女体の中心を貫くあの感動を思い出すと、歩みが止った。
夢子はおのれの胸を抱えるようにして、
「新九郎さま」
と小さく呼んでいた。
「夢子はいま新九郎さまのおそばにまいります」
あたかも目の前に新九郎がいるかのように、うっとりした眼をしていた。
八つになる竜王丸の母ということを忘れていた。夏の夜の闇は、彼女の夢をふくらませて、娘の時代に還していた。
こうして夜道を男装して逢引に行くなど、世の常の習慣からすれば、〝不倫〟のそしりは免れない。
が、夢子はすでに人妻ではない。竜王丸の母ではあるが、もはや後家なのだ。
寡婦である。男を求めて悪いということはない。
もしもそれを阻むものがあるとすれば、今川家という社稷の問題があるだけである。
それは道徳とは違う。身分の拘束のひずみ以外の何物でもない。
星空の下に猪之谷神社が見えてきた。こんもりと深い木木に包まれて、社殿が夜の底に眠っている。
いかにも二人の恋の逢瀬を待ち望んでいるかのように見えた。
(ああ、とうとう来てしまった)

まるで処女が男のもとに来た時のようなときめきであった。
　夢子がその提供された一宇に近づくと、
「北川どのか」
　男の声がした。
　頼もしく力強い新九郎の声に相違なかった。
「は、はい…」
　うつつに答えて、ひかれるように近寄る。
「北川どの、待ちかねた」
　誘いをかけたのは夢子の方なのである。その男の思いやりが嬉しかった。
「夢子と呼んでくださいまし」
　すがりついた。その肩に男の手がかかった。
　強い力で引き寄せられて、もうそれだけで、夢子はうつつになった。
「新九郎さま」
　乾いた唇があえぎ、そこに男の唇がかぶさってきた。
「夢子！」
　唇はそう呼んだ。
　男の激情が、唇を熱くしていた。荒々しく舌がすべり込んでくる。それを受け入れながら、夢子は、わなわなと震え、男の背に手を廻して、命の限りと抱きしめた。
「……」
　あの夜の草むらでの喜びが甦ってきた。
　昨日のように感激は生々しかった。
　夢子を抱きしめた男の手を、いっそう、大きく熱いものに感じたのは、新九郎自身がそれだけ成長したのか、感動のあまり夢子にそう見えたのか判らない。
　男のなすままになっていながら、ただ感激があった。
　それは男の強さ、やさしさを、全面的に受け入れることによって、しあわせを得ようとする女心の、率直さから来るものであった。
　男のからだが、夢子のからだに合わさった時、彼女の眼には涙がにじみ出た。それはあとからあとからと、盛り上り溢れた。激しいあえぎと共に、涙はこめかみを流れた。
（やはり私は……、新九郎さまのもの……）
　夢子は心の中で叫びつづけた。
　新九郎の熱く硬いものが、夢子との楔（くさび）となって二人をつないだ。
（もう離れない！）
　二所と離れない、このまま、いつまでも、いつまでも、この感激の中にひたっていたい。
　夢子のからだを女の血が流れている。昂ぶりがおのれを失わせていた。自分が今、どういう姿態になっているかも、意識になかった。
　男の手の導くままに、下肢を開き男の愛をひたすらに受

け入れる喜びに濡れていた。
　からだの芯から喜びの律動が起り、無意識に、彼女は声をあげるのだった。
　その女の喜びは、また男をも、感激させずにはいない。
「夢子！」
「新九郎さま」
「おお」
「新九郎さま、いつまでもいつまでも」
　なにをいっているのか、なにをいいたいのか、夢子は自分でも判っていない。
　自分の感激をこの溢れるような喜びをそのまま伝えたいと思いながら、思うように語句が見つからないのだ。
　その焦りが意味をなさぬ声となってほとばしり出る。
　二人のその声は、屋外にまで聞えていた。
　その声につられてきたかのように、その時建物に近寄ってきた影がある。
　まるで、灯を慕う蛾のように、その影はどこからか湧き近寄ってきたのである。
　一穂（いっすい）の灯が、二人のまぐわいを見おろしている。
　その淡い灯かげが洩れる隙間から、一心にのぞいている影は、小柄で、背がまがっている。
　もぞもぞと動いているのである。
　そんな影にのぞかれているとは知らず、新九郎と夢子は、歓を尽くしていた。
　夢子は、この夜の倖せが、いつまでも永遠の時間を保ってくれることを願い、男の腕の中で、甘美な悦びに浸っているのだった。
　新九郎の体力は、一度二度と重ねても、すぐに元へ戻った。
　男が一度のぼりつめるまでに、夢子の快感は、堰を切ったようにあふれて、度数もわからぬほど、歓喜をきわめるのである。
　新九郎には、はっきりと、その都度、わかった。明らかにあふれるものが、温かく、かれを包んでくる。そのたびに、夢子は、声を奔（ほとばし）らせた。
　自分がどんな声を出すか、そのときは、まるきりわからないらしい。
　全身がとろけ、五体が痺れる感覚が、彼女を幸福に浸すのだ。
　新九郎は、夢子が、そのまま狂ってしまうのではないかと思った。
　男のそれに比べれば、女のほうの快楽度は、数倍まさるという。
　たしかに、その狂喜ぶりを見ると頷けることであった。
　いつも澄ましている夢子の、そんな乱れた姿も、また新九郎の情感をたかめたのは、否めない。

新九郎も、夜の明けるのを歎じる気持で、愛撫した。
「明日も……逢いたい」
と、夢子は、黒髪を藻のようにゆらめかせて、甘える。
「逢うて下さりませ」
「そのように、毎晩では、誰かに見られよう」
「かまいませぬ」
「――竜王丸のことを思え」
「ああ……」
「竜王丸のことを思えば、気楽にかような刻を持つこともかなうまい」
「でも、夜ですから」
「いや、夜も昼も。そなたは見張られていると思わねばならぬ。好事、魔多し、じゃ」
たしかにそうだった。
世間は、竜王丸の母に、むしろ得度することを奨めている。寵愛をうけた恩を忘れずば、出家して義忠の霊をとむらえ、と強いるのである。
それが世間の常識というものだった。黒髪をおろそうとしない寡婦に、世間の眼はきびしい。
竜王丸を次代の今川家棟梁に据えようと思うからには、尚更だった。
「明夜は……駄目なのでございますね」
「自重したがよい」
「その次の夜は？」
「まだ早い」
「殺生な、わたくしは、もう、からだが火照って、火照って」
と、またすがりつくのだ。
外の影は、またもぞもぞと動いている。
「夜が明けぬうちに」
と、きぬぎぬの思いを熱い抱擁と口づけに見せて、新九郎は、腰をあげた。
「もう？」
と、怨じる女の顔に、娘のあどけなさが見え、新九郎は、また気が動くのを感じた。
「やがて、夜が明ける」
「つまらない……哀しくなりまする」
「竜王丸のもとへ帰ることだ」
「いや！　そんなこと仰有らないで」
「だが、そなたは、竜王丸の母者人だ」
「いやよ」
と、また娘のように身を揉んで、
「せっかく、楽しく、楽しい時を過したのに、そんな」
「これでいいのだ、楽しんだあとは、そなたは竜王丸の母親になる」
「……」

「また、時がくれば、逢えばよい」
「いつ？」
と、女はあえいだ。
その手が、そっと高鳴る胸をおさえている。胸のふくらみが、息づいている。
新九郎に抱かれて、夢子のからだは〝母〟から〝女〟になったようであった。
「いつ……逢って下さいます」
「用心せねばならぬ。急くな」
「でも、逢いたい……」
なろうならば、もう一度抱いて下さいまし、そう言いたそうな唇であり、眼であった。
黒々と濡れた眼には、思いのたけがこめられていたし、その唇には、新九郎の肉体を含んだ余情が淫らなばかりの弛みを見せていた。
「いずれ、こちらから、使いをだすゆえ」
「はい」
「待っているがよい。他の者に気どられてはならぬ。竜王丸の将来に関わることだ」
「はい」
漸く、説得が利いて、夢子の肉体の炎はおさまって来たようであった。
「なるべく、暗いうちに帰ることだ」
新九郎はもう一度念をおして、戸外に出た。
茂みの陰にうずくまった人影には気がつかぬ。
新九郎が、神社の森から出たころあいを見はからって、夢子も出た。
と、ふいに、その影が背後からおどりかかったのである。
「あ……」
小がらなわりには、敏捷だったのである。
夢子は腕をつかまれて、悲鳴をあげた。
「これ、静かに」
と、抱きすくめようとする。
「あ、放して！　無礼な、お放し」
「夢子どの、わしじゃ、わしじゃ、そなたのすること、すっかり見たぞ」
嗄れたその声は長者小川法栄にまぎれもなかった。
(見られた……)
かっと、からだが熱くなった。
羞恥の感情は人によって違う。
夢子の場合、ことにはげしい。育ちのせいもあるが、この駿河に来てからも既に十年近い。太守の寵妾として多くの男女にかしずかれ、優雅な生活を送っただけに、その挙措はいかにも京の上臈らしい気品がある。
人間の感情などは、環境しだいでどうにでもなるものだ。裸を露出しつけていると、肌の感覚が鈍くなり、羞恥感

を失ってくる。
新九郎との情事を、覗き見されたと知ると、恥しさで全身がかっと熱くなって、目がくらんだ。
足の力が抜けてそのままくずれかかった。
「ふふ、よかったの」と、法栄長者は囁いた。「この老齢（とし）になると、なまなかな事ではセガレが役立たぬでの」
「……」
「そなた様の、あの声、あの狂いよう、ああたまらぬ」
「ぶっ、無礼な」
「左様、無礼は承知の上じゃ。それだけそなた様に想いを寄せているこの老人を哀れと思わぬか」
「そんな事……」
「不憫と思わぬか、の、の、憐れんで下されや」
駿府の山西一帯の大地主で……長者……の名をほしいままにしている老翁が、こうまで哀を乞うのだ。
普通の女なら、男の言葉に負けてしまう。
事実、夢子も抵抗をなくしかけた。羞恥と不安とで混乱して、何もかも投げ出してしまいたい気持になった。
長者は小柄だが腕は強い。乱世の中で、これだけの富豪になるには、やはり、相当以上の悪辣なことをしてきたに違いない。手もからだのわりには大きく、握力も強かった。
夢子は腕をつかまれ、背後から抱きしめられて、乳房を押えられると、振りほどこうとする力が、全身から抜けるのを覚えた。
長者の熱い息が、襟足にかかった。
「やっ、何をしてござる」
背後で驚きの声がした。
「これは無体なことを……」
その声にはっと我にかえって、夢子は悲鳴をあげた。女性の本能的なものであろう。現われた第三の男が誰であるかより、少なくとも、この場を救ってくれるもの、と思った。
その叫びは、長者を狼狽させたのである。長者としては、誰にも見られたくない醜態なのだ。やにわに男装の夢子の腰から刀を引き抜きざまに、背後の男を斬った。
したたかな手ごたえがあった。さっと生温かく血がしぶいた。
悲鳴とともに、血が、ぱっとかかった。
その男が、長者だと知って気をぬいたところだったにちがいない。
長者とたたえられる法栄の老齢では、まさか、そんな行為に出るとは誰も思わない。
もっとも、ひそかごとをのぞき見することも、その昂奮のあまり、情事に濡れた女にとびかかることも、この老翁が、異常に若い気力を持っていることを物語っているわけだが、第三の男には、それがわかっていなかったのだろう。

それに、老人自身は刃物を持っていなかったのだ。
咄嗟にひき抜いたのは、夢子の刀である。
なまじ、万一を慮って男装して来たのが、思わぬ結果をひき起してしまった。
ざっ！　老人は背後の影を夢中で斬ってから、
「あ、しもうた！」
と、舌打ちした。
手ごたえは、充分すぎるほどだった。
ざくっと、やられて、血を噴いて倒れたのは、なんと、この神社の禰宜だったのである。
「ちょ、長者どのが……」
斬られながら、なおも不審を残しているように、禰宜は、手をあげた。
それは、救いをもとめているというよりは、おのれの眼耳のふたしかさを、感触で確かめようとするかに見えた。
片手が、突っ張って、長者のほうにのばされ、まさぐるように、二、三度動いた。
長者も、夢子も、呆然となっていた。
「……」
長者の狼狽は、殊にはなはだしかったようである。
虚ろな目になっている。手に下げた刀から、ぽたっぽたっと、血がしたたり落ちている。
動乱を利用して、他人の田畑を奪い、おのれの土地を増やしていっただけに、その過程にあっては、殺戮も少なくなかったろうが、長者と呼ばれるような男は、めったに自身では手を下さない。
人を殺したり打擲したり、あるいは怯やかすにしても、それらの危害を加えるには、ほとんど、人を使嗾する。
おのれは危険に近寄らない。精神的にも苦痛をおぼえない。
血をかぶったり、人に恨まれるのは、愚かな輩下なのである。
手を汚さずに、非道を行って、おのれ一人、肥えてゆく。こうした長者にとって、自ら、人を斬ってしまったということは、大きな衝撃だった。
「しもうたわい……なんということじゃ、くそ！」
手の血刀がうらめしい。
それに、血の中で苦悶している禰宜の姿は、もはや助かりようがないことを、あらわしていたのだ。
呆然としているところに、足音が聞えてきた。
「——何ということだ。長者どの、この場の仕儀は……」
こう声をかけたのは、新九郎だった。
悲鳴を聞いたように思って引きかえしてきたのである。
長者法栄は、振りかえろうともせず、呆然として、禰宜の苦悶を見おろしている。
「ああ、新九郎どの……」

我を忘れて、駆け寄ろうとした夢子を、新九郎は目でおさえた。
夢子としては、すがりつき、男の強い腕で抱きしめてもらいたいところだった。
新九郎の目まぜがなかったら、夢子は、節度なく、男の胸に飛びこんでいっていたろう。
「禰宜を斬ったのか、長者どの」
「……」
「見れば、刃物も持たぬようだが、相手が無手なのに、斬ったのか」
「——は、はずみじゃ」
やっとの思いで、長者は言った。
「はずみだと？」
その事の真偽はどうでもよかった。
新九郎には、この殺人の結果が長者法栄にどうひびいているのか、そのことのほうに興味があった。
こんな場所に、この時刻、長者があらわれていること自体が、不思議なことだった。
（こやつ、夢子を……）新九郎には、その見当がついた。
（おれたちの情事をぬすみ見たのか！）
夢子が尾行されたにちがいない。男装が、かえって、興味を呼んだのかもしれなかった。
新九郎は、かっとなった。が、すぐに、この男は冷静をとりもどしている。
「どうなさる、おつもりだ」と、冷静に言った。「長者が禰宜どのを斬った……これは、みんな面白がる話でしょうな」
「……」
「長者の人殺し……はははは、いままでは、随分と、悪いことをなされたであろうが、いつも、他人の手を汚させて、おのれは綺麗でいられたわけだが、もはや、そうもなるまい」
「き、斬る気はなかったのじゃ」
「居直り強盗なども、たいてい、そのように申すらしい」
「ほんとうじゃ」
「だが、死んだ。まだ死んではおらぬが……あと小半刻も保つまい」
「殺す気ではなかったのじゃ、ただ、ふいに……威されたゆえ」
「威すとは？　長者は一体、何をしていたのだ、ここで」
「……」
「北川どのに無体をはたらこうとしたのだな」
「ゆ、許せ」
「社人のほうで、騒がねばよいが」
僧門では、いわゆる荒法師の僧兵などが組織されるように神社でも、社人たちが結束して強大な勢力を持っている。

鹿島、香取の社人から塚原卜伝など、兵法（剣術）の名人が出たことはそれを物語っている。
いかに長者でも、僧兵や社人を敵にまわしたくはない。
石脇城との関係でも、敵でもなく、さりとて領民というわけでもない。
あいまいなかたちをとって、拮抗してきたのである。そのために私兵を貯えていたのだ。
だが、武士を相手の場合は、まだ、単純でやりやすい。
一応、〝士道〟というものが、ある。
源平時代の歌に托した心情の吐露など見てもわかるように、後世の士道とは少し違うが、ともかく、武士であることの一つの規制がある。
だが、僧兵や社人となると、全然違ってくる。
その背後にあるのは宗教だ。信仰の有無は、それぞれ深浅があるとしても、敵はすべて、仏敵であり、邪神であり、精神と風土の所産である呪術的な要素が入ってくる。
それが長者には迷惑だった。
宗教の力というより、宗教に偏した集団の力というものの恐ろしさをよく知っている。
それに比べれば、武士の集団など、きわめて、御し易いといっていい。
「——どうなさる」と、新九郎は冷たく言った。「社人を相手に、戦さをなさるおつもりか」
「そ、それは……」
「神罰を蒙って、五体が砕けるか腐り肉となるか、狂気となるか……いずれにせよ、神罰は免れますまいな」
「な、なんとかなるまいか、のう、新九郎どの」
長者が、哀れな一人の弱々しい老人になっているのだった。
「北川どのに、理不尽なふるまいをしたらしいな」
「い、いや、その、わしの心のうちを伝えて、その情けを……」
「たわけな」新九郎は、蹴倒したい思いで、足がむずむずした。「われらのことを盗み見していたのだな、長者」
「それは……」
「見たか」
「うむ。おてまえ方は、兄妹だと申したが……」
「腹ちがいの兄と妹だ。悪いか」
「……」
「どうだ、長者、ここで禰宜の仇討ちをしてやってもいいが」
新九郎が刀に手をかけると、長者は、あわてて、血刀を捨てた。
「め、滅相もないことを、わしは、おぬしと、斬り合う気はない」
「そうか、では今夜のことはなかったことにするか」

「そう願えれば……」
「おぬしが見たり聞いたりしたことも、すべて夢。悪夢と思え」
「悪夢……なるほどな」
「禰宜を斬ったのも、悪夢だ。おれも見なかったことにしよう」
「た、たのむ」
　ほっとして、長者は、その場にへなへなと坐りこんだ。
（斬ってしまえばよかったかもしれぬ）
　新九郎は、あとから思った。
　長者法栄が信用できぬせいもあったが、万一の場合、夢子の立場を慮ると、あの場で決断すべきではなかったかと、振りかえられるのだ。
　法栄がしかし、どのくらい衝撃を受けたか。
　その衝撃の深さが、逆に新九郎と夢子の秘密を保ってくれるようであった。
（早い時期に夢子と竜王丸をひきとらねばならないが）
　しかし、城へ入れるとなると、いざというときに、危険が生じる。
　石脇の城は伊勢新九郎が守っているといえば、まず、城攻めの兵は、かれ一人を目標にしてくる。
　そういう意味では竜王丸の名を表面に出さないほうがよい。
（成長なさるまでは）
　おれが敵を引き受ける。その肚裡だった。
　範満にとっては、竜王丸が生存していることは、目の上の瘤で気になってしかたがない。
　折あらば、竜王丸と夢子を、抹殺しようと思っている。
　その矛先を、
（そらさなければならぬ）
　自分を的にする。
　新九郎はそうすることで、範満をひきつけ、逆に叩き潰すこともできるのだ。
　その際に、竜王丸と夢子をオトリにされる恐れもあった。オトリとしての有効度は、新九郎との親密さにある。
（いっそ、断絶したかに見せるか？）
　それも一法だと思った。
　断絶していれば、オトリにはならないし、範満としては、また別の手を持ってくるかもしれない。
　つまり、新九郎を懐柔するのが容易だと思うに違いなかった。
「それも術だな……」
　新九郎はそう考えた。
　竜王丸にとって、唯一無二の忠臣ということであれば、
　範満も、力攻めでほろぼすまでは安心できない。

だが、竜王丸と離反しているならば、三者鼎立ということで、様相が変ってくるのだ。
　新九郎は、その方向に進むことにした。
　山中才四郎が、
「竜王丸ぎみの御身辺に、もっと侍を配すべきほうが」
と、提案したときも、
「その必要はない」と、斥けた。「この城を固めるほうが大事だ」
　として、裏山に小径をつけ、要所に見張り小屋をたてたり、虚空蔵山の上に、〝海上見張り〟としての烽火台を設けたりした。
　海上からの侵攻の兵船があれば、烽火をあげてただちに石脇城へ知らせるのである。
　義忠をはじめ、今川家代々の供養なども、一切、新九郎はとり行おうとしなかった。義忠の命日にすら、顔を出さないのである。
　その年が暮れ、正月になっても竜王丸に賀正にもゆかぬ。
　これは、この国の上下の慣習からすれば、重大な意味を持つ。
「新九郎めは、竜王丸と断ったようじゃ」
と、範満は、駿府の今川屋形で、盃を含みながら言った。
　いうまでもなく、範満は、益頭郡に細作を放っている。
透破と呼ばれる、サグリの者である。これは、場合によっては、放水や、盗みや、殺人など、乱破にも変じることがある。
　こうした者たちの報告が、その離反を裏づけたのである。
「――すると、新九郎は、いよいよ、牙をむきだしたということでございますな」
　腹臣がしたり顔に言った。
「牙というより、爪であろう。竜王丸に尽くすがごとくに見せて、おのれの足場を築く」
「乞食牢人のやりそうなことよ」
「したが、石脇城ほどの小城で何が出来るものか」
　一人が笑いとばそうとした。
「いや、足場にはなろう」長老が白髯をしごきながらその笑いを打ち消した。「ああいうやつは、押しが強い。なまなかのことでは、手を引かぬ。死んでも喰いつくというやつでの。甘くは見られぬ」
「しかし、石脇城は」
「いや、石脇だけで満足するやつではないということよ。ここは一つ、充分に考えねばならぬ」
　竜王丸に忠実であるなら、その狙いはわかっている。今川の椅子を奪うという一点にすべてが集約される。
　目的が判然としていれば、対策も講じ易い。
　まず、竜王丸の成長までの期間がある。
　その間に、充分、範満は地盤を築くことが出来ると思っ

ていたし、いよいよとなれば、〝乱破（ラッパ）〟をして暗殺させればよい。
ただし、そのことは、最後的な手段だと思っていた。
というのは、やはり、世間ではまだ、血統や世襲にこだわっている。
それは、とりも直さず、
〝竜王丸さまが、太守たるべし〟
という気持にほかならないのだが、ただ、民衆の声というものは風にそよぐ葦のように、範満の圧力の如何で、右にも左にも揺れるのだ。
竜王丸が正しい継承者だと見る者が少なくない以上、その竜王丸を暗殺することは、範満にとってプラスとはいえない。
痛しかゆしということであった。それが新九郎と離反したということになれば考えを変えねばならない。
（新九郎の考えがわからぬ……）
石脇城を足場にして、天下を狙うか。
今川家を横領するということはまず、難しい。範満でさえ、傍系だと見られて困難があるのに、一介の、氏素姓も知れぬ牢人が、いかに智慧才覚があるといっても、この東海の覇者になれるとは、考えられない。
それが当時の常識であった。
新九郎は一見、欲も得もなさそうに、茫洋としている。が、時々光る鋭い眼は、尋常の男でないことを物語っている。
（底が知れぬ……）
範満は一族や家来の前では歯牙にもかけないような顔をしているが、肚裡の中では、
（彼奴は、おれの終生の敵になるかもしれぬ）
と、懸念していた。
人間は、理解によって心の平安を得るものである。新九郎という男の目的が、どれほどあって、その人間の可能性がどれくらいか。
そういうことがわかれば、それなりの対応策がたてられる。つまり、敵を〝識る〟ことで、おのれは、それを上廻る。
ところが、相手の性根や、内奥がわからないかぎり、手のうちようがない。底が知れないというのは、無気味なことであった。
（竜王丸から手を引いたということは、石脇城を拠点にして、野望をとげる心算であろう）
そう推測はした。が、確信が持てなかった。
範満は透破の耳次を呼んだ。
「耳！」
この男を呼ぶときは、いつも、廻廊に耳欠けの壺を出しておく。

高さ一尺ほどのもので、片耳が欠けている。青磁の壺である。
この中に、丁銀や粒銀を入れおくと、どこからともなく、耳次はあらわれる。
夕刻である。
〈――参上仕りました〉
耳次の声がした。
「頼みがある」
と、範満は姿を見せて、うずくまった影を見た。
耳次は平伏している。
この男は、顔をあげない。土を舐めるように、小さくなって、範満の指令を聞いた。
「新九郎の考えをサグれ」
「は……」
「新九郎めの目的は奈辺にあるか、それを知りたい」
「は……」
「竜王丸と断った真意じゃ。おのれが今川家を乗っとる所存か、あるいは……山西一円のみならず駿河半分を望んでいるのか、その辺をよく見きわめよ」
「かしこまりました」
そのままの姿勢で、するすると、身を退き、耳次は消えた。
範満は、銀のことを言おうとして、呼び止めかけ、壺の中を見た。
銀子はとっくに消えていた。
三日ほどたってからだった。
急に春めいて梅花が一せいに咲きほころびた道を、女輿が宇津谷峠を越えてきた。峠には木戸が出来ている。
新九郎の命令で、木戸には常時三名配置されていて、時時見廻りにゆくのが荒川又次郎の役目だった。
又次郎が山へのぼってゆくと、白衣に緋の袴の巫女風の女が木戸の前で押問答をしているところだった。
「これは、荒川さま」
と、足軽が救われたように声をはずませて、
「丁度よいところへ」
「どないしたのや、その女性は。どこぞの巫女と見ゆるが」
「それが……」
と、説明しかけたのを、
「申し上げまする。私は府中の文殊堂の者で、天殊さまの先触れにまいりました」
「天殊……」
ああ、れいの女か、と又次郎は頷いた。
「その天殊がどこへ参る？」
「石脇のお城へ」
「ふうん、何の用や」

「直々に、伊勢新九郎さまへお話し申し上げたいことがございまして」
「――殿は御多用やで」
「是非ともにと、天殊さまが」
「お目通りかなうかどうか、わからぬがな」
「そこをまげて」
「おれには、何ともいえへんで」
　又次郎は、じろじろと、巫女を見た。
　若いし、可愛い顔をしている。
（悪くないな）
と、思った。
　そんな又次郎の眼を何と思ったのか、巫女は真摯な表情になって、
「――神のお告げでございます」
「神の？」
「はい。されば、天殊さまは、是非ともにお伝えしたいと」
「書面では、成らんのかいな」
「お直々でなければ」
　神とかホトケとか言われると、そういったものは否定したい気持がありながら、やはり弱い。
「それほどまでに言うのんなら、取り次がんわけにもいかんやろ」又次郎は足軽をふりかえって、「足長を起せ」
と、言った。

　木戸の傍に小屋がある。草葺きだが、風雨に耐えるようにがっしりと出来ている。
　夜昼、見張るための休み小屋で、足軽が入ってゆくと、韋駄天が、寝そべって、白昼から酒を飲んでいた。
「おい、御用だ」
「城へか」
　残り惜しそうに大瓢箪を放して、身を起した。イザというときには、城へ一っ走りする。そのほかのときは、酒を飲んで寝転んでもいいといわれている。
「おい、韋駄天、こいつを持って行け。殿へお手渡しするのやで」
「おう」
　又次郎がさらさらとしたためた手紙を割り竹にはさんで手渡すと、韋駄天は身を翻した。
たちまち、風が韋駄天をさらった。
　韋駄天が石脇の城へ着いたかと思われるころ、その女乗物は、峠に姿をあらわした。
　陸尺は屈強の男であるが、付き従う巫女数人はいずれも薙刀の鞘をはらい、袴を裾みじかに穿いている。
　神に仕える巫女の姿としては、異様なものだが、何しろ乱世だからしかたはない。
　ほかに小荷物を持った小者が四、五人ついている。これは着替えや化粧道具、それから食糧などであろう。

　当時は、二、三日の小旅行でも、食糧、寝具持参が普通である。交通の不便な時代で、道中というものが、後世に考えるよりも、はるかに困難だった。
「天殊さまのお着きでございまする」
　巫女の一人が、木戸で申し入れた。
　又次郎は、小屋に入って、韋駄天の残していった大瓢箪から酒を汲んでいたが、
「着いたか、女狐が」
と、呟きながら出てきた。
「これこれ、まだ木戸を開けてはならん」と、足軽を制して、「いま、お城へ使いの者が走った」
「……」
「返事が間もなくくる。入れてよいかどうか、その返事しだいやねん」
　又次郎は腕を組んで木戸の前へ突っ立った。
「まあ、何という冷たいお言葉」その巫女はぷっとふくれて、「天殊さまですよ」
「わかっとるがな」
「天殊さまに、木戸をお突きになりますか」
「天殊であろうと、天子であろうと、おれの役目は、これや」
「お前さまは、天殊さまと、新九郎さまが、どのような仲か御存知ないゆえ、そのような返事をなさる」

「さよか。おれは、殿とは同胞（はらから）やで」
「……」
「うぬらの仲よりも、ずんと深いよってに」
と、又次郎は、袖まくりして、ぬっと腕を突き出した。
「この腕がよう知っている」
「それは……」
「見んかい、この傷を。お互いの血をすすりあった仲や」
「……」
「血盟しているのや。うぬらのような女狐が何と申そうと、われらの仲にくちばし差しはさめるの段やない」
　これには、巫女も、黙らざるを得ない。
　又次郎にしてみれば、ただの主従ではない。
　その問答を聞いていた天殊は、輿からおり立った。
「供の者が失礼を申し上げました。わたくしは、これにて御返事をお待ち申しまする」
　艶然と笑いながら、こう言われると、又次郎は狼狽した。
　天殊は去年よりも、若がえったように見える。
　不思議な女であった。
　むろん、いまでは範満の女として、その保護を受けて、文殊堂で祈禱したり、天文を案じたりしている。
　天下がどう変っても、為政者の交替が行われても、こういう女は、一向にこたえない。
　巧みに、世の中を渡ってゆく。

天性の媚を、からだ全体にあふれさせている女であった。
　又次郎が役目に忠実に、天殊の木戸を突いたのだが、天殊が、これにこたえたふうがないのを見ると、かえって、狼狽した。
「待つか、それならばよろし」
「はい」
「殿のお許しがあれば、拙者が案内してやるさかい」
「はい」
　素直なのである。
　女狐という先入観があるのだが、こう素直に出られると、又次郎は抵抗感がうすれてくるのをおぼえた。
（美い女や……）
　年齢がわからぬ。そこに妖しさがあった。
　あの女は、十年来、少しも変らぬ、という者がある。十年も前から府中にいるのかどうか、それすら判然としない。ただ、男の眼には、奇妙に魅力なのは事実だ。
（あかんな、あんな女に惚れたらあかん）
　荒川又次郎は、想いをふり払うように、頭を振って、そこらを歩きまわった。
　天殊は、峠の景色を眺めるような顔で持参の餅をつまみながら、ちらちら、又次郎の様子を見ている。
（――男って、他愛ない……）
　又次郎が、自分の美貌に惑わされて、胸をおどらせている様子が、天殊にはよくわかる。
　男を誘うに馴れた女の感覚である。どういう表情をし、どういう仕草で、男たちが気を惹かれるか、胸を高鳴らせるか、手にとるようにわかるのだ。
（もしも、新九郎どのが、逢わないといったら……）
と、天殊は次の手を考えていた。
（あの男を誘って……）
　次から次と、頭のまわる女だった。どんなことがあっても、絶望するということがない。
　自分には文殊菩薩がついていると、信じこんでいる強さだった。文殊の化身と思うことで、非常識な態度もとれるのである。実際に、頭がよくまわる。
「荒川さま……」
　記憶もいいのだ。名前を忘れていない。
「荒川さまは、私をどうお思いになる？」
　こう言われて、また又次郎は狼狽した。
「どうとは？」
「文殊菩薩の化身だと思いませぬか」
　陰では（女狐めが……）などと悪罵していても、面と向って、こう言われては、男は弱い。美しい女だと思っていただけ、弱いのである。
「さ、それは……」又次郎は口ごもった。「なんとも申せぬ」

「ほほほほ、仰せられて下さいませ」
「――弱った」
「私には、私のことはわかりませぬ」
「……」
「でも、世間では、文殊菩薩の化身だと申しまする」
「さよか」
「なぜかしら」と、天殊は小娘のように首をかしげ、にこりとした。「先のことがわかるからかしら」
「……」
「明日のこと、一年先のこと」
「ほう……予見するか」
「わかりまする。たとえば、新九郎さまが、いま、どんなお顔をなさっているか」
「……」
「天殊が来たか。こう仰有いました」澄ました顔で、天殊は、おごそかに言う。「それならば、拒むことはない、すぐ城へ案内せい……と」
「こやつ、たばかったらあかんで」
　愚弄されているなと思って、又次郎は、眼を怒らせた。
　甘い顔を見せたので、つけ上りおって、という気持だった。単純な男だけに、すぐ、腹をたてる。
「いいえ、これがわたくしの耳に聞えてまいった新九郎さまのお声です」
「……」
「韋駄天よ、早よう、返事を持ってゆけ」
「……」
「そう仰せられています」
　又次郎は声を失っていた。自信に満ちた顔で言われると、かれは反撥する材料を持たない。
（なに、この女狐めが、何を言うことか）肚裡の中で反撥した。（くそ！　いまにわかることだわさ。韋駄天が戻ってくれば、すぐにわかる。この女が、何と申そうとも、答えは出るわけだ）
　たしかに、その答えは出たのである。
　ほどなく韋駄天が、長い脛にものを言わせて、駈け上ってきたが、
「すぐにお城へ案内せよとの仰せだ」
と、伝えたのである。
　又次郎は、あっと、息をのんだ。返事が出来なかった。
　天殊は、木戸越しにこれを聞いて、にこりとした。
「――ね、申し上げた通りでしょう」
「う、ううむ」
「ほほほほ、天殊には、わかるのでございます。さあ、荒川さま、御案内を頼みます」
　又次郎はもう言いなりになるしかなかった。
　たしかに、新九郎は、

「通せ」
と、言った。
が、天殊のいうように、待ち望んだわけではない。
まず、新九郎が感じたのは、
(範満の意をうけてきたな)
と、いうことだった。
東雲之助ともあやしいし、範満とも関係がある。これは、間違いないと見ている。
府中の今川館が範満の手中に帰した以上、いっそう、天殊が範満に接近したであろうことは疑いをいれない。
(おれをサグリに来たのであろう……それならそれで)
逆手を使ってやる。まず、近づけて、真意を逆に吐かせてやる。新九郎はそう思ったのだ。だが、待っているうちに、天殊の肌のことが思いだされた。
(ただの女としてみれば……悪くはない)
ただの女でないところが、興味をひくのだが、この興味は、下手をすると、嚙みつかれるおそれがある。
(ひとつ、阿呆になってみせるか、その上で、女の出方を待つ……それもいいな)
女の方で、安心すると、固い鎧も、自ら脱げてくるものだ。
新九郎が、とつおいつ思案しているとは知らず、急坂をおりてきた輿は、城の近くにくると、容儀を正して、三ノ郭の木戸にさしかかった。
「府中よりまいった天殊どのや」
と、先導役の又次郎は、足軽に顎をしゃくった。
「開けろ」
「は、只今……」
すでに、新九郎の方から、達しが来ている。
木戸を開けると、
「乗り打ちでかまへんよってに」
すっかり又次郎は、天殊の扱いが変っている。
天殊の方でも、それが普通のような顔で、
「御苦労でした」
鷹揚に会釈して乗り打ちする。
二ノ木戸、一ノ木戸と通って、本丸へ入って、漸く、天殊は輿からおりた。
本丸の——後世なら天守閣にあたる本櫓の広間で、天殊は引見を許された。
「——お久しゅうございます」
「よく来た」と、新九郎は、笑みを湛えて天殊を見た。「あの夜、以来だな」
「はい」
「落城の夜……」
「見苦しいところをお見せいたしまして」
「忘れた」

と、あっさり新九郎は言った。
「ところで、本日は、何の用だ。ゆるりとしてゆけ」
「忝けのうございます。お懐しく存じまして、ついこちらに足が向いたのでございます」
(嘘を吐け)新九郎は、眉毛に唾をつけたい気持だった。
饒舌らせておけば、どこまで嘘を吐くか。それを見きわめるのも面白い。
「懐しいのは同様だ」と、新九郎は受けた。「だが、それだけではあるまいが」
「……はい」
「本心を申せ」
「はい」
「懐しさが嵩じて抱かれたくなった? それが本心であろう」
「御明察」女も、したたかである。「でも殿、そのようなことは、お人払いの上で、申されませ」
怨じるような、哀しげな眼で、ちらりと見る。色っぽい流し目である。
(こやつ……天性の娼婦だ)
虚々実々というが、こうなると色気に屈服したほうが負けである。
「はははは、なに、人払いすることはない、いずれも、おれの同胞よ」
山中才四郎、大道寺太郎らは、これを聞いて、にやりと顔を見合わして頷いた。
「抱かれたくば、抱いてやる。が、その前に、用向きを申せ」
「はい、申し上げます」
天殊は、またあの生真面目な表情になり、懐中から数珠を出すと、手にからめて、目を閉じた。
全く、神仏混淆である。何でも有難そうな恰好をしてみせる。それが、また、当時の民衆には効くのだ。
何しろ学問といえば、坊主か神官くらいにしかない時代だ。一般人は、教養のつけようもなく、知性のみがきようもない。
そういう時代では、神や仏の力は、まことに偉大なものだった。その〝化身〟と称するのだから弱い人々は、ただ、ひれ伏すしかない。
「——殿には、牛馬の相があらわれておりまする」
「牛馬……なんだ、それは」
「はい。禍牛福馬……方向は東西でございます」
何のことかわからない。もっともらしい顔で、天殊は説明した。
「東は、殿には凶」
「うむ、なるほどな、範満のいる府中は東、つまりは凶。それはわかるが」

「東より牛がまいれば、禍いでございます」
「牛が？……」
「それも、一頭や二頭ではありませぬ。数頭が……」
「ふうむ、牛がな、東からな……凶事を運ぶか」
「かすかに火のいろが見えまするが……」
「読めた」ぽんと膝を打って、「範満めが火牛をもって、宇津谷峠をぬき、攻め落とすか」
「さあ、それは」
「いや、そうに違いない。なるほど、されば、われらに凶じゃ。よくわかったぞ。それを知らせにまいったか」
「はい。範満どのがどうとかは私にはわかりませぬ。でも、新九郎の殿を凶事から救うために」
天殊の言葉も、表情も真摯だった。
（どこまで、嘘を吐く気か）
新九郎は、瞞されたような顔で、天殊の言う言葉に耳を傾けている。
（天性の娼婦……生れつきの嘘吐きだな）
嘘吐きの最たるものは、人を瞞す前に、まず、おのれを瞞す。おのれが、おのれのつくり出した嘘を信じてしまう。嘘に酔うのだ。
そのとき、その言葉は真実めいた重みを持ってくる。常人なら、たいてい、九分通り瞞されてしまう。
新九郎はそれくらいでは、瞞されない。
（巧妙な嘘を構築するものだ）
と、呆れるような気持で見ているのだった。
「東からくる牛が凶だというのだな」
「はい」
「西からくる馬が福だというわけか」
「そのように……顔相に出ておりまする」
「馬がなあ……」そんなことがあるかないか、新九郎は信じたくない気持が先に立っている。「まあいい。その吉凶を信じるとしよう」
「……」
「今宵は泊ってゆけ」
「よろしゅうございましょうか」
「好きなだけ、いよ」
「わたくし、陰陽の術を使いまする以上、その成否を知るまでは、滞在しとうございます」
「ふむ……何日だ」
「わかりませぬ。両三日のうちか、十日か、一年か」
「ばかを申すな。そんなにいられては困る」
「ほほほほ、冗談でございます。両三日……」
「それで、吉凶が判然するか」
「多分……そのしるしがなければ、二度と、かようなことは口にしませぬ」
「ほう、大きく出たな」

それならそれで、面白い、と思った。
その夜、新九郎は天殊に手も触れずに過している。むろん、同室ではなかった。
が、天殊のほうでは、
（私の魅力で、きっと……）
新九郎を籠絡できるとおもっていた。それだけの誘いを出している。眼や表情や、身ぶりや……充分に自信があった。
（きっと、お出でになる）
と、おもい、与えられた部屋で凝っと待った。
灯りをつけっ放しにし、夜のうすものに着替えて、夜具の上で坐ったまま待った。
足音がしないか、新九郎が声をかけたら、何と答えよう。どのような姿態で、恥じらいながら、顔をそっとあげる。そんな動作までやってみた。せいぜい、しおらしく初々しく見せよう。天殊のその緊張は虚しかった。
夜はゆるやかに刻をきざみ、そして、訪れる者もないまま、しらじらと、明けた。
「福が馬に乗ってくるか」
と、新九郎は笑った。
どうせ、いい加減なことを言うのだろうと思っていたが、三日目になって、天殊があきらめて、出てゆこうとしたときに、その〝福〟が舞い込んできたのである。
その朝まで、新九郎は揶揄していた。
「福の馬など、あらわれぬ、いよいよ、天殊の眼も曇ったらしいのう」
「はい、自信を失ってまいりました」と、しおらしい顔になって、「この様子では首をくくらねばなりませぬ」
「ほう、殊勝なことを申す、そのきれいな首をくくるのは勿体ない」
「……」
「目くらましは七日と申す。七日たてば、目くらましの、いかさまはばれるというが、そなたのは三日で性が割れたか」
「お恥しゅうございます」と、うなだれてみせたが。「でも……まだあと三刻がほどは……」
「三刻に望みをつなぐか」
「はい……」
その三刻ののち——福が馬に乗ってきた。
いや、福かどうかわからないが、馬がやってきたのである。
それも、三十頭ばかりの良馬が、西の木戸へあらわれたというのだ。
「三十頭の良馬が!?」
まず、山中才四郎が耳にして驚いた。

「なんだ、その馬は」
「はい、馬六と申す馬喰が曳いてきましたので。なんでも伊豆の韮山へ運ぶ途中だとか」
良馬と聞いて、目の色が変るのは、当時の武者として当然のことである。
「それがどうしたのだ」
「はい、なぜか、木戸のところまで参りますと、腹痛をおこしましてな、七転八倒の苦しみで」
「ふうむ」
「小屋に寝かせて、水などくれてやり、どうやら、少々おさまった様子でございますが」
〝禍牛福馬〟の話はみんな聞いているから、良馬三十頭、と見ると、
（さては福馬か）
と、思ったのは無理はない。早速、報告してきたわけだ。
才四郎は新九郎のところへ飛んできて報告した。
「まいりました福馬が」
天殊も馬喰のことを聞くと、ぱっと憂色がはれて、
「それに違いありませぬ。腹痛など、いと易いこと、治して進ぜましょう」
陰陽師はまた医療に就いても、力があることになっている。
天殊は馬六にどのような術を施したか、たちまちに、病いが治ったとみえ、馬六は礼を述べて、こう申し出たのである。
「もはや死ぬるかと思いました。ここで命を救われたのも、御縁でございましょう、御領主さまへこの三十頭、寄進仕りまする」
話が出来すぎている。現代人なら、直感的にそう感じるところだが、この時代の人々は素朴である。
神通力――今日でいう超能力を大半が信じようとする。生活が不安定だと、人は、何か特別な力を望むようになる。
天殊のような女は、いわば、その善良で弱い人々の心を利用して、のし上ってきたのである。
新九郎のように、広く世間を見てきた者には、そのいんちき性がわかるのだが、一般には、盲信する者も少なくない。
「やはり！」
と、手を打つ者が少なくなかった。
「天殊どのの言葉通りじゃ」「馬がのう、西からのう」「ほれ見ろ、わしが申した通りではないか、天殊どのの予言は当るとな」
急にそんなことを言いだす奴もいる。
馬六と名乗った男は、子供のように小作りで、素走っこい目つきをしていた。
「良馬三十頭、お役に立てて下さりますか」
「くれると申すか」

「お役に立てて下されば、進呈致します」
「いかほどだ、安いなら買おう」
良馬三十頭とは、いわば、三十騎の武者を傘下におさめたにひとしい。
因みに武者一騎は、雑兵二十人もしくは、五十人に換算される。
当時、良馬は銭を出したからといって、容易に買えるものではなかった。運送ということが困難なのだ。
良馬は誰でもほしい。おのれの領内を集団で通れば、たいていの権力者が、手を出す。購うか、否定されれば、力ずくで奪う。そういう時代である。
新九郎は大いに喜んだ。天殊のお告げがなくても、これは吉報であった。
正当な値段でと申し入れたが、馬六と名乗る男は、
「銭は要りませぬ」
と、言う。
「なに、タダでくれるというのか」
「いいや、タダではありませぬ」
「………」
「馬だけでなく、この馬六めも御奉公仕りたい」
「ほう、そちが」
「馬六めは役に立ちまする。それに、進呈いたす以上、三十頭がいかにお役に立つか、この目で見届けねば」
なるほど理屈だ。
おのれが手塩にかけて、立派に育てた馬匹となれば、その取扱いぶりが気になるのも当然であろう。
「よかろう」と、新九郎は、その条件をのんだ。「たしかに三十頭と馬六、そちをおれが麾下にするぞ」
「私もこれで、生きのびました」と、天殊は喜んで、「漸く、府中へ戻れまする」
陰陽師にとっては、予言が当ったとなれば、それが勲章でもある。
天殊は意気揚々と帰っていった。
三十頭の良馬を得て、石脇城内は昂奮した。武者たちにしてみれば、名刀、名槍を得たにもひとしい。
「殿、あの馬を一頭、それがしに」
「殿、是非にも、やつがれに一頭を」
「殿よ、てまえの馬は、もはや老いぼれましたなれば」
などと、次々と申し込みがある。
在竹兵衛や荒木兵庫などは、はじめから、馬を選んで、
「この馬は、拙者にふさわしいゆえ……」
「ウマが合うと申すがな、この馬と身共は、ぴったりじゃ。ほれ、身共を見て笑うておる」
それぞれ、あの手この手で、気に入った馬を獲得しようとする。
新九郎は、その申し出を検討した上で、それぞれに与え

た。
かれらが、その馬によって、勇躍することで、新九郎の勢力は一段と増した。
数日のち、新九郎は、石脇城の大手で馬揃えを行った。
一種の閲兵式である。
武者たちは、それぞれ、自慢の鎧に身を固め、磨きあげた刀槍を帯し、手入れのよい馬にまたがって、大手前に群れ集った。
法螺貝の合図で、次々とあらわれて、床几による新九郎に一礼してゆく。
「おう、見事だぞ、才四郎」とか「又次郎、旗差物がいささか重げだぞ」
一々に、声をかける。
それが、いかなる言葉であっても、この場合、激励になるのだ。
武者たちが一巡すると、今度は、戦場の駈け引だ。
法螺の一吹き一吹きで、あるいは馬を走らせ、あるいは、長槍をふるって突っこみ、あるいは、突然、馬首をかえして、引き上げにかかる。
その素晴しい動きに、新九郎は目を細めた。
（――城は出来た……）
その第一段階がすぎたいま、
（兵馬を養うこと、これだ）
この精強の兵によって、かれの理想はおしすすめられる。
一人の武者は、十人の武者を生む。
（いまに、この武者どもの旗差物によって駿河の山河は埋められるだろう）
新九郎は殆ど、酔ったような気持だった。その耳に、こう問いかける声が聞えた。
（この武者どもを、どこへ進められまするぞ？）
（――敵はいずれでござる？）
その声は、囁くように問いかけた。
ふっと、新九郎は夢の中へひきこまれるような、陶然としたものを感じ、
「敵か……」
（はい、どの城を？）
「攻めるとか？」
（これだけの武者あれば……）
「そうだな……」
誰が話しかけているのか気にならない。
ならないということは、すでに新九郎、半ば夢心地になっていたわけだ。
あとから考えてみると、その声は大道寺太郎のようでもあり、荒木兵庫のようでもあり、荒川又次郎かと思えば、そのようでもあった。
かれらには、それぞれ、声に特徴がある。

似てはいない。にも関らず、そのように感じたということは、その声が、わざと似せたか、新九郎の耳を、鈍くしたか、何らかの奇妙な手をつかったのにちがいない。
（攻める？……）
どこへ攻めよう。
新九郎には、まだその考えはない。
城を完成した上は、領内の整備が先であった。
人心は乱世で荒廃している。まずその民衆を安堵させる。
生活の安定が先だった。
今川家の勢力は、たしかに、他国に比べれば、強大だったし、民衆は、安心して、家業にはげむことはできた。
が、義忠の横死以来、急激に不安になってきている。
それに何といっても、府中（現在の静岡市）は安倍川の東にある。
西のほうは、宇津谷峠以西を山西といい、同じ駿河ではあるが、府中と、それにつづく東の方とは、安定感が違う。
いざとなれば、府中は、西からくる敵を、宇津谷峠で邀え撃ち、さらに安倍川を外濠にすることもできる。
ということは、山西は、その犠牲になるということだ。
その不安がある。
法栄長者などの勢力が、山西一円に強力なのも、一つには、そのことがある。
弱い人々は、常に頼るものをもとめている。
農耕民族は、外敵に対して弱い。法栄長者は、いわゆる武家集団ではないために、たとえば、遠州三河の方から外敵が侵入してきても直接、敵対はしない。
いかに乱世でも、民度の安定が得られなければ、生産が出来ず、侵略の成果は得られないのだから、こういう土地の者の協力を、侵略者はまた望むものである。
新九郎はそれをよく知っている。
「――どこの城も、おれは攻める気はない……」
と、新九郎は答えて、はっとなった。
「誰だ？　そちは」
振りかえってみた。
「……」
耳のそばで、誰かが言ったはずだった。
が、誰もいない。
少し離れて、小姓や近習がいる。大道寺太郎も馬からおりて、木の下につなぎ、汗を拭いている。
かれではないし、ほかにも、質問をした様子はない。
（おれの耳がどうかしたか？）
幻聴だろうか。だが、会話を交したのだ。
（夢を見ていたのだろうか）
と、思った。
白昼夢ということがある。ほんの僅かな時間、ふっと、夢を見る。

しかし、それとも違ったようだ。
陽ざしがきつく、馬が巻きあげる草埃りが、けむりのように、遠く雑兵たちをかすませていた。
この馬揃えが、伊勢新九郎という存在を象徴するものである以上、もはや、〝大名〟といってもよかった。
厳密には小名というべきであろうが、この時代、大名の定義は後世ほど、明確ではない。
いかなるかたちであれ、家来を持ち、城を持ち、領地を持てば、大名である。
身分や地位が、〝力〟で象徴される時代が来ようとしている。
空疎な身分や、不安定な地位よりは、着実にそれらを具備した者が、信頼を寄せられ、声望を得るのは、きわめて自然な成りゆきである。
(おれは……酔っているのか)
新九郎は自問した。
それは反省を含んでいる。
若くして成り上った者ではない。人生とは苦しみであること、矛盾の中に人生が存在することを知る年齢になっている。
小成に甘んじるには、新九郎は青春を遠くに過してきていた。
(酔うものか、これくらいのことで)
まだ、漸く、第一歩を印したばかりではないか。
これからが、
(伊勢ノ新九郎が、男として、これから歩きだすのだ)
その出発点といっていいいま、小成に酔ってはいられない。
そう思って、新九郎は、しゃんと、気をひきしめ、床几から立ち上ろうとした。
そのとき、頭上の楠の梢にするすると、黒い影がすべったのを、誰も気がつかない。
大声をあげて、馬を走らせる数人の武者のうち、一騎が馬首を突然こちらへむけると、勢いよく疾走してきて、十間ほど手前で、ぴたりと止めるやぱっと飛びおりた。
在竹兵衛であった。遅れて走ってきた供の者に大槍を預けると、新九郎の前へ草摺を鳴らして、近寄ってきた。
片膝ついて、一揖し隻眼をあげた。
「殿、げに爽快でござる。それがしの武者ぶり御覧ぜられたか」
「はははは、見たとも、東海一の武辺と見うけたぞ」
兵衛の稚気をほめてやると、
「髀肉の歎をかこっていたものじゃ、どこぞへ攻め寄せましょうわえ」
「城攻めか」
ぎくりとした。

さっきの幻聴と思ったのは、その言葉を予兆してのことだったのだろうか。
新九郎は、異様な気持に襲われた。
「はい、城攻めでござる」
「む……」
「これだけの精強の武者あれば、小城の一つや二つ踏みつぶすに、手間ひまかけぬぞ」
「……」
「殿、武者は武辺であってこそ、武者でござる。ただ、いたずらに馬を駈けさせても、何の役にも立ちませぬぞ」
「わかっておる」
「この勢いをもって、手近の城を攻めましょう」
「……」
「殿の御下知あれば」
「待て」新九郎は、床几から立ち上った。「おれは城攻めは、まだ時期ではないと思うた」
「へえ、それはまた何として」
むっとして兵衛が片膝おこすのへ、
「おれの夢は大きい」
「……」
「小城の一つや二つとったところで何になる」
「し、しかし……」
「それを足がかり、手がかりと申すのであろうが、そういう心映えは、下手をすると、小城攻めの狂い者となる」
「はあ」
「早い話が、美い女にめぐり合わぬとて、手近のつまらぬ女と、ナニしてみよ」
「こりゃまた、何を仰せられることか」
その、呆れた顔ににやりと、新九郎は笑って見せて、
「醜女の深情けということを知らぬか」
「はあ、それは知ってはおるが」
「同じことよ。望みは大きく持て。いま小さな城をとったところで、うぬら五人が分けられまい」
「――なるほど」
隻眼に納得の色を浮べて、兵衛は頷いた。
こういうほうが、この男たちには、一番わかり易い。
「まず、平等にわけてくれよう。されば、小城を六つ、攻め陥さねばならぬ」
「なるほど、なるほど」
と、兵衛はまた大きく、合点した。
「そんな手間をかけるよりは、望みは大きく持って、天下に目をむけることよ。兵衛、われらが血盟したときの気宇は、そうではなかったか」
「たしかに、当時は」
「いまも変らぬ。それが男だ。尻の穴を小さくしてはなるまい。その大いなる志の前には、小さな欲を出すまいぞ」

「……」
「うぬが、いま三人力と申すなら十人力になるまで力を養え。この武者揃えが十倍になったときがおれの采配が動くときと心得よ」
　この新九郎の言葉は、当時の力からすれば破天荒なほどだった。大言壮語である。が、新九郎の口から洩れると説得力がある。そう遠い話ではないような気になる。
「まず、両三年」
「そりゃ、また、いつのことで」
「……」
「五年後と思うておけ」
　その言葉を、あの〝影〟はまた耳にしている。

野望

　馬六に扮した耳次が、その情報を府中へもたらすと、
「五年、と申したか」
　範満は頷いて爪を嚙みはじめた。
「五年……のう」
　右手の拇指から嚙みはじめて、食指、中指、と順々に嚙んでゆくのである。右手が済むと左手になる。順ぐりに嚙んでゆくので、見ていると、一本も飛び抜かすということがない。
　両手の指を嚙みおえたので、話しだすかと思うと、また、もとの右手の拇指へもどった。
（なんじゃ、最初からやり直しかい）耳次は、呆れた。（下手な考えは休んでいるのと同じだそうな……）
　焦れったさを感じたが黙っていた。平伏していて耳次は、爪を嚙む極く小さな音を聞いているのである。
　衣の音がした。廻廊で、範満は立ち上り、歩きだした。

　耳次を平伏させたままである。そのまま、どこかへ行ってしまうのかと思うと、曲りかどまできてまた戻ってきた。考えがまとまらないらしい。
　やがて、足が止った。
「耳！」
　と、呼ぶ。声にいらだちがある。
「馬三十頭を購うて、漸くに得たのが、それだけか」
　耳次は平伏したまま、顔を左右に振った。
「申し上げたのは、これまでのところ……新九郎の考えを」
「わかった。が、明日はどう変るかわからぬ」
「はい」
「当分、奴のもとを離れるな」
「はい」
「おれに言わせれば……」範満は急に渋い顔になった。
「きさまのその情報は、良馬一頭分の価値しかない」
「さ、それは……」
「二十九頭分の仕事をせい、たとえ、二年かかっても、三年かかっても、だ」
　範満はこれだけ言い捨てると、板戸のうちへさっさと入っていった。
（二十九頭分か……）耳次は、声のない笑いを洩らし、つと立ち上った。（ふん……明日のことがわかるものか）

　明日のことは――
　新九郎にしてもわかるはずがない。
　ただ、かれには理想があった。
　その理想は、小さな野望ではなく、大きく、天下を動かし、長年つづいてきた貴族武門政治の価値転換をはかり、農民も連雀（行商人）も漁民も、山賤ですらも、静かで日日を安堵して暮してゆけるというものであった。
　その理想のために、戦さをしなければならないなら、やむを得ない。が、おのれの精強を誇るため、手近の城へ攻撃をかけるということなど、夢にも考えない。
（いかなる理想も、その基盤がゆらいでいては、成らぬ）
　新九郎は、一応の武力を得ると次には、領内の人心の収攬をはかった。
　いうまでもなく、財政の源は、当時農作物が殆どである。小物成りもあるが、これはかなり変動が多かった。
　駿河のみならず東海地方はいうまでもなく、南に海を控えていて海産物が多い。凪ぎがつづくと、漁師はうるおうが、時化になると、収入も減る。したがって新九郎のところへ届けられる分も減少するのである。
　農作物は〝土地〟が算出の基準になり、その比率は当時〝六公四民〟が常態であった。
「情けぶかい領主どの」

といわれるには五公五民にしなければならない。

新九郎は施政にあたって、これを、

〝四公六民〟

にした。英断である。領民たちは、感泣した。

「こんなことははじめてじゃ」

「ほんとうかえ、反対ではあるまいか」

「地頭どのがはっきりと申されたぞ、書き付けも見せて下された。たしかじゃ、間違いない」

民衆にとっては、天下の情勢がどう変ろうと、大したことではない。問題は、誰が領主になり、どのような政治をしてくれるかだけである。

新九郎の政治は、春忠の暴戻のあとだけに、一層、領民に喜びをもって迎えられた。

「四公六民とは、思いきったことをなされましたな」

大道寺太郎が、顎髭をぼりぼりかきながら言った。

「大丈夫でございますか」

「何が」

「どこの大名でもまず六公四民でござるによって、その比率はつまるところ、大名家の賄いにはそれだけ要るということで」

「そうではないぞ、太郎」新九郎は笑いを含んで静かに言った。「大名だけが贅沢に馴れ、土と泥にまみれて生きている者たちのことを思わぬからだ」

「……」

「同じ人間と思うてみよ。立場を変えてみよ。一ト晩に二升酒を食べ酔うことで六公四民なれば、酒を二合にすりゃ四公六民でよい」

「そんな無茶な」

「何が無茶だ」

「二合では足らぬ。舐めたくらいで」

「それなら、うぬの刀を質に入れろ」と言ってから、哄笑した。「二合でも毎晩のめるだけ倖せではないか、ものは考えようだ。領民の暮しが楽になれば、城の暮しも楽になる」

「そんなものでございましょうかな」

「そうだ。ところで、聞くがな、うぬの刀は質に入れるだけの名刀か？」

「刀でござるか、はあ」

大道寺太郎は、妙な顔をした。

大きなからだをもじもじさせて、刀に手をやったが、

「大したものではござらぬ」

「ほう、自慢できぬほどか」

「はあ……槍ならば」

刀よりも槍に力を入れるのは奇異ではない。どちらかといえば槍の方が尊重された。

馬上から武者が腕をふるうのは最初は槍である。

槍はまた、長く重いせいもあったが、平時には槍持ちに担がせて供に連れ、その鞘に贅を凝らしたりして、おのれの武勇を象徴する。

そのために槍には力を入れる。

だが、槍だけでは、むろん、最終的には、戦さのしめくくりにはならない。混戦になれば、長い槍は使えない。

大刀と小刀の使いわけも、その必然性がある。鎧通しなども、きわめて、武者鎧に対して合理的に作られている。

「ナマクラな刀を持っていては、おれの輩下としても名折れになる」

「はあ、それは、もう……殿が、名刀を下さるので」

「いや、おれは余分には持たぬ。春忠の刀箱にも、存外ろくなものはなかった」

それなら、どうしたらいいのだと、問い返すような太郎の目だった。

「刀鍛冶だな。領内の鍛冶を探して集める」

「なるほど」

「領内だけではたるまい。されば近国より、連れてくることだ」

「近国と申しますと」

「昔から、相州鍛冶は、聞えている。鎌倉近辺から伊豆にかけて、名ある者がいる」

「……」

「連れてくるのだ」

「てまえが」

「そうだ、おぬしと、ほかにも二、三人。供を連れてゆけ。むろん、本人が嫌だと申せばしかたがないが」

「力ずくでも」

「馬鹿なことは申すな。女をさらうのとは違う。力ずくで連れてきた鍛冶に刀を打たせても、使いものになると思うか」

「なるほど、そういうもので」

「刀は心をこめて打たねば、名刀にはならぬ。心と腕だ。その秘術によって、切れ味がきまる」

「……」

「折れず、曲らず、しかしてよく斬れる。髪の毛から、鎧までだ。な。唐人の諺に、鶏を裂くに牛刀をもってする、と愚かなもののたとえがあるが、あれは、唐人の刀が、鈍くて重いゆえだ」

「ほう」

「牛を殺すのには、重くて大きくて、肉の厚い刀でやる。鶏を裂くには、うすくてほそい、鋭利な庖丁だ。ところが、この国の名刀はその両方を兼ねる。絹を切り、猪の首を断つ。この名刀を打って貰うのだ、礼を尽くさねばならぬ。場合によっては、三顧の礼をもって迎えよ」

名刀の産するところは良鉄が採れるのはいうまでもない

が、相州物は、備前物と並んで、その切れ味の鋭さでは聞えている。

鎌倉時代名工が出現したのも、社会的理由からである。

新九郎が刀工を呼び寄せ、

（名刀を打たせる……）

ことを考えたのも、武辺者の当然の企画だった。

かれは、これまでの経験からも刀というものが、いかに大切かを知っていた。

大切というのは、古刀には、キズ物が多いということだった。古刀とはこの場合、今日でいうところの区分ではない。

古い刀である。戦場を往来してきた刀、一言でいえば、人を物を多く切った刀、または、火を浴びたりした刀は、いざというときに折れることが多い。

刀と刀が打ちあい、あるいは槍や薙刀などと、打ちあったら、キズが入る。このキズは一見、表面的なものに見えるが、いざという場合に、命とりになりかねない。力の入り工合、打ち合いの呼吸で折れることが多い。

現代まで残っている古刀の名品を見て、絶対折れないなどというのは軽率である。それはそれだけに実戦を経てきていないことを物語っている。何度か人を斬り、骨を断ちあるいは、鎧や兜を斬ったことのある刀には、必ずキズが生じる。

ただ研ぐだけでは、そこの部分の芯にまで及ぼした影響が見えない。アイソトープにでもかければわかるかもしれないが、肉眼では判別し難い亀裂が入っているわけだ。

それを実戦に使うと、ぼきりと折れる。もともと刀というものは、現代人の美術鑑賞のため、趣味のために存在するものではなかった。

人を斬るためのものだ。これは、どんな理由をつけようとも変らない。

鍛錬に鍛錬を重ねて、出来あがったものが、結果として、美術品としての価値を生じているにすぎない。

氷のような刃の美しさ、顔が写る美しさは、すべて鍛刀と研ぎあげの結果である。メッキした西欧のサーベルとの違いである。

したがって当時は、実戦に役立たぬ刀は、いかに名ある刀工のものでも、珍重されなかった。どんな名刀も一度兵火にあうともろくなる。

新しく打たせたものには、そういう欠点がない。たとえ刀工として、二流三流でも、その方が役に立つ。

新九郎が、刀工を呼び集めたのは、そうした実戦の経験から出た刀への認識に発している。

むろん、刀だけではない。槍も薙刀も同じことである。刀鍛冶を集める一方、新九郎は、山師を動員して鉄鉱採掘にも力を入れさせている。

宇津谷峠の東麓に、大鑪の地名が残っている。前にも述べたが、ここはタタラの跡で、鍛冶がいたことを物語っている。

ここにも、人をやって、廃鉱の有無を調べさせた。

山西――宇津谷峠の西側一円、掛川の手前までが新九郎の勢力範囲だったから、山の東にまで、手を伸ばすことは他を侵すことになる。

だが、幸い、このあたりは、安倍川まで、一庵老人の勢力がある。府中の範満にしてみれば、この一帯を一庵の勢力と見るよりは、新九郎との緩衝地帯というふうに見ている。

それだけに、山掘りは慎重にやらねばならなかった。

刀鍛冶が集まっても、原料の玉はがねなどが入手できなければ刀は打てない。そのための予備調査だった。

ここが駄目なら、伊豆や伯耆あるいは備中備前などから需めなければならない。

新九郎は、刀工を集めるとともに、甲冑師の手配もした。れいの明珍高義である。

「刀があっても、鎧がなくては」

この時代、源平期の大鎧は大分、影をひそめてはきていたが、それでも、まだ、大将分や身分地位のある者にとっては、豪華な鎧は、一つの象徴だった。

いわゆる桶側胴など、この時代特有の軽便で実用的な〝具足〟もぼつぼつ出てきていたが、昔のものへの郷愁も多く、まだ、前時代色が払底していない。

どちらにせよ、甲冑は必要不可欠なものだったのである。

陋巷にくすぶっていた明珍高義を誘うことは難しくなかったが、

「手のふるえが治りませぬゆえ、てまえだけは、お役に立てませぬ」哀しげに首を振って、「弟子どもを集めましょう。その上で、てまえが差図をすることに」

それくらいなら出来る。高義は新九郎に目通りして、新たに意欲をかきたてられたようであった。

「これで、てまえも立ち直れるかもしれませぬ」

と、眼をかがやかせた。

落ちくぼんで、老いと疲れを感じさせる高義だったが、その眼の光に、往時の名工とうたわれた時代の壮気が甦ったようであった。

新九郎は、城下の水利などを見て、鍛冶場を建てさせた。

むろん、鍛冶の役目はそれだけではない。矢尻や、槍の石突や、門扉の乳鋲や蝶番やいろいろのものを作る人々も、集めた。こうしたものは農具を専門にしている腕で充分だったのである。

こうして着々と、城と兵が充足していった。

「さて……」また新九郎は考えねばならない。「どの手を用いるか……」

新九郎の狙いは、まず、安倍川以西、大井川以東の、志太郡一円であった。

まだ、この間の地域を完全に掌握しているとはいい難い。群雄が数十人、数百人の手勢をもって、各地に蟠踞している。

その事実を知りながら、新九郎は、故意に、放置していた。内容が、充実しないうちに、かれらに牙を剥かせるのは拙だった。

(小猫どもは、いずれゆっくりと料理できる)と、考えていた。

当面の敵を問題にしなければならないのだ。

その間、小うるさい連中たちはそっとしておく。

余裕が出来さえすれば、どうにでも対策は講じられるのだ。叩きつぶすなり、懐柔するなり、相手しだいで、どうにでも手を打てる。

新九郎が春忠を仆して、石脇城を掌握したことで、それらの小名豪族たちも、成りゆきを静観している。

春忠を攻めるのに手間どっていたら、どういうことになったかわからないが、新九郎が一夜で陥したことで、かれらは啞然とした。

ただ、かれらのもとへ膝行する者が少なかったのは、やはり新九郎がこの東海地方——今川家との縁がうすいせいだった。

(どこの馬の骨とも知れぬ奴)と、白眼で見られている。

これは、この地方の人々が、偏狭だというのではない。むしろ、東海地方は、その点では、一番寛大だったかもしれない。

街道の交通量では、むかしからもっとも多い。それだけに、沿道の人々が、自然と東西の文物に目がひらけるのが早い。閉鎖的ではなかった。

新九郎がこの地方が気に入ったのも、太陽の明るさや、人情の大らかさなのだが、何といっても、新九郎に名誉がないことが、城主となっても、容易に敬意を払われなかったのである。

今川家があまりにも由緒があり足利家とつながりがありすぎる。

この土地で、徒手空拳、殆ど無名の男が城を掌握したといえば、好意よりも、悪意の眼をむけられるのは当然だった。

(まあ、いいさ……少しの間だ)

仁政によって、その蒙を啓くというか、実を見せるしかなかった。

四公六民の政治は、たしかに、その点では成功した。

はじめのうちは、

「かけ声だけじゃ、いざとなれば、ひっくりかえされるわさ」

と、猜疑の目で見ていた者も、収穫時になって、その布告に変りがないのを知ると、漸く、安心した。

「嘘を吐かねいお方ぞ」

それだけでも、かれらには望みを托せるのだ。いかに代代、地頭や領主に苦しめられていたかがわかる。

一年二年と経つうちに、新九郎の仁徳が、浸透してくると、近隣から逃散してくる農民が増えた。

いくら土地を領していても、そこで働く〝手〟がなければ、収穫はあがらない。ために、農民の逃散には厳罰をもってしたことは、奈良朝のむかしから変らない。

新九郎の治めるところが、

(四公六民)

だと、近隣に知れわたると、家を捨てても、飛びこんでくる者が増えた。

収穫の十分の六を農民のとり分にしてもよいという善政は、ただその割合ではなく、領主の心の温かさを感じさせる。

(そのような御領主ならば、わしらを虐めることはなかろうで)

この世で仏にあったように期待に胸をふくらませてやってくる。むろん、諸国では逃すまいとするから、これは命がけだった。

新九郎は、そうした人々が来ると、これを助けた。

一村あげて移ってきたこともある。身軽な者で、道を心得た男が、そのことを事前に知らせにくる。新九郎は荒木兵庫など腕利きに足軽を三十人ばかりつけて、救援にゆかせた。

あらかじめ打ち合わせた大井川の上流で、舟を出して逃散農民たちを迎え入れる。追ってくる兵を、遠矢にかけて射倒す。むろん、新九郎の勢だということは、明らかにしていない。

数十人の農民たちを収容して、敵を撃退し、これを希望にまかせて荒地を与え、開拓にあたらせたりした。

これに正面きって抗議してくると、

「われらは一切知らぬ」と、突っぱねた。「農民が土地を捨てるのは、大津波か大地震か、旱魃などだが、一体、そのどれか」

などととぼけた。

「また、こうも申すぞ、土地が悪けりゃ人は住まず、地頭が吝けりゃ土竜も住まず、とな」

「ともかく、逃散の者を、貰いうけたい」

「さあ、知らん。おりゃ、番人ではない。第一、土地を選ぶのは、かれら自身じゃ、働きやすいところへゆく、しかたがないではないか」

「ぬ……なんと申される。さればそちらから逃散者が出ても」

「ああ、しかたあるまいな。足鎖りつけても、働かぬ者は働かぬ」

善政を布きさえすれば、人々は安住する。その根本的なところがわからない非道の領主の手から、逃散する者が多いのは当然だった。

近国で減った分だけ、新九郎の領内に増えていった。

かれの名声を慕って集まってくる逃散者の中に、あの権平がいた。新九郎が伊勢にいるころ、二見ヶ浦で私刑にあうところを救けてやった男である。多目権平と名乗らせ、士分に取立てた。

数年するうちに、自領の収穫は倍ちかくにあがり、新九郎の治政の評判は高まり、さらに多くの商売の往来するところとなっていった。

遠交近攻策という戦略がある。これは外交というものの本質を物語っている。

領地を接した国を攻めて、その向うの国と仲良くする。つまり背後をおびやかした上で攻めこむというやり方だ。ふしぎに遠い国とは仲良く出来るものだ。

こうしたことは隣家と争いの多い現実を考えると、常にくりかえされてきた人間の業というしかないが、欲がある以上、何かと隣家とは争いが起るものだ。

また勢力の伸長を常に考えている以上、手を伸ばすには、国境を越えるしかない。

最大の防禦は、攻撃にあり、というのが、戦国の常識になっている以上、誰でもが、他を侵略することを考えている。

したがって、一つ向うの国との連合も、結局は、間の国を攻めほろぼすまでの便法にすぎない。間を両者でわけどりにすれば、こんどは、お互いが敵になるのである。

だが、そういう歴史的必然よりも、まず目の前の欲だ。そうでなければ、生きるための方策だ。一時的な糊塗策であろうとも、それはやらざるを得ないことであった。

新九郎は、西方の安泰を保つために、西駿河の豪族大名たちに牒を送り親交を保った。

新九郎の勢力と結びつくことは、それらの大名にとっても、東方の安泰を意味した。

こうして、西方を固め、着々と計画を実行していった。

領民の生活が豊かになり、田畑が収穫を増やしてゆくと、当然、野心の牙を剝き出して、手を伸ばしてくる者があるが、新九郎は兵馬を養うのにも意を尽くしている。

くに境いには、常に看視の兵を置き、不意の襲撃に備えたし、烽火と飛馬の連絡を密にすることで外敵侵略の不安を失くした。

兵馬の充実をはかって待ったのは、北川どのすなわち夢子の一子竜王丸の成長であった。

二年三年とまたたく間に歳月は経ち、漸く竜王丸が十三歳になったころから、新九郎は府中屋形の奪取に行動しはじめる。

「府中の様子をさぐって来い」

と、ある日黒丸に命じた。

黒丸もすっかり成人していた。

あれから五年、まだ童顔は残っていたが、毛脛も生え、肩幅も広くなって、頼母しい青年になっていた。もっともまだ元服していないので、黒丸の名前のままだった。

「そろそろ、侍らしい名にせねばな」

新九郎のその好意にも、黒丸はまだ大人になることの、ためらいを見せていた。

「なんにも手柄をたてていないから」と、照れたように言い、「戦さがあったら、手柄をたてるよ。それからでいいもの。そのときに烏帽子親になって下さい」

「欲のないやつだ」

「欲があるから言うんです」

親も兄弟もいない黒丸にしてみれば、伊勢新九郎とのめぐりあいは、新しい人生が開けたことを意味していた。

乱世の浮浪児が辿る運命はおおむね悲惨で、救いのないものである。

後のことになるが、豊臣秀吉のような例は極めて少ない。残飯をあさり、盗みと威しの果てには殺しの常習となってゆく。

そうした例をいやというほど見ている黒丸は、新九郎のもとで成長したことを、ときどき振りかえっては、ほっとするほどだった。

何も信じられない時代の空気の中で、ひとりの少年が成長するには悪の道しかない。そのころ新九郎という、信頼のできる存在を知ったということが、かれを絶望から救った。

「まず字をおぼえろ、学問のはじめだ」

仮名ぐらい読み書きできなければ、ものの用に立たぬ。

当時は、一般には学問の道はひらけていない。

一生、一字の読み書きもできぬままに過す者も少なくなかったのである。

学問といえば、公卿などは別として、一般人は、社寺に頼るか、寺小屋式の私塾で習得するしかない。

それも多くはない。のんびり学問するよりは、野良猫を一匹でも見つけて打ち殺して食べるほうが先だという時代なのだ。

この五年の間に、黒丸は、仮名だけではなく、漢書にも親しむようになっている。

もともと悧発だったし、

「新九郎さまのような侍になる」

その目標を立てて、黒丸ははげんでいる。

「――いよいよ、府中を攻めるのですか」
「極秘だぞ」
「はい」
「範満の軍勢がどの程度か、屋形の守備など、厳重かどうか。それと、城下の様子だな」
「様子と申しますと」
「府中の人々が、はたして範満の政治に満足しているかどうかだ。それがもっとも肝要なことだ。兵馬が弱くとも、人心がかれについていれば、攻めるのは難い」

五年経っている。駿河の府中は大きく変っていた。

小鹿新五郎範満が、今川義忠のあとを継いで政権を握り、独裁政治をほしいままにしている。

かれは屋形に近いところのスラム街をとり払い、腹心たちの屋敷をたてさせ、その外側を城のように固めた。

嘗ての今川氏の府中は、府中自体が、今川の繁栄の中に組みこまれた街になっていた。

唐土ではほとんどがそうである。城壁は街の外にある。街を囲繞している。街も、そこに住む人々も、つまり城侍と一体となっている。

これは、長期の籠城に耐えるという知慧なのだが、この国の城はたいてい山の上か中腹にあって、そこには一般の生活はない。

もっとも、城をつかうのは、戦さのときだけであり、平時は城下に御殿をこしらえて、そこで生活している。

したがって、城下のイメージが外国とは違っている。

〝お根小屋〟なる地名が各地にあるが、それは、城山の麓の城下の住いを表現していた。

今川屋形も、そういう意味では、城とはいえないものだったが、ここの場合は、多分に今川氏の勢力の強大さが、そこに安定感を付加していた。

山上に籠って戦さをするということが少なければ、自然に、城よりも屋形のほうに意をそそぐようになるから、御殿は華麗になってゆく。

範満はこの御殿を、
「城づくりに」
と、大幅に変えさせた。

まず濠を広く、深くして、その土で中を盛りあげた。望楼を増やしたし、矢はざまのきりこみを深くし、石落しを随所に設けた。

さらに、熊手で引き落されるのを防ぐ浮塀を前面に立てた。これは熊手で引き剝がそうとすると、もろく倒れて寄手の頭上に巨大な重い塀が崩れ、石が落ちてくるという仕掛けで、範満の自慢のものであった。

城にしても屋敷にしても、その時代の推移で、変化してゆく。旧来の屋形や屋敷のかたちのままでは、どうしても

新しい時代に合わなくなってくるのだ。

範満はその新しい〝城〟と屋敷の完成に四年かかっている。

周辺地区の整備も、たとえば、連雀の町や、魚屋の市場のようなもの、寺や社の配合なども考えた。

当時、いわゆる商家というものは、少ない。まだ〝立売り〟〝触れ売り〟の時代である。少しずつ、居付きのでものを売る〝見世棚〟というものが出来ていたが、専ら、辻や川端や広場などでの立売りが行われていた。

職人の家でものを売るのが店の構えをなしていたが、あくまでもこれは製造直売方式を出ない。商人の〝座〟（同業組合）というものが出来るのも、こういう習慣のためである。

この変化はしかし、たしかに景気には役立った。

が、範満は、
「景気がよくなったのは、わしのおかげじゃ、棟別銭を奉れ」
と、税金をとりたてた。

さらに、関所を多くもうける。これは表むき、
〝不埒な乱破〟
の侵入をふせぐというのだが、その半ばの理由は、通行税である。〝関銭〟と称したが、この通行税が馬鹿にならない額だった。

人間一人いくら、馬一頭いくら、荷物いくら、というふうである。一駄二駄というのはわかるが、おうご（朸）と呼ばれた天秤棒の荷まで、課税される。

そのあたりになると、かなり役人の懐中を肥やす部分が多い。民衆に怨嗟の声が起ってくるのは当然だった。

ところが、こういう声というものは、範満のところに届くまでには時間がかかる。名君といわれるものは、この不平を早く聞くことによって対処する。途中で私腹を肥やしている連中が多いほど、上までは達しない。

つまり下意上達は、収賄官吏の人数の多さに比例して遅れるというわけだ。

黒丸は変装して府中へもぐりこむと、こうしたことを探ってまわった。

むろん、武士の姿では警戒されるから、人足にやつしている。腰きりの布子、七分袖で、脚絆で足半である。いざというときのために、三寸ばかりの刃物を懐中にした。

浅間神社の前には、人足や連雀やその他えたいのしれない者などが、昼寝している。境内には亭々たる巨木が欝蒼と茂って涼しげな日陰をつくり、昼寝には恰好の場所なのだ。

「ごめんよ」

黒丸は、ちょっとした隙間を見つけて腰をおろした。

「暑苦しいやつがきた」

と、幹の根かたにもたれて、浮かれ女を抱きよせていた男が、太い眉をしかめた。

「まあそういうな、お互いさまだ」黒丸は、やつしのために、鍔に紐を通して眼帯にしている。「片眼だから、よく見えぬ。邪魔はせぬよ」

こだわらずに、軽く言ったが、

「もう一方の眼が邪魔だ」

その男は、女の襟から手を入れて、胸を愛撫していたところである。たしかに邪魔にちがいない。

「まあいいさ、ゆっくりとやっとくれ。ところで、いい風だな」

と、汗を拭いた。空には夏の陽が、爛れたようにぎらぎらしていた。

「酒はないか」

なんとかして話にのせようとして、黒丸は巾着から、銭をつかみだした。

男はその巾着をのぞきこんで、

「おめえ、大金を持っているではないか」

涎が垂れそうに、唇を弛めた。

「まあな」

「何かいい仕事でもしたのか、ぼろ儲けのできる仕事をよ」

「まあな」

「一口乗せてくれ」

そう言いながら、男は、女の襟から手をさしこんだままだった。その手のあたりがもぞもぞと動いている。

女は、虚ろな眼で、黒丸を見ただけだった。男の手を拒もうともしないのである。暑気にうんざりしたような、だらけた様子だったが、男の愛撫に恍惚となっているようでもある。

「酒がほしいな」

「飲めよ」

男は現金なもので、脇に置いた酒壺を差しだした。

ぐいと飲んで、黒丸は、手の甲で無造作に口のあたりを一拭いした。

「うむ……暑気払いにはなる」

「なんだえ、その顔は。まずいか」

「美味いとはいえんな」

「そうだろう、安酒だ」

男は、笑った。

「いくらだ」

「要らねえよ、それより、美味い酒が飲みたいな」

「働けば飲めるさ」

「おれは波切ノ多七」

「黒……黒松だ」

黒丸と言いかけたのを、あわてて、変えた。

「何をしている？　真っ昼間から美い女といちゃいちゃやっているとは、いい身分ではないか」

「女だけさ」と、多七は、色男づらをして、「世の中はうまくいかねえ、女にモテると、銭の方が入らねえ」

「あたりまえだ。仕事は何だえ」

「御屋形の掃除さ」

「お城か」

「そうだ、お城と言わなくちゃいけねいのかな、わしはもう古いからな、どうしてもお屋形と言ってしまうが」

「その女は」

「お末の水仕さ」

名前まで言おうとしなかったのは、黒丸に近づけたくなかったのだろう。

「古いなら、顔が利くだろう、おれの仕事はないか」

「おめえのなあ……」

と、顔を見た。

「片眼では、駄目か」

「そうさな……だがよ、大層、銭を持っているくせに」

「それほどでもねえ」黒丸はまた銭をざくっとつかんで、「口きき料は出すぜ」

「そうさな、考えてみよう、半日待ってくれ」

「わかった、どこへ訪ねてゆけばいいか」

「お屋形の不浄門の外に牛の井戸がある。そこへ来い」

それだけ言うと、多七は女を押し倒すようにし、上にのしかかって、手を裾へ這わせた。

(今日はツイている)

と、黒丸は北叟笑んだ。

こんなに早く、今川屋形で働いている者と知り合いになれようとは思わなかった。

かなりいい加減な男らしいが、かえって、その方が都合がいい。いい加減だけにこちらの素姓に対しても、深い詮索はしない。

黒丸は、明るいうちに、屋形の周囲をまわって、歩幅で、広さを計ったり、濠の幅もたしかめた。深さは見ただけではわからない。

(どれくらいか、背丈以上あるかもしれん)

なんとかして深さを知らねばならぬ。改築して濠も深く浚っている。正確なところを知らないと攻めこむときに役に立たない。

浅間神社の裏手へまわって、なるべく細目の竹を切り出した。

二間ほどの長さにして、小枝をつけたまま、三箇所に目印の切りこみをした。つまり三尺ずつの等距離である。

子供たちが泥鰌でもとっているのか、濠をのぞきこんで騒いでいる。ちょっと見ていれば、餓鬼大将は、どの子かわかる。ひょろりと背の高い十二、三の子がどうやら、そうらしい。

「おい、何をしている」
「何だっていいじゃねえか」
「泥鰌か、鮒か」
「うるせえな」
「亀の子なら、飛びこんでとったがいい、それとも泳げねえのか」
「泳げらい」
「銭をやる」
　そう言われて、はじめて、子供たちは、黒丸をふり仰いだ。
「なんだい、目っかち」鍔の眼帯をしているのだ。悪童たちは遠慮がない。「銭かい、おくれ」
「こっちへ来い」
　近くの露地へ連れていった。
　壁際にれいの竹竿を立てかけておったのだが、
「こいつを濠の中に立てるのだ。そうすりゃ魚がとれる」
「竹を立てるだけでかい」
「そうだ、泥鰌が寄ってくる、ほんとうだぞ、やってみろ」
「嘘だい」
「嘘なものか、ほら、この小枝があるだろ、ここが、泥鰌には棲家というわけだ」
　子供たちは、まだ疑わしげな眼だったが、銭を一文やると、竹をつかんだ。
「泥鰌が来なかったら、あと一文やる」
「ほんとかい、そいつはいいや」
　わっと声をあげて、走りだした。
　子供たちのすることだ、通行人や屋形侍たちも、一々気にしない。二人がかりで、その竹を濠の中に立てるのを、少し離れたところで、黒丸は見た。目印の下の一本が隠れ、二本目が隠れた。
（深いぞ……）
　二本目と三本目の間くらいでとまった。子供ががぼっと水を吐いて、顔をだしたとき、黒丸は姿を消していた。
（深い！）
　と、感じた。
　六尺以上——まず、七尺は間違いなくある。この深さでは、人が立って歩けない。かなりの背高でも、顔が水面に出まい。
　足早に屋敷町を抜けた。子供たちを使嗾しているところを誰か記憶している者がいたら、身辺が危うくなる。
　ぬけ目ない範満のことだから、城下にサグリの〝眼〟を放っているのは、疑いない。
　黒丸は安倍川の渡しの木戸での人数を数え、交替などの様子を観察したりして情報を胸に蓄えて時間をつぶした。
　書いて記憶するより、胸にしまっておくほうが、万一の場合、誤魔化せるのである。

　だが、そこまで細心に注意したにもかかわらず、
（跟けられている！）
　と、感じた。背後に眼を意識した。その眼は、粘りつくような執拗さで背中にまといついている。
（気のせいか）
　とも思った。わざと、無意味に、二、三丁歩いた。何度か角をまがった。大銀杏のかげで小用をたしたりして尾行者をたしかめようとした。
　が、その視野の中にはそれらしい男はあらわれないのである。が、また暫くすると、その視線が灼きつくようであった。
（くそ……どこにいるのか）
　異様な〝影〟を感じた。黒丸は落着かなくなった。
　嘗ては、自由に走りまわった府中の街だが、五年経つと、こうも変るものか。まるで他国へきたようであった。
　そこには、かれの少年のころの、欝屈と反抗と失意と羨望にさいなまれた日々の行動の痕跡はなく、よそものの貌の冷たさだけがあった。
　その冷たい壁が、黒丸をして、疑心暗鬼にさせるのだろうか。
（気のせいだ）
　と、おもった。そうおもうことで、忘れようとした。いざとなれば、斬りまくって、逃げるだけだ。
　黒丸は、路傍で餅を買って食べながら歩いた。餅の味だけは変らない。粟餅で、よもぎを搗きこんで味付けがしてある。
　気がついて、酒も買った。これは波切の多七への手土産にするつもりだった。
　細首の瓶子である。上酒というほどではないが、まアほどほどに飲める。
　日が暮れかけている。歩きだそうとしたとき、
「黒丸さん？」
　女の声が背中を打った。
　ぎくりとした。が、振りかえらなかったのは、それだけの肚裡ができていたことだ。
（見つかった！）黒丸はとぼけた顔になった。
　振りかえりたいのを怺えて、黒丸は歩いた。
（どうして見つかったのか）
　五年という歳月では、自分は随分変ったつもりでいるが、はた目には、それほど変っていないのか。もっとも、石脇城のある志太郡に由縁があれば、黒丸のことを知っていよう。
　日ごろの服装とは違えているし鍔で片目を覆っている。この恰好でよくわかったものだ。
（どんな女か？）
　見たい気持にかられる。

女は、人違いと思ったのか、それ以上は、声をかけて来なかった。

が、あとを跟けてくるようである。ひたひたと草履の音があとを跟けてくるようだ。しかし、暫くいって何気なくうしろをむくと、もう、それらしい女はいなかった。ほっとすると同時に、何か惜しい気もした。

（誰だったろう？　……）

明珍高義の甲冑作りの鍛冶場で、真っ黒になって、鞴を熾したり、延金を叩いたりしていたころの女の子のともだちなら、沢山いる。

もう顔も忘れている者が多い。その女の子の一人だったかもしれない。

だが、その女とは一刻ほど後に逢うことになる。

不浄門の前の牛ノ井戸というのは、屋形のための牛小屋と牛飼の小屋が固まっているところで、いうならば、牛の水飲場だ。牛飼たちは、博奕をしたり、ごろ寝したり、化粧の女を呼んで、酒を飲んだりしている。

黒丸はもの馴れた足どりで入っていった。

せまい小路に牛の糞が落ちている。蓆や縄の切れっ端や、かわらけや、そうかと思うと鼠の死骸が干からびて転がっている。こういうところに入ってきて疑いを招かない顔というのがある。顔つき、目つき、足どり、なんとなく、この土地の人間という感じがあるのだ。

いい匂いが流れている。鍋を吊して煮物をしている女がいた。味噌煮であろう。中でぐつぐつ煮えているのは、猫か犬の肉かもしれない。

黒丸は声をかけた。

「おい、多七を知らないか」

「知らないね」

顔もあげずに女は、鍋の中を長い竹箸でかきまわした。

「これなら知っているだろう」

青銅が二、三枚、音をたてて女の足もとに落ちた。

「知っているよ」

女の反応は早かった。素早く、青銅を握りこんで、はじめて、黒丸を見上げた。

「波切ノ多七だろう」

「どこにいる」

「もう少したったら来るよ。お屋形の夕餉が済んでからね」

「……」

「余り物を持って来てくれるのさ」

なるほど、そういう才覚はあの男にはありそうだ。

残飯をさらってくれれば、このあたりでは、いい顔になる。あの女がお末の婢女だとか言っていたから、残飯もそっちのルートからくるようになっているのであろう。

「そんな情のある男にも見えなかったが、余り飯をわざわ

ざ持ってくるとは」

「なあに、売るのさ」

「なんだ、銭をとるのか」

「安いけどね、ちゃんと、お櫃いっぱい鐚銭二文とか、それは抜け目がないね」

それも多七にしてみれば、余禄のうちなのだろう。

その多七が姿をあらわしたのは女にすすめられて、えたいのしれない肉をひときれ口にいれたときだった。

「黒松といったな、来ないと思ったが」

「約束は守るさ」と、黒丸は酒を渡した。「口きき賃だ、飲んでくれ」

「これだけか」

多七は、はっきりと言う。

「少ないか」

「少ない」

「じゃァ、銭を儲けて払う」

「三日分だぞ、忘れるな」

多七は念をおした。

「いいとも、さあ、連れていってくれ」

屋形の中を見ることができればいいのだ。三日分の賃銀は吝しくはないが、こういう抜け目のない男は、銭だけとって、口を拭うことがある。

どうせ戸外の掃除人だし、屋形侍もそれほど神経をつかう必要はないと思われたのか、身元しらべなども簡単だった。

「多七によく聞いて、働くんだ」

と、掃除人の頭は、面倒くさそうに、顎をしゃくった。

黒丸は多七に連れられて、箒だとか、塵芥とりの箕だとか、道具類の置いてある小屋を教えて貰ったりした。そのあたりは、屋形の裏手で、御殿のほうの様子は、かいもくわからない。

夜番たちの人数はかなり多く、篝火の数も少なくない。猛犬まで飼ってあって、容易に侵入できないようになっている。

（なかなかのものだな）

あたりの様子を目に灼きつけ、さりげなく歩幅で建物から塀までの距離を計ったりした。

「ここを掃くだけかね」

「いや、おめえには、お鷹部屋をやって貰う。こっちだ」

お鷹部屋は、十五あるという。今川家ではだいたい鷹好きが多い。

お鷹狩りというのは、ただ、よく馴らした鷹をつかって小鳥をとるというだけではなく、民情視察や、山野の疾駆に馴れるという意味もある。それに、猛禽が、小鳥に襲いかかる姿勢に、武辺的な残忍な快感を催すのも事実だ。

範満が、一時、闘鶏に凝っていたのは、流行りだったからだ。
もっとも、野望のある範満は勢力扶植のために、流行を利用するくらいは当然の気持だった。闘鶏がすたれたのは、もともと範満自身が、好きではなかったからだ。
かれが、ほんとうに好きだったら、今川家の主となった立場を大いに利用して、もっと流行らせたろう。
かれは屋形の主になるや、今川家の伝統である鷹狩りに熱中しだした。鷹部屋も、立派なやつを作り、子鷹のうちから、筋のよいのを育てて、扱いも念を入れた。
それだけに、この、
「お鷹さま」
の責任者たるお鷹匠の頭は、権限が大きく、別にお小屋を賜わって、家来たちを顎で差図している。
やはり不浄門を入った近くにあるのは、お鷹の餌などを搬入するせいだった。
鷹は食物がうるさい。動物の生肉はたいてい食べるが、蛇、いたち、蛙、みみず、など好物だ。
生きているやつが好きだから、毎日、この餌を搬入する。不浄門からでなければ、こういう餌は出入りさせられない。
「お鷹部屋の掃除ができりゃ一人前だ」
「鷹は好きだから」
「そいつァいい、お頭に引き合わしてやる」
そのお頭というのが、五十がらみの大男で、蚊遣りを焚いたなかで、女と寝ころんでいた。
燭台の火明りの中に酒気が霧のように散っている。むっとする臭いだった。
「黒松でございます。お鷹部屋の掃除を仰せつかりましたので」
「ふうん、鷹に目玉を食われねえようにしろ」
振りかえりもせず、お頭は言った。女の乳房に顔を埋めていたのである。
多七もそんな図は馴れているのか、平気であがりこんでいる。
「片目しか残っていないのですがね、この男は？」
「片目だって？」
漸く、頭は振りかえった。
女も顔をあげた。
「あっ、黒……」
さっきの声だ。
この女だったのか。黒丸は、燭の明りのもとに女を見た。黒丸、と言いかけたのも当然だ。女は、小萩ではないか。
「黒松と称いますで」
しまったと思いながら、黒丸はあわてて言った。
小萩は一瞬、妙な顔をしたが、
「そうかえ、黒松どのかえ」

「どのなんてつけるやつがあるか、黒でいい」
お頭が怒鳴った。
「ほほほほ、黒、黒松……」
黒丸と呼びたいのだ。
どうしてこんなところに小萩がいるのか。湯女風呂で五年前に逢った女である。あのとき五つ六つ年上だと思ったが、いま見ても、大して変っていない。
女はばけものだ。化粧のせいだろうか。燭の明りのもとで見るせいか。どうせ春をひさいで生活している女だから、こんなところで妾づらをしているのも不思議はない。
「黒松さん、お鷹と顔合わせは済ませましたかえ」
「いや、それは、まだ」
「ほほほほ、あたしが、案内してあげましょ」
小萩は、身を起し、襟を合わせた。豊かな乳房が隠れた。
「おい、どこへゆく」
お頭は未練げに、裾をつかんだ。
「あら、しつこい」と、小萩は眉をしかめて、「お鷹と顔合わせをしなきゃあ」
「明日でいい」
「今夜のほうが、いいでしょ、鷹は夜のほうがおとなしいから」
「すぐ戻ってこい」
そう言っただけで、お頭は酒瓶をひきよせ、椀に注いだ。
小萩の魅力にまいっている様子だった。小萩の態度にも、多寡をくくっている様子が見える。
「さあ、黒松さん、こっちへ」
と、先に立った。
黒松はとまどった。ここで小萩にくっついていっては、多七に怪しまれる。お頭に憎まれてもサグリの邪魔になる。
「お出で」
と、小萩は命令口調だった。
「黒……」
黒丸と、わざと言いかけて、語尾を濁す。その眼が悪戯っぽく光っている。
（こないと、ばらすよ……）
小萩の眼は、そう脅している。
（いいのかえ、黒丸）
あのころ、少年だっただけに、小萩の眼には、黒丸はいつまでも瓜を食い散らしている少年に見えるのか。しかたがない、ここでばらされては、これまでの苦心も水の泡になる。
黒丸は、決心した。
「案内して下さるか」
と、立ち上った。
「こっちへお出で」
小萩はいそいそと先へ立った。

鷹部屋は、棟割りのお長屋になっている。贅沢なことに、六帖ほどの小部屋に一羽ずつ、止り木の上で眼を光らしていた。
暗がりにくると、小萩はふいに黒丸の手をつかんだ。
小萩の眼も鷹のそれのように光った。
「黒丸、ね、黒丸でしょ」
「……」
「隠したって駄目、忘れやしないよ」
「隠すわけじゃないが……ばれると困るんだ」
「わかっている。新九郎さまの御命令でしょ」
「……」
「懐しい」と、小萩は、まじまじと黒丸を見た。「大きくなって、すっかり大人になって」
「――あれから五年も経っているんだぜ」
「それにしたって、あのころは、これくらいだったじゃないか」
小萩は手を自分の耳のあたりで水平にして見せた。
「嘘だい、そんなに小さくはなかったぞ」
「これくらいだったよ。もっと可愛かったから」
青年は背伸びをしたがるものだ。いつまでも年少の扱いをうけるのを好まない。
「もう大人だよ」
と、力こぶを作ってみせた。
小萩はそっと触って、
「固い……」
「だろう」
「新九郎さまは、もっと固い」
闇の中の眼がうるんでいる。その眼は新九郎のおもかげを描いているのか。
「ねえ、黒丸」
「黒松と呼んでくれ、ひょっとして、壁に耳が……」
「黒松なんて、他人みたい。ねえ、石脇のお城に行けば、新九郎さまに逢えるかしら」
「……」
「逢いたいの」
「……」
男女の仲には、うっかり口だしは出来ない。むかしの黒丸なら、おいらが話してやる、とすぐ安請合いするところだが、もう、そこまで立ち入るのは僭越だという分別がついている。
「ねえ、黒丸、知らない仲じゃなし、話を通じておくれな」
「うん……それは、話ぐらいするけど」
「小萩が、逢いたいって」
「……」
「気が狂いそうに、好きだって」

「駄目だよ」と、無情に黒丸は一蹴した。「うちの殿は、そんな甘口には乗らない」
「あれ、この子、いっぱしの口をきくじゃないか」小萩は呆れ顔になって、「そんなことを言うんなら、男と女のことだって、もう知ってんだろう、ねえ」
小萩は身をすりよせて、熱い息を吐きかけた。夜になっても、まだ風がない。潮の香が今夜は特に強いようであった。
「そうだよ、こう言っておくれな。このお屋形のことは、なんでも知っているから、ね、ぜんぶ新九郎さまにお話するって」
なるほど、小萩なら屋形のうちをよく知っていよう。改造改築した部分を、詳しく話してもらえば、役に立つ。
黒丸が掃除人になって外まわりを見るだけでは、内部のことはわからない。
「ほんとうか」と、黒丸はせきこんだ。「そうしてくれ、これからすぐに行けば」
「あら、いやだよ、餌を見せると、すぐ食いつく」
「なんだい！」
「ふふふ、いいのよ、そういうところが、黒丸が可愛いの」
「ちえッ、こけにするなよ」
背伸びした青年には、子供あつかいが一番こたえるのだ。
一方、二人が出てゆくのを見送って、お鷹匠の頭は、多七に濁った眼をむけて、妙なうす笑いを浮べたのである。
「――変だな」
「え？」
「変だ」
と、くりかえした。
「へえ……何か」
「わからねえのか、とんまな野郎だ」
「あっしが？」
「そうだわな。あの二人の様子に気がつかねえか、変だと思わねえか」
「へえ……そうですかねえ」
「どうやら、知っている仲らしいぞ」
「そりゃあ……」
当りめえじゃねえか、と、多七は言いかけて、語尾を呑んだ。
小萩が、湯女風呂にいたことはたいていの者が知っている。当然、彼女を買った男もいる。この府中だけでも百人や二百人はいるだろう。いまさら、若い男を知っていたからといって、驚くことも、腹をたてることもない。
「へえ、そうでござんすかねえ」多七はしかし、このお頭のすぐカッとなる性質を思って、空とぼけた。「ひょっとして、顔くらい知っているかも……」
「何を言ってやがる。あんときの小萩の顔を見なかったか。

たしかに、懐しそうにしてやがった、くそ！　畜生め」
「ま、お頭、そう怒るこたない。たかが、若造で」
「だから、いやなんだ。あやつが片眼で、小萩をとろかしやがったかと思うと、くそ！　もう一つの眼玉をくりぬいやりてい」
「残りの眼玉をですかい」
「そうだ」
　罵るだけではなかった。お頭は脇差をつかんで、ぽんと多七の膝上にほうりなげた。
　あわてて、どうやら受けとめると、
「殺ってこい」と、怒鳴った。「鷹部屋の中で殺りゃわからねえ。そして眼玉をくりぬいて、鷹に、そうだ吹雪に食わせてしまえ」
　女の嫉妬は〃鬼ころし〃といわれるほどだが、どうして男の妬心もすさまじい。分別のあるはずの五十男が、隻眼の黒丸の若さに狂気したようになっている。
　多七は脇差を受けとって、蒼くなった。
「ほ、本気ですかえ」
「当り前だ。やれ、いやなら、きさまの眼玉を」
「わかりました、殺りますよ」
　あわてて、多七は腰をあげた。
　たしかに、うす暗い鷹部屋で女と男が密談している姿は、あやしいものだ。

　多七は、（悪いな）と、おもった。三日分の稼ぎを手に入れるつもりが、駄目になったわけだが、それはしかたがないとして、酒を貰ったことが、少々、気がとがめた。
（まあ、しかたがねい、あの野郎が悪りいのだ）多七は腹をきめた。
　脇差を抜いて背に隠すようにしてお鷹部屋に入っていった。
「おい、黒松……」暗がりに影が動いている。「黒松、どこにいる？」
「……」
「おれだ、多七だ」
　その声は、むろん聞えている。
　黒丸は小萩の手を放して、（来た！）と、顎をしゃくった。
　小萩も息をひそめた。まるで、不倫の場を見つかったような気持だった。新九郎とのあいびきを頼んでいたのだから、不倫の相談にちがいない。
　近づいてくる多七の様子に、黒丸は敏感に殺意を感じた。なまじ、多七が猫なで声を出しているのが、かえって、あやしく感じられたのだ。
「——黒松よ……」
　二人が息をひそめている前を、そろそろと、多七は通った。その背に、抜刀が遠明りでにぶく光った。

　小萩が思わず、声をあげた。
　それは悲鳴というよりは、ひいと、かぼそい笛のような、咽喉の奥から洩れたものだったが、多七は、はっと振りかえっている。
　うしろ手の抜刀を見られた。と、知ったとたんに、「うぬら！」叫びざまに、黒丸に突きかけてきた。
　黒丸は咄嗟に身をひねった。軽捷なのはむかしからである。多七の失敗は、かれの少年時代を知らないせいだった。
　脇差を握った手は、次の瞬間黒丸に摑まれていた。
「何をする」
　黒丸は逆にひねりあげるや、ぱっと足ばらいにかけた。
「小萩、逃げろ」
　多七はもろに転倒した。黒丸がそれほど機敏だとは知らなかったのである。
　そのとたん、おのれの握った脇差で、おのれの腿を、したたかに突き刺したらしい。凄まじい悲鳴をあげた。
　倒れる拍子だったのだ。体重がもろにかかったのだろう。脇差はぐさりと腿を貫いて、血どろのきっさきが、腿から顔を出していた。
「自業自得だよ」と、黒丸は言い捨てた。「どうしておいらを殺そうなんて思うんだ、阿呆！」
「行きましょ、黒丸」
　小萩は血の臭いに蒼くなって、袖を引っ張った。
　いまの悲鳴が誰かに聞かれなかったろうか。
「早く！」
　小萩の顔は蒼い。
　どこかで、何か怒鳴る声がした。戸を開ける音、走り出る足音が聞えた。それを聞いたように、多七は、あの威勢はどこへやら、大声でうなりはじめている。
「——こっちよ」
　小萩は暗い小屋のうしろへ黒丸をひっ張ってゆく。
　黒丸は、多七のことが気になっている。多七の方から飛びかかってきたのだが、そして、それを払いのけただけだが、脇差は深傷を負わせている。腿だから致命傷にはなるまい。だが、黒丸の胸をかすめたのは、傷を負わせた罪悪感ではない。
（このままでは……）
　いつか、誰かに言われた言葉がある。
（傷を負わせたら、殺せ）
　けものでも人間でも同じだ、という。
　手負いのけものは始末が悪い。人間は尚更だ。不具にされたら、一生、怨みを持つ。そのためには、殺してしまうのが、一番よい。後患を断つ方法にちがいない。
　ものすごい呻きをあげている多七を見たとき、黒丸が考えたのはそれだった。

だが、小萩が、その時間を与えなかった。

「早く、ここを出ないと」

小萩も、同じ立場になっている。

彼女には多七の殺意が、どこから来たものかわかっている。お鷹匠の頭の異常な妬心を知っているからだった。

二人は、人々が立ち騒ぐ渦をくぐり抜けるようにして、牛の井戸まで来た。

「やれやれ、とんだ災難だったな」

「捕まれば、二人ともいのちがないよ。早く府中を離れなければ」

「どうする」

「どうするって、石脇のお城に連れていってくれるのでしょ」

「うん……」

黒丸はちょっと迷った。その二人を上げ部の窓から見ている眼があった。

波切ノ多七が重傷を負わされた話はたちまち、その夜のうちに、牛ノ井戸近辺に知れわたった。

「小萩の女郎(めろう)がやったのかえ」「いや、黒松という片眼の男だそうな」「どっちにしても、同じ穴の貉(むじな)じゃろで」「片眼の風来坊と逃げるとは、まあ、なんと尻軽な」「それもさ、実は片眼ではなかったとよ。ありゃ、やつしだったらしいぞ」

無傷な眼に鍔おさえの眼帯をかけていたのだ。逃げるときに、はずしている。それを牛ノ井戸のあの女が窓から見た。

二人が、しかし、どこへ逃げたかは、誰もしらない。話し声までは聞えなかったのであろう。

「お鷹匠の頭の顔が見ていな、さぞがっかりしていることだろ」「小萩はいい女だったからのう」「うむ、うふふ……」「なんじゃい、変な笑い方をして」「うふふ、美い肌だったぞ」「ちえっ、うぬはほんとうに抱いたのかえ」「ああ、湯女風呂でな」「どいつもこいつも、抱いたようなことを吐ざく。小萩が逃げる前とは随分ちがうぞ」「ああ、お鷹匠の頭に遠慮していただけだわな」

どこまでほんとうか。

湯女風呂に去年までいたのは事実だから、肌の感触を知っている者が多いのは当然だが、噂の女となると、われもわれもと、口にしはじめたのは、おかしな現象だった。

この小さな事件を耳にしたときも、しかし、主人の新五郎範満は、別段に、疑いもしなかった。

「下人どものいさかいか」と、思い、「いかがわしい女を引きこんでいるから、さようなことが起る。やつを鳥見におとせ」

と、老職に命じた。

お鷹匠の頭は、鳥見に降等させられた。

「首がつながっただけ、有難いと思え」

と、老職は、手刀でおのれのほそ頸を打つ真似をした。

「癇癖な殿の御気性だ、かような不祥事では、まず、打ち首だぞ」

「はい、はい、有難き仕合わせにございます」

あの酔いどれたときとは、別人のように蒼くなって、お頭は鳥見役を拝承している。

お鷹野に主人が出る場合、狩場の選択をする。当時はまだ後世ほど人口も多くないし、野原が多い。

疎林と青野が山の麓にひろがっていたし、季節や気候によって、鳥の棲息状況もちがう。それを一々調べてまわるし、時にはお鷹の餌を集めたり、指示したりする。それなりに、領民に対して権限は持っていたが、お鷹匠の頭の身分からすると、大変な降等であった。

何が幸いになるかわからない。

小萩のおかげで、黒丸のサグリの真意が隠蔽されたのは、新九郎方にとって、幸運というべきだった。

「お鷹匠の頭の女が、風来坊と逃げた」

と、見られただけであった。

今川新屋形の内部構造を、新九郎が知ろうとしていることがわかっては、急遽改築されてしまう。

そうなっては、何もならない。そのひまを与えず、二、三日のうちに急襲すればいいわけだが、その点は難しい。

友邦との連携が必要だし、麾下の将士を動員するのに時間がかかる。黒丸の隠密行を、それと悟られなかったのは、全く幸いだった。

その黒丸が小萩を連れてきたのを見ると、

「おどろいた」

と、新九郎は率直に言った。

「小萩か」

「あい……お懐しゅうございます」

「――無事で何よりだったな」

黒丸から、ざっと、事情を聞くとそれ以上、男性遍歴などを、聞きだす気はなく、

「屋形の構造を話してくれい」

「府中をお攻めになりますの」

「そうだ。そのために、調べなければならぬ」

「知っているかぎり、申し上げますわ」

「礼を申すぞ」

「いいえ、新九郎さまのためですもの」

小萩の眼や唇には、露骨に思慕が浮んでいる。

新九郎はそんな女の色っぽさから目をそらして、右筆と工匠(たくみ)の頭を呼び寄せた。

「さあ、話せ。ここに昔の屋形の間取り絵図がある。どのように変ったかだ」

傍で、工匠と右筆が書きとってゆく。

絵図は記憶をたどって、新九郎たちが作ったものであり、その上を朱筆で訂正してゆくのである。この絵図は、たたみ二帖ほどもある大きなものだった。
「ここに内濠ができています。幅は二間くらいかしら……あ、このあたりに櫓があって、いつも櫓の上には矢筒が置いてありますのさ」
などと、こまかく説明してゆくのだ。
すっかり説明し終るまでに半日ほどかかっている。
「よし、これをあらためて書き写せ。同じものを三葉作るのだ。急ぎだぞ」
屋形の内部は、すっかり、手にとるようにわかった。
あとは、軍勢の比較と配置である。府中城下の大絵図に朱点を打ちおよその人数を書きこんでゆく。
その詳細が判然してゆくうちに新九郎は、府中の城と城下を掌握したような昂奮を感じてくる。
時々、小萩が熱っぽい眼で見つめるのも忘れていた。

駿府の城

伊勢新九郎長氏が、今川竜王丸を奉戴して、府中を急襲したのはそれから十日ほどのちのことだった。
まだ残暑のはずだったが、風と雨が駿河一円を蔽って、急に晩秋になったような日だった。
新九郎の動員した軍勢は海陸三千騎、と軍記に数えられている。
その急襲のしかたも、意表をついたものだった。風雨に乗じて、夥しい大小の船を海上から府中沿岸へ上陸させたのだ。
月のない深更、海上を蔽って夥しい漁火が広がり、それは烈風にあふられて炎々と燃えさかりながら、海岸へ押し寄せてきた。
「すわッ、軍船ぞ」
仰天した見張りの注進で、範満は熟睡からさめた。まだ寝酒の酔いが残っていて褥からおり立ったとき、ふらふら

した。
「殿！　殿！　敵襲でござる！」と、東雲之助が、泡を喰って呼んでいる。「御指示を、早く」
「ええい、気の利かぬやつが。太鼓をうて、鉦をうて、下人どもに屋敷をまわらせろ。叩き起すのだ」
傍に寝ていた女も、眼をさましたが、これはぼんやりした顔で、何が起ったのか、まだわからないらしい。
「起きろ、具足を」
「え？」
「早くいたせ」
「何事か……火事でしょうか」
「うっつけめ！」怒りにまかせて、範満は女の肩のあたりを蹴飛ばした。「これだから、女めらはいざというとき役に立たぬ。具足を持て、薙刀はどうした」
その間に、屋形の内は大騒ぎになっている。敵が攻めてきたということは、範満が屋形の主になって、はじめてのことだった。
大金をかけ、人力を集めて、改築された今川屋形である。鉄壁の城構えと思われている。それだけに安心感のほうが強かったのか。
「水軍は何としたぞ、浜備えに手落ちはないか」具足を身にまといながら、範満は、指示した。「軍船を一艘も上陸させるな、全部、焼き沈めてしまえ」
「はい、火矢の用意はいたしておりますが、何分にも、風が強いので」
「では、潜ってゆかせろ、下から穴をあけて沈めろ」
「それは……軍船は数百と思われまする」
「百でも千でも、やれ、日ごろ、船手方では、訓練しているはずだ」
「はあ、かしこまりました」
浜辺に軍勢を集中しているうちに、しかし、また見張りの烽火があがったのである。
安倍川を渡ってくる軍勢がおよそ五百騎。浅瀬に水音をたててどっと一気に攻めこんできたという報告だった。
範満は仰天した。
「なんということじゃ、備えの軍は居らざったのか」
「飯尾豊前が二百騎、笹村大炊が百騎にて、防戦しておりまするが」
「足らぬ、足軽ども二百をゆかせろ」
もう今川屋形――府中の城中は混乱で命令の声も聞きとれぬほどになっている。
こういう急襲に備えての手はずだったが、いざとなると、やはりものの用に立つことが少ない。
「何としても、三ノ木戸から内には入れまいぞ、鹿柴を増やせ。前面に積みあげて、近寄る敵は、屋根の上から射よ」
もともと義忠の右腕として、自他ともにみとめていた武

将である。
　巧みに府中を掌握して、今川を名乗っているが、少し肥ったことをのぞけば、昔の範満と変りはない。
「くそ！　伊勢の新九郎とやら、鼠の糞のような流れ者に敗れてなろうや」
　範満には、今川家の血すじという誇りがある。
　これは、ただ血の純粋さを誇るだけではなく、
〃正統派〃
たる、
〃武門の血〃
の意識であった。
　昔から、武門で天下を掌握するには、源平藤橘でなければならぬとされている。
　それも武辺者の先祖と伝統を意味する。つまり、武辺者の子は武辺であるはず、という、強さへの期待が根本にある。
　範満の自惚れも、その点にあった。
（今川家では、おれを立てるのがもっとも当を得ているはずだ）
　その自負が、竜王丸を斥けて、義忠の後を継ぐという正当性を訴えさせた。
　ただ、今川家の当主におさまりたいというようなものではない。
　したがって、狼狽から立ち直れば、かれは一箇の武将としてその力を発揮する。
　具足に身を鎧うと、肥馬にまたがって、大薙刀を手にした。
「よいか、この府中は、われらのものじゃ、うぬらのものでもある。敵を一歩も寄せつけるな」
　おう、おう、と雷同の声があがる。
「伊勢の新九郎などという他国者に、この駿河府中を犯させてはならぬ」
　あえて竜王丸の名を口にしないのが、かれの巧妙なやりかたであった。
「たたかえ、首一つ、銀百匁じゃ、兜首は二十人の頭になすぞ、一番首は百人の頭じゃ、新九郎の首には城を与えるぞ」
　わーっ、わーっと、雑兵たちのどよめきが、府中の城をゆるがした。
　今川新五郎範満を支えるのは、おおむね今川一族であり、小鹿系の者が主流となっている。
　一族にして重臣の瀬名陸奥守、新野、入野、名古谷が輔佐して竜王丸に対抗しているのだ。
　瀬名陸奥守には、こんな逸話がある。
　竜王丸の父義忠が若年のころ、鞠子の観勝院に三十人ばかりの浮浪の侍が宿泊していたので身元を訊そうとすると、

反抗して暴れた。三河の野盗たちの逃れて来た者であった。
　義忠は血気の盛りであったのでただちに自ら馬を馳せて矢を放って、賊三人を斃し、二人を生捕りにした。
　ためにその余の者は自殺してしまい、一人も遁れる者はなく、平定されたという。
　このとき、陸奥守はまだ源六郎と言い、義忠より年少だったが進み出て諌言した。
「臣聞く君子は刑人を近づけずと。然るに今、君は畏くも御身を軽んじ、僅かに二、三十人の士卒に向い自ら馬を馳せて、征矢を射給うこと、数国を領する太守の所為とも思えず、豈、将に将たる大将の恥辱にあらずや」
と。
　さらに語をついで、
「自今以後、少しく意を加え給わずんば、禍必ず肘下に生ぜん」
　義忠は、その言を善しとして、改めるに吝かではなかったが、その言葉通りに、遠州で賊の兇刃に斃れてしまった。
　こんな場合は、忠言をいまさらのようにほめそやす者と、
「兇事を誘ったのは、陸奥守ぞ」
と、誹る者がでてくる。
　陸奥守を見る北川どのや竜王丸の眼も冷たいものになってくる。自然と、うとまれる存在になってくるのだ。
　そこに手をさしのべたのは、範満の巧妙さである。
「忠言は耳に痛いゆえに効く。苦い薬とて同様よ。君主たるもの、それを受け入れて身を慎む雅量がなくばな」
　いかにも度量の広さを思わせる態度だった。
　瀬名陸奥守が、範満の強力な片腕となるにしたがい、そのシンパたちも、範満の傘下に集まってきた。
　たしかに範満にとって頼みある家臣たちであった。
　範満を支える者には、甥の孫五郎という膂力百人力の若者もいる。幼時から怪童の名をほしいままにした男である。
　その腕に力瘤を作ると、三尺の紐では足りなかったといわれる。誇張があるにしても、凄まじい太さである。二十人力ほどはあったかもしれない。孫五郎が上半身裸で、大薙刀をふりまわすと、刃先にかかってはね飛ばされる者たちは、まるで藁人形のように見えたという。
　この孫五郎が安倍川では奮戦して新九郎方の侍五騎を討ちとっている。
　海から押し寄せた軍船の夥しい篝火は、風に煽られて、まるで海面が火に蔽われているかのような凄まじさだった。
　軍船や兵員の数よりも、その炎に府中城下の人々は圧倒された。
　えんえんと空を焦し、海を灼いて陸地に迫ってくる火は、そのまま、府中の街をも焼き尽くす勢いだった。
　海辺の漁師の家は、その熱風に煽られて、いまにも発火しそうなほどだった。

海岸にもうけた鹿垣（ししがき）から、火矢を飛ばして、延焼させようとしたが、海風は無情にこれを吹き消し、あるいは、勢いをたわめてしまう。
大半が、船へとどかず、水面へ落ちてしまうか、あるいはとどいても、すぐ水をかけて消されてしまう。
「潜ってゆけ、船をひっくりかえすか、船底に穴をあけろ」
水軍の大将は潜泳に自信のある者たちを促した。
刀を咥え、数十人が、海中へおどりこむ。
このあたりの海底の様子には、みんな馴れているのだ。
「もう、そろそろ届くころだが……」
と、固唾をのんで見守っているうちに、突然、先頭の船の上に、ぱっと、火の輪が舞い上るのが見えた。
篝火を積んでいるのだ。その船ががくんと揺れた。
数人の者の手がにゅっと海中から出たと思うと、舷側にぶらさがるように、力をかけたのだ。
「あっ、海坊主」
と、恐怖の叫びをあげた者さえいる。
「何じゃ、敵だあ」
あわてて、刀や槍をとりなおす間に、船は大きく傾き、篝火が炎を散らして、雪崩れ落ち、船はひっくりかえった。
「敵の水軍じゃ、用心せい」
狼狽するうちに、次々と船はひっくりかえされる。水中で組みうちの死闘がはじまる。
中には、船底に穴をあけられ、ぶくぶくと沈むものもある。
上からは槍や薙刀をふりまわす。舷側につかまったまま、両腕を切り放された者もいる。
十本の指を、さっと一薙ぎにされて、もがいているところを、上から突き殺された者もいる。
凄まじい海上の戦いは、しかし城方にとって、価値はあった。
先鋒の船が沈みかけたり、ひっくりかえったりしたのが、前進の邪魔になっている。
同志を助けなければならないし、混乱して、攻め寄せることはできなかった。
大量の船団で一気に押し寄せるから、効果があるので、一艘二艘抜け駈けしても、これは火矢を浴びて、渚で包み討ちにあってしまうのだ。
目ざましかったのは、荒木兵庫の働きである。
三間柄の長槍を膂力にまかせて自在に操る兵庫は、安倍川の浅瀬を腰で馬を馭しながら、一気に渡ると、軽々と長槍をふりまわして、群がる敵を薙ぎ倒し突き伏せ、まっしぐらに進んだ。
雑兵たちははね飛ばされ、騎馬は薙ぎ倒され、あるいは主人をふり落して、空尻（からしり）で走りだす。
「あいつを射よ、射よ」

鹿垣をたて、鹿柴を積んだうしろから、弓隊は一せいに、矢を浴びせた。
だが、運がいいというのか、何かの魔力がはたらいているかのように、矢は悉くかれのからだをそれて、一矢も、致命的な傷を負わせるには至らない。
強風のせいもあった。海から吹く風は、志太の高草山山塊に遮られて北東へと吹きつける。
府中勢にとっては、最も射にくい風向きだった。弱矢は、風に流されて方向がそれ、強矢も、目標にとどいても、力が削がれた。
鎧にあたっても力がなければ掠めたり、折れたり、虚しく落ちてしまう。兜に当っても、滑り外れてしまうし、荒れ狂う兵庫の勢いに恐れたように、はね飛ばされ、僅かに刺さったのも、兜のしころや、肩鎧に突っ立つくらいで、傷を負わせることもできない。
その鬼神のような働きに、麾下の者たちは、
「大将につづけ」
と、気勢をあげて、どっと、攻め寄せる。
府中勢の中に聞えた大力の者はいた。〝馬担ぎ〟と称さる牧ノ谷大六という壮漢は、洪水のときに、馬の四肢を肩にかけて、胸まである濁流を渡ったといわれる強の者である。
この馬は範満の愛馬で、殊に寵愛していたので、洪水に流されかけたのを助けたわけだが、以来、大六には〝馬担ぎ〟の渾名がついた。
それには驚きと呆れと、いささかの嗤いが含まれている。
むろん、これほどの大力を持つだけに大六は単純で、稚気がある。
このときも、
「あやつごと、担ぎ倒してくれるわい」
と、具足を脱ぎ捨て、鹿柴のかげからふいに飛びだして、馬の腹の下に入った。
「や、なんじゃ、こやつ」
血どろになった長槍を振りまわしていた兵庫は、あわてて、馬の下を見た。長槍はこんなとき、工合が悪い。遠くの者は仆せても、足もとは刺し難い。
しかし、それ以上に驚いたのは馬だった。腹帯をぐいと摑まれたのだ。脚で蹴ろうとした。その脚を摑まれ、はげしく嘶いて、棒立ちになった。
槍の持つ殺傷力は、刀に勝るものがある。遠距離の者を薙ぎ倒し、突き飛ばし、はね上げ、叩き伏せることができる。
その有効度は、短い刀の二倍三倍のものがある。だが、槍には、鍔がない。
殺傷したことによって、穂先にべっとりとした血汐は、振りまわすことで、一部は宙に拡散するが、一部はぬらぬ

らと柄の方に流れてくる。
千段巻、いわゆるケラ首のあたりに澱む程度のうちはいいが、多数の者を倒すと、どうしても、長柄まで朱の瓶に浸ったようになる。
血が手もとまでくれば、どうしても、滑りが気になって、力が入らない。そういう欠点がある。
槍つかいの巧拙は、長さを生かすとともに、いかに短く使うかにある。
熟練した者の使うさまは〝手妻つかいの如く〟三間の長さを一尺に見せ得る、とある。
手元にひき――手繰りよせるとき一尺ほどにまで見える。その自在に長短に駆使することによって、群がり寄る敵に対することが出来るのだ。
荒木兵庫の場合、槍つかいの巧みさの点では、さしたることはなかった。力にまかせ、度胸で暴れまわる。
危険を恐れないことで、危険を避ける――という戦国武辺者の行動が、かれを生かしていたのである。
大六が馬の腹の下へ飛びこんだのは、その槍つかいの呼吸の隙を衝いてのことだった。さすがの兵庫も仰天した。
「こやつが、何をする」
槍を取りなおして、刺そうとしたが、手もとは滑るし、逆持ちすると、左右から槍が伸びてくる。
それらを打ち払い、突き退けながら、石突で突きのめそうとしたが、馬が棒立ちになって、危うく、兵庫は落馬しかけた。
一度は耐えた。槍を持ったまま、手綱をつかんだ。
が、二度目に、ふたたび、嘶きとともに、馬が暴れて棒立ちになったとき、兵庫は、もんどりうって、落ちている。
「やったぞ」どよめきが、周囲に起った。
鬼神のような武者が、馬上から転落したのだ。同時に、どうッと、馬も横倒しになっている。
〝馬担ぎ〟の大六は、この荒業に呼吸一つ乱さず、脇差を抜くや、兵庫に躍りかかった。
落馬の打撃で腰を痛めた兵庫は、なおも長槍は放さなかったが、すぐには起き上れない。
「御首頂戴！」
大六の脇差が、咽喉くびに走った。
落馬しても、なお放さない長槍が、兵庫を救った。
倒れたまま、ぱっと、投げ上げている。
得たりや、と勢いこんで飛びかかってきた馬担ぎの大六の胸に、三間柄の槍が、どーんと当った。重量がある。十五キロは下らない。
胸を殴られたのと同じだった。並みの体格なら、ふっとぶか、下敷きになっている。巨漢の大六だから、たじたじとなっただけだった。
が、次の瞬間、兵庫は、鎧通しを抜くや、仁王立ちにな

った大六を下から突き刺していた。
「うわあーっ」
脇差を振りかぶったまま、のけぞった。
殺到しかけていた雑兵たちが、これを見て、たたらを踏む。兵庫は槍をつかんで、立とうとしたが、腰が痛くて起き上れない。
「殺れ、大将首じゃ」
功を競った者たちが、あるいは手槍を、あるいは打ち刀を閃めかして殺到した。
「ぬ！　来い」
漸く身を起したが、腰の番でもはずれたように、立てないのだ。
鎧だけでも重いのだ。兵庫は片膝立てただけの姿勢で槍をかまえた。
「この川が三途の川となるか、うぬらも共連れじゃ」
地上の草を払うようにして、ぶうんと、一薙ぎすると、数人が双足を薙ぎ払われてばたばた倒れた。
が、あとからあとから、敵は増えてくる。
兵庫は覚悟をきめた。
そのとき、疾風のように、黒いかたまりとなった騎馬勢が駈け寄ってくるのが見えた。
白い旗差物が夜風の中ではためき、母衣がふくらんで、疾走を助けているように見えた。
まだこの時代は、母衣を用いる武者が多かった。
いうまでもなく、母衣は背中に、上下、千鳥掛けにさした緒の間に組緒を貫き通し両方で結んで、つまり空気の袋を背負うような恰好になる。
これに家紋を染めたり、八幡大菩薩など武神の名を書いたり、中には死生一如と観じて、経を書いたり、陀羅尼を書いたりした。
〔武家名目抄〕によると、
――（母衣は）専ら甲冑の輔として矢石をふせぐの具なり――とある。
背後から矢や石は、空気抵抗で、身体にあたらない。
きわめて原始的だが、武辺者は大たいおしゃれで、これも風俗的に美観に発展させている。母衣をふくらまして走る騎馬武者の姿は美々しく勇壮なものである。
鉄砲の伝来と発達がこれを役立たなくするまでつづいたのである。
母衣にも変遷がある。
古いころの母衣は前説の通りだが、後になると、大きな竹籠をすっぽり包んで、串でもって鎧の背――押板というところに差すようになっている。
これは、往昔の母衣が、一種の挿物化したわけだが、これを挑灯母衣、あるいは籠母衣と呼んだ。
武辺者たちはただ殺人力を誇示したわけではない。

武者振りにも気をつかっている。
馬に乗るにも、恰好よく乗りたがったし、兜を猪首にかぶるにも、前廂と目との加減にそれぞれ意を用いた。
母衣を背負うにも、その武者振りへの留意がある。
いま――
その武者振りをきかせた騎馬の一隊が、長槍や薙刀を持って、荒野の葎を刈り進むがごとく、攻めこんできたのだ。
「われは大道寺太郎源ノ高季」
「在竹兵衛源ノ貞行ぞ」
「これは山中才四郎藤原ノ金村」
名乗りはどこまで本当かわからない。大音声の叫びは、しかし敵を威圧し、効果をあげるに充分だった。
これらの名前が、新九郎麾下にありとは、すでに衆の知るところである。かれらの顔を知っている者もある。
嘗て府中の今川屋形に在るころ（短い期間ではあったが）口をきいた者もいる。いずれも諸国を放浪して、戦いの経歴が長い。
伊勢ノ新九郎とは血盟の仲だという。
一貫二貫の恩賞金目あての参軍ではなかった。そこに強みがあった。
縦横に駈けちがい、突きまくり斬りまくり、暴れまわる武者たちに、今川勢はひるみ立った。
この手には、関口左京亮景良と名古谷大膳大夫の軍勢が主核をなしていたが、蹴散らされて、どっと崩れ、たちまち敗走しはじめた。
「追え、追撃じゃ」
「府中の城へ突っこめ」
まっしぐらに、新九郎の先鋒は、もとの今川屋形、府中城へ押し寄せている。
あとにつづくのは三浦次郎左衛門、由比民部の軍勢で、その勢いは一気に城へ攻めこみ、蹂躙するかと思われた。
が、伏勢がいた。
賤機山の山頂山腹に、灯もともさずに待機していた入野修理介の軍勢が先鋒と後陣の間に、どどっと、山が崩れるように、雪崩れをうって、駈けおりてきた。
逆落しの奇襲であった。
「わっ、山津波だあ」
たちまち混乱が起った。
その混乱を見た城の前衛の一隊が、今だとばかりに、逆襲して来た。
「深入りしすぎたぞ」
「退け、退け」
大道寺太郎らは、馬首をかえそうとしたが、そこもすでに敵勢に盈ちていた。
退路を断たれた大道寺太郎たちが、その場から脱出できたのは新九郎が手勢を率いて駈けつけてきたからだった。

韋駄天の姿を見たとき、太郎は助かった、と思った。
その手の大鉞が一振りされるたびに、血がはね、骨が哭き、首が飛んだ。
間もなく、牛次の姿が見え、その輩下の足軽たちが突っこんできた。
新九郎の大音声が聞えた。
「伊勢ノ新九郎長氏だ、討ちとって手柄にせよ」
もとより、敵勢の関心を集めることで大道寺らを救け出そうとするためだった。
俄然、かれらは刀をとりなおした。
「やあ、城首ぞ」
「あやつを討ちとれば、一城にありつけるぞ」
「ええい、討つのは、わしじゃ」
腕におぼえのある者はもとより自信のない者までが、万一の僥倖を狙って、襲いかかる。
「雑兵ばらが、推参な」
新九郎の大薙刀が一閃するたびに、血しぶきが夜の虹を描き、首が左右にはね飛んで、なかまに嚙みついた。
「降参する者は許すぞ、刀を捨てる者は降人にしてくれるぞ、今川家の正統たる竜王丸に刃向うまいぞ」
新九郎の声は夜の修羅場に、とどろき渡った。
これはたしかに効果があった。
心なくも範満方についていた者や、新九郎の勢いに恐れをなしていた者たちが、ばたばたと刀を捨てて、膝をつく。
大道寺らが血路をひらいて安倍川川下へ逃れると、新手の三浦、朝比奈の軍勢がくりこんでくる。
「賤機山を乗っとれ、浅間ノ社を陣地にしろ」
混乱の中で、新九郎は軍配をふるって指示した。
もとより、地ノ理は心得ている。敵といっても、同じ家中だったし、駿府はわが家の庭のようなものだ。
三浦の手ノ者は浅間神社へ走り朝比奈の軍勢は賤機山へよじのぼる。
すでに山頂には少数の者しか残っていない。たちまちに朝比奈勢は山頂を確保した。
そうなると、浅間神社の範満勢は、あるいは降人となり、あるいは脱けだした。
こうして、一方の拠点を得たことは、府中城を挾撃するのに幸いな地ノ理を占めたことになる。
これから凄絶な今川家中の死闘が連日、つづくことになる。
五年間の沈黙と静寂を破っての攻防は、熾烈だった。
その攻防は、一進一退はなんと二ヶ月あまりもつづいたのだから、いかに、両者が争い、また多くの死傷者をだしたかわかる。
そして、駿府の城は漸くにして、新九郎の占拠するところとなり、範満は沓谷の古巣へ引き上げざるを得なくなっ

たのである。

沓谷の城は、嘗て、今川屋形の奪取と、今川当主の椅子を狙って劃策したところである。

ここには、甥の孫五郎を入れておいた。

城代にしていたのだが、範満は命からがら引き上げてくると、

「是が非でも、城はとりかえさなければならぬ。うぬらも雪辱を忘れるな」

と、一族郎党らを鼓舞した。

勢力はしかし殆ど伯仲していたのである。

新九郎方も、漸く府中城は奪還したものの、沓谷を攻め取るだけの力はない。

この上戦えば、深傷を蒙るだけだった。

この戦さの何よりの難しさは、今川家一族重臣間の勢力が微妙に絡みあっていることであった。

必ずしも力押しだけでは勝利に至らない。

その原因は、今川家という東海一の勢力を構成している一族重臣たちの、複雑な血縁関係にもあった。

「今川家のために」

というスローガンは共通している。

したがって、焦点は、今川（小鹿）新五郎範満と、前太守治部大輔義忠の血をうけた竜王丸、のいずれを立てるかにある。

それは今川家の社稷を思うならば、一時の感傷や私的な利害で云々できるものではなかった。

駿遠の国守たる家に生活を依存している者は多い。

直接的には数千人数万人、その領民まで入れると、数十万人が影響を受ける。

誰が太守になるかで、家臣はもとより、領国一円の禍福が決るのだ。

この五年の間で見るなら、範満の勢力の及ぼすところ、（それは、ほぼ駿河の半分を占めていたが）悪政の結果で、怨嗟が満ちている。

悪政は一に苛酷な税にあった。

かれは、ある意味で理想主義者でもある。ただ、そのやり方が強引で、領民の実情を、斟酌しようとしない。

たとえば、城壁を厚くするため、牛馬一頭につき、いくらという税を課し、濠を深くするため、鍬鋤一挺につき、いくら、と布令をだす。

生産が増えているわけでもないのに、税金だけは、どんどん増える。

領民たちの生活が圧迫されるのは当然だった。

「範満を仆さなければならぬ」

現状を憂える者は一様にそう思っている。

新九郎に加担する者は、いずれも、その使命感に駆られてのことだった。

「竜王丸ぎみが府中城の主になれば」

苛斂誅求などあるまい、と望みを托している。

この今川家の長年月にわたる内訌は、当然、四辺に影響を及ぼさずにはいなかった。

塩湯の客

駿河の府中から、四里ほど東へいったところに、興津という村里がある。

ここの城主は三浦次郎左衛門であるが、次郎左衛門が、新九郎方について以来、範満の軍勢に城を攻められて、陥されている。

三浦一族は興津川上流へ走り、いまの富士宮市のあたりに山砦を構えて拠っている。

もともと興津というところは、山がせばまって、殆ど、興津川の下流流域と浜辺くらいにしか平地がない。

東海道を西から下って来た日蓮宗徒が身延詣りするには、ここから道がある。

いわゆる甲州身延山道で、小さな法華題目堂があって、道標となっている。東から来た者は、富士川沿いに芝川を経由して登るのだ。

その方が道がいいのだが、何よりも興津を小さくしてい

るのは、由比との間に横たわる薩埵峠である。
　これは宇津谷峠とともに、東海道山三難所の一つだが、秋色の深まった山中を、いましも、東の麓倉沢からのぼって来た旅人がいる。
　素走っこそうな若者を一人、供に連れただけの立派な風采である。
「聞きしに勝る嶮峻じゃな」
　呟きながら、一番坂、二番坂、蜂が沢と登ってきて、漸く峠へ出た。
「やれやれ、ここが頂上か。相当な難所だな」
「お疲れでございましょう」若者は荷物を置くと、ひざまずいて、「足など、お揉みいたしましょうか」
「かまうな、乙次。大したことはない。まだ、わしも若いつもりだ」
　とんとんと、足を踏みしめて、その男は、鼻下のきれいに刈りこんだ髭をなでた。
　若いといっても、四十は過ぎているにちがいない。その面貌は、するどく光る眼と情熱的な唇が、武辺というよりは知性をあらわしているが、中肉中背の体軀にもかかわらず、自信に満ちたものだった。
「ほう、ここまでくれば、富士が嶺はまたひときわ格別だのう」
「絶景でございますな」
　乙次も汗拭く手を止めて、東のかなたに目をやった。
「富士の姿は、嶽南百態とか申すの。南側から見て美しい姿が百様に眺められるというが、さて、絵にうつすとなると……」
　巻書をとりだして、筆をかまえたが、絵を描くのではなく、歌でも案じているようだった。
　そのとき、西の方から、行商人らしい姿が見えた。
「人がくる」と、旅の武士は呟くように言った。「用心せい」
　向うから来たのは連雀――とも称される行商人だった。
「ほう、ここは好い眺めですわのう」
　行商人は二人を見ると、話しかけた。
　近よってくる間に、さり気なく二人を観察していたらしい。
　この薩埵峠は難所だけに山賊が出没する。もっともこの時代は、土地を支配する武士たちと、山賊の間に、大して差はない。
　力のない良民にしてみれば、奪われるという点では同じことだった。
　その行商人は、二人が旅人ではあるが、身なりも悪くないし、態度から見ても、心配ないと思って放心したのであろう。
　どっかりと背負った荷をおろすと、青竹の筒をとりだし

た。水筒らしい。栓を抜き、やはり竹の輪切りにした盃にそそいで飲んだ。
「ああ、甘露々々、いかがでございます、さきほど、岩清水を汲んできましたので、まだ冷たい。はい、生きかえる思いでございますよ」
「忝けないが」と、武士はふりかえって、「結構だ。わしらも所持しておる」
「左様で……」強いて奨めずに、腰へもどすと、「どちらからお出でで」
「あっちだ」東のかたへ、顎をしゃくっただけで、「おぬしは府中からか」
「はい」
「戦さで大変であろうな」
「はい、ここ二、三日は、睨み合いのようですが。全くいつになったら終ることか」
「………」
「わしらにしてみれば、どちらさまが勝っても負けても同じですからのう、早よう商いが出来るようになればよいので」
「商いもできぬか」
「何せ、品物が、品物ですから」
　かれは、背負荷は、布だと言った。
　直接的には戦さに関係ない。戦さで儲かる品ではない。
　こんなことなら、いっそ〝弦召そ〟にでもなった方がいいという。
　弦とは弓の弦である。弓に張る弦を売る商売だが、弦を作るのは、一般的な加工ではなく、また売るのも、普通のルートをたどらない。曲げものの櫃のようなものに入れて、乞食のように門付けしたりして歩く。
　多くは戦さで不具になった者が同情をひくかたちで、武士の家などを門付けしたことなどから、そういう風習が出来たのかもしれない。
　この行商人の言い方には、そんな乞食のような商いでも、戦さ道具を扱ったほうがいいという気持があらわれている。
「これから府中へお出でになるので？」
「そうだ」
「そら大変じゃ、まるで死ににゆくようなものですぜ」
「ははは、私は戦さしにゆくのではない。歌詠みだからのう」
　武士は軽やかに笑った。
　歌詠み、と言われて、布売りは、あらためて、武士を見た。
「はあ、左様で」
「連歌をな」
「ははあ……でも、連歌をなさるお武家衆は多うございますよ」

「それはそうだ、当代の流行りだからな」と、武士は柔和な微笑を消さない。「だが、わしのは、そこらの者の歌を弄ぶのとは違う」

自信あり気な様子だった。

「古くは、この山は、いわき山と申したそうだな」

と、布売りを無視して、供の乙次に話しかけている。

「一名、富士見山ともいうが、なるほど、そう称うにふさわしい」

「もし、お前さま、歌詠みでござらっしゃるなら、宗長さまを御存知か」

「名は聞いている」筆を走らせながら、武士は答えた。

「宗祇の弟子であろうが」

「へ？　よく御存知で」

「宗祇は自然軒と号し、見外斎とも称しているな。もともと紀州の生れで猿楽の飯尾某の子で、幼きころ、仏門に入っている……」

すらすらと、こう述べた。

自然軒宗祇の名は当代に遍ねかった。いつの時代でも、流行り廃りはあるが、この時代ほど、連歌が盛んだったことはない。もともと連歌は、相当な教養を必要とするが、何にでも巧拙はあるように、貴賤貧富のきらいなく、人々は楽しんだものだ。

宗祇はしかし、連歌の道に入ったのは遅い。もともと幼くして文学を好み、歌を詠むのを無上のこととしたが二十歳を過ぎてから、連歌を修めんとして斯道の権威とされた猪苗代兼載の門をたたいた。

兼載は皮肉な調子でこう言ったという。

「およそ連歌を学ぶには二十年を要す。惜しいかな、そなたはすでに壮年じゃ、十年おくれたな」

「十年の遅れは夜昼兼修してとりもどしましょうほどに」

その言葉通りに、宗祇は研鑽をつみ、兼載の推すところとなって宗匠の地位を得た。宗祇の名は、連歌好みの武将や堂上公卿の間で高まり、後花園上皇の招きを得てその寵を得、〝花の本〟の号まで賜わった。

その宗祇と親しいというのである。

「お前さまの名を聞きたい、さぞかし、聞えたお方であろ」

布売りは態度をあらためたが、武士は名もない旅の者だと言ったきりだった。

「さ、まいろうか、乙次」

筆をしまって歩きだした。

「もうし、お待ち下されや、この峠で富士を詠まっしゃったのなら、その歌をお聴かせ下され」

「わしの歌は軽々とは聞かせられぬがな。こんな歌はどうだ……朝日影さすより富士の高嶺なる雪もひとしお色まさるかな……」

「――ただいまの歌は」

と、暫く行ってから、乙次が聞いた。

「どこかで聞いたような」

「はははは、誰でも知っている。足利将軍義教公が富士遊覧なされたとき、府中で詠まれたものだ」

「左様でございましたか」

「そのときの守護上総介範政の返歌が、紅の雪を高嶺にあらわして富士より出ずる朝日影かな……」

すらすらと暗誦した。

「それに尭孝法師が和した。なおざりの気色ならずに朝日かげ雪にうつろう富士の高嶺は……」

乙次は感じ入ったように首を振りながら、

「よく憶えられるものでございますな」

「歌は心じゃ、文字を憶えるのではない」

「常々、仰せられていることでございますな。したが、われわれ凡な者には、その心が……」

「はははは、心さえあれば、理解できるものよ」

「それはやはり、殿なればこそのことで」

「声が大きい」

柵が見えた。

関所であった。

すでに、ここから先は興津城の勢力になるのか、ものものしく抜き身をぎらつかせた雑兵たちが数人見えた。

「木戸銭をとられるかの」

武士はうすく笑った。

悠然としている。供の乙次のほうはやはり緊張できょときょとしているのだった。

「おい、いずれへ参る」

髭面の大きな男が喚いた。

「山向うへな」と、武士は雑兵たちを見まわして、「山向うの興津とやらに、塩湯があると聞いてな」

「塩湯だと？」呆れたように、みんなは顔を見合わした。

「塩湯は知っている。それがどうした」

「打ち身に効くと聞いたのでのう、入りたいのだ」

「木戸銭を払って貰おう。それから、素姓をありていに申せ」

戦さの最中だから、これはしかたがない。

「武州からまいった歌詠みの宗伯と称う者だ」

「歌詠みだと、ほう、それは面白い、歌を詠んでみろ」

「さあ、弱ったのう、歌というものは、そう軽々に詠めるものではない。まず、気持がな……感動がなくては詠めぬ」

「そういうものか。いや、そこが歌詠みではないか」

「塩湯に浸ってな、ゆるりと、詠みたい」

「こやつが、誤魔化すか。さァ、詠め」

「そう申されるなら、詠むしかないが、おぬしらの顔を見ては、興がわかぬ。箱根の嶮で詠んだ歌を聞かそう。……

箱根山あくる雲井のほととぎす道さまたげの一声も優し
……」
歌のわかる奴もいたらしい。
ほう、と感歎の声をあげた。
「これはいい歌だ」
ほかの者は半信半疑である。
「おぬしが作ったのか」
「箱根に山中というところがある」
「………」
「そこでも詠んだな。こしわびぬ岩がね伝う足びきの、山中暗きならの下みち……」
雑兵たちの愚かな頭にも、噛んで含めるような落着いた声音は効果的に、聞えたようである。
「嘘ではないらしい」と、髭面が言った。「よし、通れ」
昔から山伏や僧侶などの宗教関係と遊芸人は、関所を通りやすい。
弁慶の安宅関の芝居でもわかるように、山伏には修験のための必須なものがある。所持品と教養を見れば真偽がわかる。
芸人はいうまでもなく、芸をさせればいい。
歌詠み、という才覚も、一つの身分保証になるのであろう。
それでも木戸銭は払わされて、この主従は、どうやら、木戸を通った。
峠から西は下りになる。山ノ神ノ平、牛房坂、つづら坂、女夫坂と下って、洞村におりてくるのだが、興津川を渡ってから前述した身延道が右へ折れるようになる。
塩湯は、この河口近くにあった。
宗伯と名乗った関東の男は、その日から、塩湯の客となった。
もとより当時のことで、宿というものはない。付近の民家に宿泊して、入浴賃を払って入るのである。
簡単な丸木の柱で、檜皮で葺いた屋根が乗っているだけで、素通しだから、湯につかりながら、四辺が眺められる。温いから、大釜で沸かしたものを注ぐようになっている。
宗伯と名乗った男は、はた目にも、ただの歌詠みとしか見えないように、悠々と近辺の名所を見物したり、湯を沸かす時刻は、どこからともなくあらわれて塩湯を楽しんでいる。
「今日は三保の松原までまいったが、やはり、清見潟の眺めは、清見寺から見るのが一番じゃの」
などと、饒舌っている。
「このあたり、見るべきものが多いのう。神師ヶ洞などは、まことに面白い……」
塩湯の客は、むろん混浴だが、半ばが、武士だった。
戦さで負傷した人々が、傷の治療にやってくる。塩湯は、

皮膚病や打ち身、骨痛み、などのほか、傷の恢復を早めるという。
かれらは、おきまりの戦場の自慢話に花を咲かせるが、そんな話をさして興もなさそうに、そっぽをむいていながら、宗伯の眼はときどき、ぎょろと動いた。
「おれが一番首をとったときはな、……」
生々しい刀傷で、右眼の下瞼がひんめくれている。凄まじい顔付きの男が言った。
「いつの一番だ」
頭に繃帯をした男がまぜっかえした。
「半月ほど前さ、夜明けに城攻めしたではないか。そら、途中で雨が降ってきたときさ」
「ああ、あの小競合いか」
気が抜けたような調子でその男が言ったので、笑い声が起った。
「なんだ、こやつ！ 何が小競合いだ。あのときは、味方は三十人以上も死んだのじゃぞ」
赤目は肩をそびやかした。
「やい、話の腰を折るな。そのときのことさ、この傷は、一番首をとったときに、前からザクリとやられたのじゃ」
「ほう、ほう、哀れな話さ。みんな泣いてやれ」
「まだ吐かす。左様なことではない、塀を乗り越えようとしたときじゃ、うしろから、刀の鐺をつかんだやつがいる」
「よくあることよ、一番乗りをさせまいとしてであろ」
「おれも、そう思った。ところがさ、そうではなかった」
赤目が、ぎょろりと、みんなを見まわした。
岩をたたんだ湯場には、七、八人入っていた。女人が二人いる。二人とも若い女だった。
赤目の大言壮語は、その女の関心を惹くためだったらしい。
「こっちは一番乗りに夢中だったしな、振りかえったりしていては、前からやられる。放せ、放せ、と、左様さ、二、三度、槍の石突でこづいたかのう。あとから気がついたことだが、なんと……」
「どうした？」
「切り盗られていた」
「何を？」
「鐺をさ。親父譲りの名刀でのう、鐺と鯉口には、金無垢を使うてあったのじゃ」
「ほう、それは、そやつうまいことをやりおった」
おどけた声がまたまぜっかえした。が、その辺が、ほかの連中にも共通した気持だった。
「金無垢の鐺かあ、おれもやりたかったな」
「こやつ！ さては、盗んだのは、うぬではないか」
「はははは、かもしれん」
「やい、出せ、出せ」

湯がはねた。湯の中で二人は揉みあいはじめた。半分、本気で半分、ふざけながらだった。
「やい、よせよせ、はた迷惑だ」
「ははは、やめろ、いまのは冗談(わやく)じゃァ、あ、痛い、傷にさわるな」
「ほんとうに冗談か」
「そうとも、わしが持っている金は、ほれ、これだけじゃ」
おのれの股間を両手で掬うようにして見せた。
それで、どっとまたみんなは笑い崩れたのだが、おもしろそうに見ていた宗伯がそのとき、
「その金なら、わしも持っておるぞ」
と言った。
単純な武士たちだが、他国者にはなかなか胸襟をひらかない。
宗伯の寡黙で温厚な人柄は、湯場にいても目立たないが、やはり、見ず知らずの他国者ということが、かれら土地の者との間に一線を画している。
ふざけているようでも、気をくばっているのは、同じ家中の内紛だからでもある。
戦さの最中でもあるし、下帯をしたまま入るものが多い。
宗伯が、繃帯の男と同じように、股間を露わにして笑いを誘ったのが、武士たちの気持をほぐしたようであった。
「おぬし、聞くところによると、歌詠みだとのう、面白いやつじゃ、ここは長いのか」
「十日ぐらいになるかの」
「どこから来たのか知らんが、早く帰ったほうがよいぞ、戦さがはげしくなれば、このあたりまで矢が飛んでくるかもしれん」
「そのほうが面白い」
「こやつが気の強いことを」
「まだ、このあたり、見たいところが沢山あるのでのう」
「歌詠みというやつは、暢気なことをいう。戦さにまきこまれて、首がすっ飛んでもよいのか」
「いやいや、左様なことはあるまい。わしは、どちらの側でもないゆえな」宗伯はぺろりと顔を洗った。「第一、この戦さが、どういう因縁によるものかも知らんでの」
「ようく、知らんのか」武士たちは顔を見合わせたが、
「そもそもこの戦さはな、伊勢ノ新九郎という、馬の骨が、仕掛けたものじゃ。こやつは、数年前にどこからか、ひょっこり来た奴での……」
新九郎のことを散々にこきおろしはじめる。
ほかの武士たちも、口が軽くなった。悪口というものは、欠伸のように移るものだ。
かれらにとって、今川家は範満が継ぐものという認識が出来ている。それも、すでに五年もの実績がある。
竜王丸が幼年（すでに少年に成長しているが）だったことがかれらの論理を肯定させていたのだ。

「奴らが仕掛けて来なんだら、戦さなぞない、われらも、傷を負わぬでも済んだ」
「なるほどのう、しかし、わしが聞いた話では、五年前に、その竜王丸とか、先代の遺児を追い出して、乗っ取ったとか」
「こりゃ、何と申す、乗っ取りとは人聞きが悪いぞ。七つや八つの餓鬼に政治(まつりごと)ができるものか、わが殿がもっとも先代義忠公に近い……」
「ああ左様か。ところで、お味方の衆というのは」
「それよ、一族の方々は殆ど、御味方じゃ、すなわち……」
泡を飛ばして、力説する。どうせ閑だから、話しだすと、あれこれ際限ない。口外すべからざることまで、饒舌ってしまう。
それに適当に相槌うって聞いている宗伯だった。
その女のことは、はじめから宗伯の気にかかっていた。
若い女である。小袖を着ているときはすらりとした姿に見えるが、裸になると、見事に盛り上った胸や、丸く突き出した臀のかたちに女盛りが匂っていた。
この女が湯の中にいるとき、武士たちの自慢話は一段と誇張されるようである。
女は口数が少なかった。男たちが何かと、話しかけても頷くか顔を振るか、殆ど言葉をかわすことはない。
執こく冗談を言ってまつわりつく者もあったが、女は軽い笑いで、巧みにそらしている。相手を怒らせるほどの、ねんねでもない。といって、すれた逞しさを持っているわけではなかった。
どちらかというと淋しい顔立ちだが、立居振舞いに品がある。
一人の老人の付添いというふうに見えた。父親なのであろうか、いかにも壮年のころは、ひとかどの武士であったとおぼしい肩幅の張った老人であった。
老人は杖を突いていて、きちんと湯に入りにくる。女は、いつも付添っている。
自分からは多く語らない。宗伯と同じように、武士らの話を聞いている。
宗伯がこの父娘らしい一組に注目したのは、かれ自身の目的意識に似たものがあったからだ。
「父娘かな、あれは？」
と、従者の乙次と話している。
「多分、左様でございましょう」
「そちには、そのように見えるか」
「はい」
「それなら、他の者も、そう見るだろうな」
「はあ……」

「父娘にしては、おかしい」
「え？　それでは」
「わからぬ。が、尋常ではないな」
　宗伯にも、それ以上は、まだわからなかったのだ。
　その女のことは、みんなが噂していたから、宗伯も名はおぼえた。
〝おりょう〟
という。
　おりょう、といえば読者は記憶していよう
鎧師明珍高義の娘で、曳馬の城で新九郎と別れたままになっている。
　新九郎が見たら驚くに違いない。何故ここに来ているのか。それに、宗伯の眼に狂いはなかった。たしかに、父娘ではない。
　湯の中では口をきいたことはない。宗伯が言葉を交したのは、興津川の岸だった。
　おりょうは川の流れを見ていた。ぼんやりと見ていた。紅葉が一葉、川面を流れてくる。
「おりょうどの」
　宗伯は声をかけた。静かな声だった。
　おりょうは川岸にしゃがんだまま振り向いて、宗伯を見上ると、無言で微笑した。
「何をしているのだね」
「水を……見ています」
　おりょうの言葉は素直だった。
「水を？」この返事は、いささか意外だったのである。
「川水が、何か？……」
「いいえ、ただ……川の水は、こうやって、百年も二百年も、いいえ、もっとずっと前から、流れているんですのね」
　しみじみとおりょうは言った。
「それはそうだ……」
　こんな娘が、年寄りじみたことを言うとは、思いがけなかったので、宗伯は、まじまじとおりょうを見た。
「若いのに、妙なことに感心しているのだな」
「若くはありません」
　また微笑が答えた。そこには淋しい翳りがある。
「そうか、私には、そなたはまだ二十歳そこそこにしか見えぬが」
　そう言われると、さすがに、年齢は口にできなかったように、おりょうは、強いてそれ以上は言い張らず、また流れに視線をうつした。
　それから、思いだしたように、
「歌をお作りになりますの？」
「ああ、少々な……」
「歌は、わたくしも好き」
「ほう、左様か、それは頼母しい、話が合うのう。どうも、

まわり中、がさつな者ばかりで、歌の心など解するとも思えぬ。気が滅入っていたところだ」
「いいえ、わたくしは好きなだけでございます、とても詠むなどとは……」
　そんな態度も好ましいものだった。
　おりょうが仕えている老人が、父親か主人なのか気になったが、宗伯はそこまで聞くのは、立ち入りすぎるような気がした。
　不安でもあった。聞いてはいけないような。聞いてしまえば、もう取りかえしがつかなくなるような、不安を感じたのだった。
　そのときは、それ以上のことはなかったが、宗伯は、おりょうに惹かれるものを感じた。
　それから、湯場で見る、おりょうの肌が、眩しいものに見えてきた。
　着衣を木の枝や丸太の柱（それには腕木が打ちつけてあった）にかけて、湯へ入るとき、おりょうは小腰をかがめ、前を手拭いでおさえて、入ってくる。
　その恥じらいの姿が、可憐で、宗伯の壮軀にふっと血が疼きのぼるのだった。
　むろん、そんな美しい裸身には、武士たちの眼も、けものめいた光を放ってくるのである。
（危険だな、これは……）
　案じた通りの事件が起ったのは、それから間もなくだった。
　また合戦があったとみえ、三十人ばかりの怪我人が送りこまれて来た晩だった。僅かの怪我でも、戦さに嫌気がさしている連中は、重傷の顔をして、やってくる。
　興津には、その男たちを目あての女が多く集まっている。戦場の男たちは、明日知れぬ命の洗濯に、酒や女に散財する。
　川べりに掘立小屋が思い思いに建っていて、蓆のれんから、化粧の女が、黄ろい声で男を誘う。
「あれ、そこのお武家さま、お出でなさんせ、たんと可愛がってあげますゆえ」
「もうし、腕を怪我した御方、お痛みでございましょう、介抱してあげましょうぞ」
「槍を担いだ大将どの、なんじゃら、びっこを曳いておいでの様子、あああ、なんと痛そうな、さすってあげましょ、お入りなさんせ」
　白い手がひらひら招く。
　宵闇の中では、どぎつい化粧も、女に飢えた男の眼には魅惑的にうつるのである。
「よっしゃ、さすってくれい、なんぼでさする」
「ほほほ、なんぼ出して下さるのかえ」
「そっちから言え、高けりゃやめる、安けりゃ頼む」

「さあさあ、そのようなことを言わんと、お入りな。いい思いをさせるからに」
　戸口の傍へ寄ってくれば、もう逃さないのが、地獄の入口というわけで、ぐいと引きこまれる。
　どんなに乱暴にされても、男たちはにやにやしながら、
「やい、もちッと、優しゅうせぬかい、銭は払わんぞ」
　などと毒吐きながらも、もつれあって、倒れるのだ。
　こういう小屋での一刻の歓楽には、多くを必要としない。土間に蓆をしいただけのところが多いし、ちょっと手を入れていても板の間にうすべりを敷いたくらいだ。そこで薄い夜具にくるまって、歓を尽くす。
　だが、男たちが一度に集まってくると、女が足りない。あぶれた男たちは、眼を血走らせて、
「ほかに女どもの小屋はないか」
「化粧の女でなくともよいわ、男と女じゃからな」
　と、飢えたけもののように、傷薬の臭いをぷんぷんさせながら、うろつきまわる。
　その数人が、おりょうを見つけたのだ。
「あの家にいい女がいるぞ」
「ほんとうか」
「いま井戸端でな、水を汲んでいるのを見かけた。すらりとした美い女じゃ、白い顔が、なんじゃら花のようにな、匂うようであったわ」
「うふッ、たまらぬ。行こ行こ」
「待て、順番を忘れまい、おれが発見者じゃ、一番に頂く」
　ぞろぞろとおりょうの泊っている家へやってきたのだ。
　おりょうは夕餉を済ませたばかりだった。
　民家に泊っているのだ。いうまでもなく自炊である。老人と二人きりだから、汚れものも少ない。
　食事が済むと老人は、燭台をひき寄せて、一帖の絵図をひろげた。その絵図はこの駿河府中の図面であった。
　かれはそこに何か書きこんだり、戦さ駒を並べたりして、案じ顔になっていた。駒は色分けしてあり、そこに武将の名が書いてある。
「おりょう、今日来た某というやつの話では、杉原右兵衛の軍勢は二千ということじゃったな」
「はい、たしか、そのように聞きました」
　おりょうは桶を抱えて裏へ出た。
　飯の椀や皿などが入っている。井戸で洗うのである。
　井戸端に来たとき、
「水を汲んでやろうか」
　と言う者があった。
　そんなところに人がいるとは思わなかったので、おりょうは、息が止るほど驚いた。
「まッ……だれ？　……」
「だれでもよい。水を汲んでやろうというのじゃ」

　一人ではなかった。二人、三人……五人いた。家の内から洩れる仄明りにも、この雑兵らが、今日来た連中らしいことがわかった。
　記憶のある顔がなかったからである。
「な、汲んでやる、その代り」と、雑兵の一人は、つるべを手にすると、にたりと好色な笑いを向けた。「な、いいじゃろ」
「………」
「可愛がってやる。な、な」
　がらがらと滑車が音を立てた。水をその男が汲み上げている間に、ほかの男が、我慢できなかったように、ふいに、おりょうの腕をつかんだ。
「あ、何をなさいます」
「はは、おれも親切じゃ、薪を割ってやる」
「いいえ、そんな……」
「その御礼を先に貰うかい」
　抱き竦めて、唇を吸おうとした。おりょうは、顔をそむけ、男の手をふりほどこうとしてもがいた。
「ほれ、しっかりせい、伴内、女を放すなや」
「やっちまえ、やり損じると、男の名折れじゃい」
「兜首を三つとった名誉が失せるぞよ、ほれほれ」
　三人がはやしたてる。
　その男は、腰に草摺をつけて籠手脛当に、奈良半晒の袖無し襦袢。それに桃型(ももなり)の鉢金という妙な恰好だった。
　おりょうの軀を抱き竦めた感触に、その男は、もう怺えきれなくなったとみえ、鉢金をかなぐり捨てて、おりょうを押し倒そうとした。
「たすけて！」
　叫びかけた口に手が蓋をした。
「あ、あ……」
　声が聞えたら、老人が出て来よう。雑兵たちはむろん、家人に聞えることを慮っていたのである。片手で口を押え、片手は裾をかき分けようとして、焦っているのだ。
　おりょうはもがいた。声をふりしぼったが、口を押えられていては、ただ呻きになるだけだった。
　口を押えている手に、おりょうが噛みついたらしい。
「うわッ、こやつ、噛みよった」
　男は手を放した。手拭いを腰から抜きとると、ぐいと下半面を蔽ってしまった。
「う、う……うっうッ」
　苦しげな声が、絶え絶えに聞え、しだいに消え細ってゆく。
「おい、強すぎる、女は死ぬるばい、息ばさせちゃれ」
　あわてて一人が言った。
「そうじゃ、おれは死人を抱きたくないけんな」
　そんな声は、もう狂いたった男の耳には入らない。

「おい、止せっちゅのに」
一人が引き起そうとした。が、離れない。別の男が尻を蹴った。が、こたえない。
業を煮やしたのは、最初の男だ。これだけはつるべで水を汲んでやろうとしたのは事実だから、かっとなった。
「やい、こいつ、うぬだけの女じゃねいぞ」
罵りざまに、つるべの桶で、したたかに後頭部を殴りつけたのだ。いかに横着な男でも、これはたまらない。げえっと、蛙が潰されるような声をあげて、ぐらりと崩れた。
「し、死んだか」
殴った奴も仰天した。その隙におりょうは夢中ではね起きていた。
「あ、女を!」
「逃がすなッ」
手を延ばす。袖を掴まれそうになったが、辛うじて逃れた。おりょうは、声をあげた。
「伯父上! 助けて」
家の中へ駈け上っていった。
伯父なる人は、突然、おりょうが駈け込んできたので、吃驚して、立ち上った。
「どうした、おりょう」
「あの……」説明するひまはない。
どかどかと、男たちはあとを追ってきた。
「なんじゃ、うぬらは」
老人は、身をひねって、刀を掴んだ。とたんに、先頭の男が、ぱっと跳んだ。
その面上に、ばしッと、鞘が音を立てた。
鉄輪、鉄鐺の剛刀である。鼻柱が砕けたか、かぼッと血が噴きだし、男が呻きとともに手で蔽った指の間から、だらだらと、血が滴った。
「逃げろ、おりょう」
老人は叫び、すらりと抜刀した。
おりょうは、一瞬、ためらっている。
が、老人がはげしく顔を振って、もう一度、「逃げるのじゃ、早く」と、促すと、
「は、はい、助勢を頼んでまいります」
おりょうは板蔀をあげて、外へすべりおりた。
女を逃すな、と喚く声が追ってきた。夢中だった。うしろを振りかえりもせず、走った。
暗い道だったが、おりょうは走りながら、宗伯のことを思った。
(あの方なら、助けて下さる)
なぜかそう思った。
温厚な歌詠み武士の宗伯がこの場合、血の臭いをさせた戦場帰りの雑兵ら数人を相手に戦ってくれるなどとは、どうして思ったのか。

おりょう自身、その気持は不可解だったが、足がひとりでに宗伯のところに向いた。
宗伯も食事のあとで、いつものように書きものをしていた。それが歌かどうかはわからなかった。
おりょうが戸をたたくと、すぐに乙次という従者が顔をだした。
「おお、おりょうさんじゃないか。どうなさった」
「助けて下さいまし、いま、お酒に酔った人たちが……」
おりょうの着崩れた姿で、何が起ったか一目でわかった。
「戸を閉めろ」
宗伯は手早く書いたものを片付けた。それから灯を吹き消した。
「かようなことがいずれ起るものと思っていた」
宗伯の声は闇の中で聞くと、力強く、頼母しいものだった。
だが、老人を助けに行ってほしい、という、おりょうの願いには、かぶりを振った。
「あいにくだな、その儀はことわる」
「え!?」
「わしには、曳馬の城を助ける義務はない」
あっと、おりょうは息を呑んだ。
闇の中で宗伯の双眸が光ったようであった。
「おりょう」
「は、はい……」
「そなたが伯父と称している男、実は小堀備中守が家人(けにん)で菅沼弥次兵衛……左様であろうが」
「ああ、どうしてそれを」
「乙次が調べたわ」
「あの、あなたさまは?」
その秘密を捜ったとは、一体この宗伯とても尋常の歌詠み侍ではあるまい。
ふっと、闇の中で笑いが揺れた。
「わしのことなどはよい」
「でも……」
「わしは敵でも味方でもない」
その言葉が、一応、おりょうを安心させたのである。が、胸の動悸はまだ止んではいなかった。
おりょうの肩に、厚い大きな手が置かれた。
びくっと、恐れで身を顫わしたが、
「安心せい」宗伯の声は低いが力強いものだった。「敵でも味方でもないが、窮鳥懐へ入れば何とやら申す。まして、か弱い女人じゃ」
「お助け下さいますか」
「指一本触れさせはせぬ」
「あ、有難うございます」
その間に、乙次は戸を固くしめ戸外の足音に耳を傾けて

いた。
「したが、おりょう」
「はい」
「曳馬の城は遠州じゃな。また何として、かようなところに」
「はい……」
「そちの口からは洩らせぬか。ならば、わしの推測を申そうか。小堀は戦さの形勢を案じた上で、効果のよい取引をしようとしたのであろう」
「……」
「戦さの様子を仔細に調べ、小鹿新五郎範満に高く売りつける。左様であろう、口さがない雑兵どもから、話を引き出すのは容易だからの」
「……」
「しかし、まずかった」
「え？」
「身分を隠すために、そなたを利用したことだ」
　宗伯の掌が、おりょうの頬に触れた。指先ではなく、掌で掬うように、ゆっくりと撫であげたのである。
　暗かったが、おりょうは火のように赧くなった。身動きも出来なかった。
「そなたは、きれいすぎる」
「……」
　いいえ、そんなことはありませぬ、と、かぶりを振ったが、なぜか声が出なかった。
「きれいであることは、七難隠す、だが、徒らに、興味を惹かしめる、まずかったな。それが、たった一つのあやまちだ。そして、その一つの間違いが、弥次兵衛の命取りになるであろう」
　宗伯の予言は的中したようである。
　おりょうを逃した弥次兵衛は、その書類を隠すひまがなかったのだ。
　二、三人が一度に殴りこんできてあしらいかねて、その場に倒れた。
　雑兵たちも、殺すつもりはなかった。おりょうの美貌に惹かれてのことだけに、そこまでするつもりではなかったのだ。が、女を逃して、立ちふさがったのだから、これは倒すしかない。
「こやつ、わしらを焦がれ死にさせるつもりか」
「う、う……」
「やい爺、女をどこへやった、どこへ逃げていった。知り人の家はどこだ、言え」
　それでも白状する様子がないと見ると、そこらをかきまわしはじめたのだ。
　対陣配置の絵図が半ば裂けてはいたが、かれらの目を惹いた。

「ぬッ、こやつ諜者だぞ」
「湯治客と見せて、実はサグリに来ていたのか」
　咄嗟のことで、絵図は隠すひまがなかったのである。歴然たる証拠だった。
　弥次兵衛は、血だらけの顔をもたげて、
「あ、それは……」
と、言いさしたまま、あとは絶句した。
　嘘というものは、急には出ないものだ。万一の場合を想定して、色々考えていても、イザとなると、咽喉がつまったように声が出ない。
「うぬ、こりゃァ、陣配図ではないか」
　灯火を近づけて、眼を丸くした男が、
「こやつ、透破じゃぞ」
と、吐きだすように言った。
「やはり、どうも、うさん臭い爺だと思うていたが」おりょうに逃げられた腹いせで男たちは、弥次兵衛への憎しみをつのらせた。「石脇城のまわし者か」
「新九郎の手先であろう」
　その言葉が漸く、弥次兵衛を我にかえらせた。
「ち、違う、わしゃ、違うぞ」顔をねじむけ、嗄れた声をふり絞った。「わしゃ、ただの湯治の者じゃ、石脇城とは、ゆかりはない、まことじゃ、信じてくれい」
「ふうん、信じろと申すが無理というものよ。塩湯の湯治客が、なんとして、かような絵図を書くかいの」
「……」
「この陣配を見やれ、こと細かに人数まで書きこんである。いやさ旗印から、ほれ、何日に勝った負けた、ここからここまで退いたとまで、ううむ……」あまりにも詳しく書かれているので、驚きが先に立った。「詳しすぎて、気味が悪くなる。いやさ、腹が立つ。かような透破はナブリ殺しと、昔から決っているぞ」
　一人が、ぎらりと太刀を抜き放った。
「眼玉をえぐり、鼻を削ぎ落してくれようか」
「ま、待ってくれい、まことじゃ、わしは石脇とはゆかりがない。伊勢ノ新九郎がことも知らぬ」
「知らぬ、だと!?」
「おう、逢うたこともない」
「こやつ！ならば聞くぞ、ここに新九郎が陣と書いてあるのは、何とした」
「そ、それは……」
「申せ」
「それは、陣配というものは、片一方だけでは、どうにもならぬ、両者を書かねば、戦さの様子がわからぬゆえ」
「ふうん、そうか」
「そうじゃとも、左様に書いているのが、何よりの証拠よ、敵でも味方でもない。の、ただ、戦さの様子を眺めて……」

「眺めてなんとする。やい、女をどこへやった」
熊髭の男が、唾を飛ばして喚いた。
おりょうを逃がしたことで、弥次兵衛は一安心している。
あとは、うまくこの場を誤魔化すだけだった。
「どこへ走ったか……」と、とぼけて見せた。「わしゃ知らぬ。ま、左様なことより、この身の証しじゃ。の、わかってくれい、決して、透破、乱破のたぐいではない」
「……」
「かように、両者の陣立てや進退を書きとめているのが、その証明になろう。軍略を究めているだけのこと」
「——うかとは信じられぬ」
と、一人が言った。
「そうだ、透破はいつも口がうまい」
「事実ならば、なぜ隠そうとしたぞ」と、片耳のない男が、ぬっと顔を突き出して、「うしろ暗いところがなければ、隠すに及ぶまい」
「い、いや、何も、隠そうとなどしてはおらぬ」
「いや、した」
そうだそうだと、数人が喚いた。
「そうではない、おぬしらが、理不尽に乱入したゆえ……」
「なんだ」
「その、踏み破られでもしたらかなわんと思うての、それで……」
なるほど、そう言われてみれば、納得がいかないでもない。
「ふうん、何じゃら、うまく言い抜けたような塩梅じゃ」
「いえ、滅相もない、本当のことを申したまで」
連中は顔を見合わして、唇を歪げた。
何やらもやもやしたものが残っている。振りあげた拳の持ってゆき場に困った感じであった。
おりょうのことがなかったら、そのままで済ませたかもしれない。なまじ色呆けになっているだけに、冷静には判断できない。
「とにかく、このままには済ませられん、万一ということがある」
「そうだ、来い」
と、一人が弥次兵衛の腕をつかんだ。
「ど、どこへ」
「陣所だ、来い！」
この興津には、陣屋がある。東方への備えである。
弥次兵衛はそこへ曳かれていった。
こうなると、もう度胸を決めたのか、卑屈な調子はなく、
「左様じゃな、そのほうが、わしも都合よい。おぬしらでは話にならぬ。身分ある者なら少しは話がわかるじゃろ」
「この爺め、へらずロを叩く。陣所で吠え面かくまいぞ」
「なんの、かえって酒でも振舞うて下さろうわさ」

「よしッ、その言葉を忘れるな。打ち首と決れば、おれがやってくれる」
この一行は、すぐ近くで一人の男とすれ違っている。雑兵らは、肩をそびやかして、威嚇的に、その男を見下していった。
弥次兵衛はちらと見て、その男が偶然すれ違ったのではなく、様子を見に来たのだと気がついた。
これは乙次だったのである。

「——連れてゆかれたか」
宗伯は乙次の報告に頷いて、おりょうに視線を移した。
「悪くすると生命がないな」
声は冷たい。宗伯にとって弥次兵衛の生命など、腰の瓢ほどの値打ちもあるまい。
「どうするつもりだの」
「はい……」
おりょうも、急には方策が浮ばない。
逃げるのに精一杯だったのだ。
まさか、老人が捕まろうとは思いがけなかった。
飢えた野獣のような、戦場帰りの兵士たちの欲望は所詮、女のからだなのだから、せいぜい老人は殴られるぐらいのものだと多寡をくくっていたのだ。
それが捕まったとは。
「目的がばれたのであろう」宗伯はずばりという。「ひょっとすると、一命を失うかもしれぬ」
「はい」と、答えたおりょうのほうにも、それほど、衝撃はない。「そのことも、御覚悟の上でございましょう」
「そなたにとっては？」
「むしろ……」
と、言いさして、そんな自分の心に恥じるように、おりょうは目を伏せた。
血のつながりも何も無いし、むしろ、利用されている立場だった。
曳馬城（後の浜松城）の小堀備中守の姦策にあって、押し籠められ、伊勢新九郎の手から切り離されたおりょうは、せっかくの希望も砕かれて、備中守の思いのままにされていたのである。
はじめのうちは逆らったものの、所詮、その掌の中から抜け出せないと悟った彼女は、あきらめた。
備中守はしかし、何よりも野望を優先する。今川家の内紛を幸いと、乗り出す気構えだったが、新九郎と範満の力の差や、現状把握が、まず最初の仕事で、それだけ慎重だった。
腹心の菅沼弥次兵衛を派遣して戦さの情報を蒐集させる。そのためには、湯治客を装い、おりょうを付けたのも、人人の眼をくらますためだった。

備中守としては、加勢するには新九郎側の方がいいはずだが、出来るなら、範満と手を握りたい。

むろん、深謀は、手を握り助勢すると見せて、機会を得て乗っ取るつもりだった。そのためには、新九郎では都合が悪い。

（おれの肚裡の中を読んでいるからな……）

新九郎だけではない。範満にも、負い目はある。寿々女のことがある。

両者とも、したがって備中守は信用がない。そのためにも、戦備を知悉した上で、動かねばならぬ。

弥次兵衛とおりょうは、備中守のその野望のために派遣されてきていたのだ。

戦国時代の女の立場はかなしい。

おりょうが小堀備中守の手から脱け出せなかったのを、誰も責めることはできない。逃げるには、あまりにも、無力だった。

新九郎までが、瞞されたのだ。新九郎だけが、あのとき、おりょうの運命を好転させ得る男だった。その一筋のいのち綱が断たれたとき、おりょうは、運命の残酷さを知らされたのだ。

おりょうは囚われの暗い檻でおもった。

（あたしには倖せは来ない……）

死骸と同じだった。生ける屍だった。備中守から、弥次兵衛と一緒にゆくように命じられても、もうさからうことが出来なかった。

あれから五年の歳月が流れている。

新九郎も自分のことは忘れてしまったろうし、どうせ、もはや何の望みもない身には、危険への恐れもなかった。

むろん、その目的が達成されようが、失敗しようが、おりょうはかまわなかった。弥次兵衛にも、親しみは抱いていない。いうなれば、備中守の手先である。おりょうが逃げ出せぬように、眼を放さない。

かれが捕まったと聞いても、自分の身代りという気はしなかった。憐愍を感じることはない。備中守の命令で透破活動をしていたのは事実なのである。

情報蒐集には違いないのだから、範満に与力する前段階とはいえ、あくまでも未定のことだし、所詮、詭弁ととられてもしかたがない。

「弥次兵衛が捕われた以上、そなたのところにも、手が延びて来ような」と、宗伯は思いをめぐらして、「逃げねばなるまい」

「はい……でも」

と、ためらいを見せたおりょうを、不審げに見て、

「なんだ、弥次兵衛のことが気にかかるのか」

「いいえ、そうではありませぬ。ただ……」

「どうした？」

「逃げることなど、考えていなかったものですから」

そのおりょうの気持の深いところはむろん、宗伯にもわかりようはない。

「捕まれば、申しひらきは利くまい」

「……」

「首と胴が離れようぞ……よいのか」

これにも、恐怖を見せないおりょうだった。

ちょっと小首をかしげて考えこむような風情で、この緊迫したなかで、そこだけ水のように澄んだ静けさが、異様なほどだった。

（この女は、いったい……）

宗伯はあらためて、興味を惹かれたようであった。

乙次がともした灯の仄明りのなかで、まじまじと、おりょうの横顔を見つめた。

あきらめきった女の美しさというか、宗伯の眼を惹きつけるだけの色香すら感じられた。

宗伯の視線を熱く感じたのか、おりょうは顔をあげ、眼があうと、ふっと微笑んだ。

その微笑を、のちまで宗伯は忘れない。

この緊迫した夜気の中でも、こまやかな情感が作用するのは、否めない人間の心ざまである。

「おりょう、どうするつもりだ」

と、言ったとき、宗伯の声はかすれていた。

あるいは、従者の乙次がいなかったら、宗伯の手がどう動いたかわからない。

おりょうにしても、頼母しい壮年の男の体臭を、熟れた女のからだに感じていたはずである。

宗伯が、壮軀に奔りかけた衝動を辛うじて止めたのは、その知性だろうか。それとも、〝歌詠み〟を装った目的意識であろうか。

すでに、おりょうも感じている。

この男が、ただの〝歌詠み〟でないことを。ただ、歌のために、のんびりと旅をしているのではないらしいことも。

いかにも長閑に、それらしく装っていて、そのかぎりでは完璧だったが、冷静に考えても、この塩湯で逗留しているのがおかしい。

府中を中心にして、大きな戦さをやっているのだ。

たしかに、興津は風光も明媚だし、歌心はそそられるにちがいないが、時が時だ。

みやびな歌心など、やはり、戦さとは無関係のところで浮ぶものではないか。

その疑いは持っていたが、おりょうには、この〝宗伯〟と名乗る男が、頼り甲斐のある存在に見えたのは、否めないことである。

「一刻も早く、逃げた方がよかろう」

「……」

「だが、逃げるアテがないというならば」
宗伯が、そこで言葉を切ったのは、おりょうの意志を尊重する気持からであろう。
おりょうは、しかし黙っている。アテがないというのは、本心だったのだ。
「わしが連れて去んでもいいが」
「おねがいできましょうか」遠慮がちだったが、おりょうはそれを望んでいるようだった。「足手まといになっては」
「なに、大したことはない」そうかぶりを振ってから、宗伯は乙次に命じた。「女姿では目立つ、男のものを用意せい」
「はァ、男の姿に？」
「そうだ、わしの着替えがあるであろう」
「髪は、どうなされます」
「髪か、なるほど、長い髪だな」
ちょっと思案をする。おりょうは、他人事のようにこう答えている。
「切っても、よろしいんです。あたし」
当時、女が髪を切るということは大変なことだった。髪は女のいのちとされている。
昔から、この国では、女体の均衡は、あまり問題にはされない。
肌の美しさをたたえる文章は少なくないが、手足の長さや胴のかたちなどについて、言及しているのを、ほとんど見ない。
胸がみごとなのは、いつの世でも、男にとって憧れの対象なのだが、くびれた胴との対象に於ける後世の美意識とは違っている。
細腰――柳腰を珍重される以前から、女性美の標準が違っていた。肥り肉というのも、美女の要件だったのだ。
話がそれたが、こうしたことのほかに、みどりの黒髪は、大いに珍重されている。したがって、若い女が髪を切るということは、仏教渡来以降は、世捨て人を意味していた。
髪を切ってもいい、というおりょうの言葉に、二人は驚いたがしかし、おりょうの言う意味は、少し違っていたようである。
「切ると言っても」
と、言い直している。
「男髪ということです」
と、微笑した。小さな唇もとに皓い歯がこぼれ、なんとなくほっとしたように宗伯は、
「なんだ、左様であろう、仏門に入ると申すのかと思うたぞ、そうであろう、そなたを仏門に入れるには、勿体ない」
それから、促すように、乙次に顎をしゃくった。
着替えの小袖を身につけるために、おりょうは、部屋の隅にいって、裸になった。慎しい動作だった。

帯をとくと、小袖と肌着を肩からすべらせて、腰のところで止め、借りたものを肩にふわりとかけ、それから、下半身にまとっていたものを落した。
白い背中や、腋の下からちらりと見えた胸乳の白さが、宗伯には、かなり蠱惑的だったようである。
あれだけ塩湯で見馴れた肌にもかかわらず、こういう部屋の中で、仄暗いなかで、そして、男ものを着るという緊張のなかでは思いがけない色気を感じたのだ。
まるで、はじめて見る女の裸のような。
それほどではないにしても、おりょうの肌を初めて見たような、一種の感動があったのは、事実なのである。
宗伯は、おりょうの、その、かいま見た裸身に、気を奪われたのが、いかにも、不覚だったように、乙次に強い顔を向けた。
「外を見てまいれ、やつらがもどって来ないかどうかだ」
と、追いだした。
その間に、おりょうは男物の輪ちがい文様の小袖を着込んで帯をしめている。
男ものの小袖を着こんだおりょうの姿は、一層、色気が感じられた。女姿のときは、それが秘められている。
おりょうの心映えは、色香を売ろうと思わない。そういうことを蔑すむ気持が強い。それだけに、一般的には、男の眼を惹くことも少ない。
小堀備中守が、弥次兵衛の目的をカヴァするためにおりょうを派遣することを決めたのも、軽薄なところがないからだった。安心がある。普通の女のように、女の色香を誇示しようとしない。
そのおりょうが男物の小袖を着ることで、かえって隠された艶が出てくるのだ。
「妖しい美しさだ……」と、宗伯は吐息をついて言った。
「わしも出来た男のつもりだが、多少心が動かないでもない」
「………」
「おりょう。髪をどうかせねば、それではすぐわかる」
「笠をかぶっては」
「なるほど、それがよいかもしれぬ」
乙次の笠をかぶることにして長い髪をくるくるとまるめて、笠の中に入れた。
その恰好で出て行くことにした。
「大丈夫なようです」
外の気配を見てきた乙次が囁いた。
外へ出た三人は、星あかりだけを頼りにゆくことにした。松明も持たない。松明の明りは遠くからでもわかる。
三人の影は、暗い木陰の下を拾うようにして東へ行く。
橋を渡れば、坂下になる。薩埵峠は昼間でも困難なところだが、こういう場合は、しかたがない。なんとかゆくつ

もりだった。
その橋袂まで来たとき、寝転んでいた影がむっくりと起き上った。
「いよう、どこへ行く」
酒臭い臭いが夜気にひろがっている。
暗闇を透かしてみると、塩湯でなんどか見たことがある、酒好きの男だった。
「うむ、塩湯にも飽きたのでな」
宗伯は咄嗟に答えている。
「ほう、左様かい」
「では、急ぐ」
「おっと待った」男は鼻をわざとくすんくすんといわせて、
「おかしい」
「……」
「おぬしらは、主従二人だったのではないか」
「む、来たときは、な」
「いまは三人」
「そういうわけだ。ともかく、御免候え」
三人は行き過ぎようとした。
「まあ、待て、女の匂いがするぞ」
女の匂い。男はさらに、鼻を鳴らした。
「ははは、妙なことさ。見たところ、男が三人。したが、女の匂いがするとは……の」首を突きだして、三人をよく見究めようとした。「宗伯どのは、よう見ている。とすりゃ下人二人……どっちが女か。いやさ、どうして、左様なやつしをしたかじゃ」
「……」
「どうじゃな、面妖じゃ、え？　そう思わんかい」
「うるさいぞ、こやつ」宗伯は声を荒げた。こういう男は一喝するしかない。「女なればとて、男姿になって何が悪い」
「いや……悪いとは申しておらんわ、ただ、面妖だと」
「何が面妖じゃ。うぬらとて、祭りでもあれば、米の粉はたいて、女姿になることもあろう」
「う……祭りのときとは、違うわい」
男がたじろいだ隙に、宗伯は二人を促して歩きだした。
「ま、待てやい、女！」
男は臂をのばして、おりょうの小袖をつかんだ。
「あれ……」
よろけるのを、笠をつかんでひき剝いだ。まとめて上へあげた黒髪が、その拍子にはらりと解けて落ちた。
「やあ、おりょうではないか」男は喜びにはずんだ声で、
「わしゃ、前から、そもじを好きだったのじゃぞい」
と、抱きすくめようとした。
傍若無人というか、宗伯や乙次の存在など、てんから無視しているのだ。

おりょうの悲鳴に、宗伯はかっとなった。
「何をいたす、放せ」
「ひっひっ、放せるかい、犬でもつがったら放りゃせぬわい」
その場におりょうを押し倒そうとするのだ。
愚図々々していれば、人目に立つ。あの連中が引きかえしてくるだろう。
弥次兵衛の身元がばれた以上、おりょうも無事には済まない。卑しい連中には、おりょうのからだをなぐさみものにするのに、こんな都合のいいことはないのだ。
「放さぬか」
もう一度、声をかけた。
が、相手が、その様子もないと見ると、
「これまでだ」
宗伯の右肘がつと動いた。
抜刀するや、一足退って、うしろ袈裟に斬り下げていたのである。
野獣の叫びのような悲鳴を奔らせて、男はのけぞった。その手から、おりょうは身をもがいて逃れている。
「急げ、おりょう」
宗伯は促した。
「やつらがくるぞ」
木ノ下闇の彼方に松明が十幾つ闇を焦がして右往左往しているのが見える。丁度、おりょうたちが仮泊していた家のあたりである。
(追手だ)と、感じた。
ほかにこの興津で騒ぎが起るはずがない。
半ば引き裂かれた袖をおさえておりょうは、愚かな男を見た。一刀では死にきれず、地面を掻いてもがいている。
おりょうの眼には、怒りも哀れみもなかった。ただ、愚かだと思うだけである。
「さ、急がぬと」
乙次が、うしろから押すようにして、促した。
やはり、松明の群れは追手であろう。弥次兵衛の言葉の裏づけをとるためにも、おりょうへ魔手を延ばしてきたのだ。
当然、予想されることであった。
獣欲に駆られた雑兵たちにしてみれば、二股かけることができるのである。名分も立つし、欲望もとげられる。こんな有難いことはない。それだけに、意気込みがはげしいのであろう。
三人は橋を渡った。
「軍略から申せば」
と、振り返って宗伯が歌詠みらしからぬことを言った。
「この橋を切り落せば、敵をふりきることができるが」
「はあ、左様でございますな」

「いかんせん、われらの力では切り落せぬ」
「残念でございます」
坂へかかると、宗伯はおりょうの手を握った。
急坂を引っ張ってくれた。ただ山坂というだけではない。ところきらわず、根株が顔を出しているし、うねうねと太い根足が土から盛り上っている。
松明もなしでは、足もとがあぶない。何度か蹴躓いて、転びそうになった。そのたびに、ぐっと宗伯の手に力がこもる。
するどい痛みが、爪先に走る。生爪を剝がしたのかもしれない。が、おりょうは悲鳴をあげなかった。歯を食いしばって、のぼった。
この夜の逃避行が、ふしぎと、奇妙な快感があったことである。
追われる意識というのは、スリリングなものであった。恐怖を感じるよりも、その方がおりょうの気持をとらえている。
万一捕まったら、どんな目にあわされるかしれないのだ。が、それだけに一層、逃げることに、力が出るのか。
〝死〟というものを諦観しているおりょうには、この逃避行が宗伯たちが思うほど、恐れがなかったことである。
死が恐ろしくないことはない。おりょうを恐怖させなかったのは、諦観にすぎない。
あがいても、どうしようもない運命、流れ藻のように、激流のままに流されるしかない自分の姿へ、冷たい視線を向けることに馴れてしまっていたのだ。
むしろ、自分の哀れな姿を、もっともっと虐待されるがいいと、突き放して眺めようとしている。
そうすることで、哀しみから逃れられる。倖せになりたいと希う心は障害に対して弱い。所詮、倖せは得られないのだと諦めてしまえば、哀しみも失望もないのだ。
追手から逃げているのは、宗伯の危機感に巻きこまれたからだといっていい。自然の流れに浮いていたおりょうが、宗伯という男の流れに方向がそれただけのことだった。
そして、どうでもなれ、と投げだしていたのを、夜道を走ることになった。その走り抜けた先に、何があるのか。
その期待は何もない。
いまはただ、走っているだけだった。息を切らし、足を傷つけながら、ただ、坂をのぼる。薩埵峠を越えて逃れてゆく。それだけなのだ。
追手をまいて走るということの昂奮に身をまかせているのだった。
「峠はもうすぐだ」
宗伯は力強く言った。握っている手に力がこもる。
その温かい手を、おりょうは、ふと、新九郎のそれに錯覚した。意識下に新九郎への思いが流れていたのか。

暗い夜道の逃避行という異常な行動が、五年前の曳馬の城の夜を甦らせていた。
(あのとき、新九郎さまと逃げることができていたら……)
思うまいとしながら、おりょうの心の中には、その帰らぬ夢が揺曳していたのではないか。
年配も新九郎に似通った宗伯である。壮年の男の掌の厚みも、思い出を甦らせる作用があった。
「来た！」
乙次があとを振りかえって口走った。坂の下の方で、松明が入り乱れている。
「大丈夫だ、ここまでは時間がかかる」
峠にゆくまで、追いつかれないだろうと、宗伯は断定した。松明の火の大きさで距離を判断するのも、武将の眼である。
難関は峠の木戸だった。
「疑われたらかまわぬ、斬りまくって通れ。乙次、ぬかるまい」
「心得てございます」
「おりょう。これを持て」脇差を渡して、「わしから離れずに、来い。決して立ち止るな。木戸を突破してしまえばこちらのものだ」
「はい」
おりょうはその脇差を腰にさした。木戸が前方に見えてきた。
「御開門ねがおう」宗伯は、夜番の眠りをさますように叫んだ。「急用あって、関東へ罷り越す。夜陰ながら、御開門願いたい」
木戸にいたのは、三人の足軽である。
「なんじゃいまごろ」
松明の火明りが、三人を照らしだした。
おりょうは、うつむいて笠の陰に面てを隠している。
「急用ゆえ、開けて頂こう」
「おぬしは？」
「宗伯と申す歌詠みじゃ。おぼえているはず」
「ははん、そうだったな。思いだした」と、一人が頷いて、
「何じゃら偉そうに歌を詠みくさったのう、去ぬのか」
「左様、急ぎゆえ……」
「あいにくだ。木戸は暮れより明け方まで、開かぬ」
「しかし……」
「開かんな」と、嘲りさえ浮べて足軽はくりかえした。
「朝まで、そこらで眠っていたらどうだ。おれたちも眠い」
と、大きなあくびをした。
「それは困る。急用なのだ。まげて、願いたい」
宗伯は乙次に目くばせした。賄賂をつかませろ、というのだ。こういう連中は、僅かの金で動く。

乙次は心得て、巾着の紐をゆるめた。小粒銀をつかみだした。
「少ないが、とってくれい」
　重立ったやつに握らせると、
「ふん……なんだ、これは」と言いながら、素早く懐中にしたくせに、「とにかく、朝まで、だめだ」
と突っぱねた。酷いやつもいたものだ。
　宗伯は、背後を振りかえった。朝までどころか、百と数えぬうちに、雑兵たちが駈けつけてくる。
「おい、銀子をとって、シラばくれるのか」
「へ？　銀子とは何じゃい？」
「こやつ！　いま懐中にしたものだ。とにかく、木戸を開けてくれい」
「へえへえ、夜明けまで待ってくれい」
げらげら笑って、番小屋の方へ行こうとする。
　突然、乙次が抜刀するのが見えた。からだごと、ぶつかった。脇差が、足軽の腹巻（胴鎧）の合わせ目に吸いこまれた。ぎえっと叫んで、松明で乙次を打ち伏せようとしたが、痛みで、とり落している。
「おりょう、行くぞ」
　宗伯は抜き討ちに、近くの一人を斬った。
　残りの一人が、片手の槍をとりなおそうとするのを、おりょうが武者振りつくように、槍の柄を摑む。宗伯の血刀が、袈裟斬りに走った。
「来い！　おりょう」
　宗伯は走りだしている。おりょうもつづいた。
　殿りに出た乙次は木戸を閉めて縄で縛った。時間稼ぎであった。
　どっと喚声が背後で聞えた。まるで、その声に打たれたように、おりょうは突んのめった。
「あっ！」
　つーんと痛みが走った。生爪を剝がしてしまったらしい。
「ああ、あたし……」
「しっかりしろ」
　宗伯が駈けもどって抱き起す。
「どうぞ、先へ……」
「何を申す、ここまで来て、あきらめるのか」
「かまいませぬ、あたくしのことは」
「かまうさ」と、宗伯は夜の中で白い歯を見せた。「おれが必要だ」
「でも……もう歩けませぬ」
「歩けぬなら、担いでゆく」宗伯は幅広い背をむけた。
「つかまれ」
「でも……」
「ええい、おぶさるのだ」いらだったように、声を荒げて、
「乙次、手伝うてやれ」

「はい。さあ、仰せだ、背をお借りするがよい」
　そこまで奨められては、おりょうも退けない。言われるままに、肩へつかまった。恥しかったが、しかたがない。頼母しく、広い肩幅だった。
　宗伯は、
「うん、軽いぞ」
　ゆすりあげて、左手がおりょうの尻をささえた。
「どんなことがあっても、つかまっておれ」
「はい」
「死ぬときは一緒だ」
「はい」
　嬉しゅうございます、と言おうとしたが、なぜか恥しさが、声にさせなかった。
「よいな。一蓮托生、同じ蓮の上に乗っていると思え」
　血刀を片手でびゅんと、振った。
　はらはらと、矢が飛んで来て、頭上の梢から小枝や葉っぱを散らせたり、地面をすべって走ったりした。
「へろ矢など当らぬ」
　ほとんど、おりょうのからだの重みなど感じないように、前と同じ速度で走りだしたのである。
　追手のほうでは、火矢を飛ばす者もいた。これは照明のためだったろう。
　そんな火が、枝に燃えうつって、小さな炎とけむりをあげる。その下をくぐって、宗伯主従は走った。
（矢が当るなら……）
　あたしに当る。宗伯のためには楯になる。と思うと、おりょうはふっと気が楽になった。それだけでも、意味があることではないか。
　宗伯の好意に報いるには、いまのおりょうには、それくらいしかなかったのである。
　薩埵峠を東へ。
　走りおりる宗伯の背で、おりょうは三歳の幼女にでもなったような気持で、熱い背に頰をつけていた。

「――宗伯？」と、範満は首をひねった。「そやつ、宗伯と申したのか」
「はい。関東からまいった歌詠みだと」
「歌詠みとのう」
「歌詠みにしては腕が立つやつで、頭もなかなかでございました。図々しく塩湯に入っておりまして、戦さの勝敗、駈け引、武者数などを書きとめていたようでございます」
　範満はぎょろりと眼をむいた。
（それでは、あやつと同じではないか）と思った。
　菅沼弥次兵衛を糺明によって遠江曳馬城の動きはわかったが、〝宗伯〟と名乗る男の動静は謎であった。
「頭がいいと？」

「はい」
「馬鹿め。うぬらが、頭が悪すぎるのじゃ」
「はあ……そういうことになりますが、なにせ、歌詠みで」
「それよ。歌詠みと申すからには、頭が良うなくては、なるまいが」
「なるほど。全くで」
「宗祇や宗長のことなどもよく知っていたというのだな」
「はい。宗祇の弟子とか申しておりました」
「そうか、それはよい。その線で探せばわかろう」
にたりと範満は相好をくずした。
ただちに連歌師宗長に聞きにやろうとしたが、
「宗長は駿河にいないようでございます」
と、報告が入った。
「なに、泉ヶ谷にいると聞いたぞ」
「はあ、歓昌院に足をとめていると仄聞しましたが、どうやら、また京へ参ったようでございます」
「ふうむ……」
ありそうなことだ。
連歌師は野山に寝て、風を友として、さまよい歩く。今日は隣り村にいたと思えば、明日は十里先にいる。漂泊が常の身である。歌心をそそる場所こそが、歌詠みにとって棲家であろう。
「京か、京では逢うのも容易ではない」
だが、ほかに手がかりはない。
薩埵峠から走り去った三人は、どこへ消えたか、行方は知れない。ただ東へ向ったというだけのことしかわからない。
「気になる」範満は爪を嚙みながら、呟いた。「おれは、あいまいなことが嫌いだ。白黒はっきりせぬことにはな。京でもどこでも、宗長の行方を突きとめよ」
「それは……」
「そちにまかせる」と、東雲之助へ範満は命じた。「明日が日にも、駿河へ舞い戻るかしれぬではないか」
「それは、たしかにそうですが」
「探せ。宗長と宗伯、たしかに由縁があるであろう」
「かしこまりました」
範満の気性は知っている。東雲之助は探しにゆくより仕方はなかった。
宗長の行方がわかったのは半月ほど後である。行雲流水の身だったが宗長の名はすでに斯道で、遍ねかった。
東雲之助が発見したとき、宗長は近江の竹生島にいた。
「小鹿どののもとからござったか」
宗長は湖水を展望できる蓬庵で、悠然たる日をおくっていた。
まだ若い。若くしてその才は花開いていた。権力争奪の世を冷ややかに眺めて歌の世界に遊んでいた。

この宗長ものちに武将として、出陣することもあるのだが、やはり本道は歌詠みである。
「わざわざ、それがしを探してお出でとは、御奇特なことだ」
「上意でござれば」
「まさか、兵を預けるゆえ、出陣せいとは」
「いや、左様なことではありませぬ」
「ほう、では、小鹿新五郎どのが歌を習いたいとでも」
「いや……」
「ほ、これも違うたか」
宗長はゆるやかに笑った。
閑日月を愉しむ風流人だけに許されたような笑いである。
「ま、茶など一服……」
「はあ、忝けのうございます」
「どうじゃな、竹生島は」
「よいところでございますな、駿河のくにほどよいところはないと思うてましたが、この湖北の眺望は、また格別です」
「あとから都久夫須麻ノ社へ御案内仕ろう。竹生寺は御覧じられたな」
湖水は暮れなずんでいて、比叡のかげが、一刷のうす墨の中にある。
孤舟が一点、夕靄の中を通ってゆく。まことに絵のような眺めであった。
東雲之助は、こうやって、茶を含んでいると、別世界へ来たような解放感がある。
まるで、駿河のくにを彩っている血も剣戟も、馬蹄の響きも、弦音矢羽の呻り……すべてが遠い夢の中のことのように感じられた。
「――実は」
と、我にかえって、東雲之助は来た用件を口にした。
黙って聞いていた宗長は、
「宗伯？」と、首をひねって、「知りませぬぞ」
「え!? たしかに、貴方と同門と申したと」
「名を変えていたのか、関東と申すならば……ふむ、その歌のほどは如何じゃ」
「それはもう、誰もが感心するほどの。はい、歌詠みではかなりの者と思われることゆえ」
「関東辺で、その年配と申せば」と、宗長はまた湖水に視察を転じてから、にこりとした。「江戸の太田資長どのかのう」

道灌来る

太田資長。
幼名鶴千代、長じて源六。資長と名乗り二十二歳にして従五位左衛門大夫に任ず。
父資清（入道道真）は扇谷上杉氏の持朝の執事としてすでに権勢があった。
その子に生まれた資長は、幼にして天与の才をうたわれた。九歳のころより学窓に入り、十一歳の秋まで帰家することなく、螢雪の功を積みて五山無双の学者たり、と〔永享記〕にある。
こういう文章は、だいたいに於て誇張が多い。いわゆる偉人伝の調子がある。
たとえば、父資清の武勇を表現するのに、
〃若年より文武に心を寄せ、政道を助け、武備を以て乱を治めけるほどに、関東の諸将なびき随ふ事、吹く風の草木を動かすが如し〃
などとあるのも、筆が勇みすぎている。
それにしても、資長が歌道に練達であったことは、れいの山吹の逸話で知られている。もっとも、あの話は、後世の作り事らしい。
が、そういう逸話が作られるだけ歌人としての名が高かったことを意味している。
さらに、もう一つ、やはりこれも作り話めいたものだが、よく人口に膾炙している話に、屛風の曲立がある。
これは〔太田家記〕にある話なのだが、天稟の才の聞えが高くなり、鶴千代が慢心したと見た父は、これをたしなめて曰く、
「古人の言にもあるごとく、智慧に立てば大偽に走り安く、又、智慧の足りぬに大事を計れば、災い必ず身に降りかかる。言行は慎むべし、例えて言えば、障子は直立してこそ用を為し、曲っていれば用を為さじ」
すると、鶴千代はさっと立ち上って、屛風を持ってくるや、
「曲っていればこそ役に立つものもありまする」
と、言い放ったので、資清はぐっと詰ったという。
煩瑣なようだが、もう一つ、よく知られた話がある。
資清は鶴千代の高慢の鼻を折ろうとして、
「驕者不久」
と、書いて示した。

おごれる者は久しからず、というのである。
すると、鶴千代はこれにすらすらと二字を加えた。
「不驕者又不久」
すなわち、おごらざる者も又久しからず。と言うわけである。
これなど割合、信じてよいところの〔寛政重修諸家譜〕の伝えるところなのだが、出来すぎている。
毛利元就の三つ矢の話や、塙保己一の蠟燭を風が吹き消した話なども、如何にもありそうな話だから、かえって眉唾ものなのだ。
ともかく、太田道灌資長という男はそういう逸話のあらわすような存在だった。
〃宗伯〃なる歌詠みが、実は江戸城の主、太田左衛門大夫資長らしいとわかった東雲之助は、夜を日についで駿河めざして道を急いだが、かれがまだ府中に着到しないうちに、その太田資長が、大軍を率いて駿河へ乗りこんできたのである。
「軍勢が来た！」
範満の家来たちは仰天した。
はじめに、駿豆のさかいの木戸にあらわれたのは、二十人ばかりの騎馬武者で、
「われらは関東管領家より遣わされた者、駿府へ罷り通る」
と、大音声に意を告げた。
木戸を固めていた足軽たちは仰天した。
「管領家から！」
「ひえっ、これは大変なことになったぞ」
「まことに管領家の者か」
疑いの目をむけたが、その先触れの者の身なりや、言葉遣いなどに、関東管領の家来という尊大さがあらわだった。
「まず、お通り下され」
木戸を開いて請じ入れると、重だった者二、三人が顔を寄せあって、相談した。
「まことかな」
「なんとして、関東から」
「そりゃァ、わからん。が、この戦さが、管領家の耳に入った上でのことであろう」
「それにしても……」と、一人が無精髭をなでながら首をひねった。「一体、どっちの管領かいの？」
この疑問は、異様であるが、また当然だった。
当時、関東管領は、二つあったのである。
このいきさつについては、前に少し触れたことがあるが、説明すると長くなるので、ここでは二つ存在していたということを、書いておくにとどめる。
すなわち、扇谷上杉家と、山内上杉家である。
おそるおそる、足軽頭は、その武者に質問した。

むろん、咽喉をうるおすための酒をふるまった上でのことである。
「あの、一体、いずれの管領さまで？」
「なに!?」
ぎょろりと、毛虫のような眉の下の眼を剝いた。
「どっちとは、なんじゃい、関東管領家に、どっちもあっちもあるものか」
「は、さ、左様ではござるが」
「何を世迷い言を吐かしておる」
「はァ、実は……弱りました。いえ、では、あの、管領さまのお名前は」
「たわけ、知らぬのか。上杉定正どのに決っておる」
「はァ、左様でございましたな。これは、御無礼を仕りました」
わかった。これは扇谷上杉家のことである。
（弱ったぞこれは、駿河を呑まれてしまうのではないか）
足軽たちは蒼くなった。ただちに府中へ早馬を走らせた。その使者が府中の範満のところへ到着したころ、管領家の本隊が、木戸を抜けている。
これは、上杉政憲（まさのり）と太田左衛門大夫資長（すなわち、のちの道灌）の二武将に率いられた軍勢三千余であった。
二人とも、威名は関東とその隣接するくにに高くひびいている。関東管領の一、扇谷上杉定正の竜虎と称せられた武将である。
木戸ではまるっきり手が出せない。
三千の軍勢は西へ進んだ。
「関東の大軍が来たぞ」
恐怖の声は次々と飛んでいった。
範満はわざと鎧を脱ぎ直垂（ひたたれ）姿で、これを迎えることにした。
「刃向うてはならぬ。よいか、弓を引くまいぞ」
範満は全軍に指令して、つとめて、雌伏することにした。
（やはり、太田めが！）
東雲之助の報告を待たずして、範満には、それとわかった。
太田資長が武将としての名声のほかに、歌詠みとしても、衆にすぐれていることは、かねがね耳にしていたのである。
（彼奴がサグリに来ていたのか）
はじめは、まさか、と思った。
が、その年のころといい、風貌姿勢、いずれも家来たちの口から聞いたことではあるが、符節を合わしたようにぴったりしている。
まず、狂いはない。
（サグられているとすれば、迂闊なことは言わぬぞ）
どの程度、サグられたか、が問題だった。
菅沼弥次兵衛の情報蒐集の限度は、あの地図や、拷問を

して聞き出した範囲でそれとわかったが、太田資長が、それと同じとはかぎらない。
人物も、弥次兵衛などと比べものにならないし、資長ほどの身分にして、単身、やつしてサグリに来た以上、相当なところを握られてしまったとみてよい。
（こりゃ、うっかりすると……新九郎どころではない）
新九郎くらいなら、まだ範満の方が駿河では名声があるから、負けはしないが、相手が太田資長となると違ってくる。一つ間違うと、関東管領を相手にしなければならなくなる。
いかにも今川家は了俊以来の名流で、隠然たる勢力があるが、あくまでも東海地方でのことだ。いうなれば、駿遠と参河の一部。
それにひきかえ、関東管領扇谷上杉といえば、たとえ管領が二人いるとしても関東を二分する勢力がある。
むろん、そのすべてが家来というのではない。が、被官として膝行する以上、これは家来と同じように使える立場にあるわけだ。
（とても相手にはならん、ここは一つなんとしてでも切り抜けなければ）
（一体、何をしにくるのか）
戦さの調停、と称しているが表面の口実にすぎない。
（あわよくば、駿遠を併呑するつもりではないか）
範満はそこまで考えた。それは決して考えすぎではない。充分、その心配はあった。
今川家といっても、管領や公方にはかなわないのだ。早い話が、武将はいずれも官位を持っているが、この官位をくれるのが朝廷で、それには、武家の棟梁たる征夷大将軍たる足利家の手を経なければならない。
そうでないやり方もあるが、将軍（公方）が京都にいる以上は、段階として、そうなる。そうしたところから、いやでも上下の関係、権力の構図というものが出来てくる。
それは現代に於ても変らない。昔の官爵位に代るものが現代の文化勲章などだとするといやでも内閣の手を経る。そこに絶対の権力が生じるわけだ。叙勲というものには、その上下関係を強要するものがある。
たとえ戦国時代でも、多くの武将が、官位をほしがった。それは、ステータス・シンボルであって、たとえ勢力を持っていても、官位がなければ、山賊野伏（のぶせ）りの類いとしか見られなかった。
朝廷や、武将たちばかりではない。世間もまた、そんな眼しか持たない。
そのために、野盗からのし上った連中でも、それが可能だとなると、手をまわして官位を請求した。
そこに堂上公卿たちが収賄する道があった。こうした権力構図は、いまもむかしも変らない。

今川家を私（わたくし）しようとした小鹿新五郎範満が、関東管領の名を聞いて顫えあがったのは、そういう理由からである。
　軍勢が薩埵峠の木戸を越えたという報告がついたころ、東雲之助が、府中へついた。
　新九郎たちの陣が東海道をふさいでいるから、東雲之助は遠く海上をまわって戻ってきたのである。
「殿！」
「遅かったぞ」
「それが、実は、殿」
「上様といえ」
「あ、左様でした、上様。あの歌詠み宗伯の素姓が……」
「わかったか」
「はい、あやつは」
「太田左衛門大夫資長」
　吐き出すように範満は言った。
　東雲之助は出鼻を挫かれて、あっと、シラケた顔になった。
「どうして、それを」
「わからずして何とする。もはやそこまでやってきたわ」
「そ、それは……」
「うぬも、支度を変えろ。平服を着て、化粧しろ、米の粉でも顔にはたけ、紅を唇へ塗れ」
　静岡市内には小山がある。
山というより丘陵というほうが適切であろう。
　南部の八幡山は六十五メートル、その北に位する谷津山にしても百メートルと少し。
　もっとも後者の方が総面積からすれば十倍はあるのだが、どちらも、いまでは市内の中心に近くなっている。
　関東から乗りこんできた上杉治部少輔政憲と太田左衛門大夫資長は、府中に堂々と駒を進めてくるや、狐ヶ崎と八幡山に陣どった。
　夥しい旗を立て、柵をめぐらし、決戦の構えである。
　まず三千騎のうち、おのおの三百騎をしたがえただけで、八幡山の陣に腰を据えた。大軍は清水の船越、馬走（まばせ）辺にとどめてのことであった。
　これは関東管領の上使ということをはっきりさせた行動だった。いたずらに大軍で威嚇するのではないことを示す。穏便な話しあいに来たという態度で、今川家の出方を待つ。
　前にも述べたように、公方――管領と、その傘の下にある守護大名、小名などとの関係は、微妙なものであった。被官ではあるが、家来ではない。
　後世の徳川家康による幕府体制は、このあいまいさを完全な主従関係に押し進めたものである。
　戦国時代といっても、まだ、その混乱に突入したばかりの時代だけに、〝官〟を誇示する権威と実力の微妙な対立が、こうした行動にもあらわれている。

話し合いといっても、武力がものをいうのだ。力がなければ、ものも言えないのが現実である。
　郊外に三千近い軍勢を待機させているということで、八幡山の六百騎は、孤立することがない。
　もしも周囲一キロそこそこの八幡山に、
「たかが六百ばかりの小勢、踏み潰してしまえ」
と、寄せて来たなら、ただちに、郊外の大軍が雪崩れをうって攻め入ってくる手はずになっている。
　距離は六キロたらず、一発の狼煙で堰は切られるだろう。
　むろん、そうしたことは、範満にも新九郎にもわかっている。
　何しろ当時の軍勢というのは、武威を誇示する旗差物が大仰だった。
　源平時代も華麗であるが、このころになると、武将の長旗のほかに、めいめいの旗差物がそれぞれ趣好を凝らし、籠の張りぼてにしたり、瓢箪をぶら下げたり、中には、はりつけになっている絵を描いたり、されこうべを旗の頂辺につけたり、奇異をてらい評判になることを期待する者が多い。
　それらの旗差物だけでも、遠くから見ると、谷を埋め、山を崩して雪崩れてくる威風を感じさせる。
　範満が敵対の意志をはじめからなくしていたのは、いい加減新九郎との合戦に嫌気がさしていたせいもある。
持久戦になれば、短気のほうが負けるのは自明の理だ。
　範満はもともと短慮である。
　義忠の存命のころから、今川の地位を狙っていたのだから、気が長いといえそうだが、胸に野望の火を燃やしてその雌伏の期間が長いと、疲れが出てくる。
　いったん府中の城の主となっただけに、範満は、
「戦さをやめて、この場を乗り切る方法はないか」
と、模索しはじめているころでもあった。
　世間の人気が、竜王丸に集まるまでには、もう少し時間の余裕がある。
　新九郎が邪魔だが、勢いのついたときは、日ごろの二倍三倍の力がある。範満としては、しかし敗北は喫したくない。
　何しろ戦さに馴れた時代である。禅譲は、即、敗北につながる。敗北は、また即、死である。
　下手に負けると、範満の首は、府中城の大手門の屋根のカザリになって烏に眼玉を突っつかれるだろう。
　両将からの使者を迎えたとき、範満は、要求は何でも聞く気になっていた。
　使者は上杉三左衛門正重と、江戸内匠介行秀である。
　設けの席へつくと、使いのおもむきをこう述べた。
「今度、豆州様扇谷殿よりの仰せにして、われら罷（まか）り向（むか）いし意趣は餘の儀にあらず……」

即ち義忠の討ち死にのあと、世嗣の幼少なるに乗じ、上を軽んじ、各々私闘を企てるとは何ごとぞ。何方にても候え、今川殿へ逆心あらん方に向い、一矢仕り候えとの上命を含み罷り向い候。定めて一方は御敵なるべし、御返答次第に一合戦仕るべし。

というのである。

両将の署名花押のある詰問状を手交して、

「両三日、何分の返答を待ち申す」

と帰っていった。

返答とは、その行動で示せというわけである。

範満は最前線を撤することを命じた。

鹿柴を片づけ、柵をとりはらい、櫓を毀して、後陣へ退った。こうすれば、戦意を消したことになる。

そうやって、新九郎方の出方を見た。

「和議をととのえなくては」

と、東雲之助が進言すると、

「黙っていろ」と、怒鳴りつけて、「和議などというのは、先に口にした方が損なのだ。それくらい、わからんのか」

「はあ、しかし八幡山の方に」

「まだ明日いっぱい日限がある。新九郎の方から、何とか挨拶がくるじゃろうさ。それからでも遅くはあるまいぞ」

と、また爪を嚙みはじめた。

一方、伊勢新九郎の方は、両将の使者を迎えると、ただちに陣を退いた。

「ここが勝負のしどきだな」

新九郎は範満と違って、執着するものがない。今川の家を乗っ取る気はない。竜王丸と北川どののために一臂（いっぴ）の力を貸したにすぎない。

竜王丸与力の諸将に告げて、

「城を出るがよろしかろう。ここに兵を備えていれば、申しひらきが立たなくなる」

「いや、城は開けるわけにはまいらぬ」と、反範満派の老臣たちは強硬に突っぱねた。「わが殿をこの城へお迎えして、名実ともに今川家をお継がせ申さずば」

「左様じゃ、ひとたび城を致せば、二度と……」

そんな諸将の弱気を新九郎は笑って、

「安心なさるがよい。正義はわれらにある」

「……」

「なんと申しても、竜王丸ぎみが後を継ぐのは、第三者の目から見れば、理の当然」

「しかし……」

「太田資長という仁は、歌詠みとして名が高い。話のわかる男であろう」

とにかく、いまは刺戟を与えず兵を退くことが肝要だと力説した。

だが、老臣たちはなかなかあきらめない。これの説得に時間がかかった。老人たちは頭が固い。融通ということがきかない。

一度握った玉は、死んでも離さぬというふうなのだ。

「退却も一つの方便でござる。これも軍略と思し召され」

力説すると、こんどは新九郎にまで、うさん臭い眼をむける。こういう老臣たちのかたくなさには、ほとほと、疲れてしまう。

だが、範満の方で、前線が後退したという斥候（ものみ）の報告が入ると、漸く、納得した。

「うむ、こりゃ、いかんな。われらも退き上げよう」

和睦するには、相手から先に手を出させることが大事だとかれらも知っている。城から出て、安倍川の対岸へ渡ることで、和睦の意志ありと示すのだ。

府中の城から軍勢が出てゆくのを、範満は遠望していたが、

「勿体ないな」

と、呟いた。「城は空家になるらしい、な、東雲之助」

「はい、勿体のうございますな」

「いま、攻めこめば、城は占領できる」

「左様で」

「だが、管領の目がうるさい」

「はい」と、主の意を迎えて東雲之助は言った。「私が攻め込みます。そして占領してから和議を進めては如何でございましょう」

「そうせい、それがよい。二百騎ほどで入れ」

東雲之助にしてみれば、（好機到来！）という気持だった。

寵童上りの悲しさで、いつも周囲からヒガ目で見られている。多少の手柄をたてても、目立たないし、抹殺されてしまう。

よほどの大きなことを、それも目立つ範囲でやらないことには、家中での評判がよくならない。もはや幼少時のように、色香で範満の庇護を期待できる歳ではなかった。

となれば、武辺として、一人前になるしか幸福はない。

それには、大功を樹てるしかないのだ。

（新九郎のために……）

右手はいまだに不自由だった。

天殊の文殊堂で、新九郎に手の甲を刀で突き刺された。床に釘づけにされた、思いだすだけでも、慄えが右腕を痺らせる。

傷は直ったが、そして一応、生活に不自由のないくらいは五指が使えるようにはなったが、季節の変り目には、まだ疼くことがあるし、重いものを持ったりすると、不覚にも取り落すことがある。

そのたびに、

(新九郎のちくしょうめ！)

と、怨みが噴き上るのだ。

こういう男は、おのれの悪行がその結果を招いたのだということに、反省がない。

(何もあんなことまでしなくても)と、逆恨みする。

虎の威をかる狐で、範満の権勢をカサに着て、数々の悪事をしてきたことも忘れてしまっている。

府中の城を乗っ取る先鋒となることは、願ったりだった。

「二百騎のほかに足軽三百、揃いましてござる」

と、郎党が支度が整ったことを報告してくると、東雲之助は勇み立って、

「いざ、参るぞ」

采配をとった。晴れがましい出陣である。

「よいか、一気に突っこむのじゃ、かまわぬゆえ、突っこめ、手向う者あらば、斬れ、突け、何があっても城へ入るのだ」

相手が、勧告によって和睦の意志を見せているのは承知の上なのである。城を開けて、ぞろぞろと出てゆくのだ。

その城方の軍勢が出きらないうちに、東雲之助は馬を進めた。

まるきり、出てしまってからでは手柄にならない。空家に入るのなら、子供でも入れる。

「突っ込め！」

采配を打ち振った。太鼓の音と法螺貝のりょうりょうたる音に鼓舞された一隊は、どっと喚声をあげて、府中の城へ突っこんでいった。

城を捨てる。

血を流して漸く奪還した城を捨てるなどということは、武辺の者には耐え難いことである。だが、そうするしかない。

管領の軍勢三千余騎に対抗することは難しい。よしんば互角に戦ったとしても向うはいくらでも増援できる。最終的には勝ち目はないのだ。

「とにかく、一応、城を出よう」

新九郎の奨めで、城を出ることにしたのだ。

「戦さに負けたのではない。管領家のあつかい（仲裁）に対する礼儀じゃ」

諸将はそういって自らを慰めた。

三方の門から、ぞろぞろと出てゆく。

槍を担ぎ、弓を横たえ、馬上の武者のあとに歩騎がつづき、小者らが荷駄を曳き、あるいは荷物を担いでゆく。

それらが出きらないうちに、東雲之助の二百騎が、雨のように矢をそそぎ、槍の穂先を揃えて突っこんできたのである。

驚愕と狼狽と恐怖がたちまち混乱を惹き起した。

「わあっ、敵だ」「槍を槍を早く。敵だぞお」「ひきかえせ、陣を立てろ」

まさか、敵勢が来襲するなど、夢にも思っていなかったのだ。

槍や刀は携えていても、殆ど無防備にひとしかった。戦闘の心がまえもないうちに、攻め込まれたのだ。対等の戦いなど出来るはずもない。

防戦するよりも、浮足立ち、逃げるのに精一杯だった。

「今だぞ、蹴散らせ」

馬を煽って、蹄にかけ、槍で突き伏せ、薙ぎ倒し、叩きのめす。

兜が飛び、陣笠がけし飛んだ。

「勝った、勝った、勝った」

東雲之助は昂奮して、声を涸らして叫びつづけた。

いまや、かれは色子あがりの身が変身し、大武辺者になったような気がし、馬を腰で馭しながら細身の女持ちの薙刀を、びゅん、びゅん振りまわして当るを幸い薙ぎ倒してゆく。

こうした場合の勢いというのは恐ろしいものだ。

東雲之助は返り血を浴びて血まみれとなっていた。旗差物までが血に染み、馬の平首もべっとりと血が流れている。

敵を屠るのが目的ではない。城を奪うことだった。

「もうよい、追うな」

勝機に昂奮して追いまくるのを制して、東雲之助は、城内へ入った。

がらんとした城内に入ると、久しぶりで我が家へ戻って来たような気がした。

「さあ、城をとったぞ、おれの城だ」

御殿の居間へ踏みこんで、どっかと坐ると、東雲之助は、にたにた笑った。

が、すぐに、いまの失言を誰かに聞かれなかったかと、ひやりとした。

「なに、城を奪ったと！」太田資長は報告を聞いてすっくと立ち上った。「範満めは、戦さをやめると申したではないか」

「軍勢およそ二百騎ばかりと見えまするが、引き上げの行列に突入し、殺戮の上、城を奪って門を固めました」

「不埒なッ」

資長の怒りは、

(面目を潰された)

と、いうことにあった。

停戦が目的ではない。内戦を奇貨おくべしとして、今川の所領を収奪のために乗り込んできたのである。

範満も新九郎方も、使者への態度は丁重をきわめ、勧告に従うと返事して来ている。

事実、範満方では前線を後退したのである。城方は城を

出た。そこへ襲撃をかけたとは。
「範満めの陰謀だったか」
資長は怒った。ただちに狐ヶ崎の軍勢を召集すると、
「われらは府中城へ、貴殿は範満の沓谷を」
と、二手に別れて、威武堂々と、押し寄せたのである。
「これは関東の公方の軍勢なるぞ、開門候え」
先触れが大音声に呼ばわった。
東雲之助は、さながら一城の主になったつもりで、女たちをひき寄せ、酒を喰って、いい気持になっていたが、
「なんと、太田資長が」
さっと顔色が変った。
少し頭を働かせれば、かれらが押しかけてくるのはわかっている。
が東雲之助は酔っていた。成功に酔っていた。おのれの薙刀がはねとばした首の数を数えさせても、資長の心中まで推し量ることをしなかった。
「まさか！　八幡山を引き払ってか？」
立った。が、また坐った。また立った。かれは、女たちを突き飛ばし、御座所を走り出た。
「出迎えは何とした。早くせい、早く。それから、沓谷へは行ったか、殿をお迎えしてまいれ」
狂気のように、喚き散らした。
これは、あくまでも、範満の命令でしたことなのだ。自分の一人の行動と思われてはたまらない。
「早く、馬でゆけ、殿を、左様だ、太田資長が、殿を呼ぶように命じたと、こう言え」
「左様な、嘘は」
と、二ノ足ふむのを、
「ええい、嘘も時によっては方便だ、早くしろ」
使番は東雲之助の唾を浴びて、走り去った。
東雲之助は、もう酔いもさめ、蒼い顔になって、下瞼がひくひくふるえていた。
かれは櫛をとりだして、髪をなでつけ、襟をあわせて、汗臭くないか、と傍の者に聞き、具足の腹帯などを締め直した。肌着を着かえているひまはないのである。
その間に城内は、太田資長の軍勢によって、びっしりと埋められていた。
（早く殿を……）
東雲之助は、もうそれだけが望みだった。
太田資長は、馬廻りの武者たちに囲まれて、鹿皮を敷き傲然たる態度で、東雲之助を引見した。
「城の主人どのは、貴殿か」
ねっとりした調子である。
東雲之助は平伏するかたちになっている。
「はあ、いや、主人というわけではござりませぬ」
「では、他に、誰がいる」

「いま……殿が、新五郎範満が参上いたしまする」
「城を奪ったのは新五郎範満か」
「いや、それが……」冷汗がたらたらと流れていた。「その、無人の、左様、城を致したあと、無人となれば、城内が荒れるであろうゆえ、その、留守居のために」
「そのために、殺戮をなされたか。城外には、まだ血が臭うていたな、野良犬どもが、夥しく群れ集うていたな」
「……」
「まだ半日とは経たぬ由、何人討ち死にいたしたか」
「左様、十人あまり……いや、実は、静かに入ろうと思いましたが」
必死に、東雲之助は陳弁した。
こうなれば、口から出まかせにも、この場を切り抜けなければならない。
「何しろ、敵が、阻みましたゆえに、闘うしかなかったわけでござれば」
「仕掛けたのは、その方と聞いておる」
資長は凝っと、かれを見た。
ゆるぎのない眼である。興津の塩湯で湯治を装い、戦況を考察していたかれには、範満の野望がどういうものか、およそ判断はついている。
少々の佞弁では誤魔化されぬぞと、強い態度だった。
「いや、決して左様なことは」東雲之助は手を振って、「滅相もないこと。それがしは、その、武辺者ではありませぬ」
「――らしいの」
ふっと、皮肉に資長の口髭が動いた。
「そ、それで、戦さなど好む者ではありませぬ。殿がそれがしを遣わされたのも、穏便に、城へ入ることを……」
「左様か。小犬ほど、狂気のように吠えたて嚙みつくものじゃ」
東雲之助は、ぐっと詰った。そこへ、範満が到着したという声がした。取次の者が、資長へ告げに来た。
「これへ罷り出るべし」
資長は顎をしゃくった。
平服だった。わざと平服のままで出て来たのである。
範満が資長の前へ出て、まず最初にしたことは、東雲之助を思いきり殴りつけることであった。
殴りつけただけではなかった。足をあげて蹴った。蹴った。
「ここな、うっつけ者が、何ということを！」
かっと痰まで飛ばして、怒鳴りつけた。
はじめから、資長の方を見むきもしない。そちらには目もくれず、つかつかと東雲之助の方へ歩みよりざまのことだった。
むろん、これは、資長へ見せつけるための行為だった。
吃驚したのは東雲之助である。範満に来てもらったのは、

殴られるためではない。この急場を救ってくれると信じてのことだ。

　範満の性格を考えると、これは期待できないことだった。東雲之助には、まだ、かれの真意が読めないのか。それとも藁にもすがる気持が呼ばせたのか。

　範満にとって、東雲之助を救うよりは、おのれの保身の方が大事だった。

「わしがあれほど申したのに」と、喚きながら、蹴倒し、踏みにじらんばかりにして、刀に手をかけて、「もはや、管領の御指示にしたがうと申しつけたではないか、戦さはしてはならぬ、あれほど、口を酸っぱくして申したのに」

　東雲之助も、そこまで言われると黙ってはいられない。

「い、戦さではござりませぬ、あ、痛いッ、城を空家にしていては、何かと不祥事が起るゆえと、あ、痛い痛い」

「死ね、死んでしまえ、わしの命令を聞かぬやつは、こうしてくれるぞ」

　抜刀した。ほんとうに斬りかねまじき勢いだった。

　これを資長は眺めていた。はじめから、範満の真意は見ぬいている。

（やりおる……）

　という気持である。

（どこまでやるか）

　どうせ演技だから大仰なのは当然だ。

　どこまでシラばくれて、怒りを演じるか、それを見てやろう、と思った。

　範満が、激昂すればするほど、手足をふりまわせばまわすほど、資長の心は皮肉に冷えていった。

（塩湯で聞いたことども、合致するのう）

　傲慢で、冷酷で、野望家で、下々のことなど、まるで虫ケラとしか思っていない。

　足軽組が敗れて退却したときなど、即座に、三人を無作為に曳き出して、双足を斬り放して言った。

「足は進むためにのみあるぞ」

と。

　こういう凄まじさに、顫え上って、足軽たちは、狂ったように新九郎の陣へ攻めこんだという。

　その男だ。本当に斬るだろう。

　東雲之助は悲鳴をあげた。

　範満の願いはただ一つ、

（資長めが、罪のすべては東雲之助にありと、見てくれればいいのだが……）

　そういうことになりさえすれば、ここで、東雲之助を手にかけることはない。

　東雲之助は、もはや長じて、昔日の女にみまほしい美貌は失われているし、髭も生え、骨太になり、男性のからだになっているので、情を交すことは、ない。

　が、昔は、昼夜わかたぬほど、可愛がったことがある。寵童である。念友の仲というとちょっと意味が違ってくる。同じ男色でも、気心があって、仲睦まじくなるのと、単に妾を持つのと同じように一方的な寵愛をするのとある。

　範満の場合、後者である。

　この男は、男色ではないにしても本心から、心の底から、融けあえる友人というのはいない。

　親子兄弟でも同じだったろう。かれにとって、世の中は、おのれのために動いているのであり、他の誰をも心から信じることはなかった。

「死ね、東雲之助」

　刀をふりかぶった。

　東雲之助は悲鳴をあげて逃げまわる。地面を転がり、這いまわりながら、「なんと非道な！」と、泣き声をあげた。

　さすがに、ここまでくると、もう正視できなかった。

「やめたらどうじゃ」資長は、大喝した。「見えすいた狂言じゃのう」

「え、なんと」

　範満はほっとしながらも、ここで、手をぬいては、いよいよ見すかされると思ったか、

「止めるな」

　叫びざまに、斬った。

　流星のような刀である。東雲之助は、一転して逃れた。

が、ざくっと尖先がふとももに入った。右脚である。わッと、声をあげて、東雲之助はさらに逃げた。

「助けて下されェ」

「死ね！」

　たたみかけて、二ノ刃がおちる。

「止めよ」

　資長が、采配を振った。

　それまで、じりじりしていた範満の家臣が待っていたように、竹のはねるように飛び立って、範満を抱きとめた。

「お待ち下され！」

「暫く、暫く」

　二人の強い腕にがっしり抱きとめられると、一層、範満は狂い立って、

「放せ、こやつは、今川家の社稷を狂わせるうつけ者……」

　どうせ放すはずがないと思うから、どこまでも叫び立てた。咽喉が涸れるほど喚いた。

　その間に東雲之助は、麾下に抱き起されている。右のふともから夥しく血が噴き出ていた。

「ともかく、軍勢をして退城せしめられよ」

　太田資長は、範満の野望と欺瞞を見ぬいて勧告した。

　いかに範満が演技をしても、（おれには効かぬぞ）という表情だった。

範満はくどくどと、東雲之助の不始末を詫びて、必ず相応の処分いたしますからと、いかにも、管領の軍勢の前に、腰低く見せて退散した。
（失敗したな……東雲之助めが、もっと上手にやればよかったのだ）
と、怒りは、また愚かな若者へ向けられた。
たしかに、東雲之助は功をはやった。城方がすっかり城を出きって、空になったところに、入ってゆけばよかったのだ。それだけの余裕がなく、功をはやって、襲撃したのがまずかった。
（こんなことになるのだったら、やつに攻めさせるのではなかった）
そう思っても後の祭りだった。
範満が、沓谷の陣へ戻ると、あとを追うようにして、太田資長からの使者が来た。
「明日、午ノ刻に城に罷り越されますようにとの、ことでござる」
「うぬ、彼奴め！」
なんということだ。話があればなぜ、いまさっきしなかったのか。
「くそっ垂れめ」
返事も与えずに、居間へ引き籠ると、毒を口にしたように、荒々しく吐き捨てた。
「あんなやつの命令を聞かねばならんことはない。病気と申せ、病気と」
そして、ますます、城を固めるように麾下へ命じた。
そうした範満の態度に比べて、同じ使者を迎えた新九郎の方は丁重に返事をして送りだしている。
「黒丸、いよいよ、明日だ」
「はい。どうなされます」
「資長は、話のわかる男らしい。条理さえ明白にすれば、事はうまく運ぶと思う」
「東雲之助が勝利に酔っていたのが、かえって、損な結果になったようです」
「当然の報いだろう。愚か者は、自ら、墓穴を掘るものだ」
翌日。
新九郎は礼服を着て出かけた。供もたった三人。
黒丸のほかは、馬の口とりに、進物を持った下人一人という最小限の数で府中の城へ参向したのである。
これには、太田資長も驚いたらしい。
上杉政憲と、顔を合わせた。
（大胆なやつだ。一体、何を考えているのか）
「ほかに家来はいないのか」
「はい、四人でございます」
「通せ」
資長はすでに、腹をきめているようであった。

伊勢新九郎の相貌を見たとき太田資長は、心中にある驚きを感じた。
（違う……）
その骨相の尋常ならざるに一驚したのである。
眼光炯々として、面がまえには怖れを知らぬ不敵さがある。
いままでの、他の今川の諸将とは、あまりにも違いすぎた。
野人の強さといおうか、野性の逞しさといおうか。そこには何ものにもたじろがない、大地のゆるぎなさ、一途の道を奔って悔やまない、男の貌があった。
他の今川家の家臣たちは、範満にしても、今川の勢力をすべて私のものにしたいという野望があらわで、それはそれなりに武辺であろうが、その野望の面を削ってしまえば、ただの安逸の顔だった。
生れも育ちもよい。そのエリートのコースを歩んできただけの、氏素姓によりかかる男には、どこか、脆いところがある。範満の脆さは、その点にあった。
新九郎は違う。
一見、不逞に見えながら、その相貌をかたちづくっているのは、たんなる野望ではない。
〝理想〟と呼べるものが、きらめいている。
その燦きが、男の顔をかたちづくり、一種の魅力となって、溢れ出ているのだ。
「おことが、伊勢新九郎か」
太田資長は、野太い声で言った。
新九郎の方では、この歌詠みの武将の噂をよく聞いている。その人となりを知っている。
（この男か……）
と、やはり、引きつけられるような気持で、見た。
「関東よりの御出張り、恐れ入りましてござる。このたびの騒ぎは如何様に関東に聞えておりましょうや、噂はことのほか、誇大になるものにて、実体は、いかほどのこともございませぬ」
「戦さの様子は、悉く、見聞しておるぞ」
資長は誤魔化されぬ、と笑って塩湯で見聞したままを、日時や軍勢の動きを詳細に語った。
これには、新九郎も驚いた。
（恐ろしい男だ）
知りすぎる。敏すぎる。
過ぎるということは、この男にとって、必ずしも好結果ばかりは齎さない。
（剃刀のような男だ）
と、心中、舌を巻いたがそのとき、新九郎がふっと懸念したことが、後に資長の身に災難となってふりかかるので

ある。太田資長こと道灌は、その賢才のゆえに主人の上杉定正から暗殺されるのである。

「――仰せの通りでござる。戦さはときに、過熱いたしまするが、しかし、両者、今川家の社稷を思うてのことでござれば」

新九郎は説いた。熱弁であった。語彙も豊富だし、口調もなめらかで、至誠があふれている。

かれの言葉は反撥をさせない。まず、敵を認め、その行動を善意に解釈してみせる。それが術であるともいえた。

「新五郎範満どのも、今川の御家を奪いとり私のものにする気など、さらさらござるまい」

「……」

「やはり、竜王丸君が年少におわすなれば、他国よりあなどりを受くることを案じてのことでござろう」

「それならば、なぜ、戦さを仕かけたのかのう、幼君は山西とやら鄙びたところに隠れ棲むと聞く」

「はあ、ただ、戦火を避けられたのみでござる」新九郎は、よどみなく答えて、「今川の家臣は、いずれも同胞にござれば、野望を抱く者など、一人も居りませぬ。したがって、ただ意見の行き違い、社稷を思うの心が、強いあまりの衝突でござれば」

「だが、先日、この身より使者を遣わしたにもかかわらず、いまだに和睦とならぬは、何ゆえじゃ」

「その儀は、いま少しの御猶予を。何分にも、それぞれの立場もあり、面目もありましょうゆえ、いま暫く、御猶予を賜われば、必ず、この新九郎長氏が、和睦の実をあげて御覧に入れまする」

「しかとか」

管領の軍勢が来た目的は、騒乱を幸いとして、駿遠二国を奪いとるにある。

その真意を、新九郎は見ぬいている。言をかまえて、ともかく、管領の軍勢を駿河から追い出すことが先決だった。

「もしも、二旬を経て尚も、騒擾の由、風聞これあれば、ただちに御討伐あられまするよう、新九郎長氏、この首にかけても、誓言いたしまする」

それほどまでに言うのなら、と上杉政憲も頷いた。

新九郎にはどういう成算があったのか。

かれは輩下を動員して、ただちに兵粮、酒、水その他の小荷駄をつくり、管領の軍勢が本国へ帰るまでの費用にと差し出した。軍勢が動くということは、莫大な費用がかかるのである。

こうした配慮が、二将の心を和ませたのはいうまでもない。

太田資長としては、範満の方が、野望を逞しくして北川どのと竜王丸の抹殺を企んだのが、原因だと睨んでいたから、かれらを叩き潰してやるのが手はじめと思っていたの

だが、新九郎の和睦可能説を聞くと、かえって、その肚裡の大きさに打たれた。

(伊勢の新九郎というやつ。見どころのある男よ)

帰途もその相貌を思い浮べた。

のちの太田道灌、左衛門大夫資長は新九郎の熱意と誠意に打たれたように、納得して軍勢を引き揚げさせた。

動向としては、上杉治部少輔政憲も同じであったが、その納得に微妙な違いがあったようである。

政憲は引き揚げるに際して、こう提案したのだ。

「なんとしても竜王丸は元服前である。今川の社稷は任せがたい」

この言葉を伝え聞いた時、北川どのの顔から血の気が引いた。

彼が範満の秘かな運動によって、動かされていたらしいことが、新九郎の調べで判明したが、それは後の祭りで、政憲の言葉は今川家にとって決定的な意味を持っていた。

新九郎の存在が、太田資長のような歌詠みにはもっとも理解しやすいことを政憲は見抜いていた。

いや、見抜いたのは範満ではなかったろうか。資長の資質と感性が新九郎を容認する方向に動いているとすれば、政憲を取り込まなければならない。

範満の運動が、どの程度のものであったかは明らかではない。

が、少なくとも政憲が動かされたのは事実である。

そこには資長への対抗意識も働いていたに違いない。人間にはそういう天邪鬼な部分がある。

こういう立場では、特にそうであろう。

「各々、これまでのことは、一切水に流して協議あるべし」

と、政憲は申し渡した。

太田資長の方は、新九郎の存念に任せる気があったのだ。そのまま話が通っていれば、竜王丸は今川家の当主として活躍するのが早かったろう。元服前だというのは致命的であった。

「それなら、すぐに元服……」

というわけにはいかない。

つまり、一人前ではない、というのだ。

女でも十三や十四で嫁に行くのが普通だから、男のその年齢では元服するのに遅くはない。

竜王丸のそれが遅れたのは、あくまでも戦さのためであり、これは侍の儀式としても、おろそかにできないことだった。

北川どのも新九郎も、この戦さに勝って、国内(駿河・遠江)を統一し、その上でしかるべき烏帽子親を頼んで、盛大に儀式を行う。

それが、今川竜王丸の出発点だと思っていた。

あまりに慎重になりすぎたために、手の内を読まれて、

逆手を取られたのだ。

新九郎は、

（負けた……）

と思った。

北川どのと竜王丸にそのことを報告した時、はらはらと涙がこぼれ落ちた。

「――面目しだいもない。それがしの働きが至らざるゆえ……」

新九郎は北川どの母子の悲歎が見るにしのびなかった。

この戦さに勝ちさえすれば、今川家を継承できる。

それまでの辛抱だと、長者屋敷に寄宿する身となって過した歳月の長さが、いま夢のように振りかえられる。その長い辛苦が、一朝にして、音を立てて崩壊したのである。

元服前だという事実は、あくまでも一人前ではない、という客観性を持つ。それはさからいようがないのである。大名家、殊に今川ほどの由緒ある家を継ぐには若すぎる、と言われれば返す言葉がなかった。

「あんまりです、あんまりです」

北川どのも涙をおさえ兼ねた。

範満が、信望のある男ならいい。だが、策謀を練っての乗っ取りが惹き起した戦さではないか。

その事情に目をつぶって、年齢で判断されては、かなわない。

北川どのの悲歎をみるとしかし、新九郎は、かえって勇気が出て来た。

「――まだ望みが断たれたわけではござらぬ」

「でも……」

「なんとか、もう一ふんばりしてみましょうぞ」

「上杉どのが、如何に仰せられますか」

「いや、あくまでも管領家の申されようは、一つの意見じゃ、これを受けるか受けぬかは、こちらの考えようであれば」

「受けねば、戦さとなります。今度は管領の軍勢が押し寄せてまいりましょう」

むろん、そうなったら、いかに新九郎が機略縦横であっても、かなわない。第一、与力の大名たちが、手をひいてしまう。

北川どのは眉を曇らせて、

「そうなれば、範満のほうが、正しいとされまする。どうぞ、無謀なことは、おやめ遊ばされませ。わたくしどもが諦めればよいこと。この上、新九郎どのに迷惑をかけられませぬ」

新九郎の首級が、叛逆人として軒に吊されることを考えると、北川どのは気が遠くなるほどの恐怖で戦いた。

「ははは、それがしの身を心配なさることはない」成算があるのか、新九郎は、れいの豪快な笑い声をあげて、「ま

あ、任せて下され、なんとか方法もある」

一族、重臣たち双方の部将らを一堂に会して、約定が結ばれたのは、翌日のことだった。

太田資長はすでに発足したあとで上杉政憲がその軍勢と残っていたのである。

これは、範満にとって好都合であった。かれの自信に満ちた顔をその席で見たとき、新九郎は憤怒が胸にこみあげた。

すでに範満は、新九郎を呑んでいる。

（勝算われにあり）

という顔であった。

うすい髭を指の腹で撫でたり、突然、咳ばらいしたり、腹心の部将と目で話したり、自信満々だった。

上杉政憲は正面にどっかと胡坐して、眠げな顔をむけていた。

これはもう、評定の答えを決めているということではないか。

いかなる論議が行われても、所詮、答えは決っている。そうなれば、徒らに、私見に固執することは、手の内をのぞかれるだけのことだ。

「――今川家にとって、何が一番大事か、それを考えた上で発言あるべし、些事は一切、無用」

お互いに欠点をあばきはじめては収拾がつかない。対立はいまさら、どうするすべもないのだ。この事態を救うのが、急務であった。

「竜王丸ぎみが後嗣たるを正当とせずして、何をもって正邪を判断するか」

新九郎は、ただ、その一点を強調した。ほかに言うべきことは何もない。

範満方が衝いてきたのは、

「いまだ元服前にてあれば」ということだった。「幼君に大国を任せられることは即ち、近国のあなどりを受けることになる」

これも否定出来ないことだったのである。

たとえ、実際に、竜王丸が十三歳にして、大人を凌ぐ膂力があったと仮定しても、それは、この場合、意味をなさない。

十三歳の幼君――

という一事だけで、近隣は、舌舐めずりして、

「今川の領国を奪うは、いまぞ」

と、侵略の戦意をかきたてられるだろう。そういう時代であり、そういう立場なのだ。

世の中は理屈では動かない。人間の感情が左右する。まず、侮蔑を受けるということが、すでに、まずいのである。

侃々諤々の議論が交された。

その間、政憲は一言も発しないうすら笑いを浮べ、盃を

傾けては、眠そうな眼を、双方にむけていた。
そして、この議論は、かれがほどよく酔いを発した時点で終止符を打たれたのである。
「こうせい、竜王丸の成長まで、府中城は、新五郎範満どのが預かるがよかろう」
その一言が決定した。
政憲はよろりと、立ち上った。
「あいや、暫く」思わず、新九郎は叫んで、膝を進めた。
「お待ち下されい」
「なんじゃ、不服と申すか」
政憲はじろりと、濁った眼をむけた。
「わしの裁決が不服か」
明らかに、私的な感情がはたらいている。
政憲の眼には、冷たい光があった。酒に酔っていながら、濁った眼は、虚心ではない。むしろ、罪悪感を隠そうとするためか、そこには、敵意がこもっていた。
「管領家からの上使である、わしの決定に不服を唱えるのか」
傲然と見下しての言葉である。
（こやつ！）
新九郎は、胸に、かっと突き上げるものを感じながら、
「いや、左様な不埒なことではござりませぬ」
と、平伏した。
人間として、こんな奴に頭を下げることはないが、何といっても、まだ、身分がものをいう。
相手は治部少輔である。官位相当では、従五位下だ。
こういう官位は現代から見るとどの程度のものか、判断するのに目安が難しいが、上国の〝守〟が同じ位だといえば、凡その見当はつく。六十余州はそれぞれ大きさと内容によって、大国、上国、中国、下国とにわけられていた。
こうした身分差が、いざとなるとものをいう。
新九郎は、石脇城を預かっていて、いうならば、小なりと雖も、一城の主であるが、官位ということになると、何もない。
すでに実力の時代だと信じていたし、北川どのと竜王丸のために力のかぎり、範満と闘うつもりになっていた新九郎だ。官位など問題ではなかった。
官位を望めば、それなりに貰えたろう。が、それどころではなかったのである。
新九郎は、おのれ一身の修飾のことなど考えなかった。
かれの目的は、一城の主、一国の主となって、安楽な人生をおくることでもなければ、権力欲を満足させるものでもなかった。
そこに、官位などに恬淡としていた理由がある。
わが身の立身と栄華が目的であったら、下等な官位にすら、食いついたにちがいない。

（おれは、そんな人間ではない）
と、恬然として来た新九郎だったが、いざ、こうやって、多勢の将の前で、治部少輔政憲と口を利く段になると、その官位が、目の前に立ちふさがった。
かれ自身が官位など一笑に付しても、世間は、官位に左右される。何よりも、修飾を心がけるのが世間であり、それが常識だった。
「――せめて」と、血を吐くような思いで言った。「竜王丸の継承は、何年後か、それを御指示下されい」
約束をとりつけておきたかったのだ。
政憲は、範満を見た。
それから、うすい笑いで、
「成長後、と申した。成人したなればのことじゃ」
それが最後の言葉だった。政憲は、立ち去った。
関東公方と管領が動いたとなると、今川家の争いは、一私企業内の争いではなくなる。
内訌ならば、力で勝てばそれまでだったが、もはやそれは遠い夢になってしまった。
かえって、これ以上、争いになれば、弓を引いた方が、管領の軍勢を邀（むか）えねばならぬことになるのだ。
新九郎と竜王丸派の重臣たちは兵を引き上げ、それぞれの領地に逼塞するしかなくなった。
この戦さは、そういう意味で、範満の勝ちになったわけだ。範満の策謀が功を奏したといえる。
（竜王丸が成長するまでの、仮の主）
ということで、範満は、堂々と府中城に入ってきたのである。
現在の静岡市、駿府である。徳川家康が改築した駿府城ではない。規模はもっと小さいが、大体同じところにあった。
駿河の府中にあるから府中屋形、あるいは駿府城と呼ばれていたのである。
〝仮の主〟でも、主人にちがいない。
もともと前主人治部大輔義忠の伯父範頼の子であるだけに、血統が悪いわけではない。年齢的に見れば、たしかに、竜王丸の幼少を輔弼するには、恰好の存在だ。
そのことは内外ともに認めている。
かれが野望さえ抱かなければ、この騒動はなかったのである。
（その野望が通った……）
仮にしろ、府中城の主の座に、範満は坐ってしまった。
こうなっては、じたばたしてもしかたはない。
「暫くは、静観するしかありますまい」新九郎は、北川どのを慰めて言った。「いま、一番留意せねばならぬことは……範満が、永遠に権力を放さぬかもしれぬこと」
「………」

「それを看視せねばなりませぬ」
「あと何年かかるでしょうか」
「そのことです。上杉治部少にそれがしが、念を押さんとしたのもそのことでござった」
新九郎は思いだして無念の歯をばりばり嚙み鳴らした。
「あの評定の席で、一年とか二年とか、はっきり明言してくれれば、と、願ったのも、虚しゅうなりました。範満がいかに手を廻して、治部少の歓心を買うたか。それも所詮、くりごとになる。かくとなっては、あくまでも、範満が〝仮〟の存在であることを折にふれ、判然とさせ、和子の成長を待つしかありますまい」
「ああ、一体、何年後に……」
「二年か三年か……あるいは」
新九郎は言葉を切った。北川どのの悲哀が見ていられなかった。
永遠に放さぬとなれば、これは、やはり、実力を行使して範満を仆すしかないことであった。

伊豆へ

伊勢新九郎こと、のちの北條早雲の、東海地方に在りし日のことを伝える資料は非常に少ない。
また、一様ではない。資料によっては、十年二十年くらいの年月差も無視したものも多い。
近年、漸く、地道な研究をする人々が増えて、隠れた部分、抹殺された部分も、陽の目を見てきつつあるが、それでも矛盾は蔽えないし、疑問は氷解しない。
新九郎が駿河に滞在した年月でも大きなひらきがある。
一つには今川家というものが、あれだけの大きな組織でありながら、戦国中期に織田信長に亡ぼされてしまったこと、あと徳川氏が三河から翼を広げて、丁度、近世の開き初めでもあったせいで、政治組織から文化全般にわたって、大きくルネッサンスの改革に遭遇し、変化を免れなかったことなどが、作用しているのであろう。
たとえば、少し後だが西国では、もっとも早く政治的に

中国や高麗などとの交渉のあった山口の大内家が滅亡し、その記録が散逸して、全貌が摑み難いのと、似ている。
今日われわれが享受しているところの文化の多くが、この時期にかたちを整えている。
たとえば、住居の様式などもそうだし、衣服に就いてもそれがいえる。
生活に用いる什器、部屋の中の調度なども、この時期に発生、実用化されたものが多い。
こうした変り目が、その以前の生活様式を破壊するにともない、記録をも無用のものとしてしまうのである。
資料に矛盾が生じるのもそうしたことと無縁ではない。
たとえば竜王丸と範満の相剋が、竜王丸の幼年性、つまり元服問題にあることは叙述して来た通りだが、この元服の時期に就いても、異説が多い。
前記の管領家からの調停によって、戦火がおさまったことにより竜王丸は、山西の長者屋敷に隠れている必要はなかった。
山西に在るということは、単純に地理上から見ても、駿府――静岡市との隔りがある。
距離的には僅かだが、間に名にし負う宇津谷峠が聳えているのだ。
これは、距離だけではない遠さを意味する。つまり東から攻めるほうにとっては、難事であり、山西に在る者にとっては、安全を意味する。
したがって、竜王丸は調停が済むと、長者屋敷を出て、山を越え、東の麓、鞠子の泉ヶ谷に住むことになった。
それだけ、一歩、駿府に近づいたことになる。
ここで成長し、範満が隠居するのを待つ。
問題は、そのとき元服したかどうかである。
常識的に考えると、その転機に元服したのではないかと思われる。
そう書いたものも多い。
だが、事実は、元服はずっと遅い。信ずべき資料によると、少なくとも長享元年冬以後と見てよい。すなわち、早くとも十七歳以降である。
この元服は前に書いたように男の儀式であるから、突然、衝動的に行うということはない。
年齢の区切りとか、吉年吉月吉日を選ぶなどして、その儀式を祝福する。
この長享元年冬、という理由は後述するが、新五郎範満が上杉政憲の裁決によって、駿府城の主になってから、およそ四年後だ。
この間、竜王丸は、ずっと鞠子にいた。
〝竜王丸〟の名のままである。
「もはや、こうとなったからには元服は急ぎますまい」
と、北川どのも、肚裡を決めて、

「いっそ元服は、今川家の当主の座に就いてからということに」

女の執念が、めらめらと黒い焔を吹き上げるようであった。

時機を失した以上、あくまでも一人前となる証しとしての元服の儀式が行わなければならぬとする。

夫を失った北川どのの、いまの望みは竜王丸の成長と太守の座だけであった。

鞠子に新館を建てたのは、範満が隠居するまで、少なくとも、二、三年以内ではないと見たからである。

泉ヶ谷の奥深く、歓昌院という寺があったが、荒れていたのを改築し、柵を設け、山腹を削ぎ、要害の城館とした。

この時代のことで、調停が出来たといっても安心はならない。

何しろ腹黒い範満のことだ。駿府城の主となっても、恒久的に、駿遠二国を支配する野望のために、いつ、竜王丸暗殺を計るかしれない。

そのためには、出来るかぎり、堅固に要害作りをし、襲撃にも対抗できるようにしておかなければならなかった。

前にも述べたが、いまでも、この鞠子に近い泉ヶ谷の奥、歓昌院のある歓昌院坂は、細い山道で、幽邃境に入った思いがする。

現在では宗長の吐月峰柴屋寺が名所になっているから、観光客の往来もあり、明るい山峡の盆地という感じだが、当時は、もっと立木も深く、全体に仄暗く、樹下を一条の渓流が静かな音をたてて流れていたであろう。

東海道の鞠子宿や元宿ではなく、一歩奥へ入ったあたりに住むというのは、やはり、万一を警戒してのことだ。

この泉ヶ谷には、嘗て、新九郎が寿々女を連れてきたとき宿をとった一庵老人の一族がいる。

一庵老人とその一族は、心情的には、竜王丸の味方である。範満の策謀によって、寿々女を人質に曳馬の城へやられていたことなどから、範満への憎しみが、竜王丸側への傾斜を齎している。

ただ、かれらのエゴイズムは、必要以上に肩入れしようとしないことだった。

一庵とその一族が、おのれのことしか考えない狡くて卑小な連中だというのは、厳しすぎる見方であろう。

この時代の共通したそれが生き方であった。

時代の動きは、応仁以来、急激に、相互不信と、弱肉強食の末世的な相をあらわしてきている。

六十余州すべてに、その激動の波紋が及んでいるのだが、殊に今川家の内紛は、長い間にわたっていて、一族重臣たちは自(おのずか)ら、保身にたけてきている。

保身とは必ずしも保守の意味ではない。攻撃によるそれの使いわけも心得ている。

政憲の裁決によって、竜王丸派の重臣たちの気持にもぐらつきがでてきたのも当然だった。

かれらは、敏感なのだ。常に今川家勢力地図を描いている。力の強い方に傾く。それも片足をうしろに退いた姿勢でだ。

かれらにとっては、何が正義であるかより、何がかれらを救うかの方が大事だった。身分と権益など一たん摑んだものは放したくないのが人情であろう。

今川家という大所帯の中では、人々は、官位と所領の保全に傾注してゆく。

そうした家臣たちの姿を見ると新九郎は、北川どのと竜王丸の行末に不安を感じた。

(このまま、重臣どもは範満に吸収されてゆくのではないか)

老獪な範満は、駿府城に入ると、いままでの〝敵〟であった竜王丸派の重臣たちにも、招きの手を伸ばしている。

すべてが氷解したとして、愛想をふり撒きはじめたのだ。

範満が、今川家の臨時太守であることは、誰もが知っている。知っていながら、その権勢がふくらむと、しだいに阿諛追従の輩が増えるのは、ひきとめようがなかった。

竜王丸の泉ヶ谷の城館の側に控屋敷を作り、時々、所領から往来して、臣下の礼をつくす者は多くはなかったが、何人かはまだいた。

義忠の弟貞延の子で竜王丸の従兄に当る瀬名陸奥守一秀や老臣朝比奈備中守泰熙、小泉左近などである。

当時、宗長の蓬庵として著名な柴屋軒はまだ建てられていない。

連歌師宗長のために、歌友ともいうべき斎藤加賀守安元が、一庵を営み、柴屋軒と号したのは、このころより、およそ二十年の後である。

宗長はこの間、京と往来し、あるいは九州まで足を延ばしたりして歌詠みの行脚をつづけている。

義忠在世のころは、目をかけられた男だから、竜王丸派といえよう。武人でもあり、出陣して手柄もたてているし、諸国を経めぐっては駿河に戻って来る。

したがって、在国中には、新九郎との交遊もあったはずだが、その記録が殆どない。

近時、このころ、新九郎は数度、京へ戻ったり、往来していたのではないかという説が出てきた。

あるいは、そういうこともなかったとは言いきれない。新九郎のことだ、便々として、範満の隠居の日を指折り数えて待ってはいなかったろう。

いろいろと、劃策したにちがいない。京へ行ったとすれば、前将軍義政と和した義視に逢いにいったものか。

竜王丸の家督のことを、京からの指示ということで、願いに行ったのかもしれない。

　当時、すでに将軍の座には義政の子義尚が就いている。だが年齢的にはまだ十八、九。今川家のトラブルに口を出す気はない。
　義政は京の東山に宏壮な山荘（銀閣）を造営して、華麗な夢を見ていたし、政治はたるんで、近江では六角氏などが蠢動をはじめている。
　義尚もまた、新百人一首の選をしたりして結構、楽しんでいたことを考え合わせれば、新九郎の苦衷は、実を結ばなかったろう。
（京も駄目……）と、新九郎は思ったろう。（こうなれば、関東公方を動かす。直接に向うから言質をとるほうがいい）
　関東管領が決めたことなら、関東公方の肚裡しだいで、どうにでもなろう、と思った。
　上杉政憲の片手落ちを、堀越公方たる政知の方から是正させる。
　少なくとも、
（範満の隠居の時期）
を、決定させる。その運動をするしかない。
「伊豆へまいる」と、ある日、新九郎は言った。「供は三、四人でよい」
「わたくしめを」
と、黒丸が申し出た。
「よかろう。ほかに兵庫と、韋駄天がまいれ」
　新九郎はまだ、伊豆を知らない。
　堀越公方に逢うのは、直接には竜王丸のことだが、すでにこのころ、伊豆への、望蜀の思いを抱いていなかったとも言いきれない。
　当時、古河公方たる成氏との間は、和議が整っていて、伊豆のくには名実ともに、政知のものになっていた。
　堀越公方政知が関東へ下向したことは、いうまでもなく古河公方成氏を討つにあった。
　そのために、成氏の方では鎌倉を焼き、襲撃をくりかえして箱根で阻み、相模へ踏みこませなかったのである。
　したがって、政知の第一になすべきことは、成氏の討伐。ために、義忠などは、当時、京の公方（義政）からの要請で、政知に与力し、出陣したりしている。
　また治部少輔上杉四郎政憲が、政知の執事として下向してきたのも、補佐としての役目であった。
　両公方の抗争は、十数年に及んでいるが、どうも、この情勢には、納得のいかない部分が多い。
　政知という人間が、英雄の質に欠けるところが一つ、上杉治部大輔教朝という前管領が、かなりに老獪だったことが一つ。
　関東公方（政知）の東下を乞うたのも、この教朝だが、あくまでも、成氏に拮抗するための傀儡にすぎなかったよ

うである。
　その教朝が流行の熱病にかかり、
〝発熱激甚、心身悩乱して、躁暴禁ずる能わず、自ら刀を抽き腹を剖て死〟んだ。
　あと、一族の上杉清方、上杉房顕らが鎌倉にあって、ほしいままに政治をしていた。
　一見、堀越公方を奉じているように見せながら、肚裡の中では、（坊主上りの愚か者め）と、軽侮して、公方の権威も有名無実なものにしていた。
　抗争十数年にして、漸く、成氏が屈服して、伊豆は完全に政知のものとなったが、
〝唯々両上杉氏の威を益ししのみにて、毫も堀越御所の威重を養う資とはならず、御所は却て衰退に臨めり〟
と、（塩尻）にある。
　政知は将軍の弟で京の天竜寺で僧になっていたが、二十三歳で還俗し、左馬頭政知と称して、下向。三島で元服加冠の礼を行った。
　この堀越――という地名は、後世うすれてきたが、伊豆の北條の西、守山の北にある。
　先ごろまでその居館の址は、御所ノ内と称し、畠になっていた。
　南に守山を負い、狩野川が流れて濠を成し、要害の地だ。むかし、ここに北條時政の邸があったといわれる。政子が誕生のとき、産湯を汲んだと伝えられる井戸もある。
「いいところだな、黒丸」
　新九郎は、富士を仰いで、晴れやかな声で言った。
「はい、富士が嶺が間近く見えまする。かたちもこちら側から見るほうが、面白げでございます」
「公方はよいところに館をかまえられたな」
　新九郎は土手に坐って、飽かず富士を眺めている。
　足もとに、川が流れている。狩野川である。
　雪を解かした冷たい水が天城の山々から流れてきて、北伊豆を灌漑し、沃野をうるおし、駿河湾へそそいでいる。ゆるやかに蛇行する川も、このあたり川幅を広げて、富士の姿をうつしていた。左右にひろがった平原はところどころに、疎林や小さな森を点綴させ、足柄連山は屏風のように連なっている。
　春はまだ浅く、おくれ毛をそよがせる風は、富士の雪を吹きおろすかのような冷たさだったが、その爽やかさがこころよかった。
「駿府も悪くはないが、ここも住むにはよいところでござる」
　荒木兵庫は、以前を思いだしたように、そこらを歩きまわっている。

鳥羽から血盟して船出したあと、嵐に遭遇して流れ着いたのが西海岸だったのである。

土肥のあたり。この韮山でも、少し暮した。あの鳥羽十蔵の世話になったのだが、そんなことが、道案内の役に立つようになろうとは思いがけなかった。

「兵庫、外山豊前とは、どういう男だ」

富士を見たまま、突然、新九郎は言った。

雅景を愛でながらも、頭は、方略を案じていたのであろう。

「左様……一口に申せばせませましい男でござる」

「せませましいとはどういうことだ」

「気が小さくて、こまごましく、短慮で、吝で、妬心が強い……」

「ははは、よく揃うたな」

「まず、一城の主には、価値のない男でござるな。おお左様々々、もう一つ」

「まだあるのか」

「女好きで」

「はははは、女好きは、おれもおぬしも、同じではないか」

「いや、それが尋常の好き者ではない。何せ、野駈けの途中、五十歳ばかりの女が、小川で菜を洗う姿を見て、馬から降り、草むらで抱いたという話で」

「豊前は幾歳じゃ」

「四十そこそこでござろう」

「ほう、珍しいな。したが五十歳の女でも、豊前の目には、天女に見えたか」

「それだけではない。殊のほか尼僧が好きで、領内に尼寺が七つ八つありましてな。そこを毎夜経めぐるという噂も聞いていましたな」

「なるほど、いささか、異常だな」

黙って話を聞いていた韋駄天がこのとき顔をあげて、にやっと黄ろい大きな歯を剝きだした。

「尼はいい、こたえられねえ」

「やい、ここではよせ。手を出してはならぬぞ」

外山豊前守というのは、北條家韮山城の守将であった。荒木兵庫らはかれのもとで一時足軽奉公などしていたことがある。その縁だった。

すでに、太田資長や上杉政憲によって、新九郎の存在は政知の耳に入っているはずであった。

が、新九郎は敢て、正面から乗り込むことを避けた。

まず、手蔓をもって、謙虚に膝行する姿勢を示した。

おのれを恃む心は強いがそれを表面にあらわすのは、好ましい結果を生まないことを、年輪が教えている。

信念と傲慢とは違う。新九郎は豊前守の前へ出るとき、尼僧好きと聞いたことを思いだして、思わず笑いがこみあげた。

その笑いを、どううけとったのか、

「評判は耳にいたしております」

と、豊前守は、目を細めた。

でっぷりと肥って、眼が細い。いかにも好人物という感じだが、外見と中身は必ずしも一致しない。

「先般の戦さでは、随分と功名されたそうで」

「いや、噂は事実と違いますな。もともと、家中の揉めごとゆえ、他国と戦うようなわけにはまいらぬ」

「左様でござろうな、なるほど、なるほど」

豊前守は頷いて、耳の穴を指でくじった。この男、これが癖らしく、すぐに指が耳にゆく。

この韮山の北條家も、揉めごとがあるらしい。どこの家中でも、所帯が大きくなれば、必ずお家騒動は起る。

北條家ばかりではない。公方の政知の家中でも、後妻と長男との間で、確執があるという情報を新九郎は摑んでいる。

鋭鋒を隠してはいるが、ここへ乗りこんでくるには、事前に、調査を怠っていない。情報の蒐集は、絶対に必要なことだった。内情を充分に把握しているからこそ、新九郎は、いかにも伊豆の風物に目を奪われているかのように、他意ない表情ができるのだ。

「二、三日、御当地に逗留いたしたいが」

「よろしゅうござるとも、ゆるりと、なされい。その前に、公方への拝謁をお取り計らいいたしましょう」

「よしなに」

「公方はいささか気難しいところがござるが、貴殿ならば、喜ばれるであろう」

新九郎が嘗て京で仕えていた義視は政知の兄である。京落ちして、伊勢へ下ったときも一緒だった。

訣別したのも、仲違いではないから、問題はない。

豊前守は別棟の客殿に案内してくれたが、そのとき新九郎は奥庭で一人の婦人の姿を見かけてふと、足を止めている。

「――どなただ、あの御方は」

無言で見送ったあと、新九郎は呟くように言った。

その間、数弾指経っている。

向うの女性も、こちらを見た。会釈を交したのである。それだけだった。見るからに楚々とした風情の、気品のある女性だった。打掛を長く裾ひいて、渡殿を歩いていたのだ。

呆然と見送っていた新九郎を、外山豊前守は、うすい笑いを浮べて振りかえった。

「殿の奥方だ。如何かの、目の保養になったのでは」

新九郎はそれを、やはり微笑で受け取った。

「京にも数少ない美形と申せましょうな」

それだけだった。

だが、新九郎の胸に強く彼女の面影が灼きついたのである。

客殿に入って、ゆるゆると、手足をのばしたとき、

「美い女がいますな」

兵庫が囁いた。

「奥方か」

「左様で」

「へんな気を起すな」

「はははは、御安心を。ただ、美い女ゆえ、美いと申したまでで」

「しようのないやつだ。酒を喰って寝ろ」

そのとき、黒丸が急ぎ足に板戸の外へ来た。

「殿！」

「黒丸か」

「——お変りございませぬか」

「どうした？」

「いや……」

黒丸はあたりを警戒しているようであった。

新九郎は兵庫と目を見合わせた。兵庫が刀を摑んだ。

「——気のせいかと存じますが、ただいま、怪しの影を見たように思いまして」

「怪しの影を？」

客殿に近寄って、新九郎と兵庫の話を盗み聞いていたらしい。

その影——

裏の竹藪に走りこんだ影が、確かにいたのである。

その影は竹藪の中をがさがさと熊笹をかきわけて、裏の小径へ抜けると、一散にあとも見ずに走りだした。

宵闇が迫っている。その影は、二丁ばかり走って丘の麓にある小屋敷に入った。

珍しい磚瓦塀に囲まれた小屋敷であった。磚瓦というのは、一種の煉瓦のことも称うが、屋根瓦を壁土で積み重ねたものが一般的で、明国で多く使われている様式だった。

背後に深い林を負い前面には小川が流れている。小さいながら、これは、見方によっては城館といえなくもない。

土橋を渡ると、その男は、

「御開門を、御開門を！」

と、怒鳴った。

かなり大きくその声は響いた。あたりは静かだし、鶯の声がしている。聞えないはずはなかった。

「留守か？」と首をかしげたのは鳥羽十蔵であった。「御開門を！　御開門を！」

と、また一層大きく声を張り上げた。

いつもならそれから十と数えないうちに、人が出て来るのである。

「どこに行ったのだろう、こんな時にな」

十蔵は舌打ちした。

留守ではなかった。いたのだ。裏庭に面した書院には男と女がいた。宵闇が繁みから湧き出して、軒場を蝙蝠が音を立てて飛び廻っている。この時刻だというのに、すでに痴夢を見たあとらしく、だらしなく寝そべっているのだった。

女は十七、八か、褥から乗り出すようにして、黒髪を乱していたが、

「あら、誰か……」と、呟くように言い、男を見た。「来たようでございます」

「——聞えぬ」男は女の乳房に唇を這わせながら、くぐもった声で言った。「何も聞えぬ」

「ほらまた……」

「聞えぬ」

「御開門といっていますのに」

「聞えるのはそなたの心ノ臓の音だ、もっと下へもっと下へと聞えている」

「あれ、いやらしい」

女はそれでも嬉しそうに身をゆすった。黒髪が藻のように乱れ箱の中で動いた。

「どうせ男と女じゃ、いやらしいわえ」

男は唇を這わせるのを止めない。手は女の下腹の方で何かを求めている。

その手を避けるようにして、腰をひいて、

「ねえ、黙っていてよろしいの？」

「かまわぬ。知らん顔をしておれ」

「でも」

男の手は女体の中心に触れたらしい。

「あれっ」

「もう一度だ」

「そんな、あれほどしたのに、またかえ……」

たっぷり楽しんだ筈なのに、まだ足りないのか、女は呆れて口がきけない。

その間も、外では怒鳴っている。どんどん門扉を叩き始めた。

「御開門を！　一大事でございます」

「ほらまた……」

「うるさい奴だ」ようやく乳房から顔をあげたのは、弥三郎春忠だった。「こんな時刻に急用など、ろくな事ではあるまい。知らん振りをしているがいい」

だが、門扉を叩く音は段々激しくなってくる。

弥三郎春忠はまだ若い。花鳥風月をともに暮すには、野心がありすぎる。

その野心が命取りになるのだが、野望を抱いた男にはそれを捨てろというのは、死ねというのに等しい。

彼にとって、野望は命そのものである。
駿河にいる時でも、石脇城の主として、範満なり竜王丸なりに素直に与力していれば、たとえ討ち死にすることがあっても、韮山へ流寓することにならなかったろう。こうなった以上、流寓の暮しは、それなりに楽しむ方法もある。
それができないのは、生れつきの性格もあるが、甘え心が多いせいだった。
駿河で一城の主の時ですら、不満を持っていたのだから、この土地で大名牢人としての暮しは何かにつけて腹の立つことばかりだった。
それをまぎらすのは、酒と女しかない。持って来た金を使い果すまでは、酒と女には不自由はしない。ただ、この金には限度がある。他に収入がないから、居食いというか食いつぶしているだけで、先のことを思うと、いらいらしてくるのだ。
（この金があるうちに、何とかして官位を得なければ）
と思うと、いたたまれなくなる。だが、戦さを仕掛けるには家来がいる。軍勢がいる。それを集めるのも金だ。
下手な戦さは、しかし自滅を早めるだけであった。弥三郎春忠は、財布のヒモを引き締めるしかない。
この大名牢人の暮しを見て、借金を申し込む者が少なくなかった。
大体、ヨソ者が他国の土地へ住みつくというのは、当時むずかしい。土地の領主や地主や農民にワタリをつけなければならない。
それも金だ。だから住まわせてもらっているという意識が、負い目になるのは仕方がない。それに借金を申し込まれると、吝嗇でも断われない。一方、利息をこれこれと約束する。収穫を当てにしての借金は、旱魃や洪水などの天災に見舞われると、返せなくなる。
弥三郎春忠はこまかく利子だけを取り立てる。それも払えない者には、元本に繰り入れる。
利息が利息を増して、つまり複利計算で帳簿面だけはどんどん嵩んでいくが、実際の収入にはならない。
また、あまり額が多くなると、借り主の方では腰が坐ってきて、
「あんなヨソ者に、返すことはねえ」
と、開き直ってくる。弥三郎には取り立てる力がないのだ。だから、このごろでは、人が来ると、また借金申し込みかと、警戒する気の方が強く、
「夕方に来るのはたいてい、金を借りに来る者だ、門を開けるな」
と命じてある。
鳥羽十蔵がいくら怒鳴っても、開けようとしないが、しつこく叩いているうちに、ようやく声に気がついた。
「十蔵のようだな、あの声は」

「そうらしいですね、十蔵さんですね」
と、女は頷いた。
彼女は、さっきから気がついていたのだ。が、そういうと、嫉妬の火を燃え立たせる。
もともと、ひがみの強い男だが、近ごろますますその傾向に拍車がかかった。怒りっぽくなった。今の弥三郎春忠にとって、怒りをぶつける存在は少ない。
この女はその一人だった。たいして惚れているわけではない。もって行き場のない不満の吐け口にしているだけであった。
女は、お磯という名前で、十蔵が世話したのである。
十蔵の知人の娘だというが、弥三郎はいつも二人の仲を疑って、
「ほんとうに何もなかったのだな」
と、念を押す。
かと思えば、お磯の股間に手を触れながら、
「十蔵の指の感じはどうだ」
などとかまを掛ける。
もう、お磯も馴れてしまって、
「どうかしら、口惜しいけど、弥三郎というお方のものしか知りませぬ」
唄うように答える。
初めのうちは、そうしたことも刺戟になったようだが、それも度重なると、もう倦怠を避けるだけの効力を失ってくる。
十蔵の方では、どう考えているのか。弥三郎の巧弁に騙されたまま、けっこう良く仕えている。
仕えるといっても、時々出入りして、何かと用を弁じているだけだが、北條家の家臣たちとの折衝や借金の取り立てなどに、口を添えたりする。これだけ、弥三郎のために尽くしているのは、やはり夢を見ているのか。
今川という所帯の大きさを眼のあたり見てきただけに、弥三郎の毛並みのいいところに、期待をつないでいるのだろう。
これまでの北條家では、亡命してきた弥三郎を今川家の何かの際のパイプにしようという肚があった。
新九郎の出現は、この関係を大きく変えることになる。
十蔵は、新九郎たちの韮山入りを知ったのは遅かった。
もっと早く知っていれば、手を打つ方法もあったのだが、弥三郎の貸し金のことで遠出していたので、戻って来たのが遅かったのである。
小者が門を開けると、十蔵は勝手知った中へ走り込んだ。
「大変でござる」
石階のところに躓った。
「なんじゃ、また借り手か」
「いえ、さようなことではござりませぬ。彼奴が参りまし

た。彼奴でござる、それ、伊勢の」

「何、新九郎が！」

弥三郎は、女を捨てて、棒立ちになった。

「どこへ、どこへ新九郎が参ったのだ」

青天の霹靂といってよかった。

弥三郎の声は上ずっていた。驚愕のあまりがたがたと震え出し、よろめいて板戸につかまった。

「はい、この韮山でございます」

「韮山はわかっておるわい」

「はい、外山豊前守さまの……」

「外山のところか、なんとして彼奴が」

カッと目を剝いた。こちらに来てからは、もう面貌も隠すようなことはなかった。火傷の痕がすさまじい。

一城の主としての権威と、今川家を支配する力を得ようとして、野心を研いでいる時は、体裁にこだわっていた。今川の太守たる地位にふさわしい存在でなければならないからである。一度、敗亡してその望みが断たれたとなると、もう苦しい覆面をしていることもない。また、ヨソ者がそんな恰好で暮せるものではなかった。

弥三郎も、諦めざるを得なかった。醜い顔でも、いっそ曝してしまえば気が楽だった。

「新九郎が、新九郎が……おれを追ってきたのか」

「……」

「おれを追ってここへ」

と、また繰り返した。

十蔵は黙っている。真意がわからないから、答えようがない。それがますますいきり立たせた。

「何しに来たのだ、彼奴は」

「はあ」

「新九郎めは一人か」

「いえ、四、五人で」

「たった四、五人でか、ふーむ、軍勢はいないのだな。それとも、彼奴のことだ。どこぞに潜ませて韮山を窺うているのでは」

「さあ……それにしては何やらのんびりした風で」

「たわけ！ 彼奴ののんびりはいつもの術だ。それがわからんのか、いつまでたってもうとい奴だ」

「ははあ」

「何として、外山のところへ行きよったか。真意は奈辺にあるのか」

弥三郎は、部屋の中をいらいらと歩き廻った。

その間、十蔵はじっと石階のところにうずくまっている。彼が歩きをやめ、また廊下のところへ出て来たところで、こう言った。

「荒木兵庫が伴をしていましたから」

「何だ、兵庫が……。だから何だと言うのだ」

「兵庫は、外山殿と面識がありまする」

「ふん、そうだろう。その元は貴様だろうが。とにかく真意を探ってこい」

叩き出されるようにして、十蔵は屋敷を出ると、忠実に引き返している。

新九郎の寝ている客殿に忍び込んだのである。

（寝ているな……）

十蔵は板戸の隙間から中を、覗いた。

立派な客殿である。板戸の合わせ目に隙がない。十蔵は小さな刃物を差し入れ、こじった。少しずつ少しずつこじりあけて、ようやく、室内がうかがえる程度にあけたのである。

新九郎の寝顔が一穂の灯のもとに見えた。寝息も聞えた。

中へ忍び込むことを、十蔵は考えた。真意を探って来いと言われて困ったのだが、とにかく新九郎の身辺を探ればわかるかもしれない。

しかし、忍び込んでから新九郎よりも、外山豊前守の方を当ったら情報を得られたのではないかと思いついたのだった。だが、ここまで来た以上、何か得なければ、と思い直した。

（何かがある筈だ）

新九郎の口から聞けないとすれば、その持物から判断するしかない。覗いてみて目についたものがある。

（あれを取るか）

枕許に一帖の書物が置いてある。その他に数枚の書き散らしが見えた。朱筆が投げ出されている。

寝ながら何か勘考していたとみえる。それを見ることで、彼が韮山へ来た真意がわかるかもしれない。

十蔵は更に板戸をあけた。とたんに音がした。

（しまった）

肝が冷えた。が、寝入りばなである。新九郎は眼を醒まさない。

更に、少しあけた。大丈夫だ。ようやく五寸ほど開いた。人間は頭が入る穴なら、たいてい体が入る。体を斜めにして入れようとした。が、入らない。

ガタッとまた音を立ててしまった。刀がつかえたのだ。やはり、慌てている。彼はいったん身を引くと、刀を腰から引き抜いた。左手に持ち、そろそろと身を入れた。体の半分ほど入れたところで、ふっと寝息が止った。

（眼を醒したか）

十蔵は心ノ臓が止るかと思った。

しばらくそのまま様子を窺ったが、さいわい目を醒した様子はない。また入ろうとした。焦りがある。刀の鐺が板戸に当った。

うーんと、新九郎が声を洩らした。目が醒めたのである。ぱっと上体を起した。一瞬、十蔵は身を翻している。

「誰だ」
新九郎は、枕許の刀に手を伸した。
その時はすでに十蔵の体は、板戸の外にある。
新九郎の大喝に兵庫たちが目を醒ましたのか、何処かで板戸をあける音がした。
「出合え！　賊だ！」
新九郎が走り出た時、十蔵は、庭を斜めに犬のように走って、塀に飛びついていた。室内の明りがその後姿を、ほのかに見せたが、十蔵ということはわからなかったようである。
「待て！」
兵庫が叫んだ。彼もおっ取り刀であった。裸足で追いすがった。
意外に身軽だった。十蔵は塀に飛びつくや、あざやかに乗り越している。
兵庫の手裡から、何か飛んだ。それはしかし、影を外れて瓦にけたたましい音を立てただけである。
脇差だった。影は、塀の上でふりかえった。が人相はわからぬ。
兵庫は脇門に走った。そのとき、黒丸が大声で叫んだ。
「韋駄天、逃すな」
韋駄天の姿は見えなかった。酔って寝込んでいたのである。が、その声に小屋から、飛び起きてきた。
窓からのぞいた眼に、影が塀の向うへ消えるのが、一瞬見えた。韋駄天は、はじかれたように窓から飛び出している。
まるで、黒丸の指にしたがう馴らされた犬のようであった。
韋駄天走りに塀に走り寄ると同じところから、飛び上り、塀を越えている。寝起きなのだ。下帯一本の裸だった。裸はいいとしても手ぶらだった。得物は何もない。斧も棍棒も、摑みとるひまがなかった。
そのあとになって、小者たちが寝呆け眼をこすりながら、「何事でございます」「盗賊でございますか」「こりゃ大変じゃ、外山どの御家臣に注進せねば」
などと、徒らにがやがや騒いでばかりだ。
「たわけども、早よう追わぬか」新九郎は大喝した。「得物を持て、韋駄天のあとから駆けつけよ」
槍や薙刀をかついだ小者たちがあわてて出てゆく。
いまからでは遅すぎるようだが、あるいは、素手で向った韋駄天の役に立つかもしれない。
黒丸が新九郎の傍へ残ったのはほかにも、何人、敵がいるかもしれないからであった。
軍略からいえば、いまの男は、
〝虚〟
かもしれぬ。

つまり、囮りの役をする。今度のように供の数が少ないと外へおびき出したあとを襲うということも考えられる。それくらいのことには、頭が廻るように成長した黒丸だった。
刀の柄に手をかけ、新九郎の前に片膝ついて、あたりに気をくばっている。だが、ほかには、それらしい気配はなかった。
「一人だったようだ」
と、新九郎が言ったとき、兵庫が戻ってきた。
「殿、おけがは」
「大丈夫だ、おれを殺りに来たのではあるまい」
「韋駄天が追っていますゆえ、多分捕えることが出来ましょう」
と、兵庫は言った。
韋駄天は足に自信がある。どんな足早の者にでも負けない自信がある。
闇の中を走る影を追いながら、
「待たぬかい、やい、待てい」
吼えた。
手ぶらである。それだけに、よけい威嚇する必要があったのか。
そんな計算がはたらく男とは思えないが、得物を持たずに飛びだして来たことが、咄嗟に智慧を働かせたのかもしれない。
「やい、待て、待たぬと、腕をへし折ってくれるぞ。この斧で頭をぶち割ってくれるぞ」
いかにも手に斧があるかのような喚きだった。
が、かえってその威嚇は、十蔵をして、追い詰められた者の牙を剝かせることになったようであった。
十蔵は追い迫ってくるのが、韋駄天一人であり、闇にすかし見て、素手だと知ると、
(よし、殺ってやれ)
と、度胸を決めた。
窪地になっているところで、つと身を低めた。
韋駄天は、(見失ったか)と、さらに足を速めてくる。
十蔵は草むらに身をひそめて走り寄ってくる韋駄天を見守っていたのである。
頭を飛びこえるように近づいた。
刹那、十蔵の刀は脛を払うように走った。わっと、声を奔らせながら、韋駄天は飛び上った。
双脚斬りの一刀は、一瞬の差で、宙に飛んだ韋駄天の片脚を傷つけただけだった。
しゃーっと、血が頭上に舞い落ちてきた。韋駄天は、もんどり打って転がった。
十蔵は、(勝った)と、思うと同時に、(逃げられる！)その望みが甦り、憎しみよりも、安心の方がまさった。

韋駄天に致命傷を与えようとすれば、容易だったのである。が、それよりも、いまは、顔を見られない方が大事だった。
　槍や薙刀を持った小者たちが、口々に喚きながら、近づいてくるのだ。
　さすがの韋駄天も片脚をざっくりやられて、悲鳴をあげながら、草むらでもがいている。十蔵は刀をひいて走りだした。
（ざまァ見ろ、まだおれとは気がついていないのだ。新九郎もな）
　明日は、平気な顔で、新九郎の前に出ていってやろうか、と思った。
　だが、その度胸はなかった。ここは韮山なのだから、新九郎や兵庫を恐れることはないのだと思いながらもその決心はつかなかった。

　外山豊前守は、すでに寝ていたが、この報告を受けると、
「寝所を間違えたのではないか」
と、寝呆け顔で言った。
　豊前の屋敷は、韮山の城の外郭にあり、いわゆる城下町というかたちではなく、点在していたにすぎない。その一つである。外山豊前守は叩き起されたので、不機嫌だった。
「誰が客殿を襲うことがあろう」
「……」
「そやつの人体、判明せざったのか」
「はい、追っているそうですが」
「面妖だな」
　かれは、枕元の水を飲んだ。それで幾らか冷めた。
「なるほど……」
と、一人の男を思いだしている。
「そうか、ありそうなことだ」と、うなずいて、「なるほどな」
と、また言った。
「そういうことか。だが、新九郎は無事だったのだな」
「はい、そのような話で」
と、取次の男は、閾の外で、小さくなっていた。冷えが、板の隙間から立ちのぼってくるようであった。
「では、お前が、見舞いにいってこい」
「はあ」
「こちらでも、賊の詮議はするゆえに、できるかぎり、そやつの人相風体、聞いてこい」
「ですが、顔はわからなかったということで」
「じゃから、わかっているかぎりだ」
「……」
「背の高い低いや、痩せがたか、肥満体か、何か落していかなかったか、いろいろあろう、頭をはたらかせい、頭を」

「恐れ入りまする」
「恐れ入らんでよい。行け」
　追いやってから、豊前守は、暫く、床の上に起きなおったまま、考えていた。
　思案していたことがある。それから、急に何か思いついたように立ち上った。急いで身支度をした。
　家来を呼んで、弓矢を持参させると、
「来い」
　促して、外へ出た。
　家来は、大鹿宇八という五十年配だが、弓をとっては豆州並ぶ者なしという腕前だった。
　豊前守は歩きながら頭巾をかぶった。
「松明を持参いたしましょう」
というのを、
「要らぬ」かぶりを振って、「眼をつむっても歩けるわい」
　知悉した道であった。
　暗いなかを、黙々と歩いてゆく。宇八は弓に矢をつがえたままである。豊前守が足をとめたのは、弥三郎の屋敷の近くだった。
　弥三郎春忠の小屋敷のてまえ、半丁ばかりのところだった。
「用心をせい」と、宇八に囁いた。「射よ、と申したら、遠慮なく、きって放せ」
「はい」
　忠実な犬のような大鹿宇八である。
　豊前守は何を考えているのか、そこからあたりに気をくばりながら、さらに進んだ。
　屋敷は、裏手がこんもりした竹藪と雑木林で、裏には道があるようには見えないが、表門だけということはない。必ず、裏門があり、不浄門があるはずであった。
　屋敷の脇に、脇門が見えた。豊前守は、正門と脇門が同時に見える位置に立った。
　丁度、畑の中で、そこには、亭々たる老杉がそそり立ち、月光を遮っている。そこに立ったのは、夜露を避けているように見えた。が、目は、夜の底を見通すように、注意深く、両方を眺めているのである。
「誰か人影が見えたら、申せ」
と、宇八にも、命じて、豊前守は懐ろ手で突っ立っていた。
　待つほどもなかった。思った通りであった。その影は、畦道を走ってきた。
　ということは、まともな道を避け、遠廻りしてきたのだ。十蔵である。が、豊前守には、まだ十蔵ということはわからない。
　林の向うから走ってきて門脇へ来た。その様子が、
（彼奴だ！）と、思わせた。（彼奴にちがいない。韮山城

の客殿に新九郎を襲った影……)
追われて遠廻りして逃げて来たのだ。時刻から見ても、大体、合致する。
「奴だ、行け」
豊前守は、宇八を促すと、走りだした。
「待て！」
と、大喝した。
十蔵はやっと弥三郎の屋敷までたどりついて、ほっとしたところだったのである。
「おい、何奴だ、うぬは……」
豊前守は刀に手を走らせた。
十蔵は、しまったというようにあたりを見まわした。が、もう、これ以上、走って逃げられない。思いきって、塀にとびついた。
「ぬ！ 射て」
豊前守の声に、宇八が弓をひきしぼった。
十蔵の影は、その間に塀の上へ。ぴゅッと、矢羽が夜風を裂いて走った。
「う……」
手ごたえはあった。矢は見えなかったが、影はぐらりとのけぞり塀の内へ転落している。
「やった！」
豊前守は小おどりした。矢は確実に影を刺している。
「でかしたぞ、宇八」
「はい」
と、答える宇八は、もう二本目の矢をつがえている。
「来い！」
豊前守は走りだした。屋敷の脇門である。が、思いなおして、そこへ宇八を見張らせ、
「こっちから出ようとするやつは、かまわぬ、射殺せ」
と、言って、自らは表門へまわった。
「開門、開門！ 弥三郎どのへもの申す」大音声で呼ばわった。「これは外山豊前じゃ、ただいま邸内へ入った者を詮議いたす、開門せえ」
態度はむろん横柄である。弥三郎の立場は弱い。この韮山の土地に住まわせてもらっているだけで恩に着なければならないのだ。十蔵の声を洩れさせたときのようにはいかない。
弥三郎はやむなく小者に命じて開門させた。
「豊前じゃ」ぬっと入ると、かれは、勝手知った邸内を、ずかずかと脇門の方へ歩いた。「いま、ここへ逃げこんだ者があろう」
「……」
「あるはずじゃ、そやつはどこへ行った？」
「へえ、知りましねえ」
「なに、知らぬはずがあるか」

「気がつきましねえ」
気がつかなかったといわれればそれきりだ。夜なのである。すでに世間は寝鎮まっている。
豊前守は、脇門のあたりを見まわした。
牛小屋がある。馬小屋がある。それにくっついて牛飼い馬喰などの寝小屋がある。隠れようとすれば、いくらでも身を容れる陰はある。
昼日中なら、発見も容易であろうが、この時刻、弥三郎の好意的な協力がなければ、発見は難しい。
「弥三郎に逢おう」と、豊前守は言った。「案内せい」
「はあ……」
「門は固く閉じよ、誰一人として出すではないぞ」
半信半疑だった。
狙い通りだとすれば、あの賊は弥三郎が派遣したものだし、したがって傷ついた者を匿うことになる。
(弥三郎め、どうでるか)
豊前守は、かれを追い詰める方法を考えた。
脇門の内側の、影がもんどり打って転がったあたりを調べると、まだ血がついている。
「見ろ、血だ」と、豊前守は小者に見せた。「これで逃げこまなかったと言い張れぬわけだ、な」
「はあ……」
「弥三郎が、なんと申すかな、さ案内頼もうか」
豊前守は、あの影が、弥三郎と関係があると思っている。はじめから、機先を制した。
ぬっと、豊前守は血のついた指を弥三郎の顔の前に突きつけて、
「これじゃよ、弥三郎」
「む……」
強いて、寝呆け顔をつくっている弥三郎である。
「血であろう」
「うむ、血でござるな」
「いま、ここへ逃げこんだ奴がいる」
「……」
「おれが郎党が、弓で射とめた」
「……」
「大した腕前よ。影しか見えなんだが、ぴたりと射た。三十間がほども離れていたであろう。大した腕前よ。いまでも外で見張っておるが」
と、弥三郎の眼をのぞきこんだ。これは逃しても無駄だぞという意味だった。
「外へ出る奴がいたら、射ち殺せと命じておいた」
「……」
「忠実なやつでな、殺せといえば間違いなく、心ノ臓を射ぬく。何せ、四十間離れて、青銭の穴を射る腕前じゃ」
「面妖な話でござる」弥三郎はいかにも起きぬけであるよ

うに眼がしらの眼やにを指でとった。「全く、寝耳に水とは、このことで」
「左様かな」
「妙な夢を見ていましてな」
「ほ、夢か。なるほど、おぬしには、夢かもしれん、悪い夢かもしれん」
「と申されると」
「その悪夢の中に出て来た奴よ。ほれ、おぬしにとって、一番都合の悪い男さ」
「……」
「ははは」
新九郎の名を出すまでもなかった。この才たけた弥三郎が知らぬはずはなかった。新九郎が来たと知ったからこそ、刺客（？）を派遣したのではないか。
「あの男を、一番殺したいと願っているのは、おぬしということになる」
「あの男とは」
「いかん、いかん。それがいかんのだ。シラジラしく、それが通ると思うと間違うぞよ。ここは駿河の府中ではない、伊豆の韮山じゃ」
「それはわかっておる。したが、あの男と申されても」
「ははは、名を忘れたか」豊前守は、これ以上、押しまくると、斬らねばならなくなる、と思った。「まあよい。今夜は、もう遅いゆえ、明朝、調べにまいろう。よいかな、ここへ逃げこんだ賊は、矢を突っ立ててな……この血じゃ」
と、また指をふり立て、それから、運ばれた白湯にずぶりと突っこんだ。そして、拭いとってから立ち上った。
豊前守が、足音荒く、出ていったあとも弥三郎は凝っと坐ったままだった。
（まずかった……）
十蔵も愚かなやつだ。尾行された（と思った）上に、矢傷まで負わされるとは。逃げこんできた十蔵は、奥の小部屋に隠してやった。
（どうにかせねば……）
明日になれば、あらためて、城侍が調べにくるだろう。血痕を発見されたし、豊前守が目撃しているのだ。宇八の矢が何よりも、証拠である。
（十蔵のやつは、どこかへ逃すにしても……）
豊前の去ったあと、外を窺わせると、なんと宇八が角のところで弓に矢をつがえて、見張っているというのである。徹宵、見張るつもりらしい。
そのうちに城からまた七、八人やってきた。いずれも見張りだった。これは、裏の方へも廻ったというのである。
（これは弱ったぞ）
十蔵を逃すのも容易ではない。それだけではなく、悪くすると弥三郎自身が、韮山に居られなくなる。

（くそ！　新九郎のやつめ）
どこまでついているのか。
いっそ十蔵が殺してしまえばいいものを。失敗した上に、わざわざ、ここまで、豊前守を連れてくるなど、呆れたやつだ。
（あんな奴、死んだ方がいい……）
殺すのは簡単だった。だが、そうすれば、益々、不利になる。
十蔵であれ、誰であれ、新九郎の寝所を窺った奴と、関係があると見られることは、弥三郎にとって、最悪の結果を招くものでしかない。
（どうするか……）思案は決らなかった。
弥三郎は十蔵を匿った小部屋に入っていった。
「おお、殿さま」
十蔵は情けない声をだした。さっきから、うんうん唸っていたのである。
「ひでえ目にあいましたわい」
十蔵は怨めしげに、引き抜かれた矢を眺めた。
「——血は止ったか」
「いえ、どうも……潮どきと見えて、止りませぬ」
手拭いで左肩を押えているのだが、まだ血汐は流れ出ている。
弥三郎は囲炉裡に槍の穂先を突っこんだ。すぐに真っ赧に灼ける。
「目をつむっていろ」
鹿皮の手袋を咬ませると、矢傷にじゅっと押しつけている。
「うっ!!」
「泣くな……済んだ」
傷口は小さな煙を噴きあげた。たしかに血は止った。傷口はふさがれた。十蔵の悲鳴が弥三郎にいい智慧を浮ばせたのである。
弥三郎は小者を呼んだ。
「弓を持ってまいれ」
血のついた矢を摑んで立ち上った。
裏手へゆく。不浄門の近くである。そのあたりは、夜気に臭い匂いが漂っている。けものの匂いだった。
弥三郎には、妙な趣味がある。伊豆の山中で捕えられた狐や狸などを飼っている。山犬もいる。こうしたけものの持つ野性とその欺瞞性がどこかおのれと共通感があるからだろう。
その中の狐を一匹曳き出させた。
小者が尻尾をつかんで、ずるずると曳きだすのを、一間と離れぬところから、ばしっと、射た。
これなら、小児でも当る。けーんと狐は悲鳴をあげて、逃げようとしたが、ぶるぶる四肢をふるわせて、もがいて

いる。
「とどめを」
「いや、このままでいい、夜明けには死ぬだろう」
狐は死にきれずに、矢を突きたてたまま、もがいている。
弥三郎は冷たい眼で見おろして、
「十蔵の身代りになれば、こやつも浮ばれようわさ」
その狐が死んだのは、夜明けだった。
一晩中、泣いていた。怨むような、哀しげな声で、無気味に尾を引いて、寝所まで聞えてきた。
「いやな声だ」
弥三郎は女の胸に顔をうずめてその声をふさごうとした。
夜が明けてから、城侍たちがやってきた。
ものものしい具足姿で、槍や長刀をぎらつかせ、
「客人に無礼を働かんとした賊が侵入いたしたはず」
屋敷内を捜索する、と言った。
弥三郎はこれに応対して、件の狐を見せている。
「今朝、こやつを発見いたした。昨夜、侵入いたしたのは、こやつでござろう」
「いや、人間だということじゃ」
「ほう、左様かな。されば、こやつが化けていたのでござろう」
「………」
「矢に印でもござれば、一目瞭然」
そう言われてみれば、たしかに矢は宇八のものだった。
まさか、十蔵の左肩からひき抜いて、射直したとは気がつかない。
ただ、その報告を受けたとき、豊前守は、「やりおったな」と、苦笑した。
弥三郎が巧みに、糊塗したことを知ったのだ。
「狐とは、いいところに気がついた」
宇八たちの報告では、誰も屋敷を出た者はないという。
(匿っておるな。燻し出す手はないか……)
瞞されたふりをして瞞す。弥三郎のような相手にはそれしかない。
豊前守は弥三郎の身辺を捜らせはじめた。
弥三郎が十蔵に因果を含めて、修善寺へ向けて逃したのは、三日目の夜だった。
「暫く、身をひそめておれ、その方が万事に都合よい」
「お言葉をかえすようですが、殿さま」
「なんだ」
「狐が私の身代りになったのなら、私は、べつに疑われることはないわけで」
「そう思うのが、きさまの浅はかなところだ」
「はあ」
「豊前守は、表面は納得したような顔はしているが、まだ疑いを解いてはいない。おまえの家もすでに調べられている

るはずだ」
「と申しますと」
「裸に剝いて調べられて見ろ、矢傷は誤魔化せぬ」
そうだった。槍の穂先を灼いて傷口をふさいだ。が、これは、見る者が見ればわかる。
十蔵の落ちる先は、山者のところだった。修善寺の在にいる。狐や狸などの供給源でもあった。
十蔵は夜にまぎれて、裏塀を乗り越え、修善寺に走った。
うまく逃げることが出来たと思ったが、実は尾行されていたのである。
修善寺のその男の家へゆくまで十蔵は尾行に気がつかなかった。
が、その左平次という男の家に着いて、ほっとしたところに、数人の侍が来た。
いずれも豊前守の家臣だった。かれらだけではない。一人は、あの狐を網袋に入れて担いでいたのである。
「十蔵だな」と、睨み据えて、「あとで用がある。そこで控えておれ」
もう足が痛くて、逃げるどころではなかった。
左平次は、事件は何も知らぬ。
狐の死体を見せられると、
「いかにも、わたくしが罠で捕えましたもので、はい」
「しるしでもあるのか」
「はあ、この前足の爪が欠けているのと、耳に傷があるのは、罠から脱けようとして、もがいたためのものでございますだ」
「よく憶えていたぞ、その言葉を忘れまい」
それだけで充分だった。
豊前守は弥三郎の策謀であることの証拠を握ったのである。
(これで、奴は、わしの命令に背けなくなる)
勢力を扶殖してゆくのが、豊前守のねらいだった。
「弥三郎、あの狐は、左平次が罠にかけたものだそうだの。二タ月も前から、飼うていたものではないか。虚言を弄するのもほどほどにせい」
弥三郎は呼びつけられてこう面罵されると、真っ蒼になった。
返す言葉がなかった。
「どっちを選ぶぞ？　腹を切るか、伊豆から出るか、それとも今ひとつ……」
「そ、それはなんと」
「おれの胸に納めてやってもよいということよ」
豊前守は、にやりとして、泥鰌髭をひねりあげた。
盗賊に入られたという噂は、その日のうちに韮山城下と周辺に聞えたらしい。

今川家からの賓客である。新九郎の方では、微行のつもりで、大仰にしなかったが、北條家方にしてみれば、やはり、扱いに気をつかう。
　新九郎自身は風来坊でも、竜王丸の伯父であるし、実力からいえば、範満と勢力を二分している武将なのだ。
もっとも早く見舞いに来たのは、田中内膳という北條家の執事である。
　これは外山豊前守と勢力伯仲していると聞いてきたので、新九郎の方では一抹の懸念があったのだ。
　豊前守としては、内膳に近づけたくあるまい。
　どこの家中にも勢力争いはある。ただ表面にあらわれるか、内に沈潜しているかの違いで、人間の欲望の必然的な結果で、それぞれに、底流となっている。ことに、この時代から、下剋上の風潮があらわになってくる。
〝お家のために〟
　欲望をころして奉公する、という場合でも、そこには、滅私奉公的な意志が作用する。
　つまりは、欲望を抑圧しているにすぎないのだから、社会の風潮が、それを是認するような方向に動いてくると、
（おれも一つ……）
と、いうことになる。
　むろん、豊前守にどの程度、その野心があるか、内膳の場合もどうか、判然とはしない。
　その田中内膳が見舞いに来たのである。
「御着到早々に、異変がございましたそうで」慇懃に、内膳は挨拶して、詫びた。「いずこの愚か者の仕業かは存じませぬが、必ずや、その賊は捕えて、首を刎ねてくれましょう」
「いや、それほどまでに、お考え下さらなくとも」
と、新九郎は謝した。
　大体、察しはついている。新九郎自身は別にそれほどショックは受けていないのだ。
「わざわざ御丁重な見舞い、痛み入りまする」と、鷹揚に笑って、「ちと物騒な客ではあったが、まあ、かえってよく眠れましたからな、はははは」
「伊勢新九郎どのといえば、豪勇の聞えが高い。聞きしにまさることで」
　いやに、こちらをおだてあげるのだ。
　新九郎は、警戒した。
（こやつ、何を考えて来たか）
　必ず何か目的があるはずだった。
　内膳はにこにこしている。悪企みなどなさそうであった。
（だが、腹の中はわからぬ）
　凝っと新九郎はかれの眼を見た。
　新九郎は弥三郎春忠のことを気にかけてはいない。
所詮、力を失った鼠にすぎないと思っている。たとえ、

今川家の血統たることを振りまわしても、現実に、駿河から閉め出された漂泊の男に、どれほどの同情が寄せられるものか。
　同情はしても、力を与えることはない。力は、力によって招かれるものだ。
　北條家なり、堀越公方なり、駿遠併呑の野心があったとしても、いまの弥三郎春忠では、マイナスになりこそすれ何の力にもならない。
　むしろ、範満を操るか、上手に併合するほうが可能性がある。
　新九郎は、いつも、客観的な展望をする。
（おれならば）北條家や堀越公方の立場になって考えてみるのだ。（弥三郎の使いみちといえば、せいぜい、駿河の道案内……）
　今川家の内部の人間関係、勢力の度合いなどを聞きとるくらいの意味しかない。
　そんな男を飼っているのは、万一何かの役に立てば、という程度のものであろう。
　役に立てるときは、犬の役目もさせるが、もしも邪魔になれば殺すのに容赦しない。
（おれが騒ぎ立てれば……）
　下手人は弥三郎かその使嗾者と睨んでいるだけに、新九郎は、確信した。
（弥三郎は殺されるだろう）
　いまの北條家にとっては、弥三郎よりも、新九郎の方が大事なのだ。
　小の虫を殺して、大の虫を生かす。世の中は、勢いの強弱で動いている。
　弥三郎春忠は、奸物にちがいない。北川どのや竜王丸、新九郎たちにとっても、害虫でしかなかった。ここで殺されるとすれば、自業自得だ。が、考えてみれば、哀れな存在ではないか。
（温和しくしていれば、駿河で一城の主でいられたのに）
そう思うと、哀れだった。（殺すまでもない。もはや牙の折れた野良犬だ）
　あるいは、毒針を失った毒蜘蛛か。だが、蜘蛛はどんな小さいものでも、夜あらわれるものは殺せ、という。そこらを這い廻るだけで無気味なものだ。
　しかし、昇り坂にある者は寛大な気持になっている。
（いざというとき、邪魔になってから、殺せば、それでいい）
　この歳月の漂泊のさまは、身から出た錆とはいえ哀れであった。これ以上追い詰めることはない。
　その翌日、新九郎は堀越に行き公方政知に会っている。
　堀越公方政知——
　前将軍義政の弟である政知は堀越に居て、悠々と自適し

ていた。
前にも述べたように、関東公方を僭称する足利成氏の圧えとして、関東へ下向した政知は、彼自身、将帥としての器量でもなく、また意欲にも欠けていた。
関東へ攻めこむ力もないまま、堀越に御所を営んで、無為な日を送っている。
かれは、北條家の紹介で来た新九郎を、引見すると、非常に喜んだ。
「名前は聞いている」と、遠慮のない眼で、まじまじと見た。「駿河では大した働きをしたそうだの」
「いや、何ほどのこともできませなんだ」
「その方が居なければ、駿遠二国いまも戦火がつづいているであろう」
「それがしに、才覚があれば、はじめから争いを未然に防げたものと反省しております」
「ははは、それは欲じゃ」政知は、三方の上の餅をとって食いちぎった。まだ柔らかい餅だった。「大きすぎるな、奥に申せ、一口で口に入るほどの餅を作らせい、とな」
「はい」
「奥のやつ、わしの口が小さすぎると申すであろうがな、ははは」
政知の笑い声は、女のようであった。どうかすると、ほッほッほッと、聞える。
たしかに、女のように小さな口だった。その口の上に、ほそい髭が八ノ字を描いている。髭がうすいのを、威厳のために無理に立てようとしていたが思うように、濃くならないらしい。
色が白く、ぽってり肥って、少し動くのも、億劫そうだった。酒と美食で、からだがふやけている感じである。
（こんな公方では、まことに頼りないな）
新九郎は感じた。が、表面は慇懃な態度を崩さない。
「そちは京に長くいたそうだの」
「はあ、御所にお仕えしていましたが」
「近ごろの京はどうじゃ、戦さは鎮まったと聞くが、焼野ヶ原となっては、住む家もなかろうに」
「噂でござるが、堂上衆のなかには、周防の山口へ罷り越す方々がいるとか」
「山口か、大内じゃな、あちらでは、大明国などと交易が盛んじゃとな」
「異国の船による舶載の品々は高価に売れますゆえに、内処は豊かでございましょう」
異国の船との交易は儲る。新九郎はのちに、本拠小田原に明国や高麗の船を呼んで、国際港としての繁昌を齎したといわれる。すでにして新九郎の経綸は、大きく羽搏きはじめている。
「奥を呼べ」

と、政知は侍女に命じた。
正妻を客に引き合わせることは、接待を意味する。奥という呼称は常に奥にいることを象徴しているように、他の男に紹介することは少ない。
この国では特に、男の世界が厳然としている。女性は、たとえ罪を犯しても、女性だからという理由で、大目に見られるように、男の地位は、そのまま、男の責任に通じていた。
その意味でも、女性の存在は、男の仕事――この場合、政治と無関係にされている。
したがって、政治に容喙する女性は、昔から、必ず、悪口をいわれている。甚だしい場合は、鬼とまで、陰口される。
足利将軍家の日野富子しかり、鎌倉将軍の北條政子しかり、のちのことになるが、豊臣政権の淀君しかり、徳川将軍の乳母春日局しかりである。
女性に口を出させないのが、政治を紊さない要諦だとされていたが、政知の場合も、その危険があった。
というのは、あらわれた夫人があまりにも艶麗だったことだ。
第一、若い。
「これも京の話を聞くのが、何よりも好きでな」と、政知は鼻下のうすく細い髭をなでながら、言った。「どうだ新九郎、これに京の話をしてやってくれぬか」
「さ、何しろ、もう京を離れて随分になりますゆえ、忘れていることも多く」
「ははは、思いだすだけでよいわさ、京の風物、ことに京の上臈などの日々のことをな、聞くのが好きじゃ」
政知が、夫人を見るとき、眼が細くなる。いかにも、可愛ゆくてたまらぬというふうだった。
（甘い……）なんとも甘すぎる。
男が女を好くのは自然のことだが、その惚れようにも、限度がある。
この様子を見ていると、まるっきり、鼻毛を抜かれている。それも、人前を憚らぬ、べた惚れなのだ。
（公方の地位も長くはないな）
と、新九郎は思った。
それにしても、たしかに色っぽさということでは、比類がない女であった。
公方を称しているからには、
〝御台所〟
と、尊称すべきだろうが、台所にいるよりは、褥の上で、鼻声を出して悶えているのが、一番似合いという女であった。
ぽってりと豊満で、色が抜けるように白く、眼つきが色っぽい。いつも潤んでいるし、唇がともすれば半開きになって、ふっと、あどけない童女のようになる。未成熟なと

ころがあるようでいて、その甘えた様子が、男心をそそらずにはいないのだ。

「新九郎どのと言いやるか」

　そんな調子は、御台所の権威を保つために言っているのであろうが、似合わない。

　何といっても、色香のあふれた女で、権威よりも、ただ、性を享楽するために生れついてきたような感じがする。

　女性は概して慎み深いから、夜には、どんな淫らな行為をする者でも、昼間は、そんなこと存じませぬ、という顔をしている。それが普通である。

　ところが、この夫人はちがう。新九郎を見る眼にも、色香があふれている。

（こんな眼で見られては、たいがいの男は、おかしくなるぞ）

　男の自惚れに訴えるような眼である。

　新九郎自身は、そんな眼つきくらいで心がとろけはしないが、家来たちは、さぞ大変だろうと思った。

（こういう女房を持った方も大変だ）

　いつ浮気されるかわからない。

　浮気はしないまでも、その媚を本気で受けとった男が、政知暗殺の野望をおこさないともかぎらぬ。

　どちらにしても大変なのだ。妻は〝家内〟とも称う。魅力的なのはいいが家の内でトラブルを起さないでいてくれないと、男の築きあげた城が、内部から崩壊する。

　どんな外敵よりも、こわい存在なのである。

（この女人に比べれば……）

　北條家の夫人のように、静かな美しさを湛えている人なら、間違いない。

　あの静けさは、しかし、やはり境遇のせいかもしれぬ。

　韮山城の主、北條なにがしは、長い病気で臥せっているという。その悩みがあるのであろうか。翳りのある美しさが、新九郎の心をとらえている。

　因みに、韮山城と堀越御所はさして離れてはいない。

　現在では同じ韮山町に抱合されていて、県立韮山高校の背後に丘陵がある。

　五十メートルくらいの岡で、南北に伸びている。幅員百メートル、長さ五百メートル足らずだが、背後に城池と呼ぶ、その半分くらいの池がある。

　このあたりから南東にかけて山稜が広がっている。

　韮山城は、戦さのときには、このあたり一帯を利用して、戦ったであろう。

　この韮山城から西南にほぼ二キロの地点に、狩野川に臨んで守山がある。これも百メートルばかりの小山だが堀越は、この守山の北麓で、現在も堀越御所の遺構が残っている。

　ここからの富士の眺めも素晴らしい。

「新九郎どの、いつまで逗留なされますか」

　夫人が聞いた。

　甘いその言葉のひびきには、いつまでも滞在してくれという意味がこもっている。

　富士が一番美しい季節だった。

　浅春の雪をかむった富士は朝に夕に、晴天には赤く陽に染められて輝き、さながら天の羽衣のようなうすものを肩のあたりにたゆたわせ、澄んだ空を背景にして、くっきりと浮び上る。

「公方は、ここの眺めが、すっかり気に入ってしまったのです」と、夫人は言った。「そして、わたくしをも」くくっと笑った。

　新九郎を案内して、庭を歩いている。

　公方の御台所が、いささか軽々しいが、二人もいる関東公方なのだ。それに、このひとは、どうも素姓があやしい。少なくとも、高貴の出ではない。話の端々、動作のところどころに、賤しい素振りが出る。

　賤しいといえば、流し目それ自体も気品のある女人のふるまいではない。

「わたくし、富士子」

　と、二人きりになると、夫人は名乗った。富士の霊峰を前にしてのことだ。

　新九郎は、彼女が冗談を言っているのかと思った。ところが、そうでもないらしい。

「あの富士の……」

「はい。あの富士の、富士子」

「すると、不二……」

　新九郎は宙に指で書いてみせた。

　女は首をふった。

「いいえ、富める士でございますのよ」

「なるほど、いかにも」

「え？」

「いかにも、貴女さまらしい」

「そうでしょうかしら、ほほほほ」

からだをくねらして、笑った。老女や侍女が、数間はなれたところで、うずくまっている。

　そのところまで聞えそうであった。が、富士子はおかまいなしであった。

「実を申しますとねえ、この名前は、公方がおつけ下さったもの」

「ははあ、それで」

「え？」

「富士を愛でるということでござるな」

「そう……わたくし、しあわせでございます」

ちら、とまた流し目がむけられた。

倖せといっている女の瞳だろうか。倖せは、さらに倖せを生むものか。現代の境遇に倖せを感じているのなら、何も、新九郎に色眼をつかうことはない。

それとも、これが、この女のくせなのか。頼母しげな男を見ると、そんな眼つきになってしまうのか。

政知のようなぶよぶよした肥満体では夜の営みのほうでも、この女を満足させることは少ないのではあるまいか。

歩みをかえて、守山の麓の方へ歩いてゆくと、どこかで獣の唸り声がした。

獣の唸り声――直感的にそう思った。

ぎょっとしたのである。守山という丘陵を背負っているので猿や兎ならいるかもしれないし、そんな声がしても驚かなかったろう。

だが、思わずふりむいた眼に、富士子が、つと、目をそらしたのが、印象的だった。

こうした場合、同じ驚きなら当然、眼を見合わせる。富士子の表情には、かれの視線を拒むいろが動いた。

「奇怪な……声ですな」

「ほほほ、山には、いろんなものが居りますゆえ」

「……」

「お急ぎでなければ、琴など弾じてお耳をけがしましょうか。それとも笛など」

「いや、そのような風流には、とんと」

「御冗談を。京で聞かれた耳には田舎の音曲など、聞くに価しないとでも」

かなり辛辣なことをいう。

新九郎は弱った。こんな女の嫌味でも、この場合腹を立てるわけにはいかない。

「そうは申しませぬ。野に遺賢ありと申す。草ぶかきところでもいかなる名手が存在するかわからぬ。況や、かように風光明媚なれば、音曲には、殊に」

そのとき、また聞えた。

今度は、ぎゃーっ、という悲鳴のようだった。

富士子は、

「うるさいこと、さ、まいりましょう」

と、踵をかえした。それを止めるように、また聞えた。

「あれは……」聞き過すには、異様すぎた。「一体、何の声でござるか」

「ほほほほ、大したことではない」

そう言われると、ますます関心がわく。

富士子の豊かで、円満げな顔にその一瞬、眉間に皺が立った。

「さ、いやな声には耳をふさぐが一番でござります。いやなものは見ないこと」

「しかし……」

その次に聞えたのは、悲鳴だけでなく、はっきりとした、

人の声の叫びだった。

「やい、出してくれェ」

きーっと、猿の声のように、かん高く、はげしい声だった。

新九郎は、もう、聞き捨てに出来なかった。

「いってみます」

あ、と、富士子が止めようとしたが、新九郎は走り出した。

大きな納屋のうしろになっていて見えなかったのである。その上に巨杉が立ちふさがっている。

丘の麓をえぐるようにして、土牢が出来ていた。その中に、髪をふり乱した少年が入っていて、喚いていた。

（狂人か……）

一見して思った。

さながら狂人でしかない。

あるいは、猿が、人間の着物をまとっているかのようでもあった。

怒りと悲しみとで、顔が歪み、口を思いきりあけ、黄ろい歯を剝きだして、喚いているせいだろうか。

「やい、ここから出してくれ、こいつを切ってくれ」

どんどんと、格子を叩いて暴れているのだ。が、頑丈な格子は、びくともしない。

それだけに、まるで檻の中で、泣き喚いている山猿のようであった。

呆然として、新九郎は見守っていた。

はじめ、囚人かと思った。囚人なら、しかたがない。他人の城の内部のことだ、口出しできることではない。

が、不審を感じた。その男が、少年だったことである。

すでに、長い月日を、牢内に閉じこめられているとみえ、顔色は土気いろだし、少年ながら、うすく髭が生えているのが、まるでカビが生えているようだった。

暴れまわるので、あちこちすり傷をしているのであろう、それが古い傷は黒ずみ、新しい傷は、鮮烈に赤く、髪は何日も洗わないらしく、煤け、ほうけて、正視し難い有様だった。

少年だということは、この場合異様なのだ。

少年の犯罪の場合、ここまで閉じこめたりはしない。たとえどんなことをしたとしても、これでは狂人を作ることでしかない。

（哀れな……）

と、思った。

背丈や、顔つきや、腕や胸板などを見ると、十五、六、もっと幼いのではないかと思われる。

「何者だ、その方は」

新九郎は近づいて声をかけた。

と、少年は、眼を光らして一声、奇声をあげるや、かっ

と、青痰を飛ばした。
それは、新九郎のところまではとどかなかったが、少年は、
「なんだ、その方は」
と、口真似をした。
けらけらと笑っている。
(狂っている……)
新九郎は眉をひそめた。
「お近づきにならぬほうが、よろしゅうございます」
背後で声がした。
富士子が近寄ってきていた。
すると、少年は、富士子の方にむかって、また奇声をあげ、格子をどんどん拳で叩き、あるいは、毀そうとして、引いたり押したりして、
「殺してやる、殺してやる」と、喚いた。「鬼女め、殺してやる、鬼女め」
富士子は、しかし、にこにこ笑って、
「狂人と口をきいても、しかたはありますまい、さ、まいりましょう、新九郎どの」
手をとらんばかりなのだ。
富士子が話したがらないのが、かえって、新九郎に興味を抱かせたのである。
(何かある!)
それも重大なことにちがいなかった。
ただの囚人なら、斬るなり獄門なりにしてしまうが、閉じこめたままにしておくのは、斬ることができないからではないか。
それにしても土牢は、御所内にある。
見るのも嫌なはずだ。それなら御所から遠いところに作ればいいのに、なぜ、御所内に作っているのか。
そして、その土牢へゆくのは、細い道になっていて、通常、誰も近寄れぬことになっているらしい。
御所の寝殿造りの構造と、作庭の様子から見て、そう判断できるのである。
(いよいよ面妖だぞ)
富士子の様子といい、これは、尋常ではなかった。
(鬼女!)
と、狂人は言った。
いや、少年は言った。少年が鬼というのは、その鬼の被害にあった実感からのことが多い。
富士子は豊満なからだで、いかにも福徳円満な顔でにこにこしている。菩薩顔というのがあるがそれだった。
あまりに、にこにこしているのも、うす気味悪いが、富士子の場合、それが合っていた。
赤い臠肉の唇も魅惑的だったし、流し目も色っぽい。

(この女が……)
鬼といわれる理由はどこにあるのだろうか。その疑問が、新九郎の胸に渦巻いた。
「ねえ、新九郎さま」
歩きながら、ちらちらと小指が触れている。意識的か無意識か、これは女の誘いではないか。
公方政知の正室が、いかに夫に不満であったとしても、他の男を誘うなどとは考えられないことであった。
また、たとえ、それが誘惑であったとしても、
(気がつかぬことだ)
と、打ち消した。
気がつかなければそれまでだ。朴念仁だと思われてもしかたがない。
これが本心、女に惚れたのならたとえ、死の淵に臨もうとも、進んで手を出す主義の新九郎だが、この富士子には、ちょっとそこまで惚れる気にはならない。
「お琴を」
と、言いだしたのを、
「いや、それはまたの日に」と、断わった。「本日、他に約束がござるゆえ」
「まあ、惜しい」富士子はにこりとして、言った。「またお出で下さいましね」
「——御覧になりましたか」
と、田中内膳は吐息していった。
「実は、このことは、内聞にせねばならぬことで」
「どういうことかの、あのようなけものめいた騒ぎでは、内聞にしようがあるまいが」
「いえ、御所内のことは」と、弱々しく微笑した。「誰しも、口外しませぬ」
「……」
「うかと、口をすべらせれば、大事になります」
「首が飛ぶか」
「ま、左様なわけで」
「ふうむ、それほどの…」
政知のように肥満体で、荒い声も出さず、おっとりしていると悪政を布く、恐ろしげな領主という感じはしないが、人間、外貌と内側はわからない。
外面如菩薩、内面如夜叉ということも、意外に世間に多い。かえって、あのようなタイプは、陰湿で、嗜虐的かもしれないのだ。
殊に、あの富士子が傍にいて離れないとすれば、女が陰で政治の紐をひいているのかもしれない。由来、男よりも女の方が残忍さに於ては、まさっている。
富士子の謎めいた微笑の意味がわかったのは、田中内膳から囚人の話を聞いてからだった。囚人はなんと、前妻の

子だったのである。
　富士子は、以前、側室だった。
　前妻には子が一人ある。茶々丸という名だったが、富士子と折り合いが悪かった。
　それも、富士子のほうに子供がいなかったらそれほど甚だしくはならなかったが、富士子は一児があった上に、正室になおると、さらに二人を産んだ。
　こうなると、茶々丸が邪魔になる。
　昔も今も継子いじめは変らない。殊に、富士子にしてみれば、自分の子を後継ぎにしたい。その思いがあらわだった。
　富士子が正室になおると、前妻からうわなり討ちをかけられている。
　うわなり討ち——後妻討ちとも書く。当時の風習ではあったが、そう頻繁には行われなかったらしい。
　このうわなり討ちのことは後述するが、その眼目とするところは、女の意地だった。
　乱世の女には、どんな貞淑な女性にも男のような意地がある。
　前妻をおしのけて、正室の座に坐ったのも巧妙だったが、富士子の憎しみは茶々丸にむけられた。
　妻は離別すれば赤の他人だが、嫡男は違う。政知の分身である。愛情がある。
　富士子は茶々丸を狂人に仕立てたのである。
殺すわけにはいかない。
　富士子にとって、邪魔な存在だったが、政知にしてみれば可愛い嫡男だ。
　前妻にも愛情がある。男というものは仕方がないもので、前妻に愛情がありながら、富士子に鼻毛を読まれて、離別してしまった。
　むろん理由はある。前妻が体が弱く、病気勝ちということだ。そのためにも、側室の存在が習慣として赦されている。
　従って、富士子が前妻を追い出して、正室になおる名分はなにもない。
　しいてあげれば、正室としての奥向きの取締りもすべてはきはきとやるということにあろう。それが嵩じると、表向きにも口を出すことになる。
　前妻は涙をのんで御所を出た。京から来た人だが、京へは帰れない。泣く泣く鎌倉へ身を寄せた。
　正室はもともと蒲柳の質で病弱だから、それこそ泣き寝入りだが、それでは周囲が承知しない。
「とんでもない悪女でございます。意趣ばらしをなされませ」
　と周囲でけしかけた。
「でもわらわは、いさかいなど……」

と尻込みするのを、
「なにもお手ずから打ち合いをなさることもござりませぬ。その方はわたしどもが」
「さよう、名目人としてお支度だけは」
　それではということになって、前妻は鉢巻きし、長烏帽子をかぶり、赤襷に袖を払って、ほそいからだに太刀を横たえ、纖手に薙刀を携え、足ごしらえも厳重に、どうにか恰好だけをつけた。
　そして、富士子に申し入れた。
「何月何日、意趣あって後妻討ちをかけ申し候。お覚悟召さるべく候」
　殴り込み通知だ。これは借用証や、のちの離縁状などと同じように一定の書式があるのだ。
　そして、期日に乗り込んでいったのである。
　そのためには、屈強の女達を揃えた。一族縁者という触れ込みだが、縁者というのは拡大解釈できる。
　力がある者、腕の立つ者それぞれ喧嘩支度で、鎌倉から乗り込んで来る。
　むろんこうなったら、応戦するしかない。富士子の方でも人数をそろえる。
　腕におぼえの女たちを集め、屋敷の中で相手を待った。
槍、刀、薙刀などを持っているが、使うのは木刀やタンポ槍、棍棒などで、摺鉢、手桶なんでも手当り次第に武器にしての殴り合いだ。
　女の喧嘩はすさまじい。髪を引っ張る。爪で引っ掻く。帯をほどく、腰紐を切る。辱しめようというのだ。
　この喧嘩は血みどろになるが、死ぬ事はない。ほどのいいところで仲裁人が入る。女の体面上のことだから、殺し合いには至らない。とにかくやれば、面目が立つのである。
　こうして後妻討ちは終る。
　この争いの一ヶ月後に、前妻は死んでいる。直接的とはいえないまでも、間接的に死なせたことになるかもしれない。
　こうして富士子は、名実共に正室の座におさまった。
　この堀越御所の公方（僭称）の職は一時的なものだったが、一時的にしては政知は居心地を悪く感じてはいない。
　後世から見ると、京と伊豆とを同一に論じるのはおかしなものである。が、当時の乱世の様相では〝京〟の権威そのものがどうなるか判ったものではなかった。
　千年王城の地という感懐は、幕末以降のものであり、戦国時代もまだトバ口だけに、ことに応仁ノ大乱によって焼け野原になった京は、すでに伝統と権威と共に機能を麻痺してしまっている。
　それは、これっきり京が日本の中枢でなくなるかもしれないことすら、人々には思わせた。
　政知は京にいても、政権が取れるわけではないし、僭称

でも、この伊豆では〝公方〟として崇められている。
それだけでも、政知にはほぼ満足だった。
もし、彼に野望があるとすれば、もう一人の関東公方、足利成氏を倒して、関東の第一人者になることだが、それがどうやら至難と判ると、現状維持で満足するしかなかった。
下剋上もまだ盛んではない。
一般的には階級というものは、犯すべからざるものとされている。
京から離れるほど、その素朴さは残っていたし、荒々しい関東の気風の中でも、やはり伊豆は東海の風土でのんびりしたところがある。
前にも述べたが、豆相と一口にもいうように、伊豆も関東の一部とされていたりする。
その素朴な人心にとって〝公方〟すなわち征夷大将軍ともあれば、大変なものだ。
相模の鎌倉には、管領がいるが、その人よりもなお上の存在であるだけに、庶民の目にはまるで神様のようなものだ。
〝上様〟という尊称があるが、これは〝かみさま〟とも読める。それだけ頭上の存在とされていたのだ。
政知がのんびりと腰を据え、ぶくぶく肥満するのは仕方がない。この政知は、特別に嫡男茶々丸を愛しているというわけではないが、後を継がせる気はある。
富士子にしてみれば、それが不愉快だった。後妻に入った女にしては、エゴが過ぎるが、政知の心を寝間での手練手管で自分のものにしてしまった。富士子は野心を逞しくして、茶々丸を廃嫡しようとした。
「和子は狂気なされたという話でござりますよ。お可哀相に」
寝物語にそう吹き込んだ。毎夜そうやって、印象を悪くした上で、元気がいいというだけに過ぎない少年を、家臣たちが手取り足取りして土牢に放り込んでしまった。
富士子の生んだ子は義遐と潤という。二人とも女児だったら、問題は起らなかったかもしれない。
この二人の男の児のどちらかを公方にするためには、茶々丸が邪魔でしかたがなかったのだ。
茶々丸は極く普通の少年だった。
それを狂気に仕立てたのだから富士子は大変な悪女だが、女性の偏愛は、時とすると、こういう異常なかたちで発酵する。
近ごろの子供殺しなども、その一種であろうが、富士子は茶々丸の何でもない行状を、一々、歪曲して、政知に言いつけたのだ。
「このごろ、おかしなことをなされています」
犬を連れて裏の守山を走りまわっているだけでこんなことを言った。
「犬の真似をなされて、わんわん吠えて見たり、疾風とともにどこやらをくんくん匂いを嗅いだり、ほほほほ、おもしろい子供ですこと」
疾風とは茶々丸が可愛がっているむく犬だった。
こういう巧妙な、女の意地悪な言葉の真意は政知には見抜けない。
「おかしなやつだな」
と、はじめは眉をひそめただけだったが、
「茶々丸さまは、毎夜、疾風を寝所へ引き入れなされています」
が、いつの間にか、
「疾風を抱いてお寝みなさるそうな」
という侍女たちのひそひそ話になり、
「まあ、はしたない、いくらなんでも、和子が」
「ほんとうらしゅうございますよ、疾風は牝でしょう、それを和子さまが、ほほほほ」
「犬同士のように、つるんで……ああ、きたない」
「まさかねえ、でも、そういえば和子は、わたくしどもには見むきもなされませぬもの」
「人間の女子がきらいで、牝犬がお好き、ああ、けがらわし」
そんなふうにひろがっていった。
政知もそこまで、話が醜くなると、もう我慢ができない。
「蔵人、あの疾風を殺してしまえ」
と、命じた。
「和子の寵愛なされているものを」
「噂は耳にいたしておろう」
「はあ。したが、あのような、あり得ないこと」
「事実かどうかではない。公方の後嗣ぎが、あのような噂を立てられる、そのことじゃ。わからぬのか」
「お言葉とあれば、仕りまする。されど、和子があれほど御寵愛の……」
「泣いて馬謖を斬るとも申す。余は茶々を手にかけたくない。されば犬一頭、何ほどのことがあろう」
「止むを得ませぬ」
もとより秋山蔵人が恐れたのは、愛犬殺害による茶々丸の怒りであった。
疾風は蔵人が下人に命じて、ひそかに盗み出し、裏山で殺させた。
茶々丸は、疾風をもとめて、狂ったように走りまわった。
「疾風がいない、疾風が……」
茶々丸は喚きながら、邸内を走り、裏山を走り、田圃や川筋などを、狂ったように探してまわった。
が、蔵人の命を受けた下人たちも口を噤んでいるし、誰も行方を知らない。

茶々丸は一日中、泣いていた。はた目にも哀れなほどだった。
子供のことだから、二、三日もすれば、すぐ忘れるだろうさ、などと無責任に話しあう者もいたが、その二、三日どころか、十日経ち、半月経っても、茶々丸の悲歎はなおらず、人が違ったようにふさぎこんでいた。
それが嵩じて、たしかにおかしなところがでてきたのである。
飯を食わない、食事に手を出そうとしない。
「左様なことでは、御病気になりますよ」
と、侍女が奨めても、
「いらぬ」
と、横をむく。
「食べたくない」
と、かたくなに拒む。
それでは、お気のむいたときに、おすごし下されませ、と膳部を置いて去ると、そのあとで、茶々丸は腹ばいになって、食べていたという。
「犬の真似をなさる」
と、隙間からのぞいた女が、みんなに告げた。
それが、
「犬が憑いたような」
ということになってしまった。
深夜、手で穴を掘っていたとか、わんと、吠えたとか、歯を剝きだして、侍女に嚙みつこうとしたとか、さまざま風説が立った。
その一半は、富士子が意識的に捏造させ、ふり撒かせたことだろうが、一半はまた、それに似たことがあったのかもしれない。
二十日ほど経ってからだった。さらに悪いことが重なった。
茶々丸が、疾風の死体を発見したのである。守山に埋められていたのが、大雨で柔らかい土が洗い流され、それを山犬が掻き出したらしい。
茶々丸は、驚愕と動顚のあまり崖から転げ落ち、頭を打った。
血だらけになって戻って来たのを見て、家来たちが、恐怖の叫びをあげた。
それが、少年を狂暴にした。少年はそこらにあるものを手当りしだいに投げつけ、歯を剝きだして喚き、おのれの髪をかきむしった。狂犬の病いに冒されたようなあばれ方だった。
それでも、一時的なものだろうと思われていたが、翌日になっても侍女が近づくと、
「鬼女！」
と喚いて、そこらのものを投げつけたりした。

茶々丸には、富士子と侍女の区別がつかなくなっていたのであろう。
富士子はその様子を聞いて、唇もとがほころびかけるのを圧えるのに懸命だった。
茶々丸が土牢へ押しこめられたのは、その日のことである。
茶々丸を土牢へ押し込めたことは、すなわち、将来とも公方の後嗣ぎたることの破棄を意味している。
政知の表情は冴えなかった。
頭のまわる富士子は、ほかの口実をかまえて、次男の義遐を出家させることは申し出た。
というのは、富士子には三人の子があった。真中が女児だったが、三年前に夭折している。その命日に思いついたというのである。
「茶々丸どのがおいたわしく、いっそ代るものなら、義遐か潤を代えても、御嫡男を……」などと涙ぐんで見せて、
「茶々丸どのは、御病気なれば、せめて一人を出家させれば、御恢復も望めましょう」
「そこまですることはない」
と、政知は止めたが、
「いいえ、それでは、わたくしの気が済みませぬ」
と、富士子は、強いて、その案を押し通した。
京の名刹に、というのが希望で、義遐は、父の政知のむかしと同じく、天竜寺の喝食になっていった。
前にも一寸書いたかと思うが喝食というのは、禅刹に於ける食事の係りのことで、お寺で給仕を意味するが、仏教はすべて修業の過程が必ずあり、名門の子弟といっても、そのまま、袈裟はかけられない。
まず、この身分になる。これは後の、いわゆる寺小姓に当るもので、時には、師の坊なる住職などの女色を禁じられたところからくる男色の餌食にされることがあるが、必ずしもというわけではあるまい。
義遐が天竜寺へ入ったことは富士子の陰謀に気づきはじめていた人々からも、疑念を霽らせた。
「わが腹をいためた御子を、幼くして京へ、出家なさる。よくせきのことじゃ」
「誰じゃ、何じゃら悪しざまに言うていたやつは、口の端つねり千切ってくれようぞ」
などという礼讃者まででてくるほどだ。
富士子は、にやりと北叟笑んだ。
（これでよし……年月経てから義遐を還俗させてもよいし、それが出来なくても、潤がいるから）
政知の胸にかかった一抹の疑いの雲も霽れ、十年も経てば、潤を後嗣ぎにすることに何の懸念も持たなくなるだろう。むしろ、人一倍、愛情をそそぎこむことになるのではないか。

なぜなら、三人の姿が、急に一人になってしまったのだから。
（一石二鳥、ということがあるけれど、わたしのは一石三鳥……ほほほほ）
ひとりになると、富士子は笑い転げた。
ところが、人生とは不思議なめぐりあわせで出来ている。この義遐の運命が大きく変るのである。
堀越公方足利左兵衛督政知の子にして、後妻富士子の腹になる義遐は、天竜寺香厳院の喝食として入山手つづきをとり、京へ去った。
運命の変転とはふしぎなものだ。
こういう事情で伊豆を離れた義遐であるが、血筋は、八代将軍義政の甥っ子にはちがいないのだから、乱世の継嗣争いに巻きこまれ、後に、足利将軍に推されることになるのである。
即ち第十一代義澄がこれである。
皮肉というしかない。
（わが子を公方に）
と、思って腹黒い劃策をめぐらした母の希望が、望外の栄誉で報いられるとは。
いうまでもなく、堀越公方と、京の足利将軍とでは、同じ公方でも雲泥の差がある。
伊豆で公方を僭称していても、実際のところは管領にすぎない。
日銀総裁か大蔵大臣と、支店長と地方税務署長ほどの差であろう。
その地位に我が子をつけたいという、実母の企みが、この堀越御所を騒動に巻きこみ、一家眷属が血で血を洗う惨事を招くことになり、横死しなければならなくなるのだが、そうまでして争った地位と身分が、空中分解したと思うと、たった一人生残り俗塵を避けたはずの義遐に思わぬ幸運が転がりこんでくるのである。
人生はこれだから面白いといえるし、またこれほど皮肉なものだ。
このいきさつは、いずれ後段で述べるが、また、史書によっては異説もある。
ともあれ、この義遐出家によって、政知と重臣らが、富士子の陰謀の疑念を霽らしたことは、明らかだった。
（茶々丸が、治らなければ……潤を、後嗣ぎに）
と、政知は思うようになってきた。
しかし、父親として、わが子の医療を放棄したわけではない。
「名医を集めましたゆえ、心丈夫でございまする」
政知の前では、富士子はそう言い、諸国から、医者を招き、茶々丸の病気を診断させた。
が、それは表向きのことだ。

「和子の狂気は、からだの病いではない。お脳のことなれば、薬餌では、如何ともする術はありませぬ」
医者たちを、こう強く圧えつけて、
「そなたらを呼んだのは、上様を安心させるためじゃ。されば、治療に専念するかに振舞うがよい」
報酬は過分だった。
いまや女帝の威厳を備えた富士子の言葉だから、医者たちは、
「畏まりました。仰せの如くに」
と、平伏した。
何もしないわけにはいかないから、食餌には念を入れる。だから、茶々丸は、土牢の中にもかかわらず健康は保っていた。
空腹ということはない。
いやしくも、公方の長男だ。食餌は美味だし、飽きないように、いろいろと季節のものを配分して差し入れる。
むろん、牢番や、家士の一部には茶々丸への同情があるから、取扱いも丁寧だ。
後のことになるが備前の小寺家に仕えた黒田勘兵衛孝高（如水）が主家のために入牢して、土牢の湿気と残忍な取扱いで全身瘡毒に犯され、頭髪は抜け落ち、片足は膝が伸びなくなって、生れもつかぬ不具の身となり、秀吉から、ハゲとかチンバなどと渾名された。その惨苦は、凄絶なものがあったという。
その点、同じ土牢でも、茶々丸の場合は、同情する者が多いだけに、取扱いは悪くなかった。
執事の秋山蔵人などが、牢番どもに、
「疎略にしてはなるまいぞ、欲しいと仰せあれば、何でも差し入れよ」
と、言いつけている。
政知と富士子の眼を避けて、気をつかっているから、健康だけは保っていた。
気分までは、しかし爽快にしてやるわけにはいかない。それにはこの土牢から解放するしかないからだ。
したがって、茶々丸が、どんなに土牢の中で暴れようと、どんなに喚こうと、牢番は知らない顔をしている。
そうやって暴れることが、皮肉なことに健康を保つには、役立っているようだ。入牢してから、肥ったし、背丈も伸びた。
こういう事情を聞いた新九郎は、
「いたわしや」
と、眉を曇らせた。
だが、肚裡の中は違ったようである。
（乗じ易いな）
と、思った。
（伊豆を手に入れるのは、至難ではないぞ）

と、見た。
あらゆる場合にそうだが、組織が弛んでいたり、不備だったりするところに隙がある。
伊豆一国を支配している命令系統に乱れと、弛緩がある。
第一、この伊豆の国そのものは、関東管領の一人、上杉顕定の分国であるが、北西に位するこの韮山辺は北條氏が被官として居り堀越公方がいる。
堀越公方の場合、直接的な家来は少ない。一時的に近隣の侍を召集するというかたちをとるのだが、それを定着させた塩梅になっている。
つまり、動員令が、そのまま戦争状態に移行し、いまだ戦時だというかたちをとっているのだ。
この辺に、〝公方〟という存在の弱体質がひそんでいる。したがって、北條氏がもっとも近い——というよりは、北條氏の領分に、公方が居坐ったというほうが正しいので、家来たちも、公方の世話をしたりして、どっちの家来かわからなくなっている。
普通、武士の生活、というと、徳川時代の制度が、すぐ頭に浮ぶが、当時はまるきり違う。
すでに戦国時代ではあるが、どちらかというと鎌倉時代の制度を多分に残している。
一つには鎌倉に近いという地域性もある。
家人（けにん）や被官によって武門が成り立っているから、後世のような、いわゆる家臣団という組織ではない。
むろん、これは前時代の荘園制度の崩壊に伴う守護の伸長と密接に関わっていることだが、これらの主従という関係が、きわめて実利的に結びついていることだ。
徳川時代になると、よく〝累代鴻恩〟とか、〝父祖の偉勲〟による主従関係を強調する風潮がでてくるが、このころではもっと端的に、どれほどの生活的安定の地位を与えてくれるか、にかかっている。
それは、ある意味では、かなり不安定なものだ。
後世のような義理がない。奉公を強要する風習的拘束がない。
利をもって結びついた者は、利によっても離れる。率のいい方へ転出できるのである。
したがって、覇者たる者、勢力を持続するには、常に、利を与える才覚がなければならない。
もっとも、あらためて実利性をうんぬんするまでもなく、生活の保証が主従をかたちづくるのは、原則的であるが、後世徳川氏が普及強要せしめた儒教は、この関係を道徳という体裁のいい色で染めあげ、一見、実利とは無関係に見せることに成功した。それが十五代まで徳川氏を安泰にしたテクニックである。
その意味では、中世——殊に戦国前期までは、〝道徳〟というまやかしもののない、力と力の、素朴で明確なもの

が、両者を結びつけ話が判り易かった。
そう見てくると、この時代の主たるもの、後世のように、凡庸ではつとまらない。況や、暗愚では存在できない。
政知は、暗愚ではないまでも、凡である。富士子の姦策に左右された点をいうならば、暗愚の方に近い。
おのれの実子を狂人と信じて、入牢させておくなど、どう考えても、平凡以下である。それも後妻にうつつを抜かしていたのが事実だから、これは弁解の余地はない。
こういう主人に対して、家来がどうして、尊敬と、信頼を持てるだろうか。
公方という権威を利用できる者だけが、表面的に仕えていることになる。
（一押しすれば、ぐらりとなろう）
と、新九郎は思った。
（そのためにも、まず地固めが必要だな）
新九郎は北條家にまず、手をのばすことを考えた。

北條早雲 三

昭和五十一年十月二十日　第一刷
昭和五十二年二月二十五日　第三刷

著　者　早乙女　貢
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社 文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三

本文印刷　理想社印刷
オフセット　共同印刷
製　本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Mitsugu Saotome 1976　　Printed in Japan

井上ひさし　おれたちと大砲

直参のはしくれ若者五人、共通点はオッチョコチョイ。幕末の浪風にゆさぶられながら、慶喜公のためにと珍奇放胆な計略をたてたが

880円

池波正太郎　おれの足音
——大石内蔵助——

手をつけた女中の後を追って家出した若き日より討入りの快挙までの生涯。昼行灯といわれ、無類の女好きだった愛すべきその人間像

880円

文藝春秋刊

柴田錬三郎　嗚呼江戸城 上・中・下

絢爛たる江戸城を築かんため、家康は大坂城から巨額の金銀を奪い隠匿した。この太閤遺金の在処をめぐって展開する雄大なドラマ！

各750円

司馬遼太郎　翔ぶが如く 全七巻

明治新政府は出発した。が、そこには様々な危機が内在外在していた。西南戦争に至るまでの政治をダイナミックに捉え得た大河小説

各980円

文藝春秋刊

新田次郎　武田信玄　全四巻

天下統一の雄図むなしくたおれた悲劇の英雄武田信玄——野望と情熱と波瀾に富んだその生涯をいきいきと描破した三千枚の大河小説

各800円

杉本苑子　埋み火　上・下

元禄時代の京・大坂で一人の孤児が次第に自己の文才を開花させてゆく——その男、のちの近松門左衛門を華麗な筆で描いた時代長篇

各1200円

文藝春秋刊

井上靖　淀どの日記

浅井の遺子三姉妹を襲う運命の華麗な転変！茶々は家の仇秀吉の寵姫に、はつは姉の恋人京極高次の夫人に、小督は徳川秀忠の室に！

980円

有吉佐和子　助左衛門四代記

江戸から現代にわたる紀州の名門垣内家七代二五〇年の歴史に登場する強烈な個性の持主たちを描いて、歴史を文学にまで高めた傑作

500円

文藝春秋刊

早乙女貢

北條早雲

雄大な構想のもとに滔々と描く大河小説　全五巻

出自は謎につつまれ、一介の牢人から身をおこし、ついには乱世の英雄と謳われるまでの波瀾にみちたその生涯――先ずは鬱勃たる野心を秘めて伊勢新九郎（のちの早雲）が今川家に乗り込んで大活躍

各九五〇円

文藝春秋刊